(財)米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書 50

鳥取県米子市

諏訪南山崎遺跡

2006

財団法人　米子市教育文化事業団

序

米子市は、平成17年（2005年）3月31日に東隣に位置する西伯郡淀江町と合併し、新米子市として新たな出発をむかえました。

旧淀江町には、我国有数の大規模な弥生集落で、四隅突出型墳丘墓群を伴う妻木晩田遺跡や、山陰を代表する首長墓群である向山古墳群、法隆寺と並ぶ国内最古の仏教壁画が出土した上淀廃寺跡など、重要な遺跡が集中しています。

なお、米子市は、平成17年度（2005年度）から「伯耆の国よなご文化創造計画」の策定に取り組んでおります。この計画は、市内に存在する重要な遺跡を保存、整備、活用し、さらに、市内の歴史・文化拠点施設との連携を深め、新たな文化の発信拠点となることをめざすというもので、この計画の早期の運用が望まれます。

本遺跡の発掘調査は、平成16年度（2004年度）に鳥取県の委託を受けて実施したもので、縄文時代晩期の稲作の可能性を窺わせる籾痕土器の出土や、県内では2例目の竪穴住居跡に造り付けられた竈、官衙的性格を想起させる遺物の出土など、たいへん貴重な成果を得ることができました。

これらの資料が今後の調査研究及び教育のために広く活用され、さらに、一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくうえでお役にたてれば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成18年（2006年）3月

財団法人　米子市教育文化事業団

理事長　**足　立　　操**

例　　言

1．本報告書は、「一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査」として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地は、以下のとおりである。

　　米子市諏訪字南山崎739、740、741番地

3．本発掘調査及び整理作業は、平成16年度（2004年度）と平成17年度（2005年度）に財団法人米子市教育文化事業団が実施した。

4．本報告書に用いた方位は第６図が真北を示している以外は座標北を示し、レベルは海抜標高を示す。また、座標値は、世界測地座標を用いた。

5．本報告書に掲載した地図は、第１図は鳥取県米子土木事務所発行の1：1,000「一般国道181号道路改良工事平面図（其の１）」を縮小複製し、加筆したものである。第５図と第12図は鳥取県米子土木事務所発行の1：1,000「一般国道181号現況平面図　No.４」と「一般国道181号現況平面図　No.５」を縮小複製、合成し、加筆したものである。第６図は国土地理院発行の1：25,000地形図「米子」、同「母里」、同「淀江」、同「伯耆溝口」を縮小複製、合成し、加筆したものである。第７図は米子市発行の1：20,000「米子・境港都市計画図（米子市）」を複製し、加筆したものである。

6．本報告にあたり、籾痕土器の同定を東京国際大学教授　丑野毅氏と長野県農政部　中沢道彦氏に、打製土掘具と磨製石斧以外の石材の鑑定を大山自然公園指導員の会　遠藤勝壽氏にお願いし、丑野氏と中沢氏には玉稿を賜った。記して感謝いたします。

7．米子市古市河原田遺跡出土土器の圧痕の資料調査については、鳥取県埋蔵文化財センターにご配慮いただいた。なお、調査の結果は、第４章　第６節に掲載した。

8．本報告にあたり、自然科学分析、プラント・オパール分析、放射性炭素年代測定、漆器椀の保存処理及び樹種同定、打製土掘具と磨製石斧の実測・トレース及び使用痕分析、遺跡の空中写真撮影をそれぞれの専門業者に、現地における基準点測量を測量コンサルタントに委託した。

9．発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、及び出土遺物などは米子市教育委員会で保管している。

10．本報告書は、高橋が執筆、編集した。

11．発掘調査及び報告書の作成にあたっては上記の方々の他に多くの方々からご指導、ご助言、ご支援をいただいた。以下に明記して感謝いたします。（敬称略）

内田律雄（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）、巽淳一郎（独立行政法人　文化財研究所　奈良文化財研究所）、中森祥（鳥取県埋蔵文化財センター）、濵田竜彦（鳥取県教育委員会）、八峠興（鳥取県埋蔵文化財センター）、山中敏史（独立行政法人　文化財研究所　奈良文化財研究所）

凡　　例

1．発掘調査時における遺構名、番号は報告書記載の遺構名、番号と基本的には一致するが、一部、下表のとおり変更している。なお、竪穴住居跡、掘立柱建物及び柵のピット番号は、調査時のものから変更している。

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
ＳＢ－１１	ＳＢ－１３	ＳＫ－８２	ＳＸ－０１	地下式横穴	ＳＫ－０９

2．遺跡の略称はＳＷＭＹである。

3．本報告書に用いた遺構の略称は以下のとおりである。

ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＳ：段状遺構　ＳＡ：柵　ＳＤ：溝状遺構　ＳＫ：土坑
ＳＥ：井戸　Ｐ：ピット

4．竪穴住居跡、掘立柱建物及び柵の柱穴の計測値は（長径×短径―深さ）cmで示した。また、掘立柱建物と柵の主軸は座標北との角度で示した。

5．本文中、挿図中、遺物観察表中及び写真図版中の遺構、遺物番号は一致する。

6．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにし、その他は白抜きで示した。なお、赤彩土器の赤彩部分は朱塗りで示した。

7．遺構図の縮尺については、竪穴住居跡は1／80、掘立柱建物は1／80、段状遺構はＳＳ－０１とＳＳ－０２が　1／80、ＳＳ－０３は土層図が1／80、平面図が1／160、柵は1／80、溝状遺構は1／80、土坑は1／40、井戸は1／40、地下式横穴は1／40、造り付け竈は1／20で掲載した。

8．遺物実測図の縮尺については、土器、土製品は１／４、石鏃・尖頭器は１／１、煙管、勾玉は１／２、五輪塔は１／８で掲載した。

9．遺物観察表は第３章末に掲載している。土器は、復元した数値には※印、残存値には△印を数値の前に付した。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 2
　第３節　調査及び報告書作成の体制 …… 3
　第４節　整理作業の経過 …… 4
第２章 位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 7
第３章 調査の成果
　第１節　調査の方法 ……16
　第２節　基本層序 ……21
　第３節　縄文時代の調査 ……28
　第４節　古墳時代前期後半～中期前半の調査 ……29
　第５節　古墳時代後期～平安時代の調査 ……32
　第６節　中世の調査 ……51
　第７節　近世以降の調査 ……58
　第８節　時期不明の遺構 ……61
　第９節　遺構外出土遺物 ……67
第４章 理化学分析
　第１節　諏訪南山崎遺跡におけるプラント・オパール分析 ……97
　第２節　諏訪南山崎遺跡における自然科学分析 ……103
　第３節　諏訪南山崎遺跡出土漆器椀の樹種同定 ……112
　第４節　ＳＫ－４６、造り付け竈の放射性炭素年代測定 ……113
　第５節　諏訪南山崎遺跡出土打製石斧の使用痕分析 ……114
　第６節　レプリカ法による諏訪南山崎遺跡出土土器の圧痕の観察 ……120
　第７節　諏訪南山崎遺跡出土籾痕土器の評価について ……124
第５章　まとめ ……126
図　版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　開発計画図 …… 1
第２図　調査区及び範囲確認トレンチ配置図 …… 2
第３図　下層遺構・遺物確認調査区及びトレンチ配置図 …… 4
第４図　調査遺跡位置図 …… 5
第５図　調査地位置図 …… 6
第６図　米子平野と淀江平野の遺跡分布図 ……13～14
第７図　調査地周辺遺跡分布図 ……15
第８図　平成14年度（2002年度）試掘調査トレンチ配置図 ……17
第９図　平成14年度（2002年度）試掘調査出土遺物実測図 ……17
第10図　平成15年度（2003年度）試掘調査トレンチ配置図 ……18
第11図　平成15年度（2003年度）試掘調査出土遺物実測図 ……18
第12図　試掘調査トレンチ、本調査区配置図 ……20
第13図　土層図位置図 ……22
第14図　土層図（１） ……23
第15図　土層図（２） ……24
第16図　遺構配置図 ……25～26
第17図　縄文時代の遺構配置図 ……27
第18図　ＳＫ－１３遺構図 ……28
第19図　古墳時代前期後半～中期前半の遺構配置図 ……30
第20図　ＳＩ－０３遺構図及び出土遺物実測図 ……31
第21図　ＳＫ－４６遺構図及び出土遺物実測図 ……31
第22図　古墳時代後期～平安時代の遺構配置図 ……33
第23図　造り付け竈遺構図 ……34
第24図　ＳＫ－２８遺構図及び出土遺物実測図 ……34
第25図　ＳＳ－０１遺構図及び出土遺物実測図 ……35
第26図　ＳＳ－０２遺構図及び出土遺物実測図 ……36
第27図　ＳＳ－０３遺構図 ……37
第28図　ＳＢ－０１遺構図 ……38
第29図　ＳＢ－０２遺構図及び出土遺物実測図 ……39
第30図　ＳＢ－０３遺構図 ……40
第31図　ＳＢ－０４遺構図 ……41
第32図　ＳＢ－０５遺構図 ……41
第33図　ＳＢ－０６遺構図 ……42
第34図　ＳＢ－０７遺構図 ……43
第35図　ＳＢ－０８遺構図 ……43
第36図　ＳＢ－０９遺構図 ……44
第37図　ＳＢ－１０遺構図 ……45
第38図　ＳＢ－１１遺構図 ……45
第39図　ＳＢ－１２遺構図 ……46
第40図　ＳＢ－１３遺構図 ……47
第41図　ＳＡ－０１遺構図 ……47
第42図　ＳＡ－０２遺構図 ……48

第43図　ＳＡ－０３・０４遺構図 ……49
第44図　中世の遺構配置図 ……50
第45図　ＳＫ－８２遺構図及び出土遺物実測図 ……51
第46図　ＳＤ－０５遺構図及び出土遺物実測図 ……52
第47図　ＳＤ－０８遺構図及び出土遺物実測図 ……53
第48図　ＳＥ－０１遺構図及び出土遺物実測図 ……54
第49図　地下式横穴出土遺物実測図 ……55
第50図　地下式横穴遺構図 ……56
第51図　近世以降の遺構配置図 ……57
第52図　ＳＫ－０４・０８遺構図 ……58
第53図　ＳＫ－１１・１６・２２遺構図 ……59
第54図　時期不明の遺構配置図 ……60
第55図　ＳＩ－０１遺構図 ……61
第56図　ＳＩ－０２・０４・０５遺構図 ……62
第57図　遺構外出土遺物実測図（１） ……70
第58図　遺構外出土遺物実測図（２） ……71
第59図　遺構外出土遺物実測図（３） ……72
第60図　遺構外出土遺物実測図（４） ……73
第61図　遺構外出土遺物実測図（５） ……74
第62図　遺構外出土遺物実測図（６） ……75
第63図　遺構外出土遺物実測図（７） ……76
第64図　遺構外出土遺物実測図（８） ……77
第65図　遺構外出土遺物実測図（９） ……78
第66図　遺構外出土遺物実測図（10） ……79
第67図　遺構外出土遺物実測図（11） ……80
第68図　遺構外出土遺物実測図（12） ……81
第69図　遺構外出土遺物実測図（13） ……82
第70図　遺構外出土遺物実測図（14） ……83
第71図　遺構外出土遺物実測図（15） ……84
第72図　遺構外出土遺物実測図（16） ……85
第73図　遺構外出土遺物実測図（17） ……86
第74図　遺構外出土遺物実測図（18） ……87
第75図　遺構外出土遺物実測図（19） ……88
第76図　遺構外出土遺物実測図（20） ……89
第77図　遺構外出土遺物実測図（21） ……90
第78図　遺構外出土遺物実測図（22） ……91
第79図　プラント・オパール分析試料採取位置図及び土層柱状図 ……97
第80図　ＴＷ２におけるプラント・オパール分析結果 ……101
第81図　ＴＷ12におけるプラント・オパール分析結果 ……101
第82図　ＴＷ14におけるプラント・オパール分析結果 ……102
第83図　ＴＷ15におけるプラント・オパール分析結果 ……102
第84図　プラント・オパール分析、花粉分析試料採取位置図及び土層柱状図 ……103
第85図　第１ベルトにおけるプラント・オパール分析結果 ……105
第86図　第３ベルトにおけるプラント・オパール分析結果 ……106

第87図　第４ベルトにおけるプラント・オパール分析結果 ……106
第88図　第１ベルトにおける花粉ダイアグラム ……111
第89図　第３ベルトにおける花粉ダイアグラム ……111
第90図　レプリカ法による観察資料 ……121
第91図　稲籾の部分名称 ……123
第92図　山陰地方の籾痕をもつ突帯文土器 ……124
第93図　縄文時代晩期末～弥生時代中期前葉の土器出土分布図 ……127
第94図　石器出土分布図 ……127
第95図　長者原台地における縄文時代の遺跡分布図 ……128
第96図　長者原台地における弥生時代前期～中期前葉の遺跡分布図 ……128
第97図　弥生時代中期中葉～後期の遺物出土分布図 ……129
第98図　長者原台地における弥生時代中期中葉の遺跡分布図 ……130
第99図　長者原台地における弥生時代中期後葉の遺跡分布図 ……130
第100図 長者原台地における弥生時代後期前葉の遺跡分布図 ……131
第101図 長者原台地における弥生時代後期中葉～後葉の遺跡分布図 ……131
第102図 古墳時代前期～中期の遺物出土分布図 ……133
第103図 長者原台地における古墳時代前期の遺跡分布図 ……134
第104図 長者原台地における古墳時代中期の遺跡分布図 ……134
第105図 鉄滓、紡錘車、ミニチュア土製品、勾玉、土馬出土分布図 ……135
第106図 瓦出土分布図 ……136
第107図 移動式竈出土分布図 ……137
第108図 甑、土製支脚出土分布図 ……137
第109図 緑釉陶器、硯、黒色土器出土分布図 ……138
第110図 長者原台地における古墳時代後期の遺跡分布図 ……139
第111図 長者原台地における奈良時代の遺跡分布図 ……139
第112図 長者原台地における中世～近世の遺跡分布図 ……140

表　目　次

表１　下層遺構・遺物確認調査の結果 ……4
表２　米子平野と淀江平野の遺跡一覧表 ……12
表３　平成14年度（2002年度）試掘調査の結果 ……19
表４　平成15年度（2003年度）試掘調査の結果 ……20
表５　土坑一覧表 ……64
表６　溝状遺構一覧表 ……66
表７　遺構内出土遺物観察表 ……92
表８　遺構外出土遺物観察表 ……92
表９　石器一覧表 ……96
表10　諏訪南山崎遺跡のプラント・オパール分析結果 ……100
表11　諏訪南山崎遺跡のプラント・オパール分析結果 ……105
表12　諏訪南山崎遺跡における花粉分析結果 ……110
表13　石斧一覧表 ……119

図 版 目 次

図版 1　調査前(北から)
調査前(南から)
調査地遠景(東から)
図版 2　調査地遠景(上空北から)
調査地遠景(上空南から)
図版 3　調査地遠景(上空東から)
調査地全景(上空真上から)
図版 4　1区・2区全景(上空から)
3区全景(上空から)
図版 5　1区全景(北から)
1区全景(北西から)
図版 6　2区全景(北から)
2区全景(南東から)
図版 7　3区全景(北から)
3区全景(南東から)
図版 8　4区全景(北西から)
4区全景(南東から)
図版 9　第1ベルト(A－A′ライン)土層(北から)
第2ベルト(B－B′ライン)土層(北から)
第3ベルト(C－C′ライン)土層(北から)
図版10　第4ベルト(D－D′ライン)土層(北から)
第4ベルト(D－D′ライン)土層(北から)
第5ベルト(E－E′ライン)土層(北から)
図版11　SK－13土層(南から)
SK－13完掘状況(北から)
図版12　SI－03検出状況(北西から)
SI－03遺物出土状況(南から)
SI－03遺物(4)出土状況
図版13　SI－03特殊ピット検出状況(南東から)
SI－03特殊ピット内集石検出状況(南東から)
SI－03特殊ピット完掘状況(北東から)
図版14　SI－03床面検出状況(北西から)
SI－03完掘状況(上空から)
SI－03完掘状況(南西から)
図版15　SK－46検出状況(南から)
SK－46遺物(5)出土状況(東から)
SK－46完掘状況(東から)
図版16　造り付け竈検出状況(北から)
造り付け竈検出状況(東から)
造り付け竈煙道土層(東から)
図版17　造り付け竈完掘状況(北から)
造り付け竈完掘状況(南から)
造り付け竈完掘状況(西から)
図版18　造り付け竈完掘状況(南横から)
造り付け竈完掘状況(西横から)
造り付け竈完掘状況(東横から)
図版19　SK－28検出状況(南から)
SK－28土層(南から)
SK－28遺物出土状況(北から)
図版20　SS－01遺物出土状況及び床面検出状況(西から)
SS－01、SB－01・12完掘状況(西から)
SS－01、SB－01・12完掘状況(上空から)
図版21　SS－01、SB－01・02・12完掘状況(西から)
SB－02完掘状況(西から)
SB－02完掘状況(南から)
図版22　SS－02遺物出土状況及び床面検出状況(東から)
SS－02、SB－03・13完掘状況(東から)
SS－02、SB－03・13完掘状況(上空から)
図版23　SS－03全景(上空から)
SS－03全景(北から)
SS－03全景(南から)
図版24　SS－03(A－A′ライン拡張部分)完掘状況(北から)
SS－03(B－B′ライン拡張部分)完掘状況(北から)
SS－03(C－C′ライン拡張部分)完掘状況(南から)
図版25　SS－03(A－A′ライン)土層(南から)
SS－03(B－B′ライン)土層(南から)
SS－03(C－C′ライン)土層(南から)
SS－03(D－D′ライン)土層(南から)
SS－03(E－E′ライン)土層(南から)
図版26　SB－04・05・06完掘状況(北から)
SB－04完掘状況(北から)
SB－05・06完掘状況(北から)
図版27　SB－07完掘状況(北から)
SB－08完掘状況(北から)
SB－09完掘状況(北から)
図版28　SB－10検出状況(北から)
SB－10完掘状況(北から)
SB－11完掘状況(北から)

図版29　SA－01・02検出状況（南から）
SA－01・02完掘状況（南から）
SA－01・02完掘状況（上空から）
図版30　SA－03・04完掘状況（上空から）
SA－03・04完掘状況（南から）
SA－03・04完掘状況（北から）
図版31　SA－03完掘状況（南から）
SA－04検出状況（北から）
SA－04完掘状況（北から）
図版32　SK－82検出状況（南から）
SK－82遺物（18）出土状況（南から）
SK－82完掘状況（北から）
図版33　SD－05土層（北から）
SD－05遺物出土状況（北から）
SD－05遺物出土状況（南から）
図版34　SD－05完掘状況（南から）
SD－05完掘状況（北から）
SD－08土層（南から）
図版35　SD－08遺物（22、23）出土状況（東から）
SD－08完掘状況（西から）
SD－08完掘状況（東から）
図版36　SE－01完掘状況（北から）
SE－01完掘状況（西から）
SE－01完掘状況（南から）
図版37　SE－01石積（南から）
SE－01半裁（南から）
SE－01石積除去後（西から）
図版38　地下式横穴の縦穴検出状況（東から）
地下式横穴閉塞石検出状況（南から）
地下式横穴閉塞石及び羨道入口検出状況（東から）
図版39　地下式横穴閉塞石検出状況（東から）
地下式横穴閉塞石検出状況（東から）
地下式横穴閉塞石半裁（南から）
図版40　地下式横穴羨道（東から）
地下式横穴羨道（東から）
地下式横穴玄室内五輪塔水輪（34）出土状況（東から）
図版41　地下式横穴玄室内五輪塔水輪（34）出土状況
地下式横穴玄室北壁鑿痕
地下式横穴玄室南壁鑿痕
図版42　SI－01　P－1土層（東から）
SI－01完掘状況（南から）
SI－01完掘状況（北から）
図版43　SI－02床面及びSI－04・05検出状況（南東から）
SI－02床面及びSI－04・05検出状況（北西から）
SI－02・04・05完掘状況（北西から）
図版44　SI－02・04・05完掘状況（南から）
SI－04・05完掘状況（南東から）
SI－02～05完掘状況（北西から）
図版45　遺物出土状況
図版46　遺構内出土遺物（1）
図版47　遺構内出土遺物（2）
図版48　遺構外出土遺物（1）
図版49　遺構外出土遺物（2）
図版50　遺構外出土遺物（3）
図版51　遺構外出土遺物（4）
図版52　遺構外出土遺物（5）
図版53　遺構外出土遺物（6）
図版54　遺構外出土遺物（7）
図版55　プラント・オパールの顕微鏡写真（1）
図版56　プラント・オパールの顕微鏡写真（2）
図版57　花粉・胞子の顕微鏡写真
図版58　漆器椀の組織写真
図版59　打製石斧の使用痕（1）
図版60　打製石斧の使用痕（2）
図版61　打製石斧の使用痕（3）
図版62　打製石斧の使用痕（4）
図版63　打製石斧の使用痕（5）
図版64　打製石斧の使用痕（6）
図版65　打製石斧の使用痕（7）
図版66　打製石斧の実験
図版67　諏訪南山崎遺跡出土土器の圧痕（1）
図版68　諏訪南山崎遺跡出土土器の圧痕（2）
図版69　諏訪南山崎遺跡出土土器の圧痕（3）
図版70　諏訪南山崎遺跡出土土器の圧痕（4）
図版71　古市河原田遺跡出土土器の圧痕（1）
図版72　古市河原田遺跡出土土器の圧痕（2）
図版73　籾痕土器及び籾痕の顕微鏡写真

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

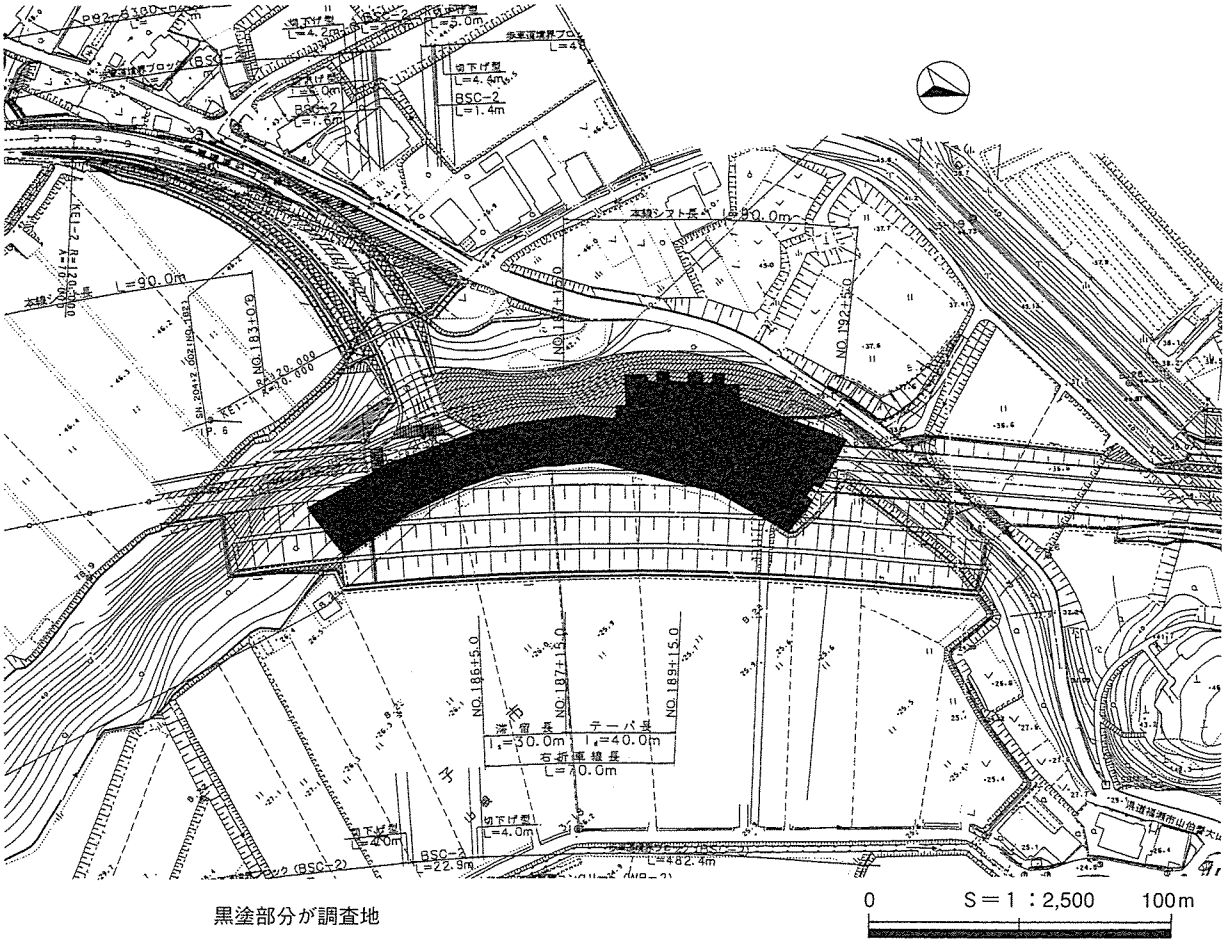
本発掘調査は、鳥取県が進める一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事を原因とし、鳥取県米子市諏訪地内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。このバイパスは米子市八幡の国道181号から分岐し、同市諏訪、伯耆町坂長を経て伯耆町吉定で国道181号に合流するものである。

工事予定地内は周知の遺跡として認識はされてはいないが、工事予定地が位置する台地上は遺跡の密度が濃いことから、当該地でも遺跡の存在が予測された。そこで平成14年度（2002年度）と15年度（2003年度）に米子市教育委員会によって試掘調査が行われ、縄文時代～平安時代の遺構と遺物が確認された[註1]。

この結果を受けて、鳥取県土木部道路課及び鳥取県西部総合事務所は米子市教育委員会文化課と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出した。その後、鳥取県教育委員会教育長より事前発掘調査の指示を受けた鳥取県土木部道路課は、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより平成16年度（2004年度）に財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が調査を担当することになり、財団法人米子市教育文化事業団理事長から鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法第57条第１項に基づく発掘届を提出した。

註

1　下高瑞哉　2004　『平成14・15年度　米子市内遺跡発掘調査報告書』　米子市教育委員会



黒塗部分が調査地

第１図　開発計画図

第２節　調査の経過

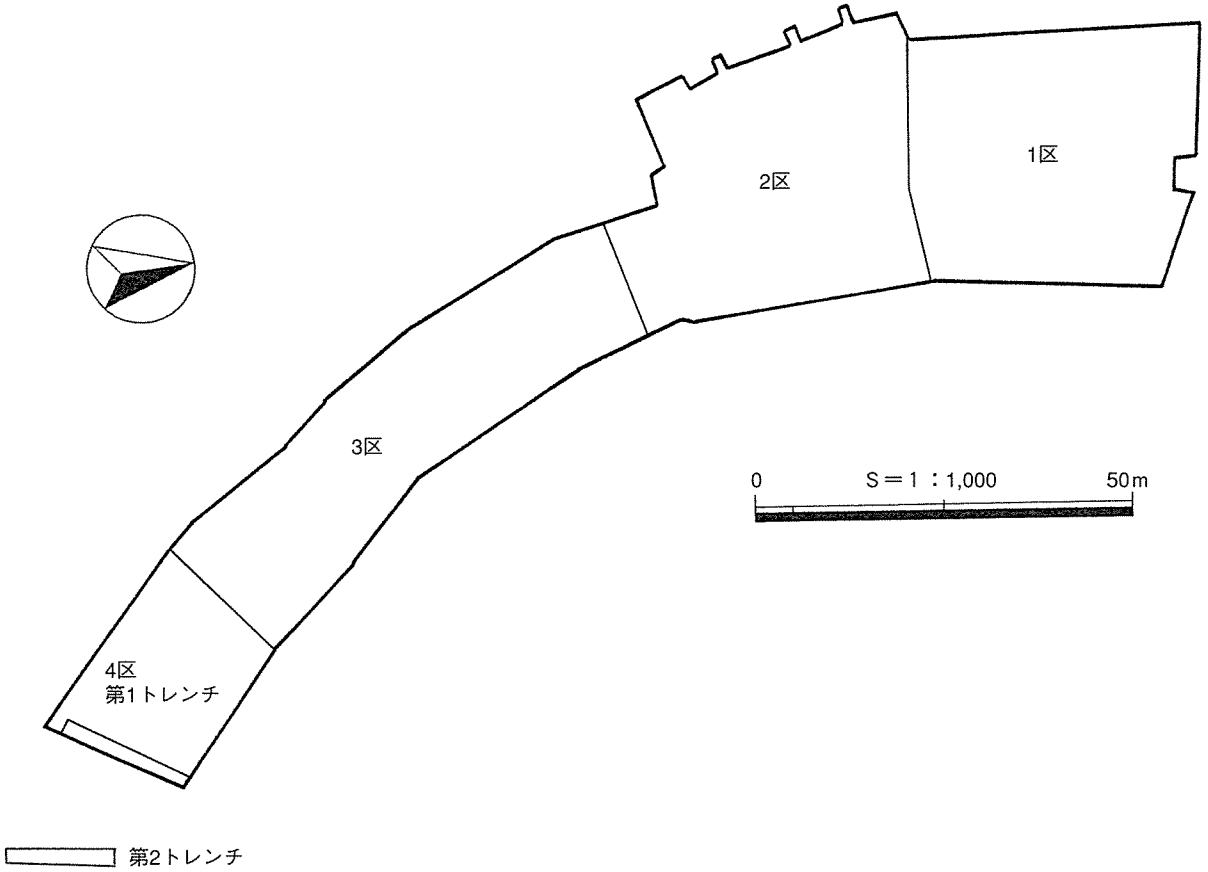
平成16年度（2004年度）は現地の発掘調査を行った。

調査は平成16年（2004年）４月12日から着手した。４月12～14日は機材等を搬入し、４月15日からは調査地の北側から重機により表土掘削を行い、４月20日からはこれと並行して人力により堆積層の掘り下げを行った。

調査にあたっては、調査区を北側から便宜的に１～４区に分けた（第２図）。４区については試掘調査が行われておらず、調査地の南側については、調査が必要な範囲が確定されていなかったため、トレンチを２ヶ所（第１トレンチ、第２トレンチ）設定し、遺構・遺物の有無の確認を行った。その結果、いずれのトレンチも遺構は確認できず、第２トレンチからは遺物が出土しなかったが、第1トレンチからは古墳時代中期の土器がまとまって出土した。また、第１トレンチ以北では土器等が多量に散布しており、以上のことから、未確定であった調査地南側の調査範囲を第１トレンチまでとして確定させた。

調査は当初の予定では、１～４区全体を調査して空中写真撮影を行う予定にしていたが、９・10月の度重なる台風の襲来や長雨により作業が予定よりも遅れ気味となり、平成17年（2005年）１月からは調査地の北側で工事が行われる予定となっていることから、優先的に１～３区までの調査を行った後、空中写真撮影を行った。空中写真撮影後、１～３区について、下層での遺構・遺物の確認のため、トレンチを設定して調査を行った（第３図）。遺物は出土しなかったが、遺構が確認された部分と上層で検出した遺構が密な部分については、新たに調査区を設定して下層の調査を行った（第３図）。その後、４区の調査を行い、平成17年（2005年）２月25日に調査を完了した。

なお、平成16年（2004年）11月20日には現地説明会を行い、約80名の参加があった。



第２図　調査区及び範囲確認トレンチ配置図

第３節　調査及び報告書作成の体制

発掘調査は、財団法人米子市教育文化事業団が鳥取県土木部道路課から委託を受け、平成16年度（2004年度）に第１図の範囲を対象として、調査員１名、臨時職員１名の体制で実施した。出土遺物の整理及び報告書の作成は平成17年度（2005年度）に実施し、調査員１名、嘱託職員１名が担当した。

以下に体制を記す。

平成16年度（2004年度）

調査主体　財団法人　米子市教育文化事業団

理　事　長　山岡　宏（米子市教育委員会教育長）

専務理事　小林道正（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室　　長　比企　裕（米子市教育委員会文化課長）

主任調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

調査担当　埋蔵文化財調査室

主任調査員　高橋浩樹

臨時職員　森田静香

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター　米子市教育委員会

平成17年度（2005年度）

事業主体　財団法人 米子市教育文化事業団

理　事　長　平成17年４月１日～平成17年５月24日

山岡　宏（米子市教育委員会教育長）

平成17年５月25日～

足立　操（米子市教育委員会教育長）

専務理事　小林道正（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室　　長　比企　裕（米子市教育委員会文化課長）

主任調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　埋蔵文化財調査室

主任調査員　高橋浩樹

嘱託職員　森田静香

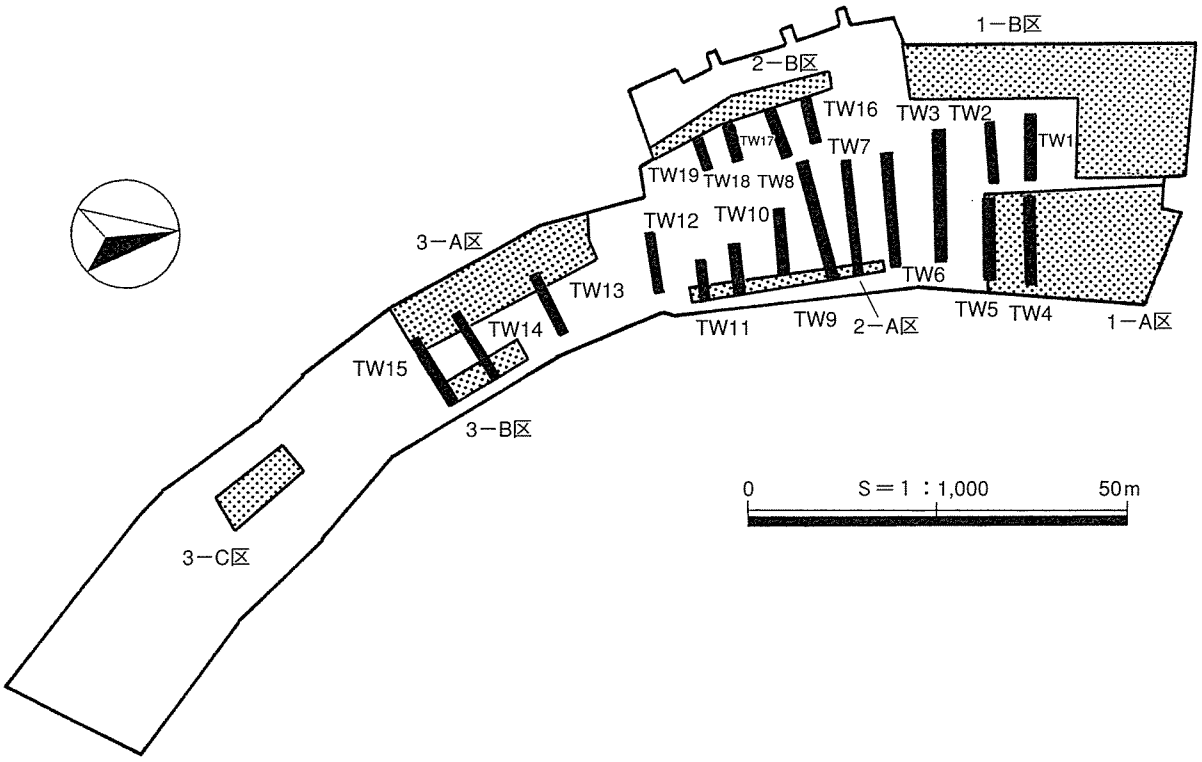
調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター　米子市教育委員会

第４節　整理作業の経過

平成17年度（2005年度）は整理作業及び報告書作成を行った。

平成16年度（2004年度）は整理作業を全く行っておらず、平成17年（2005年）４月から整理作業に着手した。まず、出土遺物の洗浄、注記を行い、その後、器種、出土遺構、出土層位ごとに分別し、土器の接合、形態分類を行った。そして、実測遺物を抽出した後、実測、トレース、写真撮影を行った。なお、石斧以外の遺物の実測とトレースは整理作業員が行ったが、石斧の実測とトレースは業者に委託した。

遺物整理と並行して、遺構図面の整理、下図の作成、遺構図のトレース、図版の作成、原稿の執筆を行った。



第３図　下層遺構・遺物確認調査区及びトレンチ配置図

表１　下層遺構・遺物確認調査の結果

トレンチNo.	出土遺物	検出遺構	トレンチNo.	出土遺物	検出遺構	トレンチNo.	出土遺物	検出遺構
ＴＷ１	な　し	な　し	ＴＷ２	な　し	な　し	ＴＷ３	な　し	な　し
ＴＷ４	な　し	土坑、ピット	ＴＷ５	な　し	ピット	ＴＷ６	な　し	な　し
ＴＷ７	な　し	な　し	ＴＷ８	な　し	な　し	ＴＷ９	な　し	な　し
ＴＷ１０	な　し	土　坑	ＴＷ１１	な　し	土　坑	ＴＷ１２	な　し	土　坑
ＴＷ１３	な　し	ピット	ＴＷ１４	な　し	な　し	ＴＷ１５	な　し	な　し
ＴＷ１６	な　し	な　し	ＴＷ１７	な　し	な　し	ＴＷ１８	な　し	な　し
ＴＷ１９	な　し	な　し	１－Ａ区	な　し	土坑、ピット	１－Ｂ区	な　し	土坑、ピット
２－Ａ区	な　し	土　坑	２－Ｂ区	な　し	な　し	３－Ａ区	な　し	土坑、ピット
３－Ｂ区	な　し	な　し	３－Ｃ区	な　し	な　し			

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

米子市は鳥取県の最西端に位置する鳥取県西部の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。なお、平成17年（2005年）３月31日には、東隣の西伯郡淀江町と合併し、新米子市が誕生した。

地形的には中国山地から流れる日野川の沖積作用によって形成された米子平野と、米子平野とは壷瓶山塊によって画された淀江平野（宇田川平野）を中心に、それを取り囲むようにしてその周縁部には大山（標高1,729m）、中国山地からつづくなだらかな山地や丘陵によって構成されている。

淀江平野（宇田川平野）は、縄文海進時には大半が海域であったものが、美保湾砂州の発達によって潟湖が形成され、その後、弥生時代中期頃には日本海との水路が遮断され、さらに宇田川と天井川との沖積作用によって次第に面積を減じ、次第に今日のような景観をなすに至ったと想定されている。

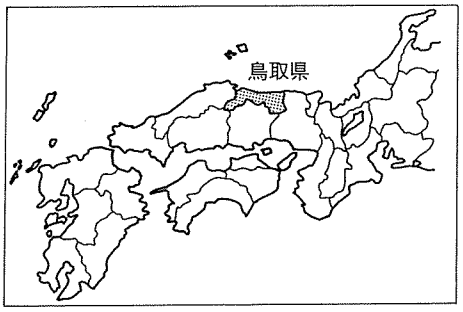
米子平野は日野川によって形成された扇状地性の沖積湿地である日野川扇状地を中心にして、その北側の低地と発達した２条の砂州からなる日吉津低地、南西側の法勝寺川によって形成された沖積性の河谷低地である法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野）、西側の米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなっている。また、米子平野の北西には日野川からの流出土砂が北西の季節風や沿岸流の影響で堆積し、これによって形成された弓浜半島が南北にのび、その西側にはこの半島によって外海と遮断されて形成された汽水湖の中海がある。

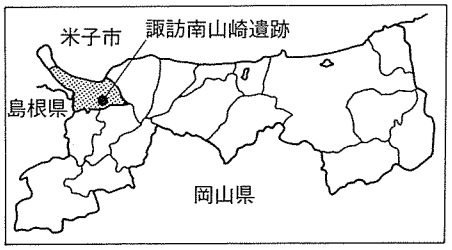
諏訪南山崎遺跡は、米子市南部の米子市諏訪に所在する。この地は市街地から直線距離で約６kmにある農村地帯で、調査地から南西へ約200m行くと西伯郡伯耆町となる。

調査地は、米子平野の最奥部に位置する越敷山塊から北へのびる長者原台地と呼ばれる洪積台地の東側斜面からその裾部にかけて立地する。

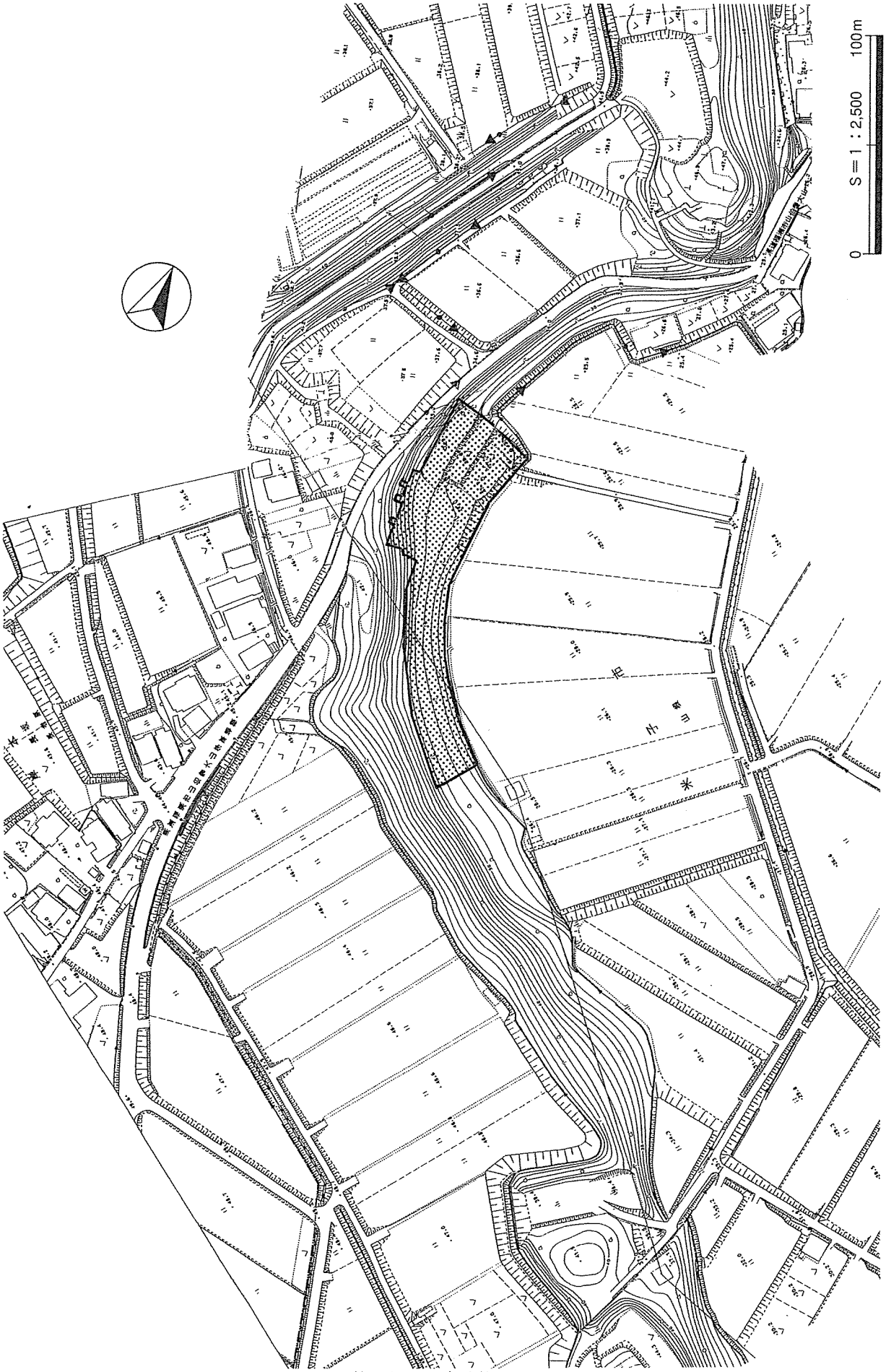
長者原台地は南北約４km、東西約２kmの範囲に扇状に広がり、標高25～45mをはかる。台地は西から東へ入り込む多数の細長い浸食谷によって開析されており、台地に直交する形で舌状の尾根が連続する地形となっている。台地の地盤は大山の降下火山灰を基盤とし、表層には火山性土壌に由来する黒ボク層が堆積している。

台地上は、幕末に開削された佐野川用水によって主に水田地帯として開墾され、他に果樹園、畑地として利用されている。山林は台地縁辺部にわずかにみられるのみで、全体的に農業地帯として利用されており、台地上や台地裾に小集落が点在している。なお、昭和40年代には台地の北側に位置する米子市福市、青木（永江）において大規模な住宅団地が造成され、その周辺は著しく景観が変化した。





第４図　調査遺跡位置図



第５図　調査地位置図

第２節　歴史的環境

旧石器時代

県内では旧石器時代の遺構は確認されていないが、大山山麓を中心にいくつかの旧石器が発見されている。米子市淀江町小波では東山・杉久保型系統のナイフ形石器、米子市泉中峰遺跡（107）ではナイフ形石器が発見され、米子市諏訪西山ノ後遺跡（76）ではローム層からナイフ形石器が出土している。また、大山町門前第２遺跡ではＡＴ層の下層からナイフ形石器を含むブロックが確認され、南部町龍徳遺跡、琴浦町笠見第３遺跡では細石刃が発見されている。このように近年、発掘調査によって当該期の資料が確認されるようになってきたが、現位置をとどめていないものが多く、旧石器時代の具体像を窺うにはまだまだ課題が多い。

縄文時代

草創期には大山北、西麓を中心に尖頭器が採集されており、米子市奈喜良遺跡（19）、陰田宮の谷遺跡（33）、南部町諸木、福成石佛前遺跡（54）では有舌尖頭器が見つかっている。

早期には大山西麓の台地上の小河川流域に遺跡の分布が多く見られるが、日野川左岸では、米子市新山山田遺跡（40）と南部町清水谷遺跡（56）で押型文土器が少量出土したのみで、当該期の遺跡はほとんどみられない。

当該期を代表とする遺跡として米子市上福万遺跡（89）がある。上福万遺跡では、押型文土器や石器が多量に出土し、土坑や配石墓と考えられる集石遺構が確認されている。

前期には大山西麓では早期から継続する遺跡が多い。一方、中海沿岸や淀江平野では早期末～前期初頭になると集落が形成され始め、大山西麓から海浜部の低湿地への進出が窺える。中海沿岸では拠点的な集落となるものもあり、島根県松江市崎ヶ鼻遺跡、タテチョウ遺跡、西川津遺跡、米子市目久美遺跡（７）のように中期以降も長期間継続するものもある。また、淀江平野では、米子市淀江町渡り上り遺跡（118）、鮒ヶ口遺跡（119）から多量の土器、石器、木製品が出土しており、特に、鮒ヶ口遺跡からは九州の曽畑式土器に類似する土器などが出土しており、広域的な地域間交流が窺える。

この時期の遺跡には、米子市目久美遺跡、陰田第１遺跡（32）、陰田第７遺跡（28）、陰田第９遺跡（31）がある。目久美遺跡は縄文時代早期末～弥生時代中期の遺跡で、当該期には貝殻条痕文土器、爪形文土器、多量の石錘、動植物遺体が出土している。陰田第９遺跡では前期初頭の遺物が出土しており、轟式の影響を受けた土器も出土している。また、シカ、イノシシなどの獣骨が多く出土している。

中期には遺跡の数が減少する傾向にあり、現在のところあまり明確にされていないが、目久美遺跡ではドングリ貯蔵穴が多数確認されている。また、陰田第７遺跡は前期末～中期を主体とする遺跡で、多量の石錘が出土しており、陰田第１遺跡では３基の貯蔵穴が確認されている。

後期には大山西麓や中海沿岸や淀江平野の低湿地に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。

この時期の遺跡には米子市目久美遺跡、陰田第１遺跡、陰田第７遺跡、古市河原田遺跡（44）、古市カハラケ田遺跡（43）、青木遺跡（71）、南部町福成石佛前遺跡、米子市淀江町河原田遺跡（117）、井手胯遺跡（128）があり、古市河原田遺跡では土坑と溝、古市カハラケ田遺跡では土坑が確認され、青木遺跡では多数の落し穴が確認されている。また、河原田遺跡からは磨消縄文土器、沈線文土器、無文土器などが出土し、井手胯遺跡では河川跡から西日本では珍しい朱漆塗りの結歯式櫛や木胎耳栓が出土している。なお、目久美遺跡第10次調査では、縄文時代後期の干潟上に海側から陸地側（集落）へと向かう数人の足跡が確認されており、当時の環境を知るうえでは興味深い。

晩期の遺跡は後期と同様の分布を見せ、南部町口朝金遺跡（67）では晩期前葉の土器、古市河原田遺跡では晩期後葉の突帯文土器がまとまって出土している。

晩期末になると平野部において遺跡が散見でき、これらの中には弥生時代まで継続するものもある。

この時期の遺跡には、米子市目久美遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡、陰田第1遺跡、東宗像遺跡（14）、大袋丸山遺跡（69）、新山山田遺跡、新山下山遺跡（38）、古市河原田遺跡、南部町福成早里遺跡（53）、福成石佛前遺跡などがある。

弥生時代

弥生時代になると海退が進み、中海沿岸には低湿地が形成される。低湿地には水田が開かれ、周辺の微高地には集落が形成された。

前期の遺跡には縄文時代晩期から継続あるいはこれに隣接するものが多く、中海沿岸の低湿地や扇状地端に拠点的な遺跡が形成され、河川を遡上した小平野をひかえる丘陵上にも遺跡が形成されるようになる。

目久美遺跡では低湿地水田と微高地に営む集落を形成しており、前期の堆積層からはプラント・オパールが検出された。米子市長砂第1遺跡（９）でも前期後葉～中期初頭の遺構群とともに水田が確認されている。

また、当地域は環濠を伴う集落が比較的集中しており、前期末～中期前葉のものには米子市淀江町今津岸の上遺跡（135）、米子市尾高御建山遺跡（103）、南部町諸木遺跡（68）、宮尾遺跡（60）、天王原遺跡（66）、清水谷遺跡があり、いずれも断面Ｖ字状の環濠が確認されている。

この他に前期の遺跡には米子市久米第１遺跡（２）、新山山田遺跡などがある。

中期には前期の拠点的集落が継続して営まれ、農耕技術の向上、人口増加等を背景に遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、低湿地の微高地上、高原地域にも見られるようになる。

米子市目久美遺跡、長砂第２遺跡（10）、口陰田遺跡（29）は低湿地に立地する遺跡で、目久美遺跡では中期中葉～中期後葉と中期後葉～中期末の２面の水田が確認され、長砂第2遺跡でも前期末～中期前葉、中期後葉～後期の２面の水田が確認されている。低湿地の微高地上に立地する遺跡としては、米子市米子城跡下層（１）、錦町第1遺跡（5）、四日市町遺跡（６）がある。しかし、中期後葉～後期になるとこれらの低湿地や低湿地の微高地上に立地する遺跡の多くは消滅し、これにかわって周辺の丘陵や台地、河岸段丘上に遺跡が形成されるようになる。その背景として社会的情勢の変化等が考えられるが、目久美遺跡では後期前葉に大規模な洪水によって集落及び水田が廃絶しており、自然災害的要因も影響している可能性がある。

この他に中期の遺跡には米子市久米第１遺跡、奈喜良遺跡、新山山田遺跡、吉谷上ノ原山遺跡（50）、奥谷堀越谷遺跡（17）、東宗像遺跡、石州府第1遺跡、上福万妻神遺跡（90）、喜多原第2遺跡（96）、南部町清水谷遺跡、米子市淀江町角田遺跡（122）、福岡遺跡（129）、晩田遺跡（132）、礎利遺跡（131）、北尾宮廻遺跡（130）、百塚遺跡群などがあり、角田遺跡では太陽、舟、舟を漕ぐ人、建物２棟、樹木、鹿が描かれた線刻絵画土器が出土している。また、福岡遺跡では200基以上の粘土採掘坑が確認されている。

後期には前期～中期の拠点的集落は継続するものが少なく、中期中葉～後期にかけて米子市青木遺跡、福市遺跡（70）、伯耆町・南部町越敷山遺跡群、米子市淀江町・大山町妻木晩田遺跡（134）のように新たに拠点的集落が形成される。また、この時期には遺跡は低地から低丘陵へ移動する傾向にあり、このような遺跡には米子市陰田第１遺跡、陰田第６遺跡（30）、吉谷銭神遺跡（48）、吉谷屋奈ヶ埼遺跡（47）、南部町福成石佛前遺跡、清水谷遺跡、北福王寺遺跡（58）などがあるが、これらは比較的短期間で廃絶する。

また、中期後葉～後期にかけて大山北、西麓には環濠集落と四隅突出型墳丘墓が近接する遺跡が見られる。米子市尾高浅山遺跡（95）では三重の環濠に囲まれた集落と四隅突出型墳丘墓を含む墳墓群が確認されている。米子市日下1号墓（91）も四隅突出型墳丘墓で、この南約500ｍの丘陵上にはほぼ同時期の環濠集落である米子市日下寺山遺跡（88）がある。妻木晩田遺跡では我国最大級の弥生集落と多数の四隅突出型墳丘墓が確認されており、これらの四隅突出型墳丘墓は山陰地域の平野部における最古のものとして注目される。

この他に後期の遺跡には米子市池ノ内遺跡（８）、奈喜良遺跡、久米第１遺跡、新山山田遺跡、吉谷上ノ原山遺跡、吉谷トコ遺跡（51）、東宗像遺跡、岡成第９遺跡（99）、尾高遺跡（102）、喜多原第１遺跡（97）、喜多原第２

遺跡、新良路遺跡（93）、米子市淀江町坂ノ上遺跡（105）、百塚第1遺跡（110）、井手挟遺跡（116）などがあり、池ノ内遺跡では水田が確認されている。

古墳時代

前期の古墳には南部町普段寺１・２号墳（65）、米子市日原６号墳（16）、石州府29号墳（86）、米子市淀江町晩田古墳群（133）がある。

普段寺１号墳は全長23mの前方後方墳で、三角縁唐草文帯二神二獣鏡、碧玉製管玉、鉄剣が出土している。普段寺２号墳は方墳で、三角縁神獣鏡が出土している。石州府29号墳は径16mの円墳で、割竹形木棺を埋葬施設とし、獣帯鏡が出土している。日原６号墳は一辺21mの方墳で、箱形木棺3基、割竹形木棺1基、土壙墓２基が確認されている。

この時期の集落には米子市米子城跡第２次調査・第６次調査、青木遺跡、福市遺跡、諏訪西山ノ後遺跡、大袋丸山遺跡、長砂第３遺跡（11）、吉谷上ノ原山遺跡、吉谷トコ遺跡、奈喜良遺跡、上福万遺跡、上福万妻神遺跡、尾高御建山遺跡、喜多原第２遺跡、米子市淀江町百塚第1遺跡、井手挟遺跡、南部町清水谷遺跡などがあり、米子城跡第２次調査・第６次調査では畿内系土器が出土している。また、池ノ内遺跡では前代に引き続いて水田が確認されている。

中期の古墳には米子市宗像41号墳（15）、陰田41号墳、水道山古墳（12）、米子市淀江町坂ノ上１号墳（106）、上ノ山古墳（125）、井手挟３号墳、南部町三崎殿山古墳（59）、浅井11号墳、福成春日山古墳（55）がある。

宗像41号墳は全長32mの前方後円墳で、岩盤をくり抜いた特異な埋葬施設を有する。陰田41号墳は径30mの円墳で、若年の女性を埋葬した箱式石棺を有する。上ノ山古墳は小枝山古墳群内に存在し、２基の竪穴式石室を埋葬施設とし、内行花文鏡、滑石製勾玉、甲冑などが出土している。井手挟３号墳からは円筒埴輪や盾持人埴輪などの形象埴輪が多数出土している。三崎殿山古墳は全長108mの前方後円墳で、この地域を支配した有力な首長墓である。福成春日山古墳は全長30m級の前方後円墳で、頭蓋骨を朱塗りした人骨が箱式石棺に埋葬されていた。水道山古墳からは仿製斜縁八神鏡、浅井11号墳からは画文帯神獣鏡が出土している。

なお、米子市新山山田古墳群（41）、古市宮ノ谷山遺跡（46）、吉谷中馬場山遺跡（49）では小規模な古墳群が確認され、新山7号墳からは珠文鏡が出土している。

この時期の集落には米子市青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡、樋ノ口第３遺跡、（73）吉谷トコ遺跡、長砂第３遺跡、新山山田遺跡、新山研石山遺跡（39）、米子市淀江町百塚遺跡群（110）、南部町清水谷遺跡などがある。

後期になると米子平野や淀江平野周辺の丘陵や段丘上には多くの古墳群が形成されるようになり、米子平野を取り囲むように米子市淀江町壷瓶山古墳群（113）、小波上古墳群（112）、中間古墳群（106）、百塚古墳群（110）、米子市尾高古墳群（104）、岡成古墳群（100）、石田古墳群（94）、日下古墳群（91）、石州府古墳群（86）、東宗像古墳群（14）、宗像古墳群が存在する。石州府１号墳は径40mの西伯耆最大の円墳で、巨大な横穴式石室（全長7.5m）を主体部としている。また、東宗像５号墳では横口式箱式棺、東宗像６号墳では竪穴系横口式石室が確認されており、九州との関係が窺える。一方、淀江平野を取り囲むように米子市淀江町西尾原古墳群（115）、中西尾古墳群（116）、高井谷古墳群（120）、稲吉古墳群（121）、城山古墳群（124）、小枝山古墳群（125）、向山古墳群（127）が存在し、向山４号墳、長者ヶ平古墳、岩屋古墳、小枝山12号墳、石馬谷古墳などの大型前方後円墳が築かれる。向山古墳群は独立丘陵上に立地し、前方後円墳８基と方墳１基からなり、このうち、岩屋古墳は切石積の横穴式石室をもち、人物や水鳥などの形象埴輪が出土している。長者ヶ平古墳は割石小口積の横穴式石室をもち、金銅製冠、環頭太刀、三輪玉、銅鈴などが出土している。石馬谷古墳からは本州唯一の石馬が出土したと伝えられている。

６世紀後半になると、横穴墓の造営が開始される。これらは日野川左岸、法勝寺川流域に集中しており、米子市陰田横穴墓群では50基ほどが確認されている。この他には米子市大埼山横穴墓群（13）、尾高1号横穴墓（104）、南部町マケン堀横穴墓群（57）があり、これらは後背部に墳丘を有することを特徴としている。

この時期の集落には米子市青木遺跡、樋の口第4遺跡（72）、奥谷堀越谷遺跡、長砂第3遺跡、東宗像遺跡、石州府第4遺跡（85）、泉中峰遺跡、泉上経前遺跡（109）、米子市淀江町百塚遺跡群、大下畑遺跡（111）、福頼遺跡（114）、南部町福成早里遺跡、清水谷遺跡などがある。

飛鳥～平安時代

白鳳時代には仏教文化が盛行し、多くの寺院が建立される。米子市淀江町上淀廃寺跡（126）は金堂の東側に南北に瓦積基壇が2棟近接して並び、その北側には基壇はないが、心礎があり、3塔が南北に並ぶ類例のない伽藍配置をとる。また、法隆寺金堂壁画と並ぶ国内最古級の彩色壁画片や塑像片が出土している。この他に、この時期の寺院には石製鴟尾を有し、変形の法起寺式伽藍配置をとる伯耆町大寺廃寺（83）や伯耆町坂中廃寺（82）がある。

律令体制下では当地域は伯耆国会見郡と汗入郡に属している。会見郡は壷瓶山を郡境にして米子平野の大部分がこれに属しており、郡衙は従来、官衙的配置をとる大型の掘立柱建物群が確認された伯耆町長者屋敷遺跡（79）が比定されていたが、同遺跡の北東約400mに位置する伯耆町坂長下屋敷遺跡（81）でも官衙的配置をとる大型の掘立柱建物群が確認されており、郡衙の範囲は従来よりも広範囲に及ぶものであると想定される。一方、汗入郡衙は現在のところ確認されておらず、淀江平野は汗入郡新井郷に属していたと推定されている。

この時期の集落は法勝寺川左岸に多く分布している。これらはいずれも丘陵斜面を加工して平坦面をつくり、そこに掘立柱建物などを構築したもので、米子市陰田遺跡群（25～27、30、33～37）、新山遺跡群（38～40）、吉谷銭神遺跡では製鉄・鍛冶関係の遺構、遺物が確認されている。また、これらの遺跡では7世紀後半以降、官衙的な性格を有するようになり、米子市陰田小犬田遺跡（26）では館の存在を窺わせる墨書土器が出土している。米子市陰田第6遺跡では石敷道路が確認されており、山陰道の支道であると考えられている。

この他に、集落としては米子市青木遺跡、樋の口第4遺跡、諏訪西山ノ後遺跡があり、樋の口第4遺跡からは石帯が出土し、諏訪西山ノ後遺跡では土師器甕に和同開珎3枚、刀子、鋤先、墨挺を入れて埋納した胞衣埋納遺構が確認されている。

この時期には生産遺跡も確認されており、米子市陰田遺跡群、新山遺跡群、吉谷銭神遺跡は前述したように製鉄・鍛冶関連遺跡である。米子市淀江町礎利遺跡は上淀廃寺跡の北側に所在する鍛冶遺跡であるとされるが、布目瓦、鴟尾瓦、彩釉陶器、石帯などが出土しており、同寺との関連が考えられる。また、米子市淀江町小枝山瓦窯跡（123）は上淀廃寺跡の南約1㎞にあり、同寺の瓦を焼いた窯跡である。

淀江平野では近年まで条里に基づく地割が遺存しており、発掘調査では畦畔や水路、石列、杭列などによる土地区画が確認されている。

中　　世

南北朝から戦国期の動乱を背景として米子市新山要害（52）、橋本七尾城（20）、戸上城、飯山城（4）、河岡城（87）、尾高城（101）、米子市淀江町小波城、淀江城、稲吉城、香原山城などが築かれる。尾高城は山陰道と山陽道に抜ける日野道との分岐点の近くに位置し、大山山麓の入り組んだ谷と丘陵を巧みに利用し、空堀と土塁で守られた8つの主要な郭からなっている。

古墓は長者原台地で多く確認されており、米子市青木遺跡、諏訪1号墳（75）、青木遺跡、別所中原地下式横穴（77）、別所長峰古墓（74）がある。青木遺跡では亀山焼系の甕を蔵骨器として納めた配石墓と白磁や鉄器を伴う土壙墓が確認されている。諏訪1号墳、別所長峰古墓は方形の墳丘の周囲に溝を巡らせるもので、墳丘上に宝筐印塔あるいは五輪塔を立てていたものと思われる。別所中原地下式横穴は地下式横穴が3基確認された。

長者原台地以外では、古墓は米子市淀江町大下畑遺跡、百塚第5遺跡（110）、米子市尾高御建山遺跡、上福万遺跡、日下古墳群、陰田第6遺跡、錦町第1遺跡で確認されている。大下畑遺跡と百塚第5遺跡では鎌倉時代前半の地下式横穴墓が確認され、尾高御建山遺跡では一辺9.5mの方形周溝状の墓が確認されている。また、上福万遺跡

では土壙墓が確認され、日下古墳群では斜面をＬ字状にカットして平坦面を造成し、ここに長方形の積石基壇を築いており、基壇内から五輪塔や蔵骨器が出土している。陰田第6遺跡は70基の土壙墓からなる集団墓である。

経塚は米子市長砂町と奥谷で発見されているが、いずれも遺構は不明である。

また、錦町第１遺跡では畠跡が確認され、米子城跡下層でも当該期の遺構、遺物が確認されており、米子城下町が形成される以前の様相も少しずつ判明している。

近世・近代

近世の城下町の米子の中心であった米子城は天正19年（1591）に東出雲・西伯耆・隠岐12万石の吉川広家によって築城が開始されるが、慶長５年（1600）には吉川広家は周防国岩国に転封される。かわって中村一忠が同年、伯耆18万石の領主として入城したが、慶長14年（1609）に中村家は断絶し、その後、慶長15年（1610）に加藤貞泰が伯耆国汗入・会見郡６万石を領有し、米子城主となる。やがて、元和３年（1617）池田光政が因伯２国の領主となり、池田由之が米子城主となる。寛永９年（1632）の国替えによって池田光仲が鳥取藩主となると光仲の首席家老の荒尾成利が米子城を預かることとなり、その後、明治２年（1869）まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

米子市諏訪は近世には新庄村と称し、明治初期に当地に鎮座する諏訪神社に因んで諏訪村と改称した。藩政期の拝領高は376石余、本免３ツ６分で、幕末に記された『六郡郷村生竈付』には生高932石余、竈数81とあり、同じく幕末に記された『伯耆志』には高937石余、山林５町５反余、家数85、人数358とある。なお、幕末に完成した佐野川用水によってこれ以降、長者原台地は耕作地として開発が行われる。

諏訪村は明治10年（1877）に会見郡諏訪村に改称され、明治22年（1889）には会見郡五千石村大字諏訪となり、昭和29年（1954）には米子市諏訪となり、現在に至っている。

文　献

北浩明ほか　2004　「鳥取県下の旧石器資料～山陰・中国山地の石器群の位置付け～」　『鳥取県における旧石器文化の様相』　中・四国旧石器文化談話会

高橋浩樹　2002　『今在家下井ノ上遺跡』　財団法人　米子市教育文化事業団

高橋浩樹　2003　『吉谷亀尾ノ上遺跡　橋本徳道西遺跡』　財団法人　米子市教育文化事業団

米子市史編纂協議会編　1999　『新修　米子市史』　第7巻　米子市

中原斉ほか　1995　『上淀廃寺』　淀江町教育委員会

徳永職男ほか　1992　『日本歴史地名大系第32巻　鳥取県の地名』　平凡社

表２　米子平野と淀江平野の遺跡一覧表

1	米子城跡	2	久米第１遺跡	3	米子城	4	飯山城
5	錦町第１遺跡	6	四日市町遺跡	7	目久美遺跡	8	池ノ内遺跡
9	長砂第１遺跡	10	長砂第２遺跡	11	長砂第３遺跡	12	水道山古墳
13	大埌山横穴墓群	14	東宗像古墳群・東宗像遺跡	15	宗像古墳群	16	日原６号墳
17	奥谷堀越谷遺跡	18	石井要害	19	奈喜良遺跡	20	橋本七尾城
21	橋本遺跡	22	吉谷遺跡	23	吉谷亀尾ノ上遺跡	24	橋本徳道西遺跡
25	陰田荒神谷遺跡	26	陰田小犬田遺跡	27	陰田ヒチリザコ遺跡	28	陰田第７遺跡
29	口陰田遺跡	30	陰田第６遺跡	31	陰田第９遺跡	32	陰田第１遺跡
33	陰田宮の谷遺跡	34	陰田広畑遺跡	35	陰田隠れが谷遺跡	36	陰田ハタケ谷遺跡
37	陰田夜坂谷遺跡	38	新山下山遺跡	39	新山研石山遺跡	40	新山山田遺跡
41	新山山田古墳群	42	古市流田遺跡	43	古市カハラケ田遺跡	44	古市河原田遺跡
45	古市コガノ木遺跡	46	古市宮ノ谷山遺跡	47	吉谷屋奈ヶ埌遺跡	48	吉谷銭神遺跡
49	吉谷中馬場山遺跡	50	吉谷上ノ原山遺跡	51	吉谷トコ遺跡	52	新山要害
53	福成早里遺跡	54	福成石佛前遺跡	55	福成古墳群	56	清水谷遺跡
57	マケン堀横穴墓群	58	北福王寺遺跡	59	三崎殿山古墳	60	宮尾遺跡
61	天万遺跡	62	天萬土井前遺跡	63	枇杷谷遺跡	64	寺内８号墳
65	普段寺１・２号墳	66	天王原遺跡	67	口朝金遺跡	68	諸木遺跡
69	大袋丸山遺跡	70	福市遺跡	71	青木遺跡	72	樋ノ口第４遺跡
73	樋ノ口第３遺跡	74	別所長峰古墓	75	諏訪１号墳	76	諏訪西山ノ後遺跡
77	別所中原地下式横穴	**78**	**諏訪南山崎遺跡**	79	長者屋敷遺跡	80	諏訪東土取場遺跡 大殿下ノ原遺跡
81	坂長下屋敷遺跡	82	坂中廃寺	83	大寺廃寺	84	石州府第２遺跡
85	石州府第４遺跡	86	石州府古墳群	87	河岡城	88	日下寺山遺跡
89	上福万遺跡	90	上福万妻神遺跡	91	日下古墳群	92	日下堂平遺跡
93	新良路遺跡	94	石田古墳群	95	尾高浅山遺跡	96	喜多原第２遺跡
97	喜多原第１遺跡	98	喜多原第３遺跡	99	岡成第９遺跡	100	岡成古墳群
101	尾高城跡	102	尾高遺跡	103	尾高御建山遺跡	104	尾高古墳群
105	坂ノ上遺跡	106	中間古墳群	107	泉中峰遺跡	108	泉前田遺跡
109	泉上経前遺跡	110	百塚遺跡群	111	大下畑遺跡	112	小波上古墳群
113	壷瓶山古墳群	114	福頼遺跡	115	西尾原古墳群	116	中西尾古墳群 （井手挟遺跡）
117	河原田遺跡	118	渡り上り遺跡	119	鮒ヶ口遺跡	120	高井谷古墳群
121	稲吉古墳群	122	角田遺跡	123	小枝山瓦窯跡	124	城山古墳群
125	小枝山古墳群	126	上淀廃寺跡	127	向山古墳群	128	井手胯遺跡
129	福岡遺跡	130	北尾宮廻遺跡	131	礎利遺跡	132	晩田遺跡
133	晩田古墳群	134	妻木晩田遺跡	135	今津岸の上遺跡		

第６図　米子平野と淀江平野の遺跡分布図

第７図　調査地周辺遺跡分布図

1	福市遺跡、福市古墳群	2	青木遺跡、青木古墳群	3	樋ノ口古墳群	4	樋ノ口第４遺跡
5	樋ノ口第３遺跡	6	樋ノ口第２遺跡	7	樋ノ口第１遺跡	8	成ヶ谷西遺跡
9	諏訪１号墳	10	諏訪宮ノ後遺跡、諏訪古墳群	11	諏訪西山ノ後遺跡	**12**	**諏訪南山崎遺跡**
13	放レ山第１遺跡	14	放レ山第２遺跡	15	放レ山第３遺跡	16	下安曇古墳群
17	別所第１遺跡	18	別所新田遺跡	19	別所ダヤシキ遺跡	20	別所中原地下式横穴
21	上安曇遺跡	22	上安曇古墳群	23	別所第３遺跡	24	別所荒神ノ峰遺跡
25	別所第４遺跡	26	別所第２遺跡	27	上安曇第１遺跡	28	上安曇第２遺跡
29	上安曇第３遺跡	30	別所第５遺跡	31	別所第６遺跡、別所１･２号墳	32	長者原古墳群

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

工事予定地は台地の斜面から台地縁辺の水田にかけて位置し、台地の裾部には段状の平坦面が見られる。本調査に先立ち、平成14年度（2002年度）と平成15年度（2003年度）に米子市教育委員会によって実施された試掘調査では、台地の裾部の平坦面では遺構・遺物の検出が顕著であったが、台地縁辺の水田部は圃場整備による改変が著しく、遺物の出土は認められるが、遺跡は既に消滅したものと判断された。また、斜面部についても遺構は確認されず、遺物も僅少であることから、遺跡は存在しないものと判断された(註1)。以上の結果から、台地縁辺の水田部と斜面部は調査対象から除外され、台地裾部の平坦面部分を調査対象地として調査を行った。

調査は便宜的に調査区を１～４区の４つに分け、第１章で前述したように１～３区までを優先的に調査をし、この部分の下層の遺構、遺物の確認を行った後、４区の調査を行った。

調査は調査地の北側から南側へ順次、重機により表土掘削、排土処理を行いながら、これと並行して人力による堆積層の掘削、遺構面の検出、遺構検出、遺構掘削を行った。

遺構の検出は、米子市教育委員会が実施した試掘調査の結果から遺構面が１面のみであると判断し、第Ⅵ層上面で遺構を検出した。なお、下層のローム層上面でも遺構を確認しているが、埋土の状況などからこれらも第Ⅵ層上面から掘り込まれたものであると判断した。

検出した遺構は、検出状況の写真撮影を行い、土層観察用の畦を設定して掘削した。遺構埋土の堆積状況を写真撮影した後、土層図を１：20で作成し、完掘した。状況に応じて遺物の出土状況の写真撮影を行い、トータルステーションにより遺物の位置を記録した。遺構完掘後は写真撮影、トータルステーションによる測量を行った。

堆積層から出土した遺物の取り上げについては、平面的には任意であるが、層位ごとに行い、トータルステーションにより位置を記録し、状況に応じて出土状況の写真撮影を行った。現場での写真撮影は35㎜を用い、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムで撮影した。また、これと併用してコンパクトカメラを用い、カラーネガフィルムでも撮影を行った。

今回の調査では、特に以下のことに目的、課題を設定し、これに基づいて調査を行った。

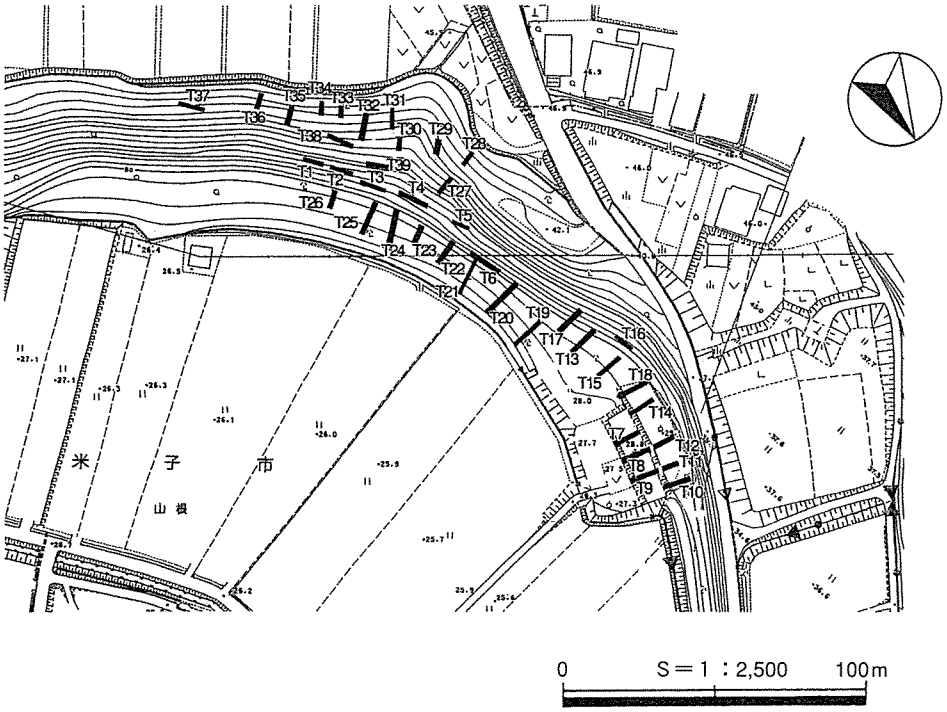
調査地は会見郡衙であると推定される長者屋敷遺跡の近くに位置し、試掘調査では奈良時代～平安時代の遺物が多量に出土し、この中には赤彩土器や瓦が認められることから、会見郡衙に関連のある施設の存在が予測された。

そこで、調査にあたっては、建物配置や区画施設の有無、官衙的遺物の出土に留意しながら調査を行い、さらに、当該期の遺物の出土状況及び組成を勘案しながら検討を行った。なお、整理作業の際、官衙関連施設の性格等を裏付ける墨書土器等の文字資料の存在に留意したが、文字資料は確認できなかった。

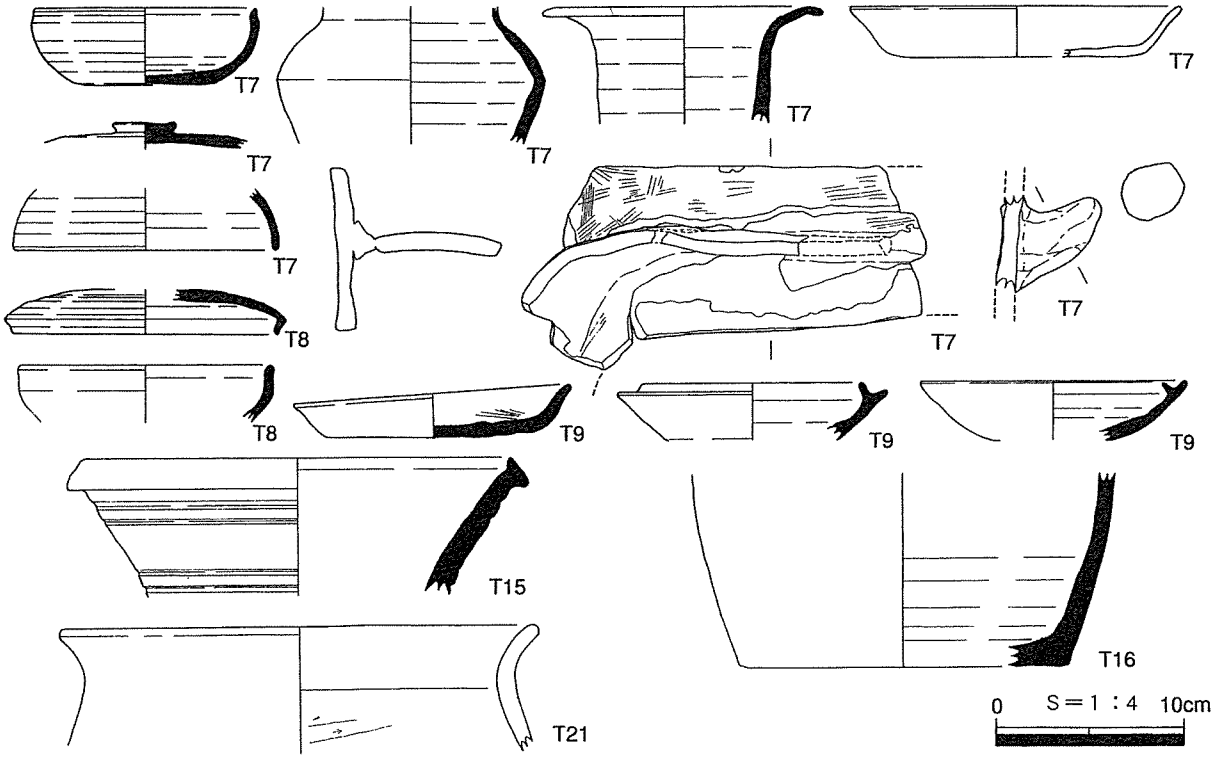
調査地の南側では、縄文時代晩期末に属するものと思われる籾痕土器が出土し、また、これと同時期であると思われる打製土掘具(註2)も比較的まとまって出土していることから、調査地周辺に当該期の水田が存在することが予測された。

そこで、まず、水田遺構を確認するように試みた。土層の堆積状況や遺物の包含状況などから第Ⅵ層上面に水田が存在する可能性があると判断したが、平面的には検出が非常に困難であるため、トレンチ（ＴＷ―13～15）を設定してその土層断面で畦畔の有無を確認するという方法をとった。しかし、畦畔を確認することができず、遺物も出土しなかったため第Ⅵ層の時期さえ特定できなかった。そこで、第Ⅵ層についてプラント・オパール分析を行い、水田の存在について検証を行ったが、稲作が行われた可能性が低いという結果が提示された。

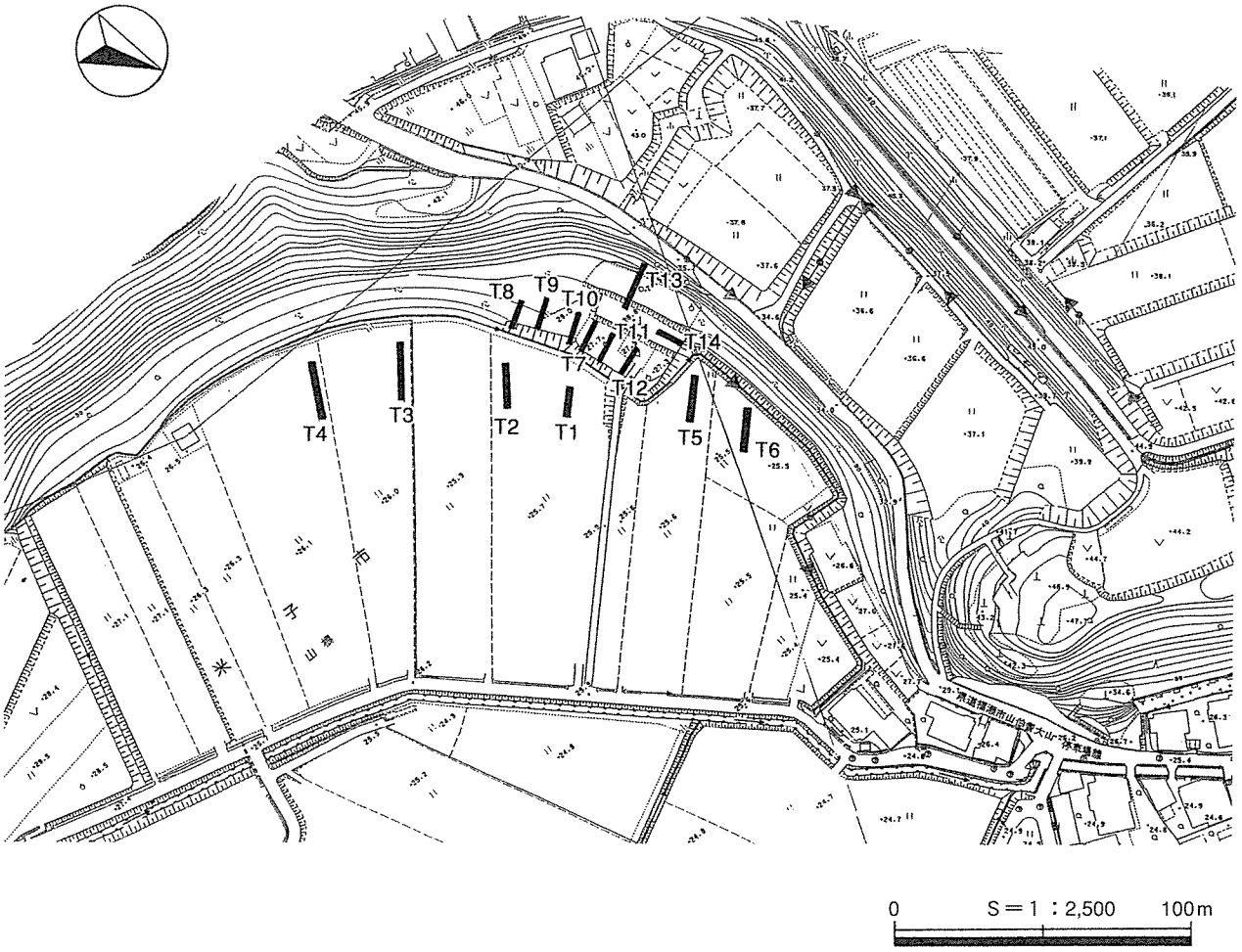
なお、出土した打製土掘具は稲作に関連があるものかどうかを検証するために業者に委託して使用痕分析を行った。



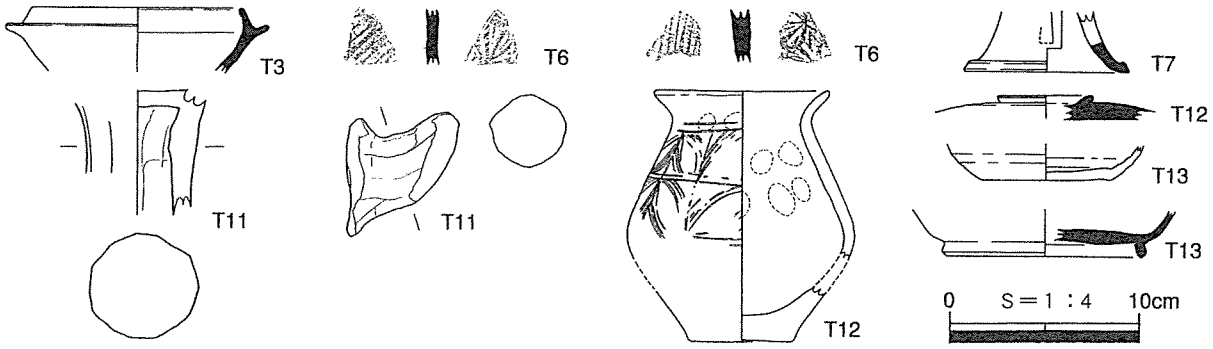
第８図　平成14年度（2002年度）試掘調査トレンチ配置図



第９図　平成14年度（2002年度）試掘調査出土遺物実測図



第10図　平成15年度（2003年度）試掘調査トレンチ配置図



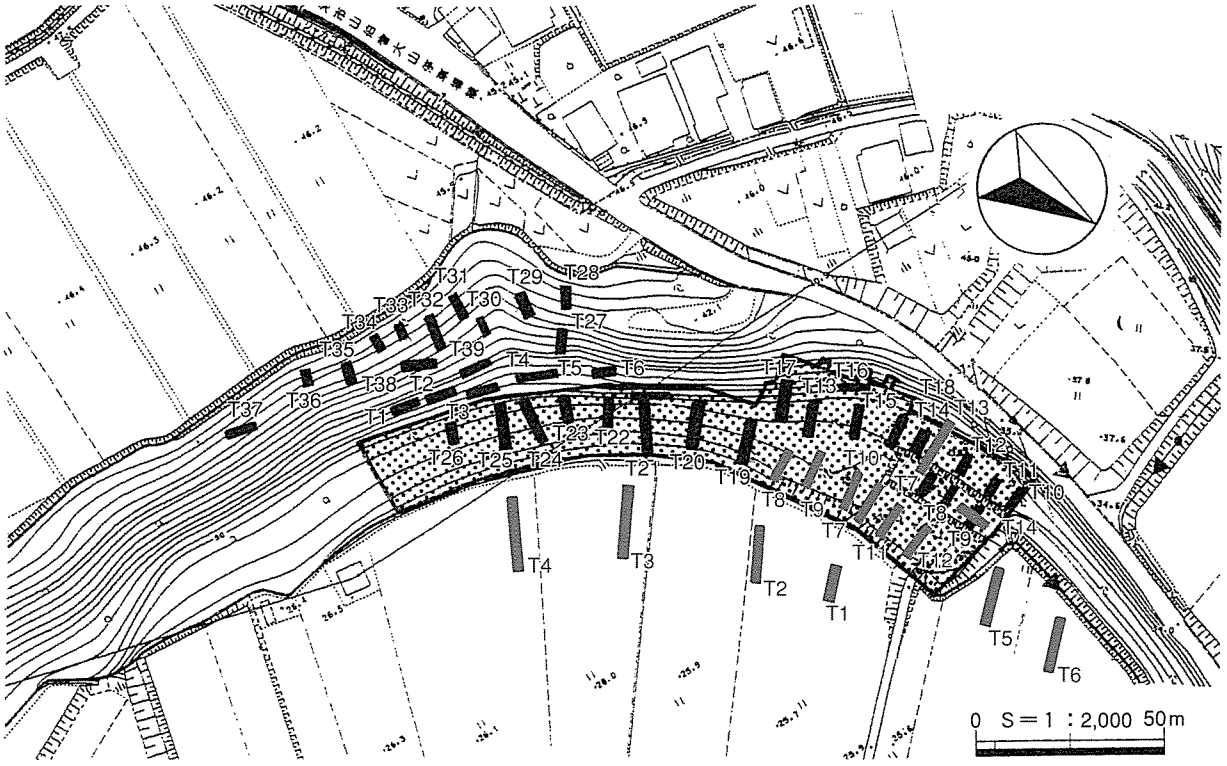
第11図　平成15年度（2003年度）試掘調査出土遺物実測図

表３　平成14年度（2002年度）試掘調査の結果

トレンチNo.	規模（m）	検出遺構	出土遺物	備考
Ｔ　１	８×１．５			
Ｔ　２	８×１．５			
Ｔ　３	１０×１．５	ピット	土師器、須恵器	
Ｔ　４	１０×１．５		土師器、須恵器	
Ｔ　５	８×１．５	ピット		
Ｔ　６	１０×１．５	ピット、土坑	土師器、須恵器、陶器	
Ｔ　７	８×１．５		土師器、須恵器、移動式竈、土製支脚	土器多量
Ｔ　８	７×１．５		土師器、須恵器	
Ｔ　９	８×１．５		土師器、須恵器、磁器、黒曜石	
Ｔ１０	９×１．５			
Ｔ１１	７×１．５			
Ｔ１２	９×１．５	ピット	弥生土器、土師器、須恵器	
Ｔ１３	７×１．５		須恵器	
Ｔ１４	１１×１．５		土師器、須恵器	
Ｔ１５	９×１．５		土師器、須恵器、陶器	
Ｔ１６	８×１．５		土師器、須恵器	土器多量
Ｔ１７	１０×１．５		須恵器	
Ｔ１８	６×１．５			
Ｔ１９	８×１．５			
Ｔ２０	１０×１．５		土師器、須恵器、陶器	
Ｔ２１	１０×１．５		土師器、須恵器、陶磁器	
Ｔ２２	１０×１．５		土師器、須恵器、陶磁器	
Ｔ２３	６×１．５		土師器、須恵器	
Ｔ２４	１４×１．５		土師器、須恵器、陶器	
Ｔ２５	１４×１．５		土師器、須恵器	
Ｔ２６	６×１．５		土師器、須恵器	
Ｔ２７	８×１．５			
Ｔ２８	６×１．５			
Ｔ２９	５×１．５		土師器、須恵器、陶磁器	
Ｔ３０	５×１．５			
Ｔ３１	８×１．５			
Ｔ３２	１０×１．５			
Ｔ３３	５×１．５		土師器	
Ｔ３４	５×１．５			
Ｔ３５	７×１．５			
Ｔ３６	６×１．５			
Ｔ３７	８×１．５			
Ｔ３８	９×１．５			
Ｔ３９	７×１．５			

表４　平成15年度（2003年度）試掘調査の結果

トレンチNo.	規模（m）	検出遺構	出土遺物	備考
Ｔ　１	１０×１．５		瓦、須恵器	圃場整備による改変著しい
Ｔ　２	１４×１．５			圃場整備による改変著しい
Ｔ　３	１８×１．５		弥生土器、須恵器	圃場整備による改変著しい
Ｔ　４	１８×１．５		土師器、須恵器、石鏃	圃場整備による改変著しい
Ｔ　５	１６×１．５			圃場整備による改変著しい
Ｔ　６	１５×１．５		須恵器	圃場整備による改変著しい
Ｔ　７	１２×１．５		土師器、須恵器	土器多量
Ｔ　８	９×１．５			
Ｔ　９	１１×１．５			
Ｔ１０	１０×１．５		須恵器	
Ｔ１１	１１×１．５		須恵器	土器多量
Ｔ１２	１２×１．５		弥生土器、土師器、須恵器	土器多量
Ｔ１３	１５×１．５	土　坑	土師器、磁器	
Ｔ１４	９×１．５			



第12図　試掘調査トレンチ、本調査区配置図

黒：平成14年度（2002年度）調査
赤：平成15年度（2003年度）調査

第２節　基本層序

調査地は南北に長く、現状では西から東へ緩やかに傾斜しているが、旧地形は調査地南側の４区に谷が入り込み、谷内には水成堆積や湧水による台地裾部の崩落土の流入が認められる。一方、１～３区は台地上部から流入、堆積した層を基本とするもので、後世の耕作による段切り、削平、造成が行われているため、場所によって土質、土色が多少異なるが、出土遺物の様相などから、大部分が層的には対応するものと思われる。

以下に基本的な層名及びその特徴を示し、調査地の北側、中央、南側に分けて基本層序を述べる。なお、() 内は調査時の旧層名を示す。

１．基本的な層名及びその特徴

第Ⅰ層（旧第１層）

表土及び現耕作土。

第Ⅱ層（旧Ａ層、旧Ｃ層）

近世以降の旧耕作土あるいは旧表土。

第Ⅲ層（旧第２層）

茶灰色を呈し、石、礫が混じる。中世後半～近世前半の造成土で、縄文時代～中世の遺物を多量に包含する。

第Ⅳ層（旧第４層）

クロボクを基調とする層で、黒褐色を呈する。遺物は比較的少ないが、縄文時代～中世の遺物を包含する。

第Ⅴ層（旧第５層）

クロボクを基調とする層で、黒褐色を呈する。第Ⅳ層とは基本的には同質であるが、第Ⅳ層よりも粘性がある。縄文時代～中世の遺物を包含する。

第Ⅵ層（旧第６層）

明褐灰色～灰褐色を呈し、上層の第Ⅴ層と下層のローム層（第Ⅸ層）との間の漸移的な層であると考えられる。上面が遺構検出面となっているが、第Ⅵ層からは遺物は出土していない。

第Ⅶ層（旧Ｓ層）

淡灰色細粒砂で、礫が多量に混じる。湧水によって台地裾部が崩落、流入したものと思われる。

第Ⅷ層（旧Ｎ層）

灰褐色粘土で、基本的には水成堆積したものと思われるが、黒褐色粘土ブロック、ローム層ブロック、礫が混じっており、堆積後、撹拌された状況である。古墳時代中期の土器を多量に包含している。

第Ⅸ層

黄褐色粘質土からなるローム層で、調査地のほぼ全域で認められるが、４区では白灰色粘質土となっている。なお、２区の西側では、第Ⅸ層が失われて下層の砂礫層が露出している。

2．基本層序（第14図・第15図）

調査地北側（1区：A－A′、B－B′）

調査地の北側では、表土（第Ⅰ層）直下に中世後半～近世前半の大規模な造成（第Ⅲ層）が認められ、基本層序は現地表面から第Ⅰ層→第Ⅲ層→第Ⅳ層→第Ⅴ層→第Ⅵ層→第Ⅸ層となっている。

調査地中央（2区：C－C′、3区：D－D′）

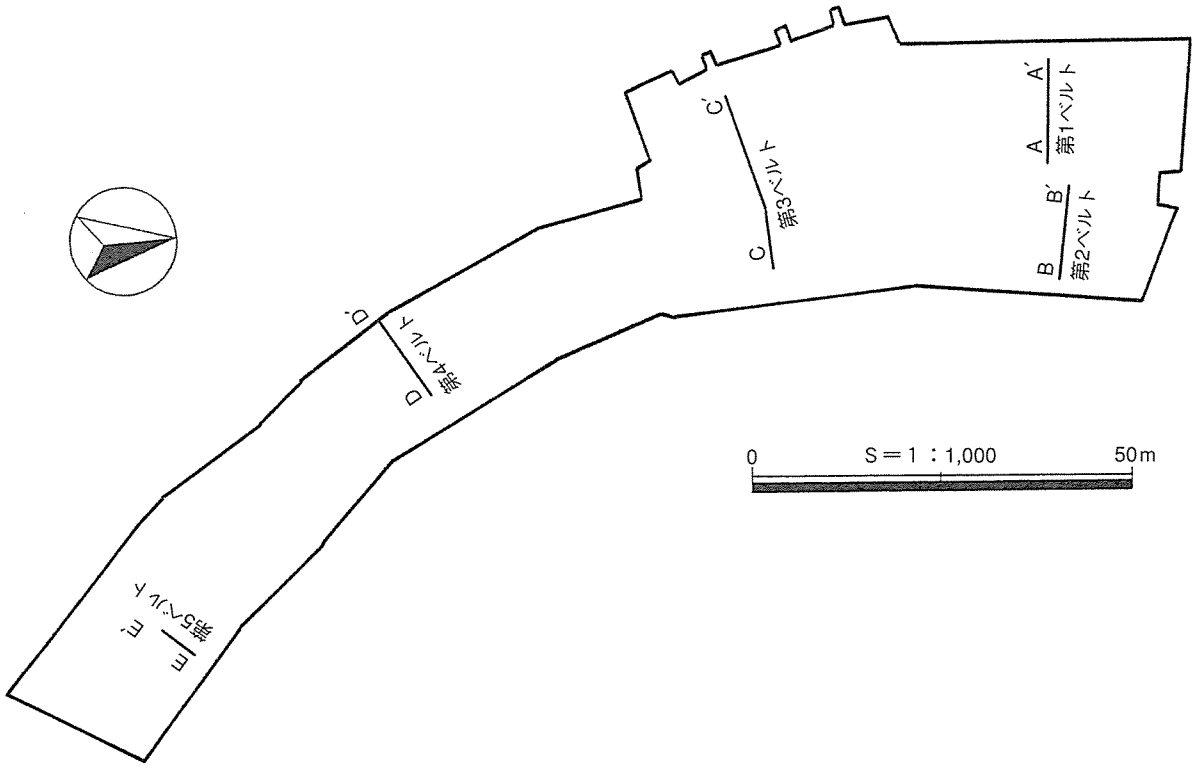
調査地の中央では、調査地北側のような造成（第Ⅲ層）は認められないが、表土（第Ⅰ層）直下に近世以降の旧耕作土あるいは旧表土（第Ⅱ層）が認められる。第Ⅱ層は2区では茶灰褐色土（旧A層）、3区では茶灰色土、暗灰色土、褐灰色土（旧C層）となっている。

基本層序は現地表面から第Ⅰ層→第Ⅱ層→第Ⅴ層→第Ⅵ層→第Ⅸ層となっている。

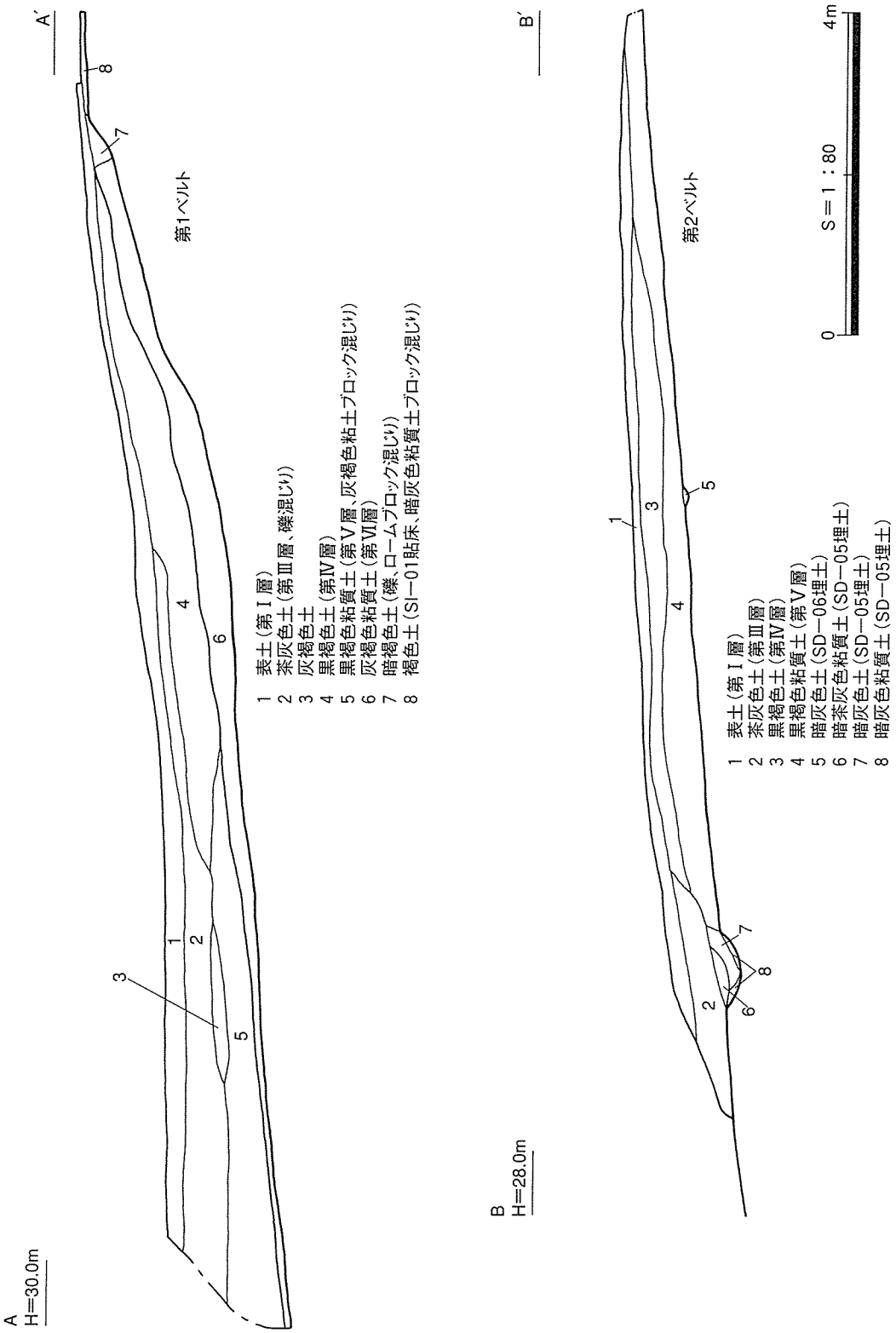
調査地南側（4区：E－E′）

調査地の南側は谷が入り込んでおり、谷内の下層は水成堆積、上層は湧水による台地裾部の崩落土の流入が認められる。

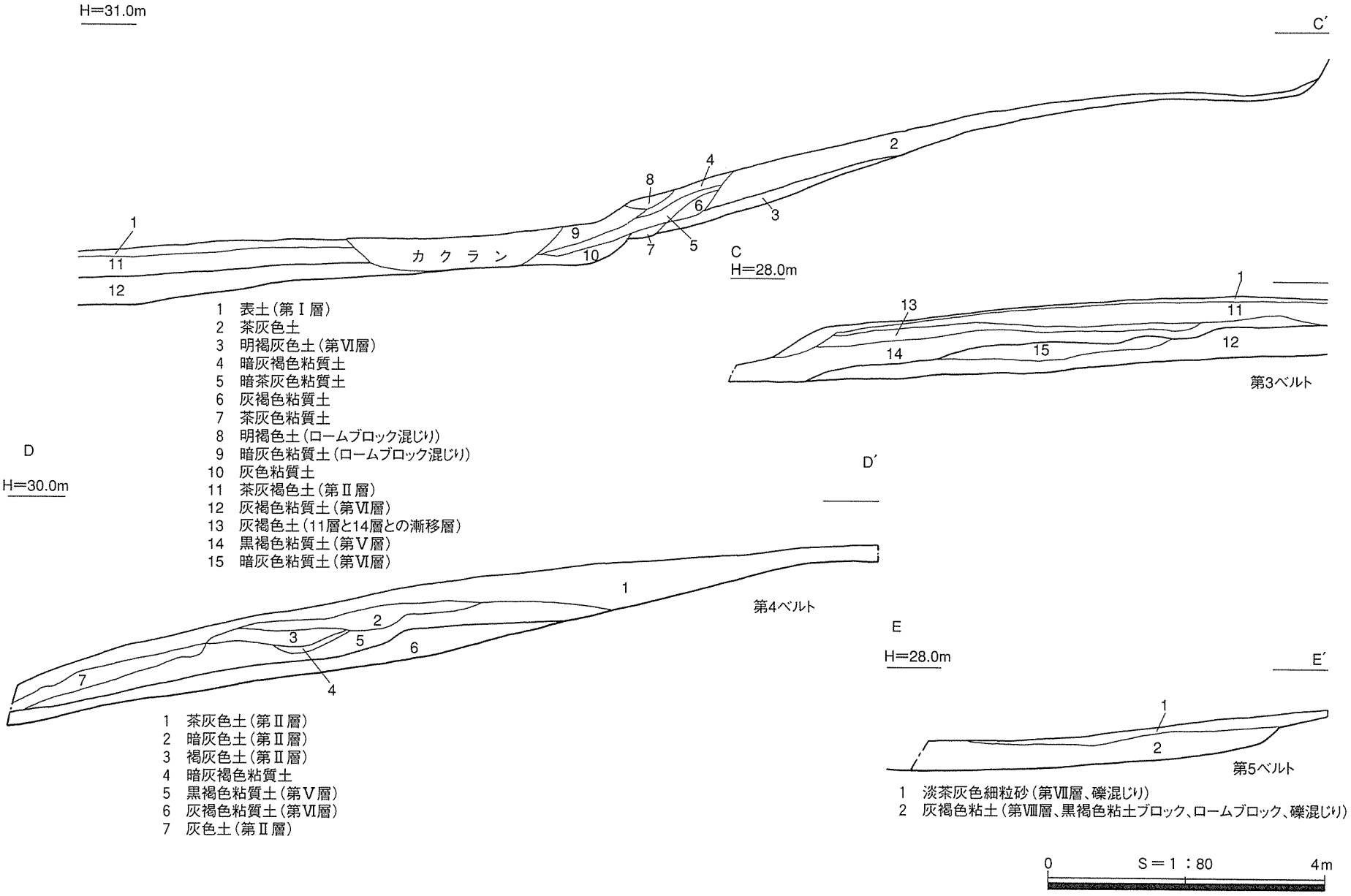
基本層序は現地表面から第Ⅰ層→第Ⅱ層→第Ⅶ層→第Ⅷ層→第Ⅸ層となっている。



第13図　土層図位置図


A
H=30.0m
A′
第1ベルト
1 表土（第Ⅰ層）
2 茶灰色土（第Ⅲ層、礫混じり）
3 灰褐色土
4 黒褐色土（第Ⅳ層）
5 黒褐色粘質土（第Ⅴ層、灰褐色粘土ブロック混じり）
6 灰褐色粘質土（第Ⅵ層）
7 暗褐色土（礫、ロームブロック混じり）
8 褐色土（SI−01貼床、暗灰色粘質土ブロック混じり）
B
H=28.0m
B′
第2ベルト
1 表土（第Ⅰ層）
2 茶灰色土（第Ⅲ層）
3 黒褐色土（第Ⅳ層）
4 黒褐色粘質土（第Ⅴ層）
5 暗灰色土（SD−06埋土）
6 暗茶灰色粘質土（SD−05埋土）
7 暗灰色土（SD−05埋土）
8 暗灰色粘質土（SD−05埋土）
0
S＝1：80
4m

第14図　土層図（1）



1　表土（第Ⅰ層）
2　茶灰色土
3　明褐灰色土（第Ⅵ層）
4　暗灰褐色粘質土
5　暗茶灰色粘質土
6　灰褐色粘質土
7　茶灰色粘質土
8　明褐色土（ロームブロック混じり）
9　暗灰色粘質土（ロームブロック混じり）
10　灰色粘質土
11　茶灰褐色土（第Ⅱ層）
12　灰褐色粘質土（第Ⅵ層）
13　灰褐色土（11層と14層との漸移層）
14　黒褐色粘質土（第Ⅴ層）
15　暗灰色粘質土（第Ⅵ層）

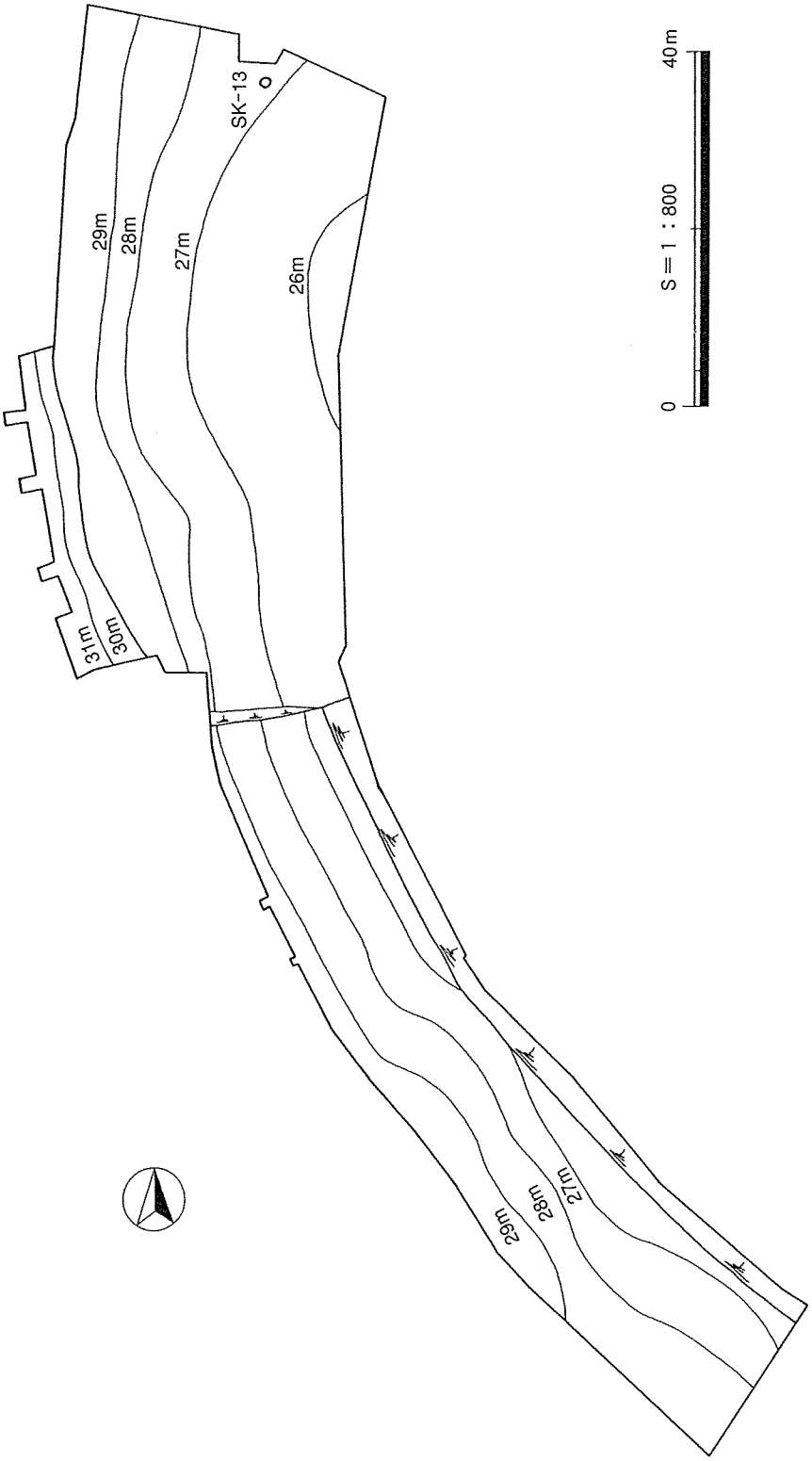
1　茶灰色土（第Ⅱ層）
2　暗灰色土（第Ⅱ層）
3　褐灰色土（第Ⅱ層）
4　暗灰褐色粘質土
5　黒褐色粘質土（第Ⅴ層）
6　灰褐色粘質土（第Ⅵ層）
7　灰色土（第Ⅱ層）

1　淡茶灰色細粒砂（第Ⅶ層、礫混じり）
2　灰褐色粘土（第Ⅷ層、黒褐色粘土ブロック、ロームブロック、礫混じり）

第15図　土層図（2）

X=−69,320
X=−69,310
X=−69,300
X=−69,290
X=−69,280
X=−69,270
X=−69,260
X=−69,250
X=−69,240
Y=−86,340
Y=−86,330
Y=−86,320
Y=−86,310
Y=−86,300
Y=−86,290
X=−69,330
X=−69,340
X=−69,350
X=−69,360
X=−69,370
X=−69,380
X=−69,390
X=−69,400
X=−69,410
SK-82
SB-09
SB-08
SB-07
SB-06
SB-05
SS-03
SB-04
SI-01
地下式横穴
30m
29m
28m
27m
26m
SK-28
SA-01
SA-02
SB-02
SS-01
SB-01・12
SK-13
SS-02
SB-03・13
SD-05
SD-08
SE-01
SK-46
SA-03
SA-04
SB-10
SI-02
SI-03
SB-11
0
S＝1：500
20m

第16図　遺構配置図



第17図　縄文時代の遺構配置図

第３節　縄文時代の調査

１．概　　要

縄文時代の遺構は、調査地の北側で落し穴１基（ＳＫ－１３）を検出した。この他にもＳＫ－１３と同形態、同規模の土坑が54基存在するが、いずれも底面に小ピットを持たないもので、このうち、１基（ＳＫ－２６）は埋土から須恵器が出土していることと、もう２基（ＳＫ－５４・５５）は古墳時代前期後半のＳＩ－０３の貼床上面から掘り込まれていることから、これらの３基は縄文時代に属するものではないと判断した。残りの51基についても遺物が出土しておらず、時期が特定できないため、現段階では縄文時代の落し穴であると積極的には断定できないものと考えている。

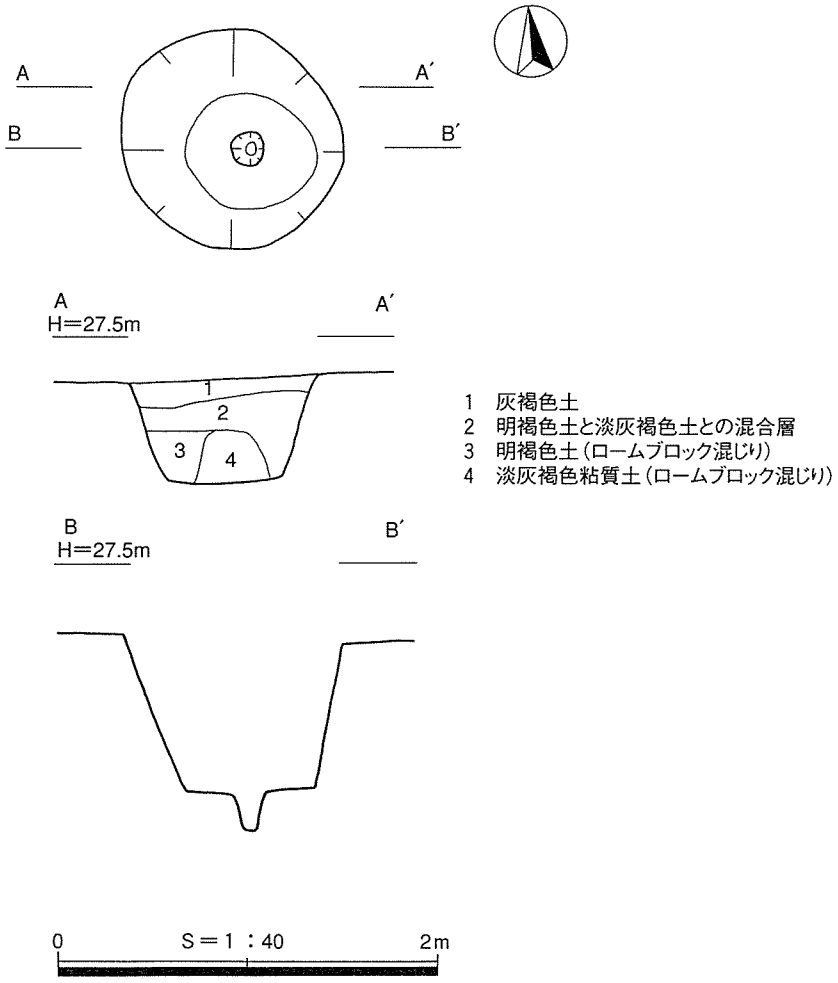
２．検出した遺構

ＳＫ－１３（第18図）

ＳＫ－１３は調査地の北側で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は長軸1.２ｍ、短軸1.1ｍ、深さ0.8ｍをはかる。底面の中央には径19×17cm、深さ20cmのピットがある。

埋土は土層観察用のベルトの設定位置を間違えたため、詳細な状況は不明であるが、現況では上層、中層、下層の3層に分かれ、中層と下層は壁に近いこともあって、ローム層に由来する土やローム層のブロックが混じっている。

遺物が出土していないため時期は不明であるが、形態的特徴から縄文時代の落し穴であると考えられる。



第18図　ＳＫ－１３遺構図

第４節　古墳時代前期後半～中期前半の調査

１．概　　要

古墳時代前期後半～中期前半の遺構は、調査地の中央から南側にかけて、竪穴住居跡１棟、土坑１基を検出した。竪穴住居跡は古墳時代前期後半のもので、２本の主柱穴からなり、特殊ピットを有する。土坑は古墳時代中期前半のもので、床面や壁面には被熱した痕跡は認められないが、埋土に炭化物や焼土が混じっている。

両遺構は時期的に連続するものであるのか、あるいは断続するものであるのかは不明であるが、いずれも集落の縁辺部に位置しており、当該期の集落の本体は調査地西側の台地上に存在するものと思われる。

２．検出した遺構と遺物

ＳＩ－０３（第20図）

ＳＩ－０３は西から東へ張り出す小尾根上に位置し、平面形態は方形を呈する。規模は、南東側が残存していないが、北東―南西長4.6m、北西―南東長は現状で3.9m、深さは最大で0.4mをはかる。

主柱穴はＰ－１、Ｐ－２の２基で、各々の規模はＰ－１（39×38―51）㎝、Ｐ－２（38×36―54）㎝をはかり、柱間距離は2.2mである。

南東側を除く壁際には幅20～28㎝、深さ４～12㎝をはかる周壁溝が巡り、南西側の壁際には周壁溝を切る形で掘り込まれた特殊ピットがある。特殊ピットの平面形態は方形を呈し、北西側と南東側の肩には段がある。規模は一辺0.7m、深さ0.8mをはかり、埋土は灰褐色土（上層）、茶褐色土（中層）、暗灰色土（下層）の３層に分かれ、いずれもローム層のブロックが混じっている。北東側の肩付近には１石があり、特殊ピット内にも床面からかなり浮いた状態（中層）で集石が認められる。集石は10～20㎝大の６石からなっており、その直上から土師器の高坏脚部が出土した。なお、上層及び下層からは遺物は出土していない。

特殊ピット内の集石の性格については、特殊ピットの性格の１つとして祭祀に関わるものであるということが考えられており[註3]、特殊ピット内の集石の直上から土師器の高坏脚部が出土したことからも、何らかの祭祀行為に関わる可能性がある。

住居跡の埋土は暗茶灰色粘質土（上層）、淡茶灰色粘質土（下層）の2層に分かれ、いずれからも遺物が出土した。また、住居跡の床面全体にローム層と同質の明褐色粘質土を用いた厚さ３～８㎝の貼床が認められるが、貼床内からは遺物は出土しなかった。

遺物は住居跡の埋土及び特殊ピットから弥生土器、土師器が出土した。１は特殊ピットから出土した土師器高坏の脚部である。２、３は上層から出土したものである。２は弥生時代中期中葉の土器で、口縁には１条の凹線が巡る。３は複合口縁を有する甕で、口縁端部は平坦な面をなし、さらに外方へわずかにつまみ出されている。４は下層から出土した複合口縁を有する壷で、口縁端部は平坦な面をなし、さらにわずかに外方へつまみ出されている。

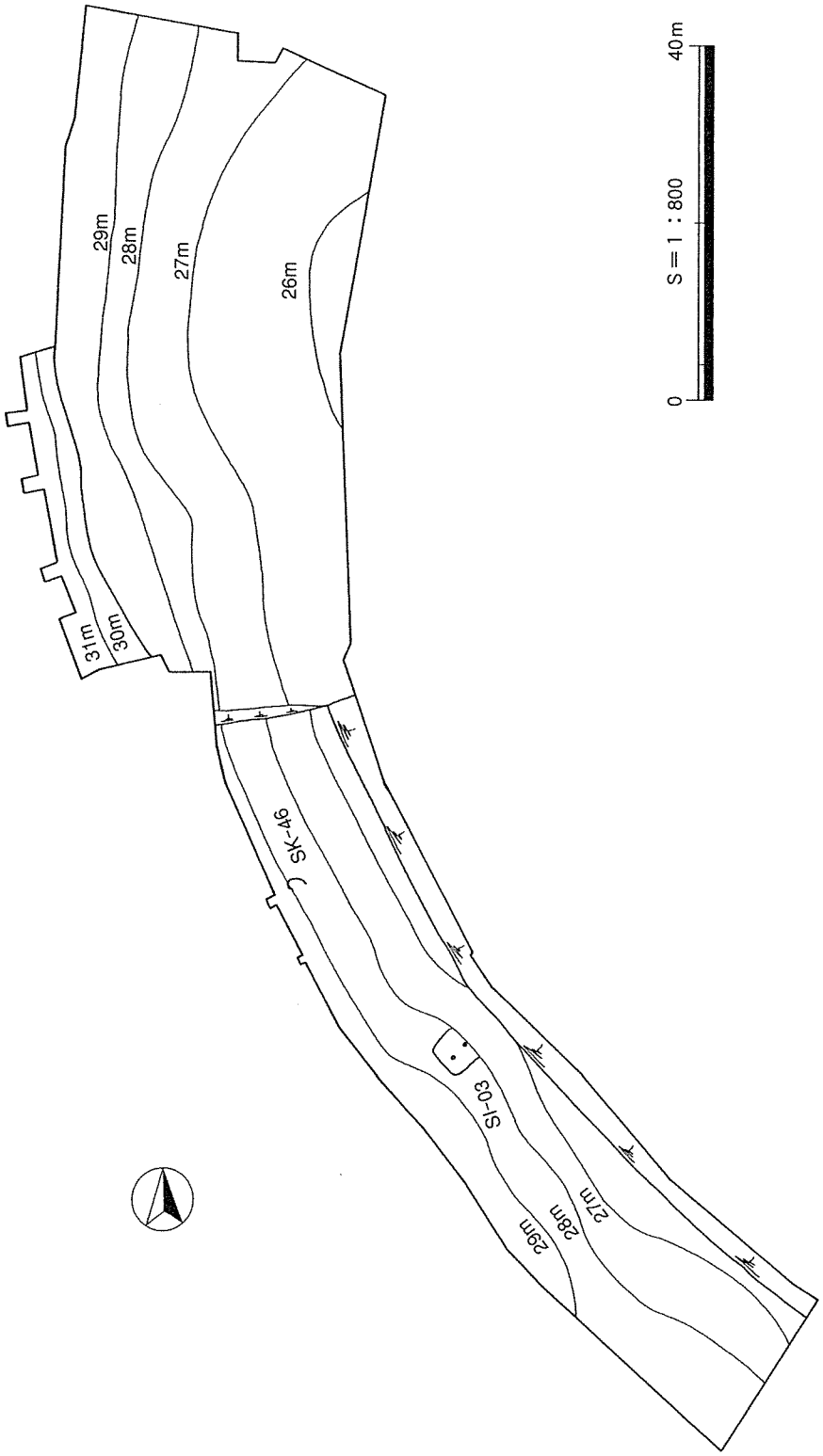
本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代前期後半頃のものであると考えられる。

ＳＫ－４６（第21図）

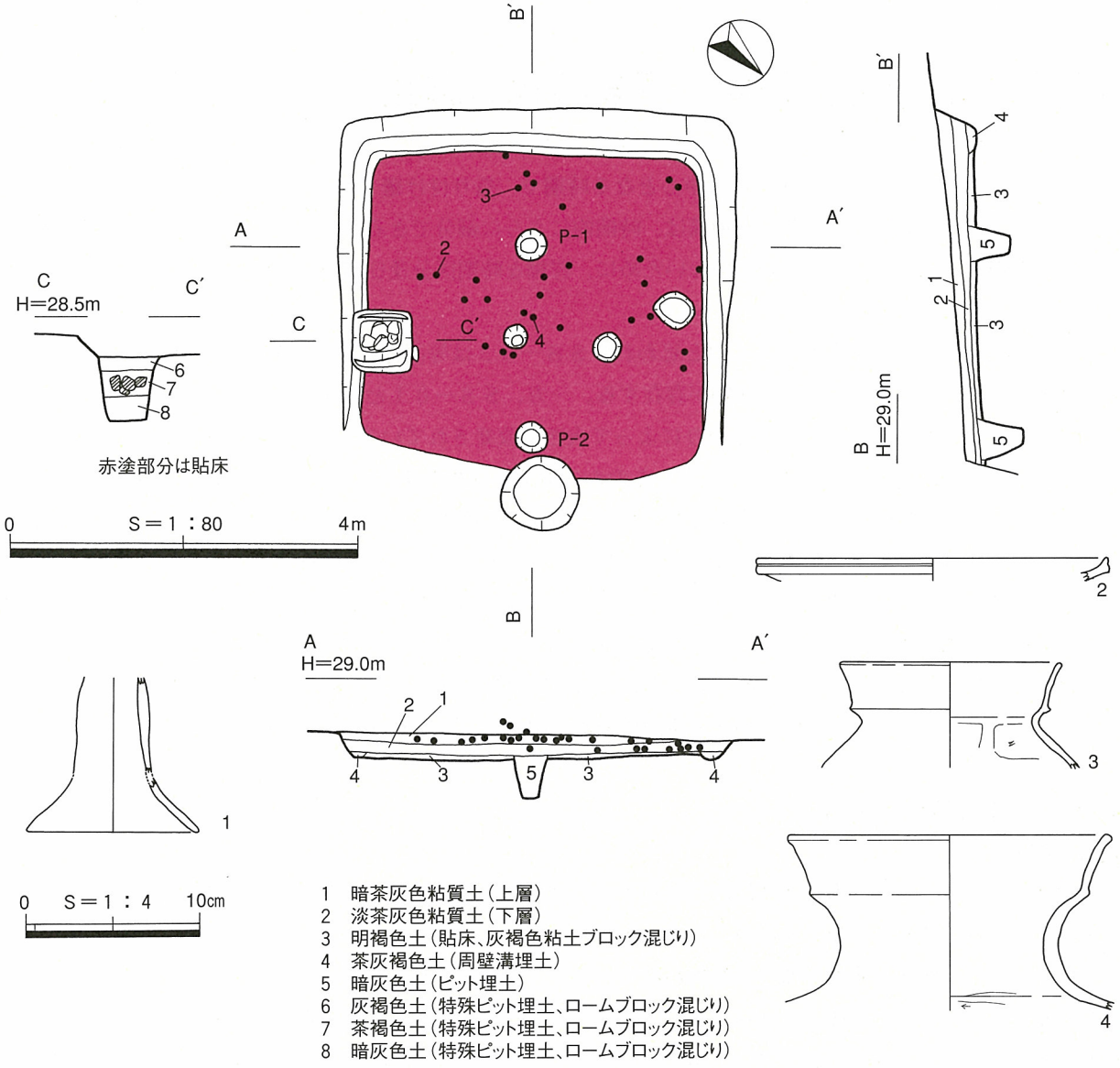
ＳＫ－４６は南東側が削平されているが、平面形態は隅丸方形を呈するものと思われる。規模は1.4m×1.3m、深さ0.3mをはかる。埋土は灰褐色土の単層で、炭化物と焼土の小塊を包含している。なお、床面と壁面には被熱した痕跡は認められない。

遺物は西側の壁際で、床面から少し浮いた状態で土師器甕（５）が出土した。

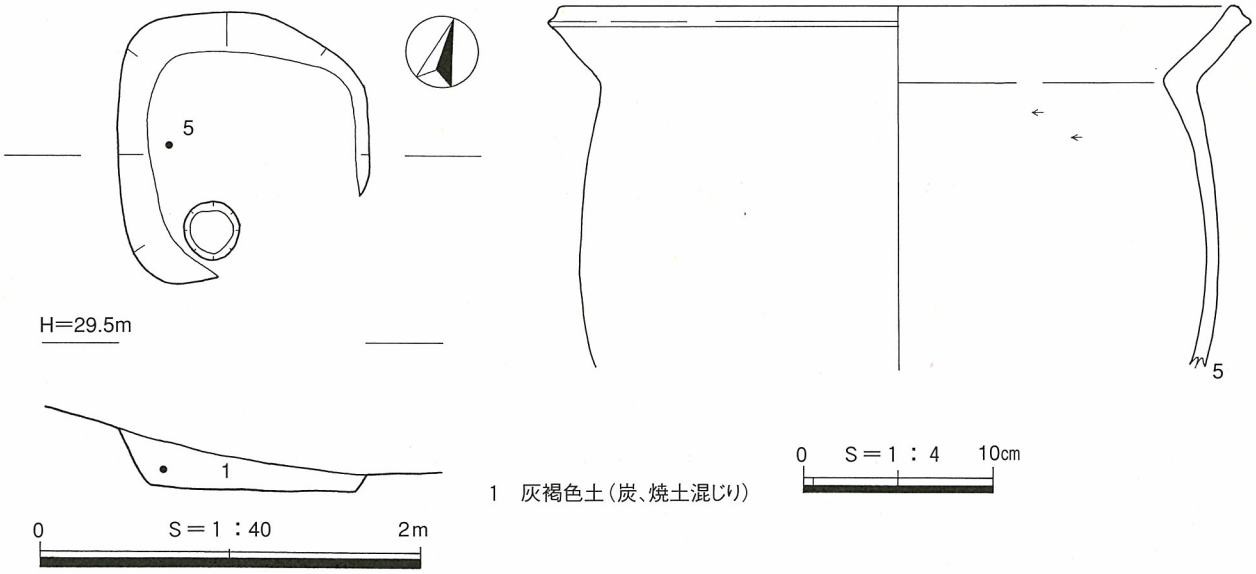
本遺構の時期は、出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果（AD420年）から、古墳時代中期前半頃のものであると考えられる。



第19図　古墳時代前期後半～中期前半の遺構配置図



第20図　ＳＩ－０３遺構図及び出土遺物実測図



第21図　ＳＫ－４６遺構図及び出土遺物実測図

第５節　古墳時代後期～平安時代の調査

１．概　　要

古墳時代後期～平安時代は当遺跡の最も中心となる時期で、造り付け竈１基、段状遺構３基、掘立柱建物13棟、柵４条、土坑１基を確認した。これらの遺構は、時期的にさらに細分できるものと思われるが、詳細な時期を特定できる良好な遺物が遺構内から出土していないために、詳細な時期区分及び遺構の所属時期をこれ以上明らかにすることができなかった。

段状遺構は地形に即して配置されたものと思われ、ＳＳ－０３は等高線に平行するように東を志向して位置し、現状ではＳＳ－０３には６棟の掘立柱建物が存在する。一方、ＳＳ－０１とＳＳ－０２は東へのびる小尾根上に位置しているが、いずれも北側が後世の土取りによって大きく改変されているため、どの方向を志向しているのか、また、各々の段状遺構内に建物が1棟のみ存在したのか、あるいは複数棟存在したのかは不明である。

掘立柱建物は大部分が段状遺構内に構築されており、斜面部に構築されたＳＢ－１０・１１については後世の耕作等によって段状遺構が削平された可能性もある。ＳＢ－０２とＳＢ－０６は総柱建物、これ以外は側柱建物であると考えられ、ＳＢ－０２は切合関係からＳＢ－０１よりも時期的に先行する。

掘立柱建物と柵は、柱穴から時期が特定できる遺物が出土していないことと、ＳＢ－０１とＳＢ－０２以外は切合関係が認められないことから、時期的な前後関係や併行関係は不明である。また、建物の主軸方向によってグルーピングができるものの、特には時期的な前後関係や併行関係などの有意性を示すものではないようである。

２．検出した遺構と遺物

造り付け竈（第23図）

造り付け竈は、竪穴住居跡内に造り付けられたものと思われるが、住居跡の掘り方は後世の削平によって著しく改変を受けており、柱穴も確認できなかったが、無柱穴であった可能性がある。

造り付け竈は、南側と東側の一部の壁が失われているが、本来は壁がコ字形に巡り、西側に焚口が位置するものと思われる。また、東側には煙道がとりつき、燃焼部には竈の構築材として用いられたものと思われる石が転落した状態で出土している。煙道は長さ46cm、幅25cm、深さ5cmをはかり、煙道内には炭化物と焼土の小塊が混じっている。なお、竈の構築材として用いられたものと思われる石は長さ45cm、幅８～14cmをはかり、被熱している。

壁は粘土によって構築されており、北側の壁は現状で長さ55cm、幅22cm、高さ７cm、東側の壁は現状で長さ37cm、幅24cm、高さ６cmをはかり、いずれの壁も一部が被熱している。なお、壁内には７～12cm大の石が混じっているが、遺物の出土は認められなかった。

燃焼部の床面は貼床や被熱した痕跡は認められず、燃焼部内にも炭化物などの堆積は認められなかった。後世の耕作等によって失われたものと思われる。

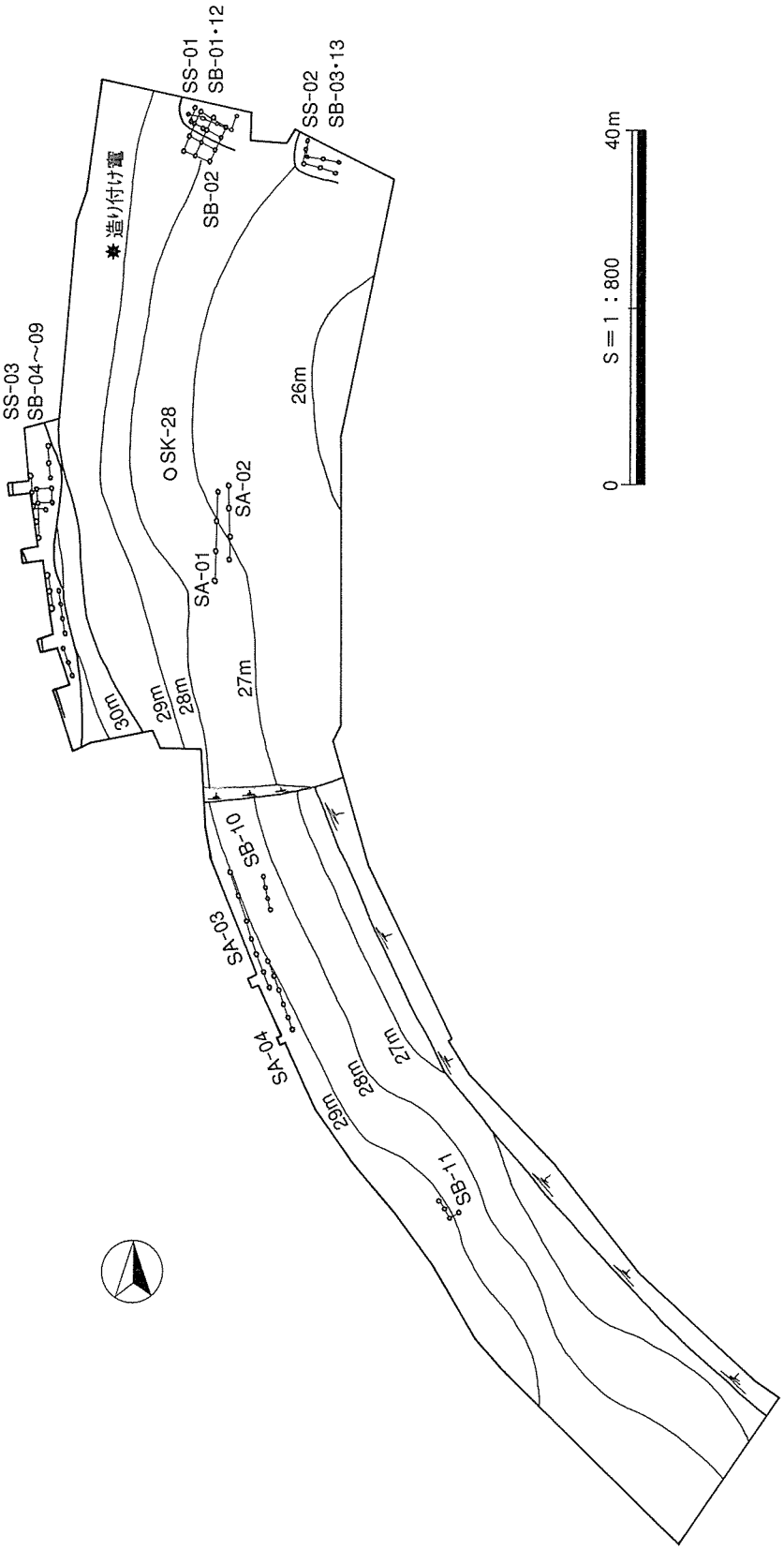
遺物は出土していないが、煙道から出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果（AD660年）から、本遺構は７世紀中葉頃のものであると考えられる。

ＳＫ－２８（第24図）

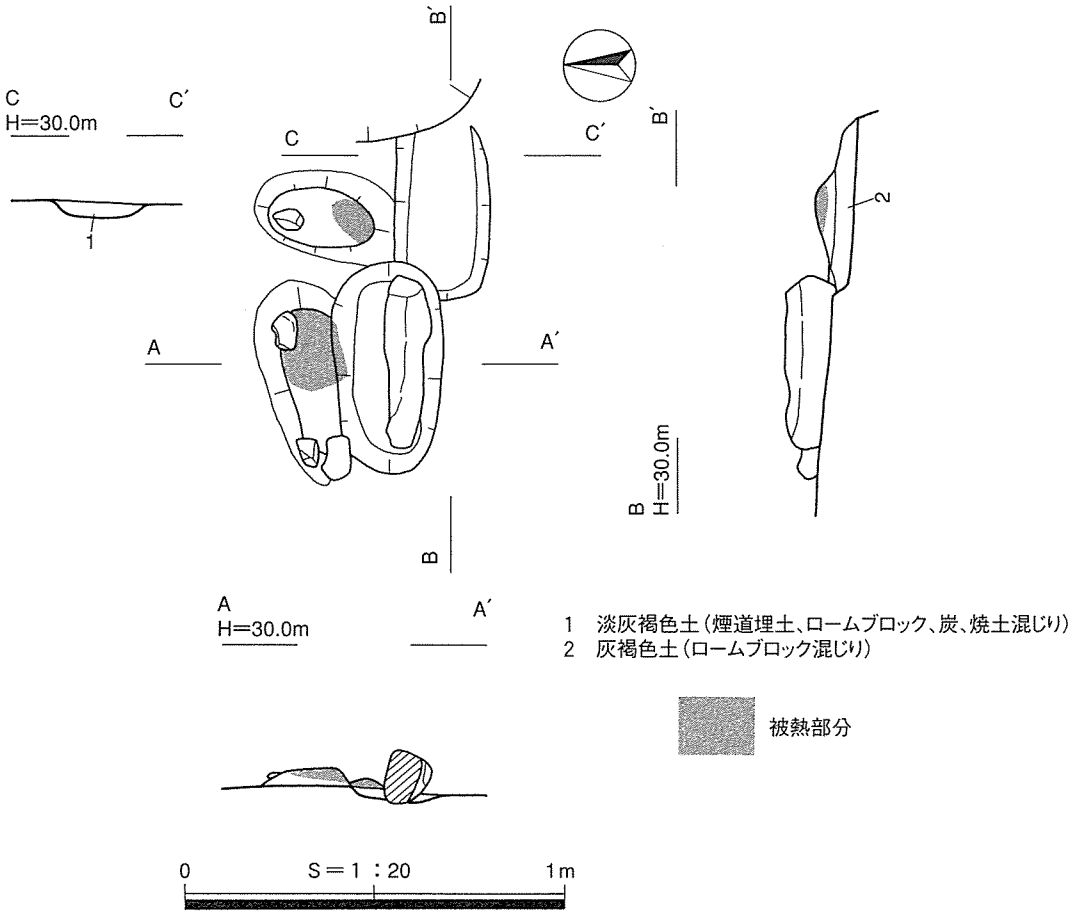
ＳＫ－２８はＳＫ－２９を切って掘り込まれており、平面形態は不整形な円形を呈する。規模は長径1.6m、短径1.4m、深さ0.3mをはかる。

埋土は大きく２層に分けられ、下層（６、７層）はローム層のブロックが混じることから、ローム層を撹乱したものと思われる。上層（４、5層）は黒ボクに由来する堆積土であると思われる。

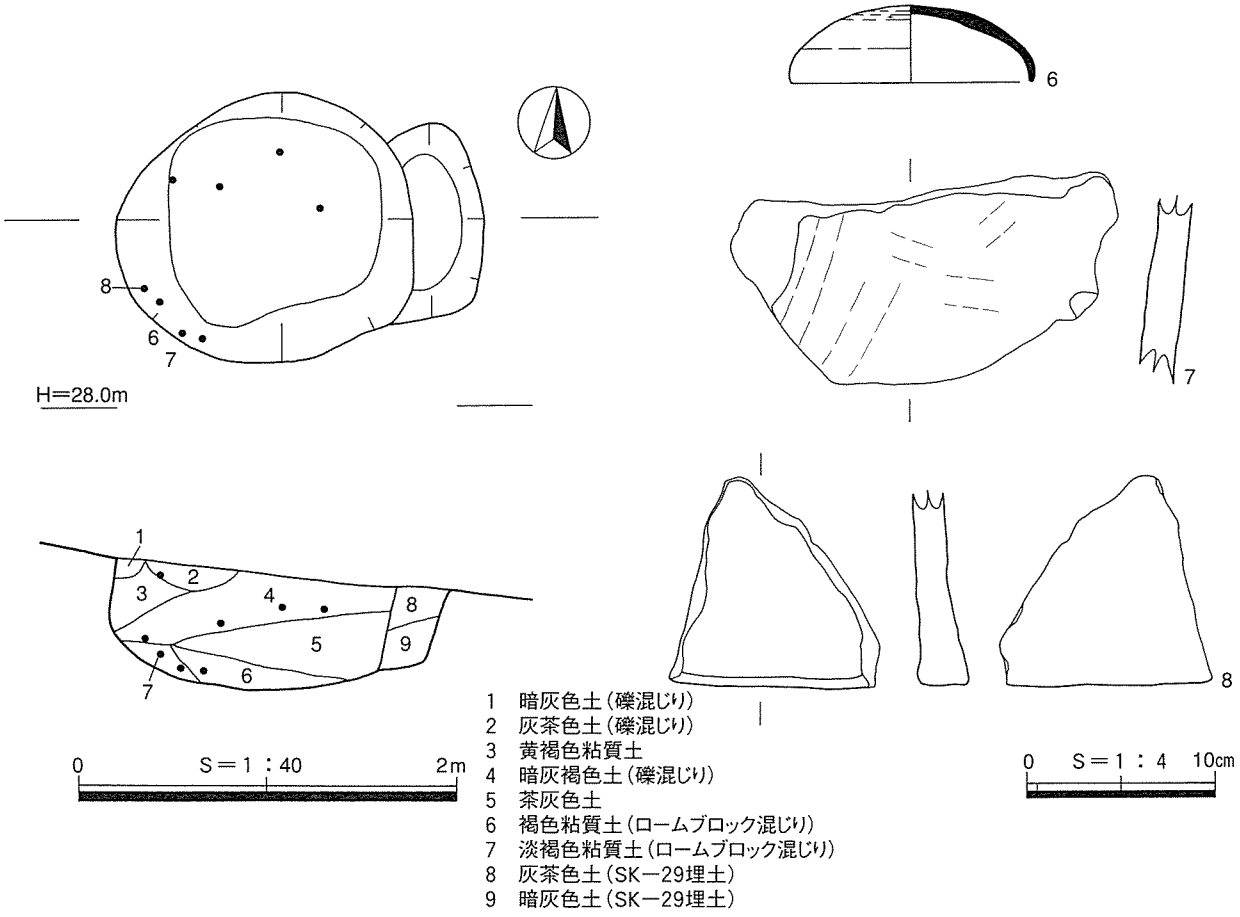
遺物は上層及び下層から出土しており、床面近くから須恵器坏蓋（６）、移動式竈（７、８）が出土した。



第22図　古墳時代後期～平安時代の遺構配置図



第23図　造り付け竈遺構図



第24図　ＳＫ－２８遺構図及び出土遺物実測図

ＳＳ－０１（第25図）

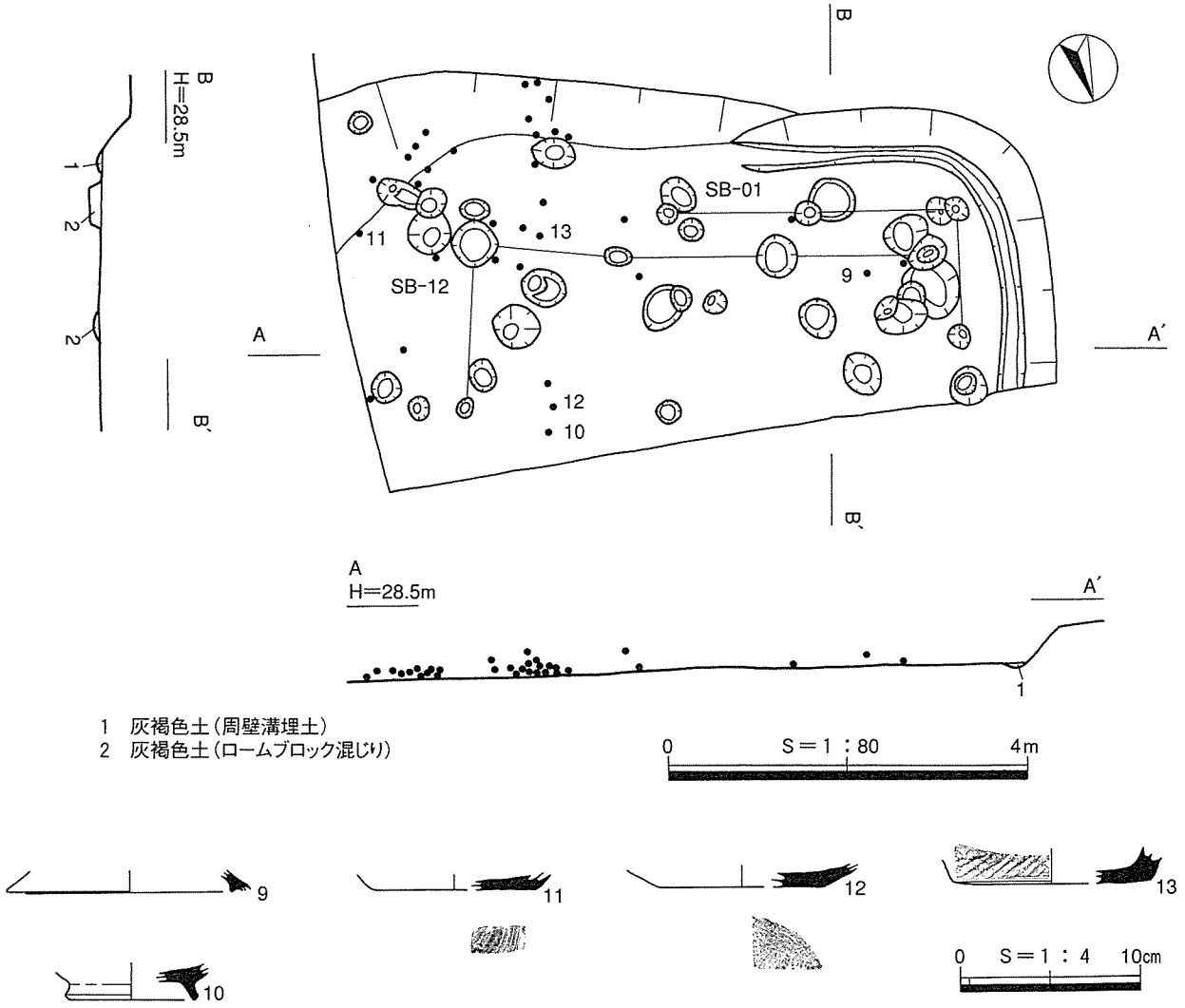
ＳＳ－０１は東へのびる小尾根上に立地する。北側は後世の土取りによって大きく破壊され、東側は中世後半以降の掘り込みや段切りによって改変を受けているが、平面形態は隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は現状で南北長3.4m、東西長3.5m、深さは最大で0.4mをはかる。また、壁際には周壁溝が巡り、その規模は幅16～33cm、深さ５～８cmをはかる。なお、東側の中世後半以降の掘り込みはついては平面的には確認することができなかった。

ＳＳ－０１内にはＳＢ－０１とＳＢ－１２の２棟の掘立柱建物が存在するが、両者は切合が認められず、時期的な前後関係は不明である。

遺物は東側では中世後半以降の掘り込みによって現位置を保っていないものが多く、中世後半以降の陶磁器とともに須恵器が出土しているが、これらの須恵器は本来はＳＳ－０１に属していた可能性がある。

９は返りを有する坏蓋で、床面から少し浮いた状態で出土しているが、ほぼ現位置を保っているものと思われる。10～12は坏身で、11の底部外面には回転糸切りが施されている。13は甕で、外面には平行叩きが施されている。

本遺構の時期は、出土遺物から８世紀代であると考えられる。



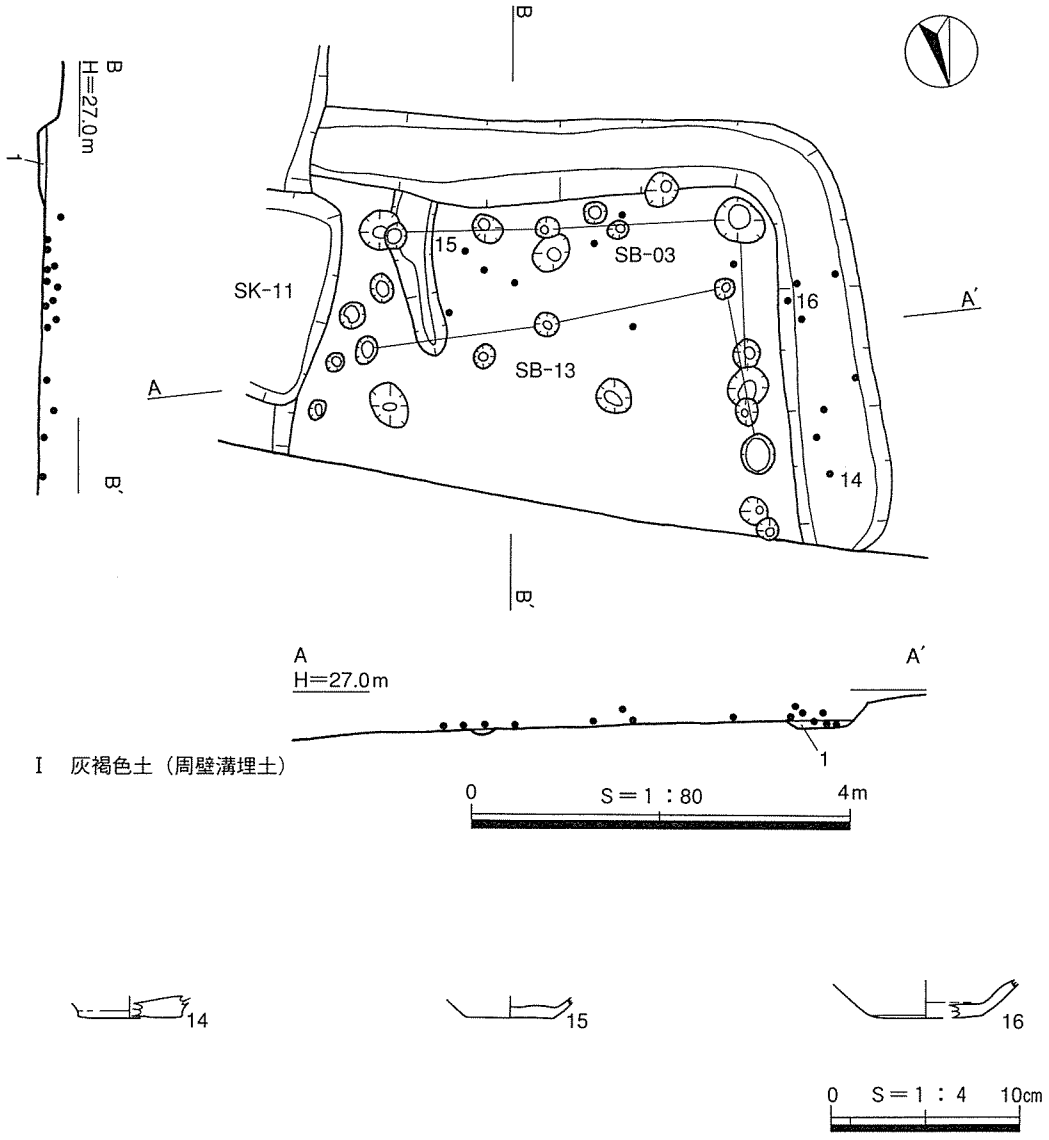
第25図　ＳＳ－０１遺構図及び出土遺物実測図

ＳＳ－０２（第26図）

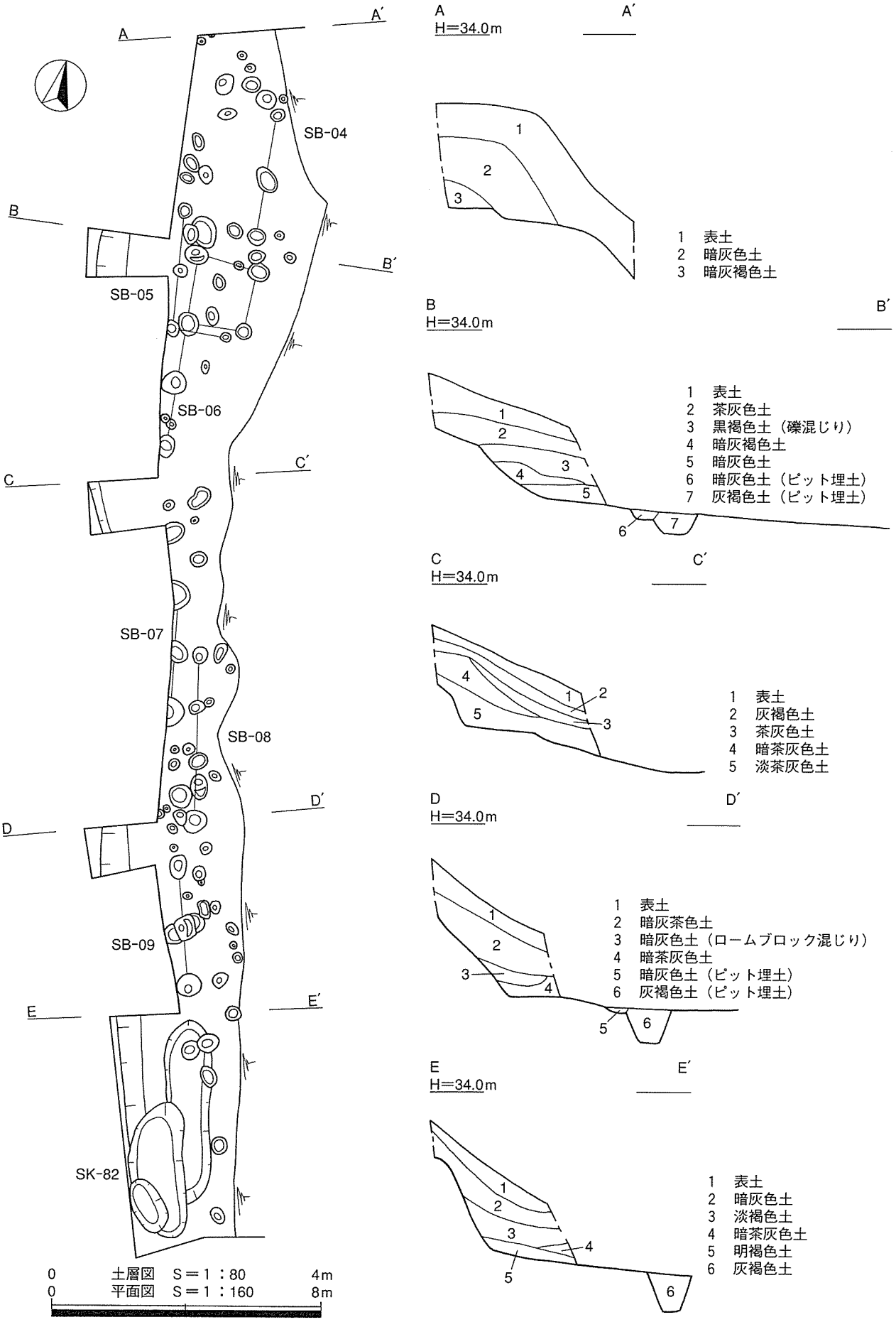
ＳＳ－０２は東へのびる小尾根上に立地する。北側は後世の土取りによって大きく破壊され、東側はＳＫ－１１によって改変を受けているが、平面形態は隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は現状で南北長4.6m、東西長6.1m、深さ0.2mをはかる。また、壁際には周壁溝が巡り、その規模は幅0.7～1.0m、深さ８～12cmをはかる。

ＳＳ－０２内にはＳＢ－０３とＳＢ－１３の２棟の掘立柱建物が存在する。両者は切合は認められないが、ＳＳ－０２の主軸との関係からＳＢ－０３がＳＢ－１３よりも時期的に先行するものと思われる。

遺物は床面から浮いた状態で土師器と須恵器が出土している。14～16はいずれも土師器坏身であるが、床面から比較的浮いた状態で出土しており、これらは本遺構の所属時期を示すものではないものと考えられる。



第26図　ＳＳ－０２遺構図及び出土遺物実測図



第27図　ＳＳ－０３遺構図

ＳＳ－０３（第27図）

ＳＳ－０３は調査区の西側に位置し、南北にのびる長大な段状遺構である。調査区の関係で、全容を確認できなかったが、調査区外の南側と北側には現状でもこれにつづくものと思われる平坦面が認められる。しかし、笹等が繁茂しているため、立ち入ることができず、規模や平面形態は確認できなかった。西側については部分的にトレンチを入れて、西側の肩を確認した。現状での規模は長さ36.0m、奥行は最大で7.2mをはかる。

床面は硬く締まった砂礫が露出し、著しく凸凹しているため、本来は貼床がなされていたものと思われるが、今回の調査では確認できず、既に失われたものと考えられる。また、周壁溝も確認できなかったが、本来は貼床上面から掘り込まれていた可能性がある。

ＳＳ－０３内にはＳＢ－０４～ＳＢ－０９の６棟の掘立柱建物が存在する。ＳＢ－０５・０６以外は桁行部分しか確認できなかったが、これらも掘立柱建物であると判断した。なお、掘立柱建物は切合は認められず、時期的な前後関係及び併行関係は不明である。

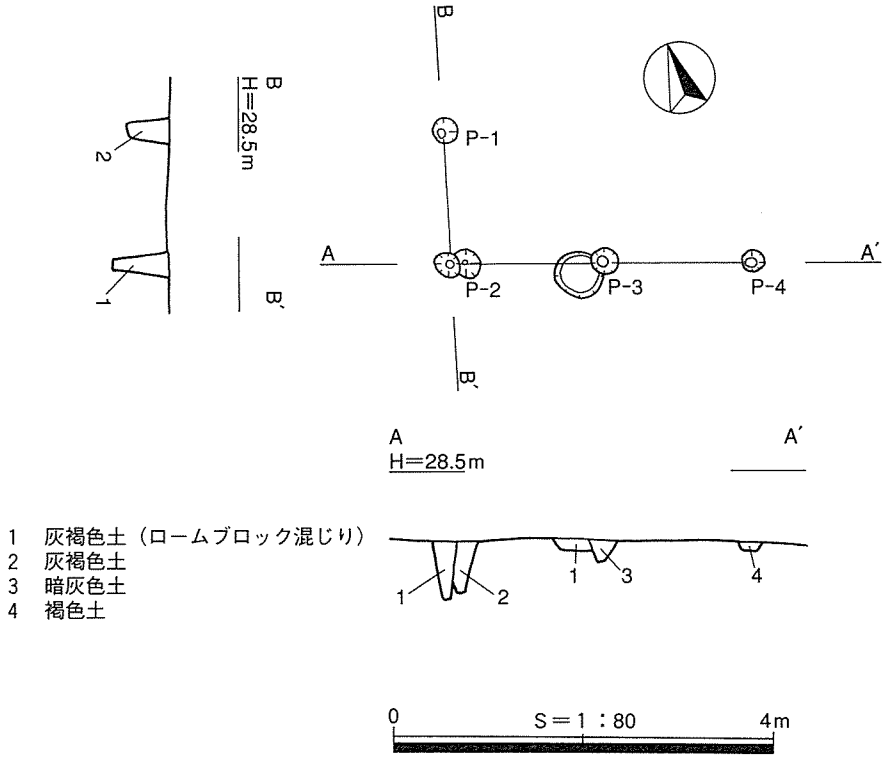
遺物は上部からの流入土からは出土するものの、床面付近からは須恵器甕の胴部片が１点出土したのみである。

ＳＢ－０１（第28図）

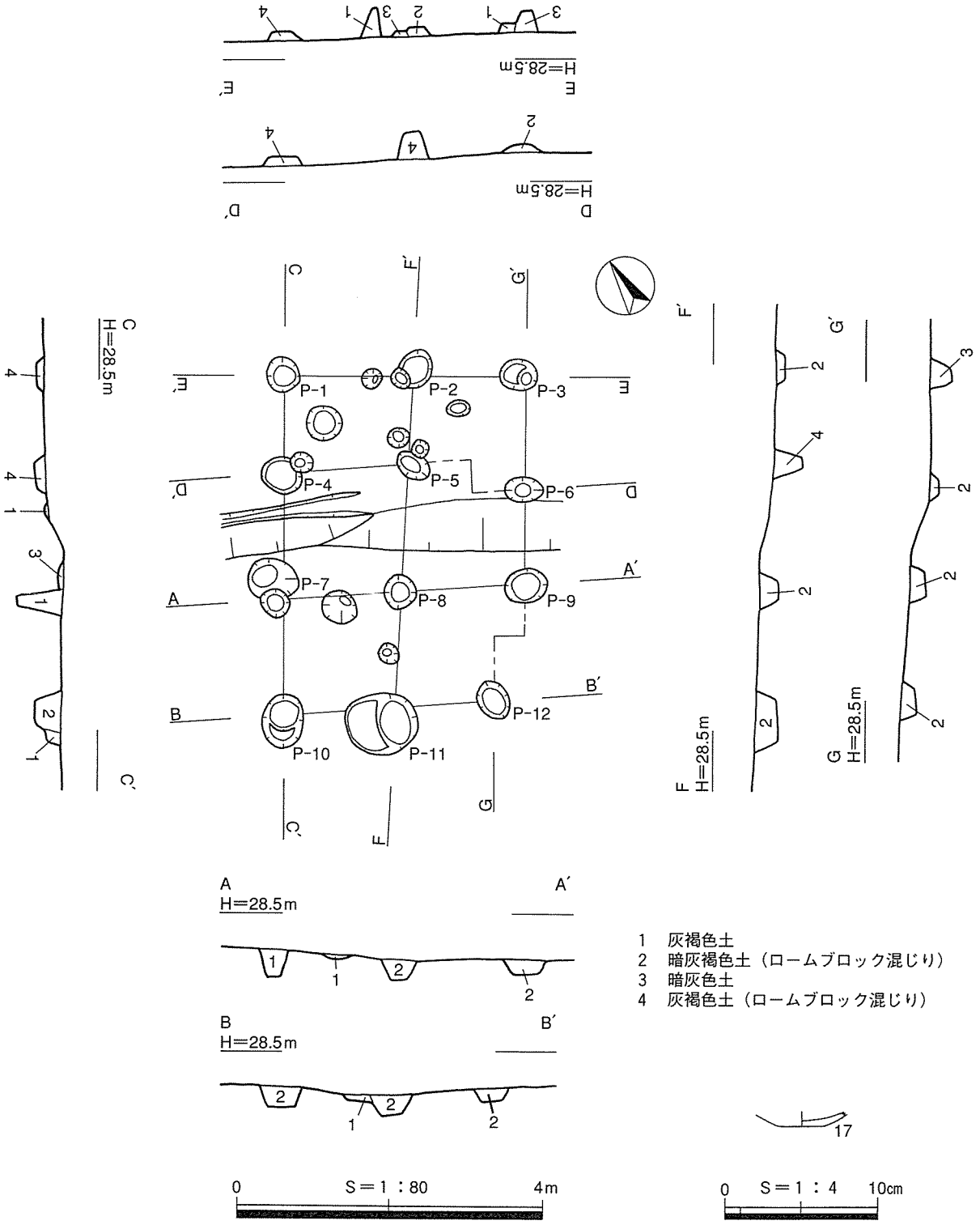
ＳＢ－０１はＳＳ－０１内に位置する。北側が後世の土取りで大きく破壊されているために、建物の方向は不明であるが、現状で２間×１間分を確認した。

柱穴の規模はＰ－１（27×25－47）cm、Ｐ－２（30×25－62）cm、Ｐ－３（28×27－23）cm、Ｐ－４（24×23－12）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.4m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.6m、Ｐ－３～Ｐ－４が1.6mである。主軸方向は南北棟であると仮定すると、Ｎ—21°—Ｅである。

柱穴内からは遺物は出土しなかった。



第28図　ＳＢ－０１遺構図



第29図　ＳＢ－０２遺構図及び出土遺物実測図

ＳＢ－０２（第29図）

ＳＢ－０２は東へのびる小尾根上に立地し、この小尾根の軸とは直交するように位置している。ＳＢ－０２は桁行３間、梁行２間の総柱建物で、北東側はＳＢ－０１に切られている。

柱穴の規模はＰ－１（47×44－11）cm、Ｐ－２（52×43－14）cm、Ｐ－３（53×44－30）cm、Ｐ－４（52×49－18）cm、Ｐ－５（48×34－38）cm、Ｐ－６（53×33－14）cm、Ｐ－７（39×38－60）cm、Ｐ－８（46×42－25）cm、Ｐ－９（58×44－23）cm、Ｐ－10（70×56－36）cm、Ｐ－11（72×54－32）cm、Ｐ－12（52×41－22）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.7m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.4m、Ｐ－４～Ｐ－５が1.7m、Ｐ－５～Ｐ－６が1.5m、Ｐ－7～Ｐ－８が1.7m、Ｐ－８～Ｐ－９が1.7m、Ｐ－10～Ｐ－11が1.5m、Ｐ－11～Ｐ－12が1.3m、Ｐ－１～Ｐ－４が1.3m、Ｐ－４～Ｐ－７が1.7m、Ｐ－７～Ｐ－10が1.5m、Ｐ－２～Ｐ－５が1.3m、Ｐ－５～Ｐ－８が1.7m、Ｐ－８～Ｐ－11が1.7m、Ｐ－３～Ｐ－６が1.5m、Ｐ－６～Ｐ－９が1.3m、Ｐ－９～Ｐ－12が1.6mである。主軸方向はＮ—30°—Ｅである。

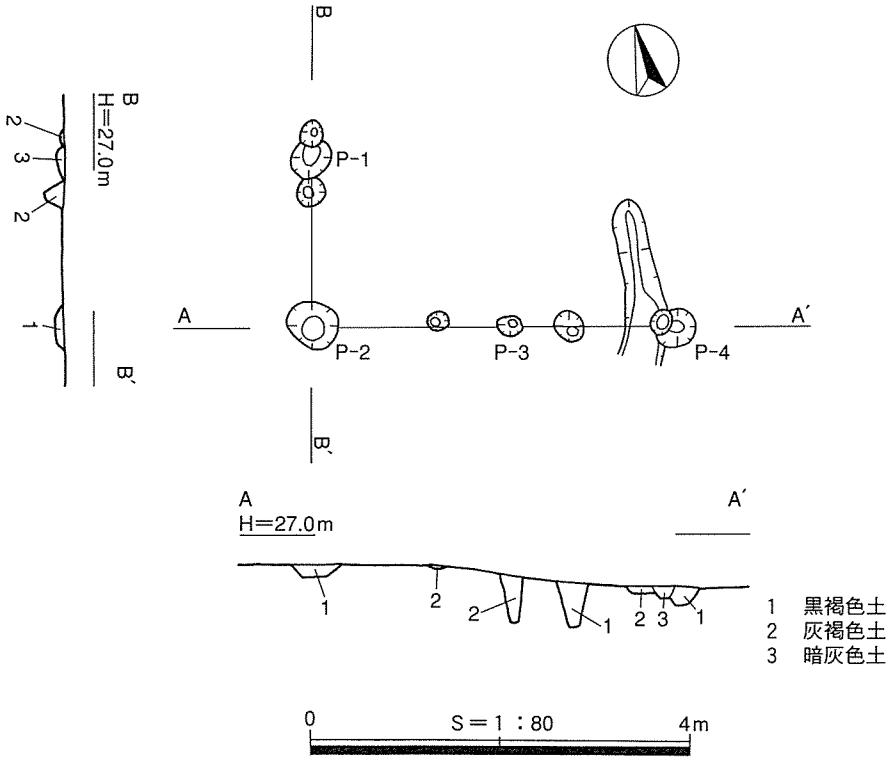
遺物はＰ－７から土師器坏身（17）が出土した。

ＳＢ－０３（第30図）

ＳＢ－０３はＳＳ－０２内に位置する。北側が後世の土取りで大きく破壊されているために、建物の方向は不明であるが、現状で２間×１間分を確認した。

柱穴の規模はＰ－１（46×40－10）cm、Ｐ－２（55×48－14）cm、Ｐ－３（26×24－51）cm、Ｐ－４（43×42－21）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.9m、Ｐ－２～Ｐ－３が2.1m、Ｐ－３～Ｐ－４が1.7mである。主軸方向は南北棟であると仮定すると、Ｎ—５°—Ｅである。

柱穴内からは遺物は出土しなかった。



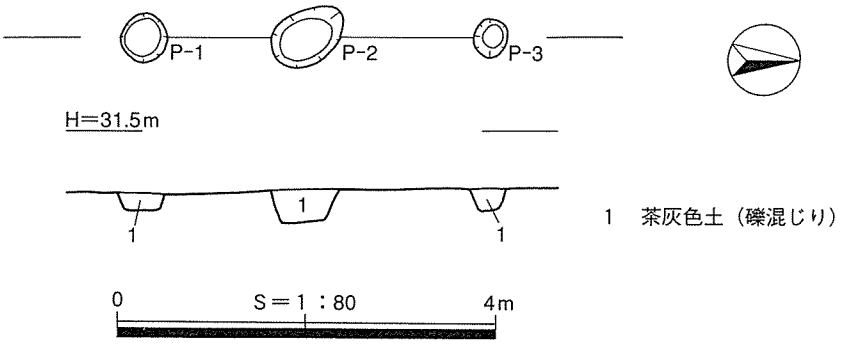
第30図　ＳＢ－０３遺構図

ＳＢ－０４（第31図）

ＳＢ－０４はＳＳ－０３内に位置する南北棟の建物で、桁行２間分を検出した。

柱穴の規模はＰ－１（48×44－18）cm、Ｐ－２（84×62－38）cm、Ｐ－３（41×36－24）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.7m、Ｐ－２～Ｐ－３が2.0mである。主軸方向はＮ－２°－Ｗである。

柱穴内からは遺物は出土しなかった。



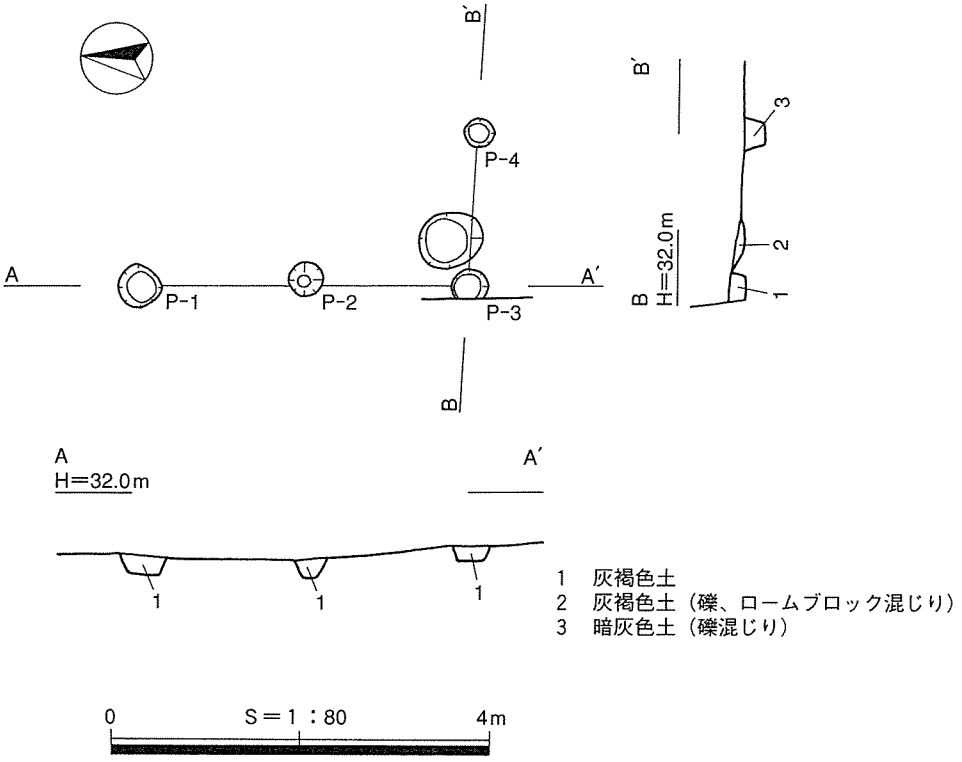
第31図　ＳＢ－０４遺構図

ＳＢ－０５（第32図）

ＳＢ－０５はＳＳ－０３内に位置する南北棟の建物で、桁行２間、梁行１間分を検出した。

柱穴の規模はＰ－１（48×47－23）cm、Ｐ－２（38×38－23）cm、Ｐ－３（40×32以上－18）cm、Ｐ－４（38×32－18）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.7m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.7m、Ｐ－３～Ｐ－４が1.7mである。主軸方向はＮ－５°－Ｗである。

柱穴内からは遺物は出土しなかった。



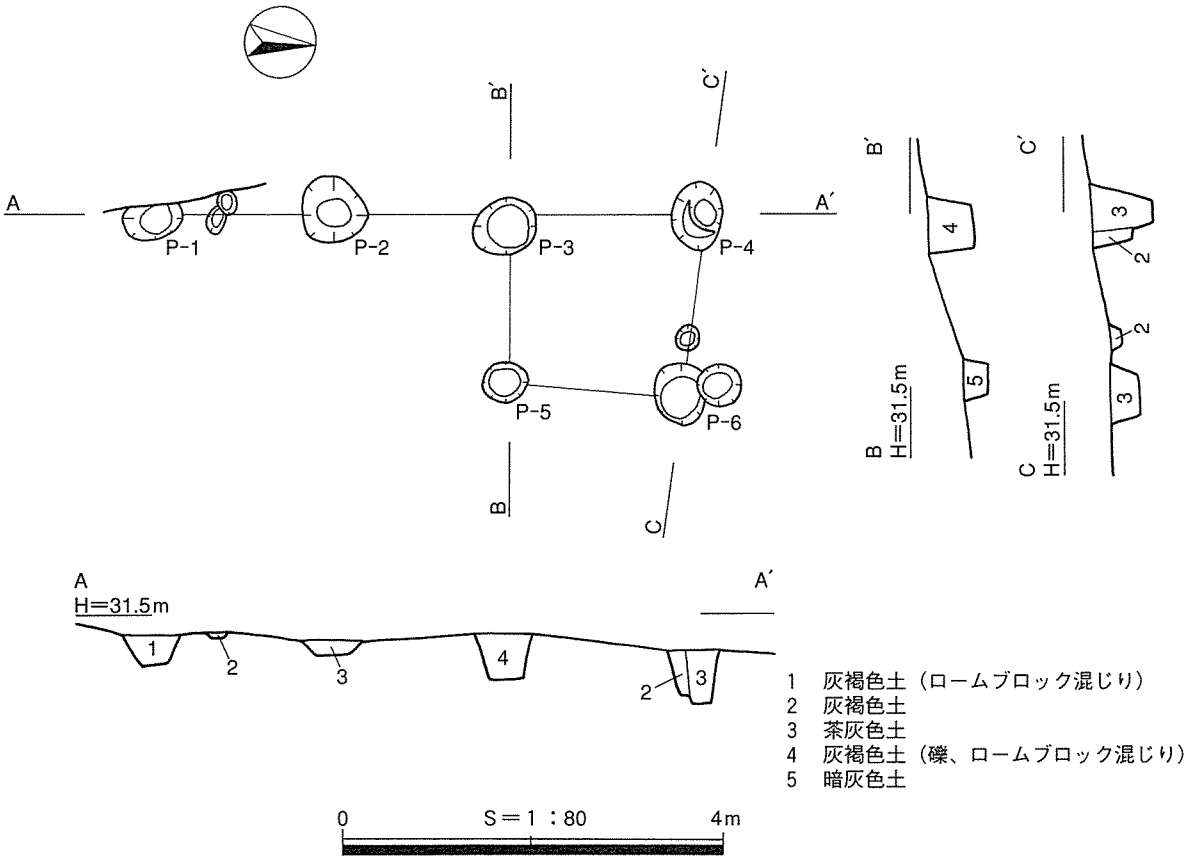
第32図　ＳＢ－０５遺構図

ＳＢ－０６（第33図）

ＳＢ－０６はＳＳ－０３内に位置する南北棟の総柱建物で、桁行３間、梁行１間分を検出した。

柱穴の規模はＰ－１（64×42以上－33）cm、Ｐ－２（73×67－16）cm、Ｐ－３（69×61－51）cm、Ｐ－４（73×54－64）cm、Ｐ－５（48×43－28）cm、Ｐ－６（68×54－31）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.9m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.9m、Ｐ－３～Ｐ－４が2.1m、Ｐ－５～Ｐ－６が1.9m、Ｐ－３～Ｐ－５が1.7m、Ｐ－４～Ｐ－６が1.9mである。主軸方向はＮ－２°－Ｗである。

遺物は図示できないが、Ｐ－３から須恵器、Ｐ－６から土師器が出土した。



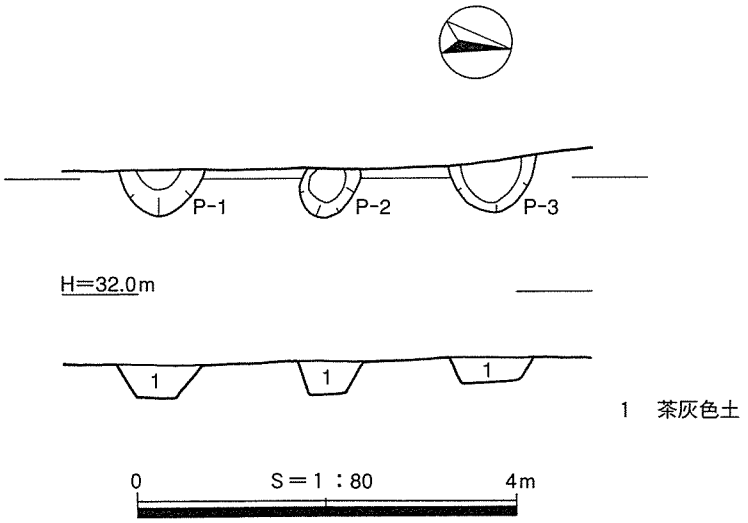
第33図　ＳＢ－０６遺構図

ＳＢ－０７（第34図）

ＳＢ－０７はＳＳ－０３内に位置する南北棟の建物で、桁行２間分を検出した。

柱穴の規模はＰ－１（88×48以上－38）cm、Ｐ－２（65×52以上－37）cm、Ｐ－３（96×56以上－29）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.8m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.8mである。主軸方向はＮ－７°－Ｗである。

遺物は図示できないが、Ｐ－３から土師器が出土した。



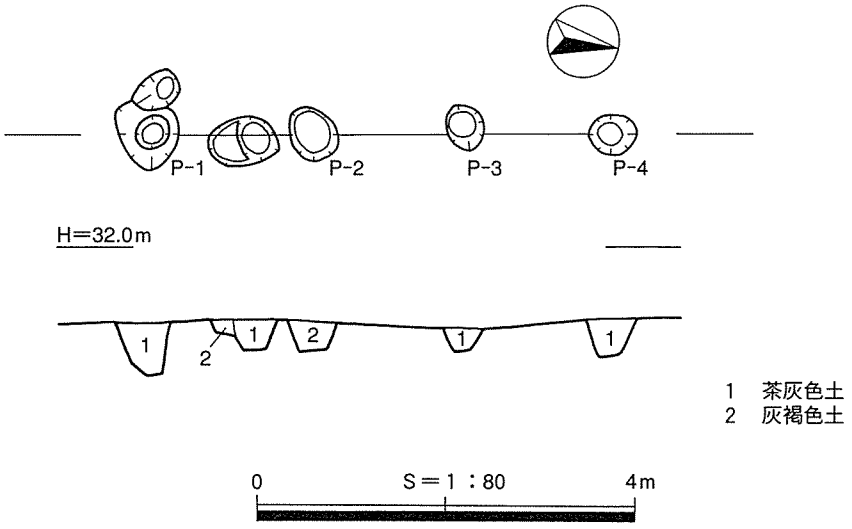
第34図　ＳＢ－０７遺構図

ＳＢ－０８（第35図）

ＳＢ－０８はＳＳ－０３内に位置する南北棟の建物で、桁行３間分を検出した。

柱穴の規模はP－１（74×64－58）cm、Ｐ－２（58×48－36）cm、Ｐ－３（50×39－25）cm、Ｐ－４（51×43－42）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.7m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.7m、Ｐ－３～Ｐ－４が1.7mである。主軸方向はN—10°—Wである。

柱穴内からは遺物は出土しなかった。



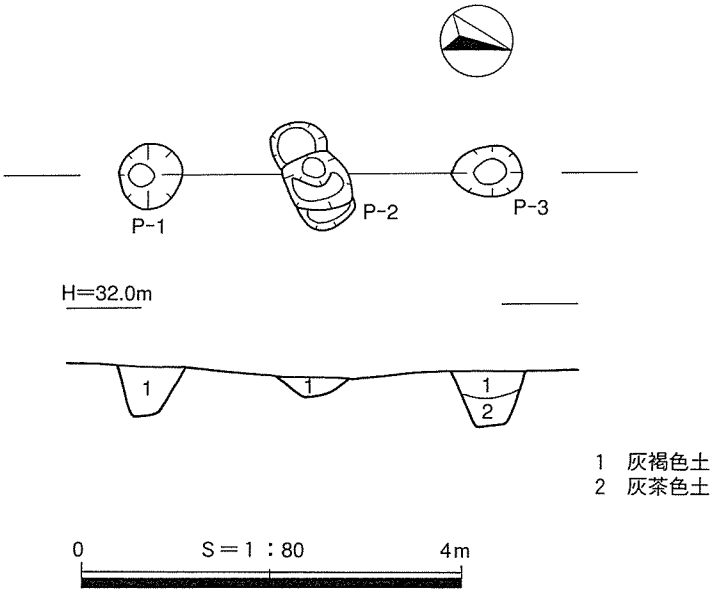
第35図　ＳＢ－０８遺構図

ＳＢ－０９（第36図）

ＳＢ－０９はＳＳ－０３内に位置する南北棟の建物で、桁行２間分を検出した。

柱穴の規模はＰ－１（69×68－52）cm、Ｐ－２（82×67－22）cm、Ｐ－３（75×54－59）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.8m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.8mである。主軸方向はＮ－16°－Ｗである。

遺物は図示できないが、Ｐ－１から須恵器が出土した。



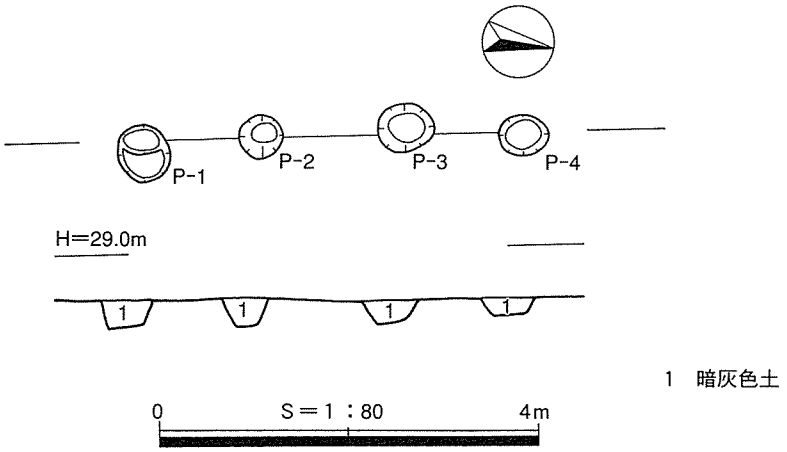
第36図　ＳＢ－０９遺構図

ＳＢ－１０（第37図）

ＳＢ－１０は南北棟の建物で、桁行３間分を検出した。

柱穴の規模はＰ－１（48×33－28）cm、Ｐ－２（49×47－31）cm、Ｐ－３（61×52－24）cm、Ｐ－４（54×48－18）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.3m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.5m、Ｐ－３～Ｐ－４が1.2mである。主軸方向はＮ－９°－Ｗである。

遺物は図示できないが、Ｐ－３から赤彩土器が出土した。



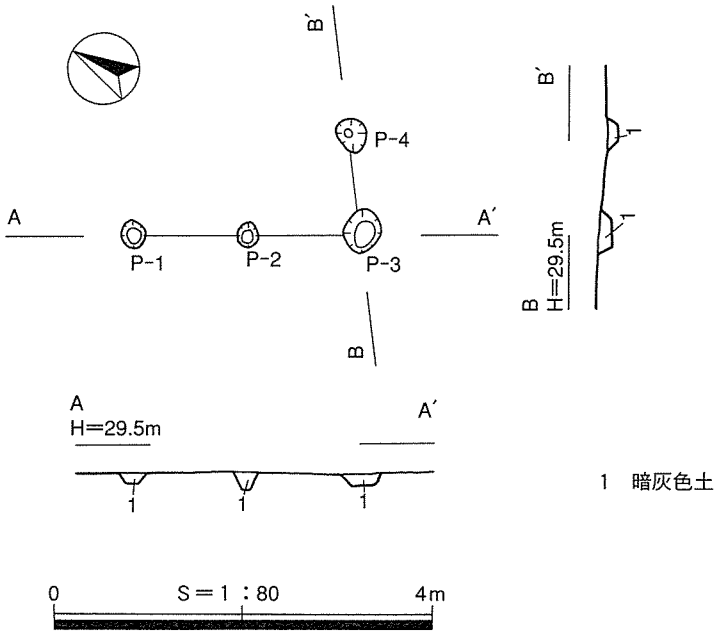
第37図　ＳＢ－１０遺構図

ＳＢ－１１（第38図）

ＳＢ－１１は南北棟の建物で、桁行２間、梁行１間分を検出した。

柱穴の規模はＰ－１（29×26－13）㎝、Ｐ－２（28×23－22）㎝、Ｐ－３（47×40－16）㎝、Ｐ－４（38×33－13）㎝をはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.2m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.2m、Ｐ－３～Ｐ－４が1.1mである。主軸方向はＮ―62°―Ｗである。

柱穴内からは遺物は出土しなかった。



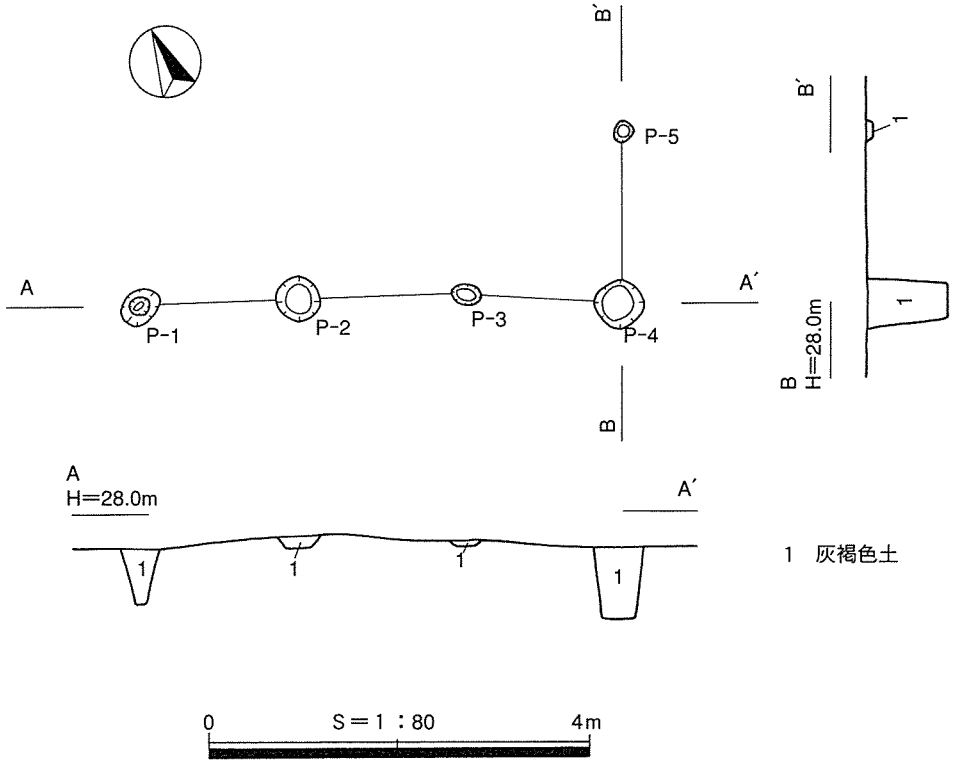
第38図　ＳＢ－１１遺構図

ＳＢ－１２（第39図）

ＳＢ－１２はＳＳ－０１内に位置する。北側が後世の土取りで大きく破壊されているために、建物の方向は不明であるが、現状で３間×１間分を確認した。

柱穴の規模はＰ－１（48×36－60）cm、Ｐ－２（49×47－15）cm、Ｐ－３（31×24－８）cm、Ｐ－４（52×43－86）cm、Ｐ－５（23×19－８）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.7m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.8m、Ｐ－３～Ｐ－４が1.6m、Ｐ－４～Ｐ－５が1.8mである。主軸方向は東西棟であると仮定すると、Ｎ―67°―Ｗである。

柱穴内からは遺物は出土しなかった。



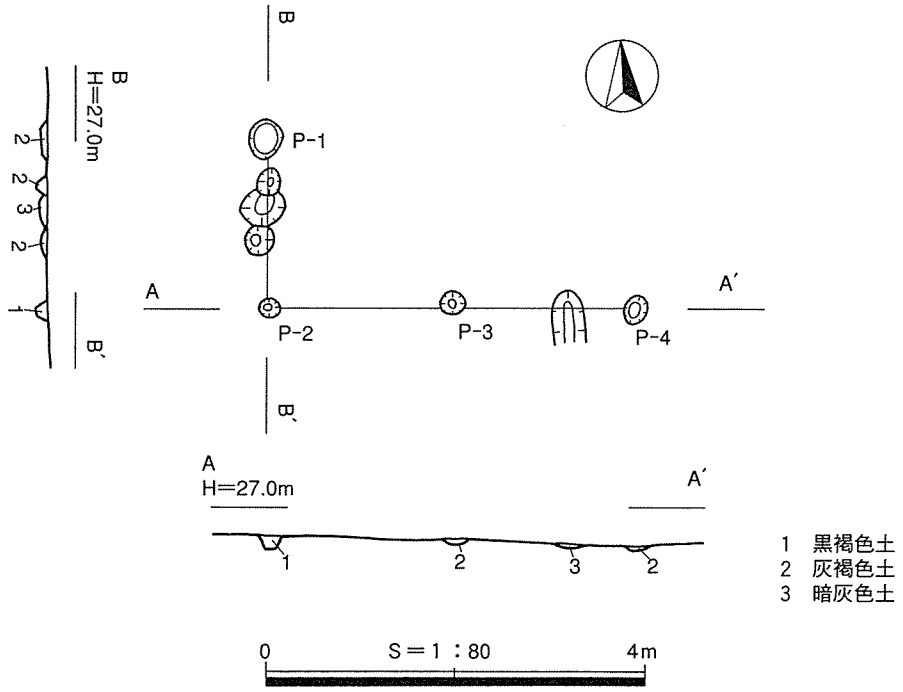
第39図　ＳＢ－１２遺構図

ＳＢ－１３（第40図）

ＳＢ－１３はＳＳ－０２内に位置する。北側が後世の土取りで大きく破壊されているために、建物の方向は不明であるが、現状で２間×１間分を確認した。

柱穴の規模はＰ－１（43×35－９）cm、Ｐ－２（24×22－15）cm、Ｐ－３（27×26－６）cm、Ｐ－４（31×24－７）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.8m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.9m、Ｐ－３～Ｐ－４が1.9mである。主軸方向は南北棟であると仮定すると、Ｎ―５°―Ｅである。

柱穴内からは遺物は出土しなかった。



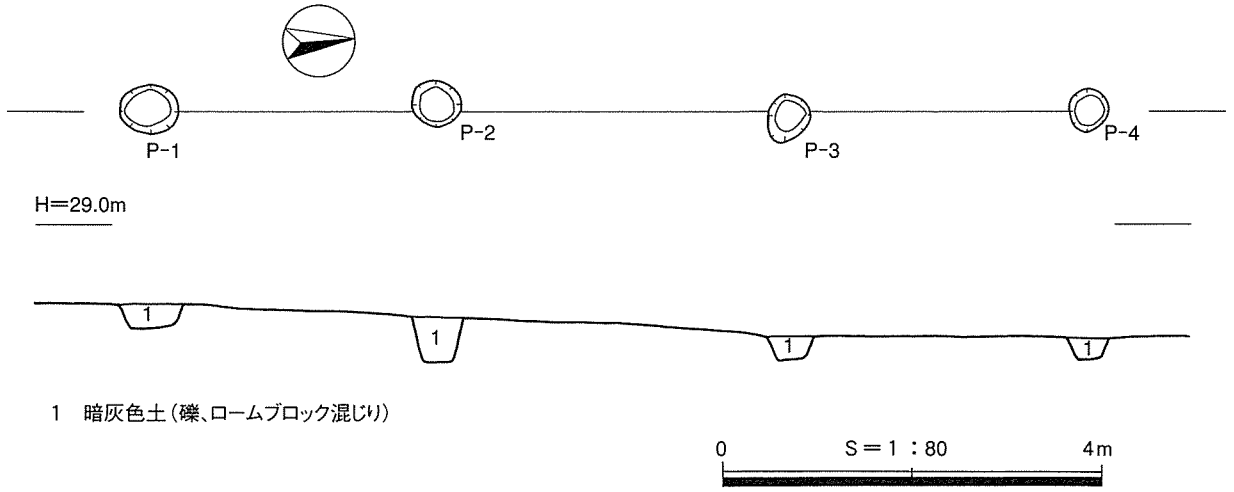
第40図　ＳＢ－１３遺構図

ＳＡ－０１（第41図）

ＳＡ－０１は南北方向にのびる柵で、3間分（長さ10.4m）を確認した。

柱穴の規模はＰ－１（58×48－32）cm、Ｐ－２（51×49－49）cm、Ｐ－３（53×45－23）cm、Ｐ－４（48×43－24）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が3.2m、Ｐ－２～Ｐ－３が3.7m、Ｐ－３～Ｐ－４が3.2mである。主軸方向はＮ－２°－Ｅである。

遺物は図示できないが、Ｐ－２とＰ－４から赤彩土器が出土した。



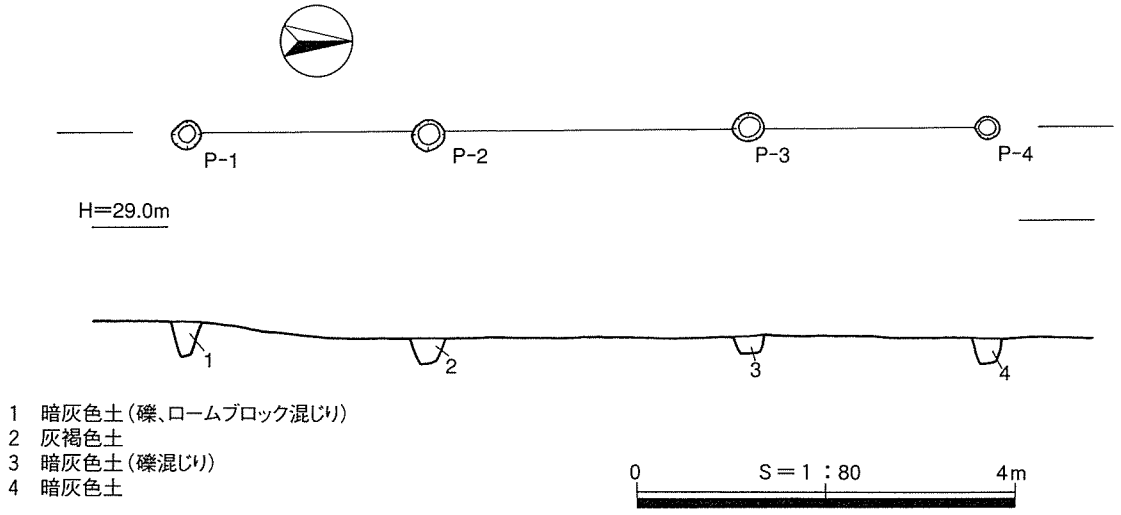
第41図　ＳＡ－０１遺構図

ＳＡ—０２（第42図）

ＳＡ—０２は南北方向にのびる柵で、３間分（長さ8.8m）を確認した。

柱穴の規模はＰ－１（31×31—35）cm、Ｐ－２（34×33—27）cm、Ｐ－３（33×29—21）cm、Ｐ－４（24×23—28）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が2.6m、Ｐ－２～Ｐ－３が3.3m、Ｐ－３～Ｐ－４が2.6mである。主軸方向はＮ—２°—Ｗである。

遺物は図示できないが、Ｐ－４から土師器が出土した。



第42図　ＳＡ－０２遺構図

ＳＡ—０３（第43図）

ＳＡ—０３は南北方向にのびる柵で、６間分（長さ12.4m）を確認した。

柱穴の規模はＰ－１（35×31—21）cm、Ｐ－２（31×27—15）cm、Ｐ－３（51×37—29）cm、Ｐ－４（33×28—17）cm、Ｐ－５（31×29—23）cm、Ｐ－６（28×27—19）cm、Ｐ－７（34×31—41）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が1.8m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.9m、Ｐ－３～Ｐ－４が2.2m、Ｐ－４～Ｐ－５が1.9m、Ｐ－５～Ｐ－６が2.3m、Ｐ－６～Ｐ－７が2.1mである。主軸方向はＮ—19°—Ｗである。

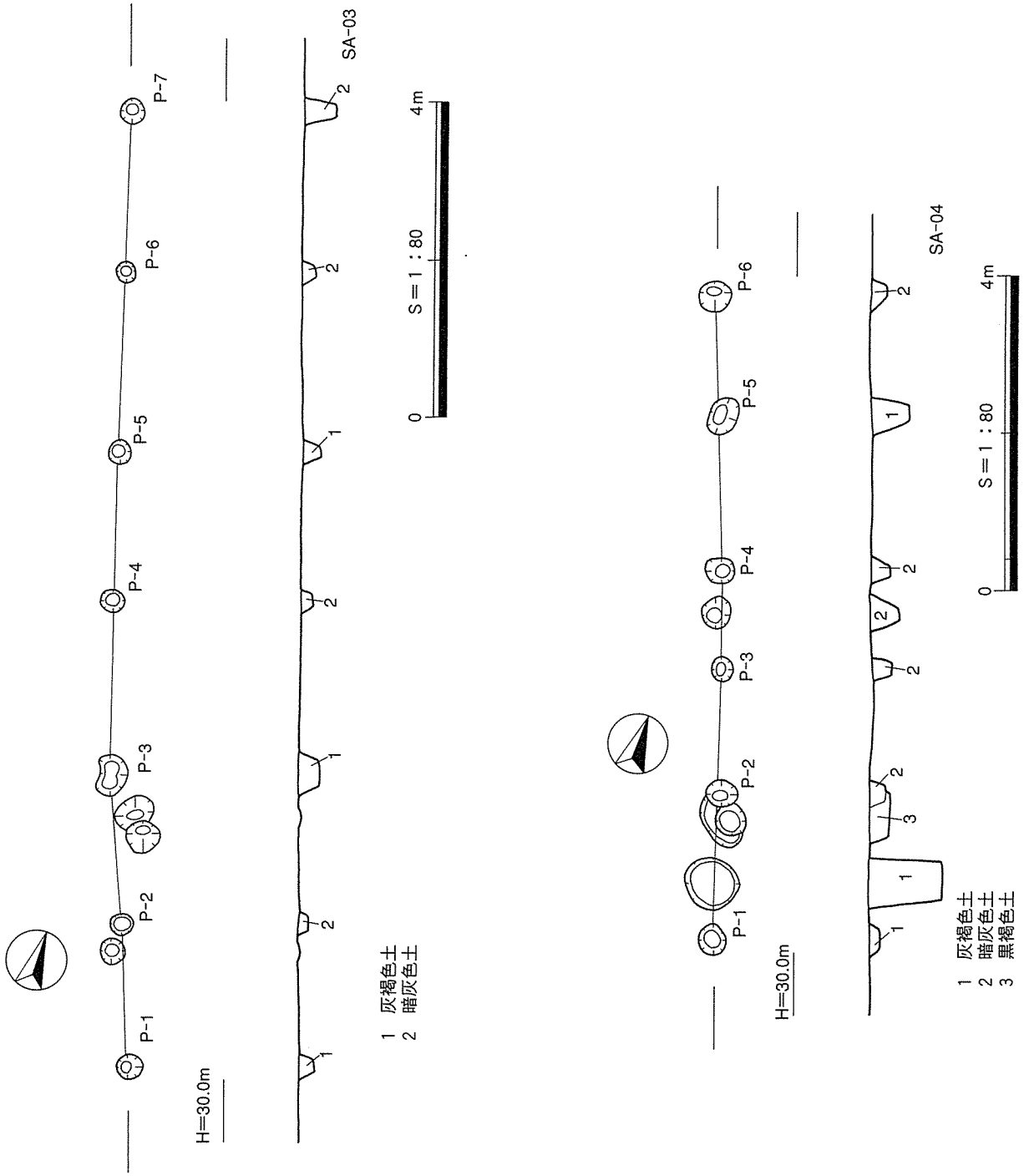
遺物は図示できないが、Ｐ－２とＰ－６から土師器が出土した。

ＳＡ—０４（第43図）

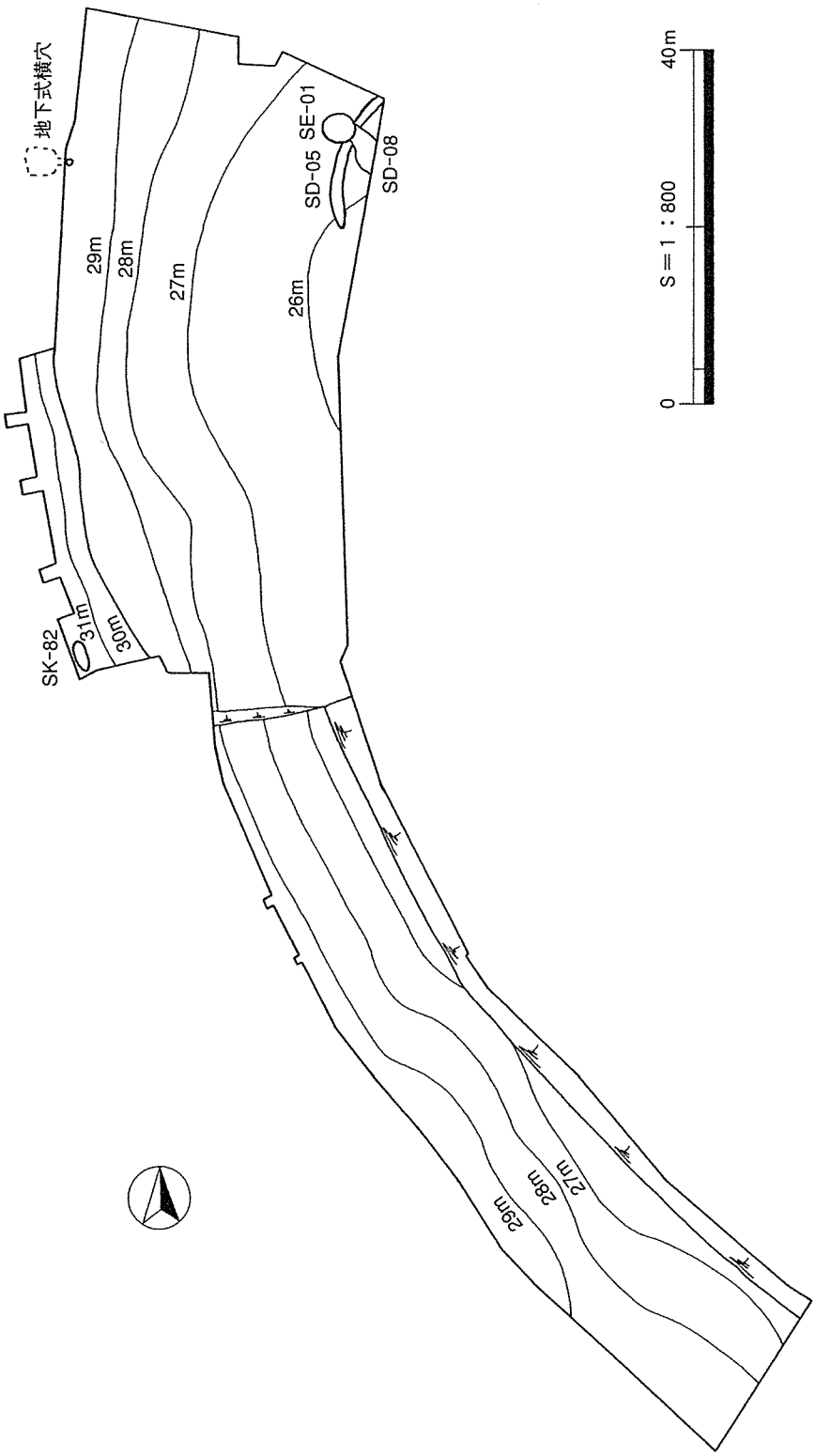
ＳＡ—０４は南北にのびる柵で、５間分（長さ8.6m）を確認した。

柱穴の規模はＰ－１（40×39—17）cm、Ｐ－２（40×35—21）cm、Ｐ－３（30×29—27）cm、Ｐ－４（38×32—28）cm、Ｐ－５（50×39—49）cm、Ｐ－６（41×40—20）cmをはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２が　1.8m、Ｐ－２～Ｐ－３が1.6m、Ｐ－３～Ｐ－４が1.3m、Ｐ－４～Ｐ－５が1.9m、Ｐ－５～Ｐ－６が1.6mである。主軸方向はＮ—20°—Ｗである。

遺物は図示できないが、Ｐ—２とＰ－６から土師器が出土した。



第43図　ＳＡ－０３・０４遺構図



第44図　中世の遺構配置図

第６節　中世の調査

１．概　　要

中世の遺構は、土坑１基、溝状遺構２条、井戸1基、地下式横穴１基を確認した。中世後半～近世前半には大規模な耕作地の造成が行われており、ＳＤ－０５、ＳＤ－０８、ＳＥ－０１はこの耕作地に伴うものと考えられる。また、ＳＫ－８２からは五輪塔が出土しており、調査地周辺にも五輪塔が散在していることから、何らかの関係が考えられる。

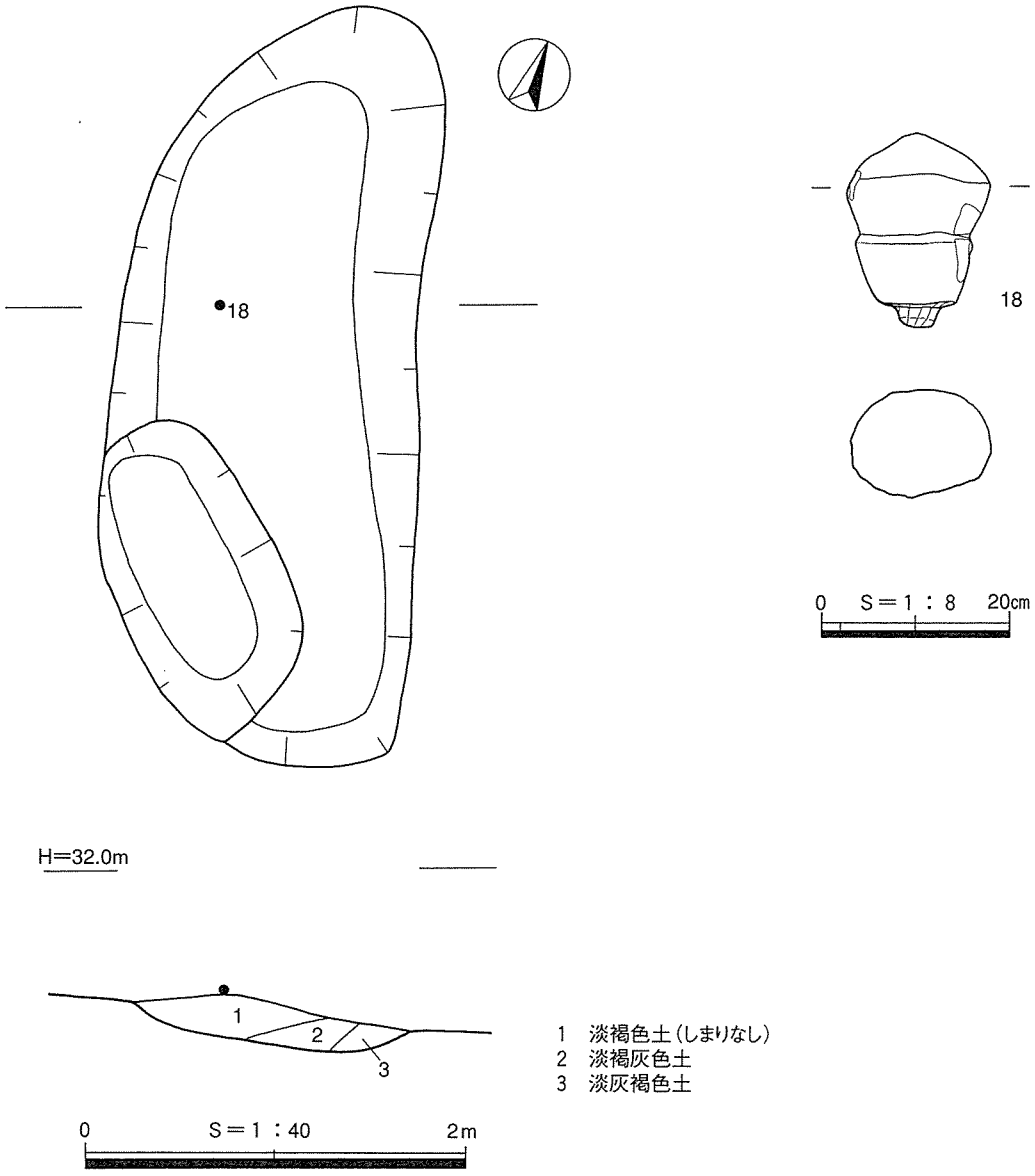
地下式横穴は１基確認したのみであるが、調査区の西側には横穴を構築するのには好適な砂礫層が存在することから、西側の調査区外に地下式横穴が数基存在する可能性がある。

２．検出した遺構と遺物

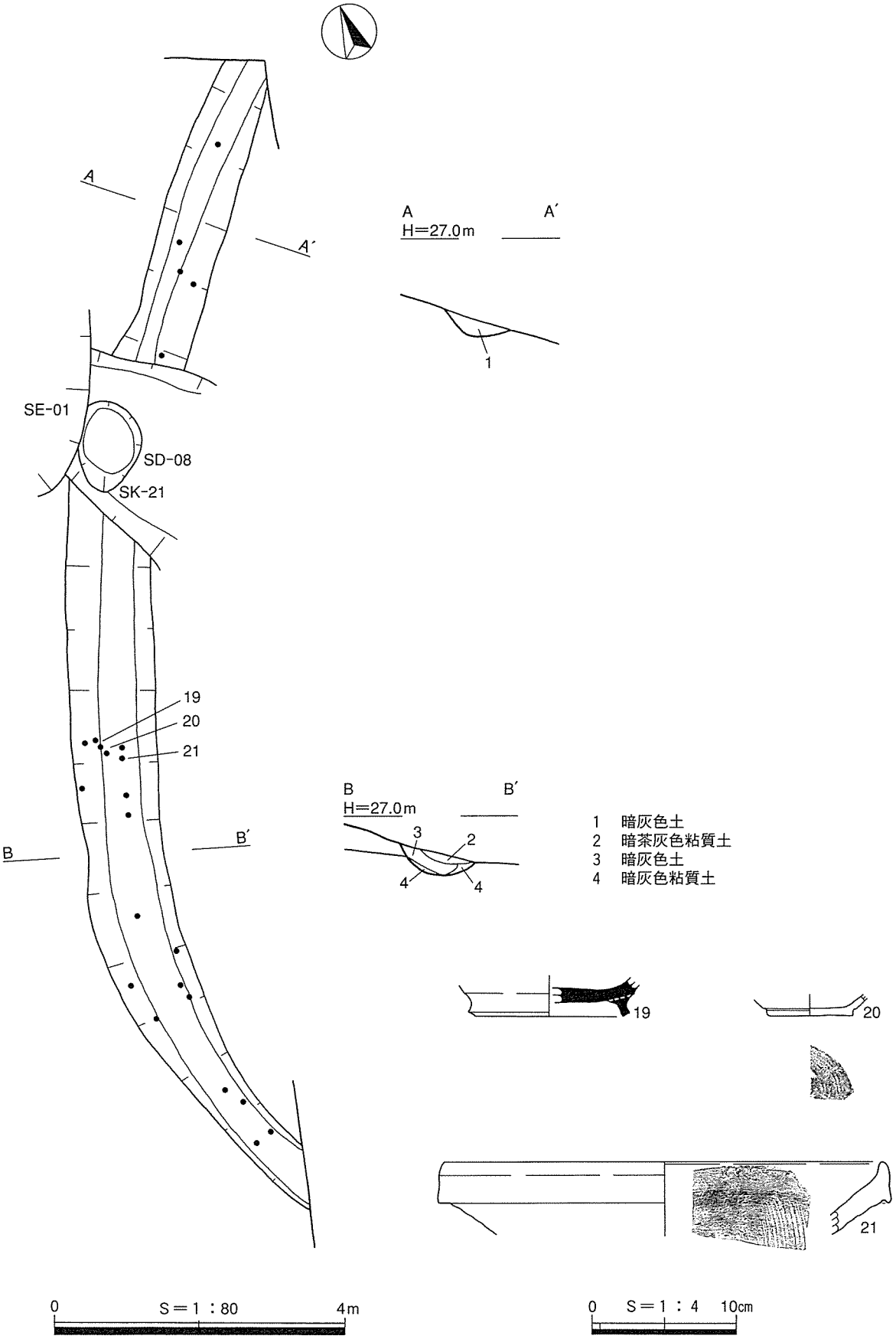
ＳＫ－８２（第45図）

ＳＫ－８２はＳＳ－０３内に位置し、平面形態は楕円形を呈する。規模は長さ4.1m、幅1.6～1.7m、深さ0.1～0.2mをはかり、埋土は同系の土が傾斜堆積している。

遺物は床面から浮いた状態で五輪塔空風輪（18）が出土した。石材は安山岩である。



第45図　ＳＫ－８２遺構図及び出土遺物実測図



第46図　ＳＤ－０５遺構図及び出土遺物実測図

ＳＤ－０５（第46図）

ＳＤ－０５は調査区の東側に位置し、湾曲しながら南北方向にのびる。規模は検出長16.6m、幅0.6～1.2m、深さ0.1～0.4mをはかる。第２ベルト（Ｂ－Ｂ′ライン）の土層断面では、ＳＤ－０５の西側には段が認められ、このことからＳＤ－０５は段々状の耕作地の段の下に巡る溝であると考えられる。

埋土はＢ－Ｂ′ラインでは暗茶灰色～暗灰色を呈するが、粘性によって３層に分けられる。

遺物はいずれも床面から浮いた状態で須恵器、土師器、備前焼が出土した。20は土師器坏身で、底部外面には回転糸切りが施されている。19は高台を有する須恵器壷、21は備前焼の擂鉢である。

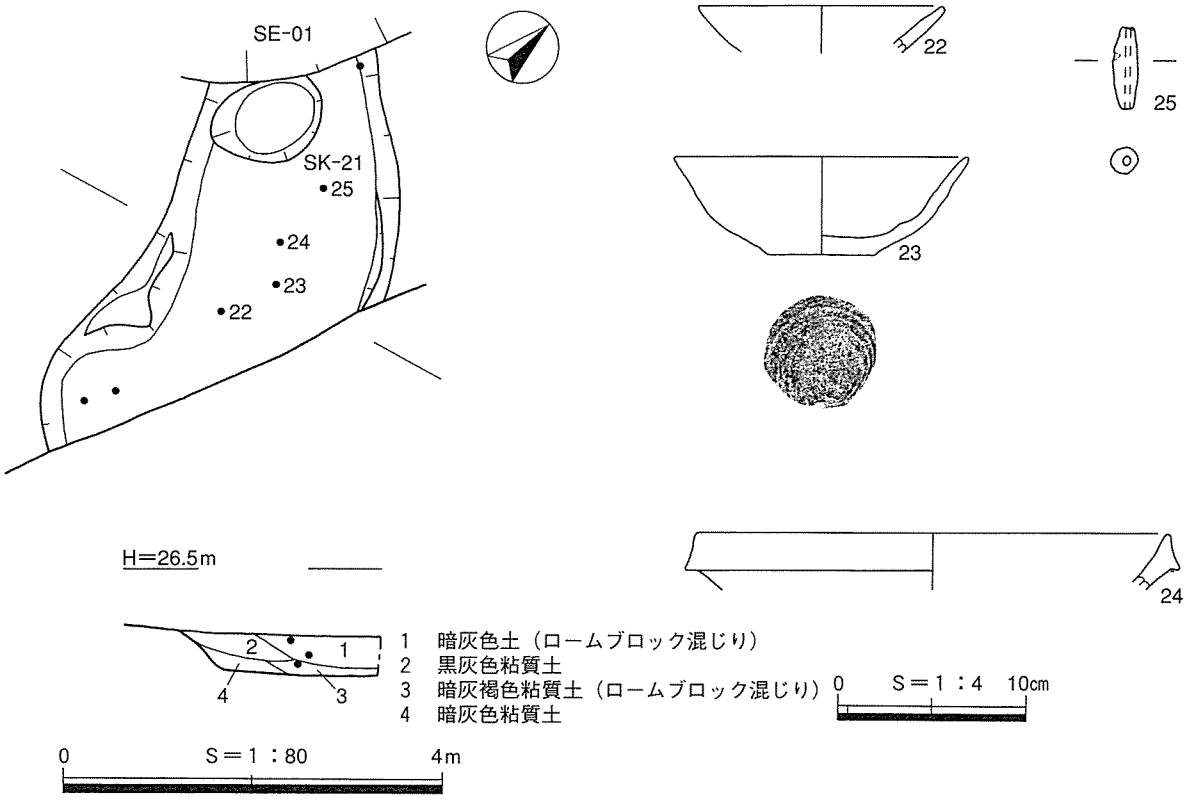
本遺構の時期は、出土遺物から室町時代頃であると考えられる。

ＳＤ－０８（第47図）

ＳＤ－０８は調査区の東側に位置し、ＳＤ－０５を切っている。北西側はＳＥ－０１に続いており、ＳＥ－０１からオーバーフローした水を東側へ流すための溝である可能性がある。規模は検出長4.0m、幅1.8～2.5m、深さ0.4mをはかり、土層断面から数回掘り直されたものと思われる。なお、ＳＫ－２１との切合関係は不明である。

遺物は床面から浮いた状態で土師器、備前焼などが出土した。22、23は土師器坏身で、23の底部外面には回転糸切りが施されている。24は備前焼の擂鉢、25は管状土錘である。

本遺構の時期は、出土遺物から室町時代頃であると考えられる。



第47図　ＳＤ－０８遺構図及び出土遺物実測図

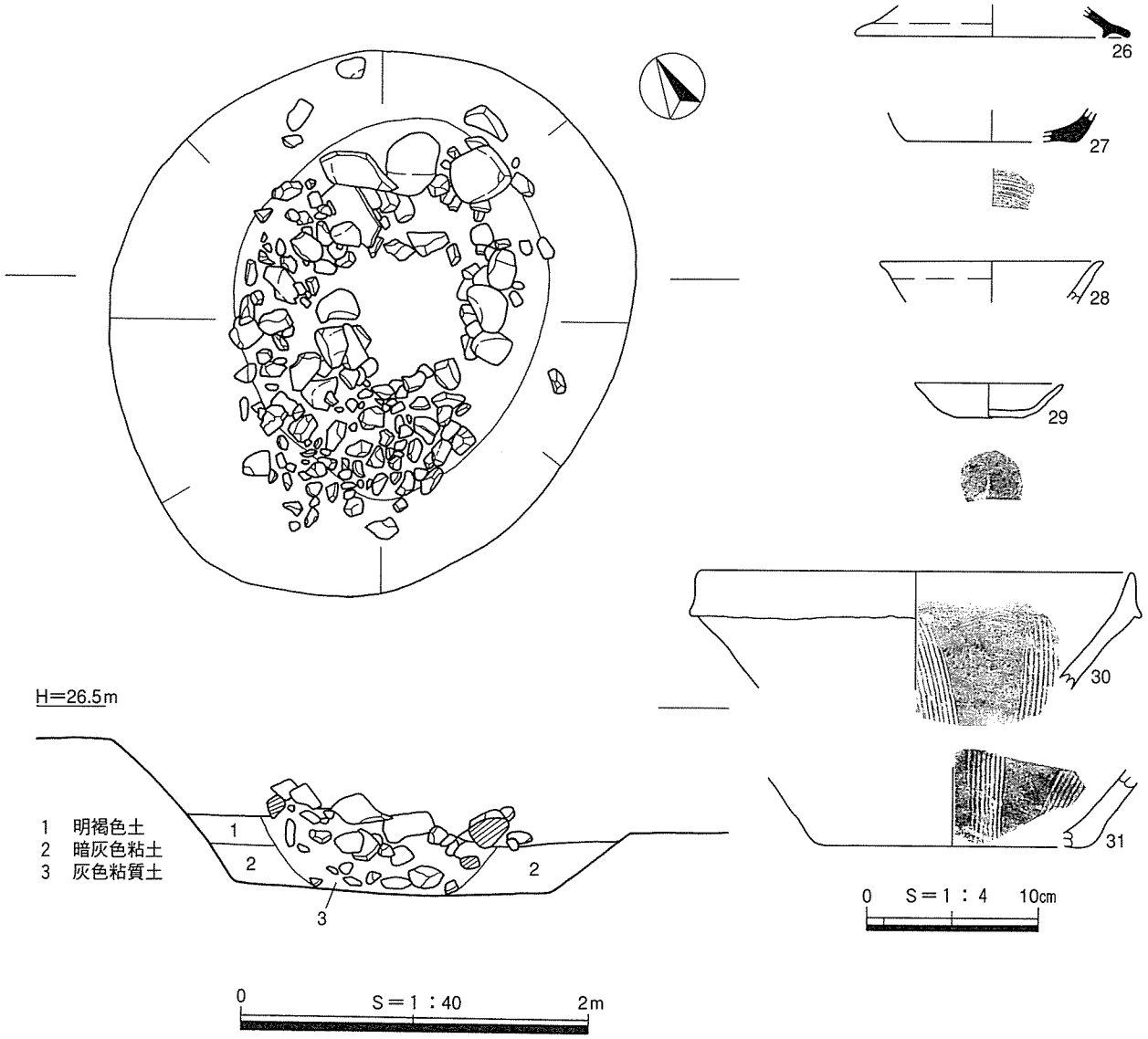
ＳＥ－０１（第48図）

ＳＥ－０１は石積の井戸で、堀方の平面形態は円形を呈し、規模は3.3×3.0m、深さ0.4～0.8mをはかる。

石積は全体的に大きさが不揃いの石を乱雑に積み上げており、積み方には特に規則性は認められない。井戸枠の内側の形態及び規模については石が内側に崩落し、原型を留めていないために不明である。

遺物は井戸枠内と石積内から須恵器、土師器、備前焼が出土した。26～30は石積内から出土したもので、26、27は須恵器である。26は坏蓋で、返りを有する。27は坏身で、底部外面には回転糸切りが施されている。28、29は土師器坏身で、29の底部外面には静止糸切りが施されている。30は備前焼の擂鉢である。31は井戸枠内の底面直上から出土した備前焼の擂鉢である。

本遺構は出土した遺物から室町時代頃であると考えられる。



第48図　ＳＥ－０１遺構図及び出土遺物実測図

地下式横穴（第49図・第50図）

地下式横穴は調査区の西側に位置し、縦穴はローム層を掘り込んでいるが、羨道及び玄室は砂礫層を掘り込んでいる。

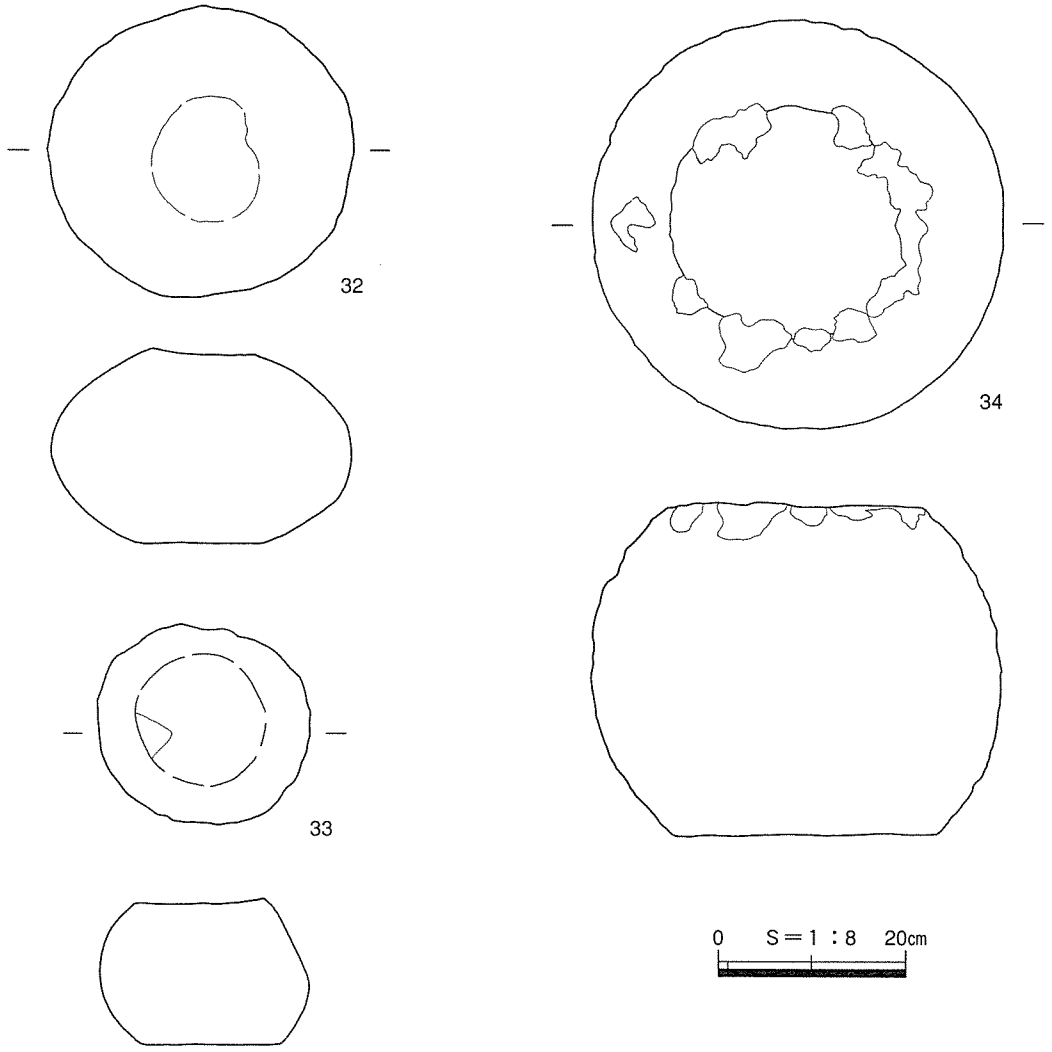
縦穴は平面形態が円形を呈し、規模は70×74㎝、深さ1.2～1.3mをはかる。縦穴内には埋め戻したと思われる土が堆積していたが、羨道や玄室にはこの土は流入していなかった。

羨道は壁がほぼ垂直に立ち上がり、断面形態は蒲鉾形を呈しており、床面は玄室側に向かって9°の傾斜で下降している。規模は長さ0.9m、幅0.6m、高さ0.7mをはかる。

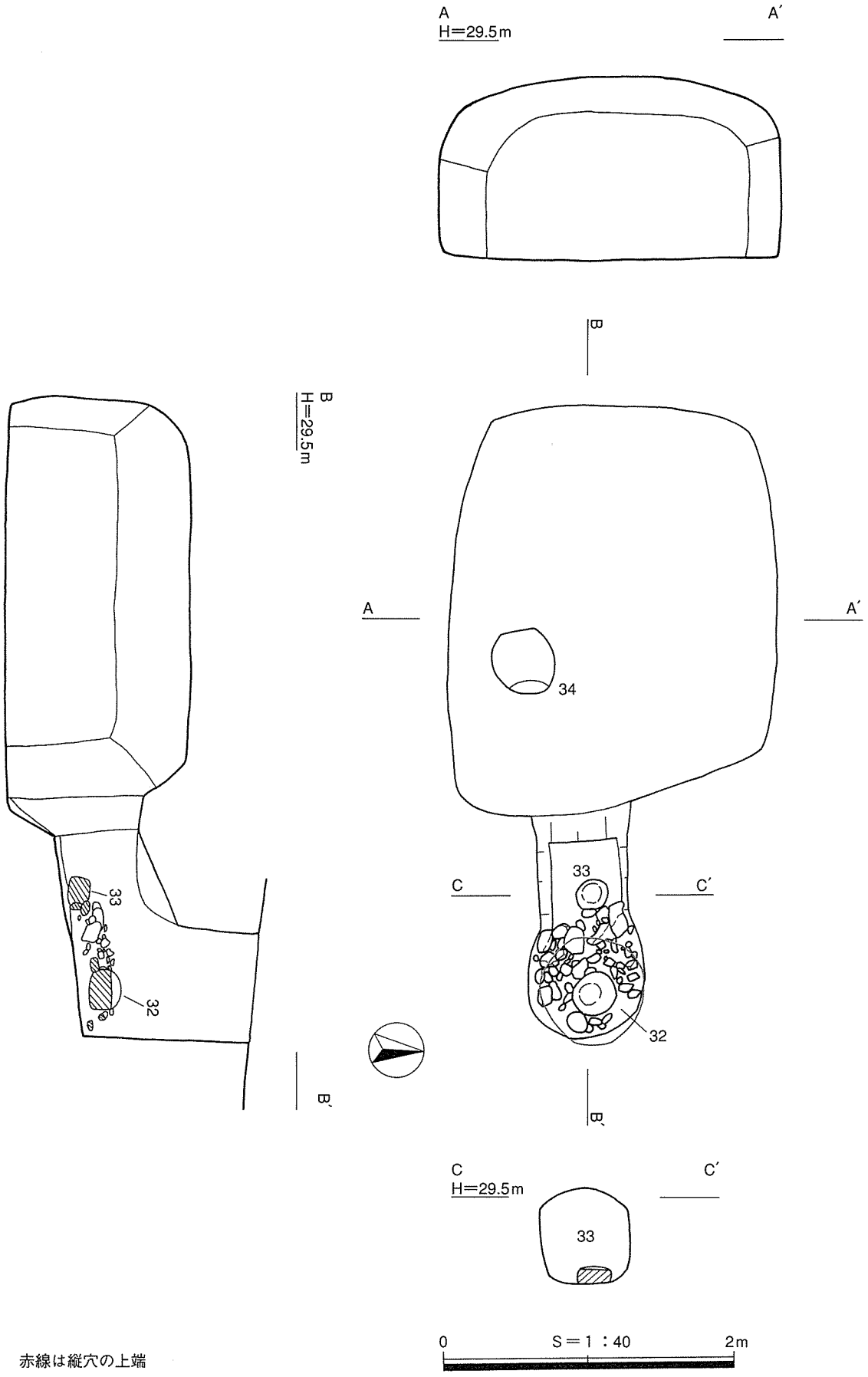
玄室は羨道の床面よりも一段低く掘り込まれており、羨道は玄室の中心軸よりも南側に偏ってとりついている。玄室の平面形態はいびつな隅丸長方形を呈し、断面形態は蒲鉾形を呈している。規模は幅2.3m、高さ1.3mをはかり、奥行は南壁側で2.8m、北壁側で2.3mをはかる。玄室の床面には水が溜まり、天井の崩落土が認められるが、これ以外の堆積土は特には認められなかった。

縦穴の底面から羨道の床面にかけては、閉塞に用いられたものと思われる石が崩れた状態で認められ、この中には五輪塔の水輪が3石（32～34：安山岩製）転用されており、このうちの1石（34）が玄室内に転落している。

遺物は五輪塔の水輪以外に閉塞に用いられたものと思われる集石直上から須恵器甕の胴部片が出土したのみである。

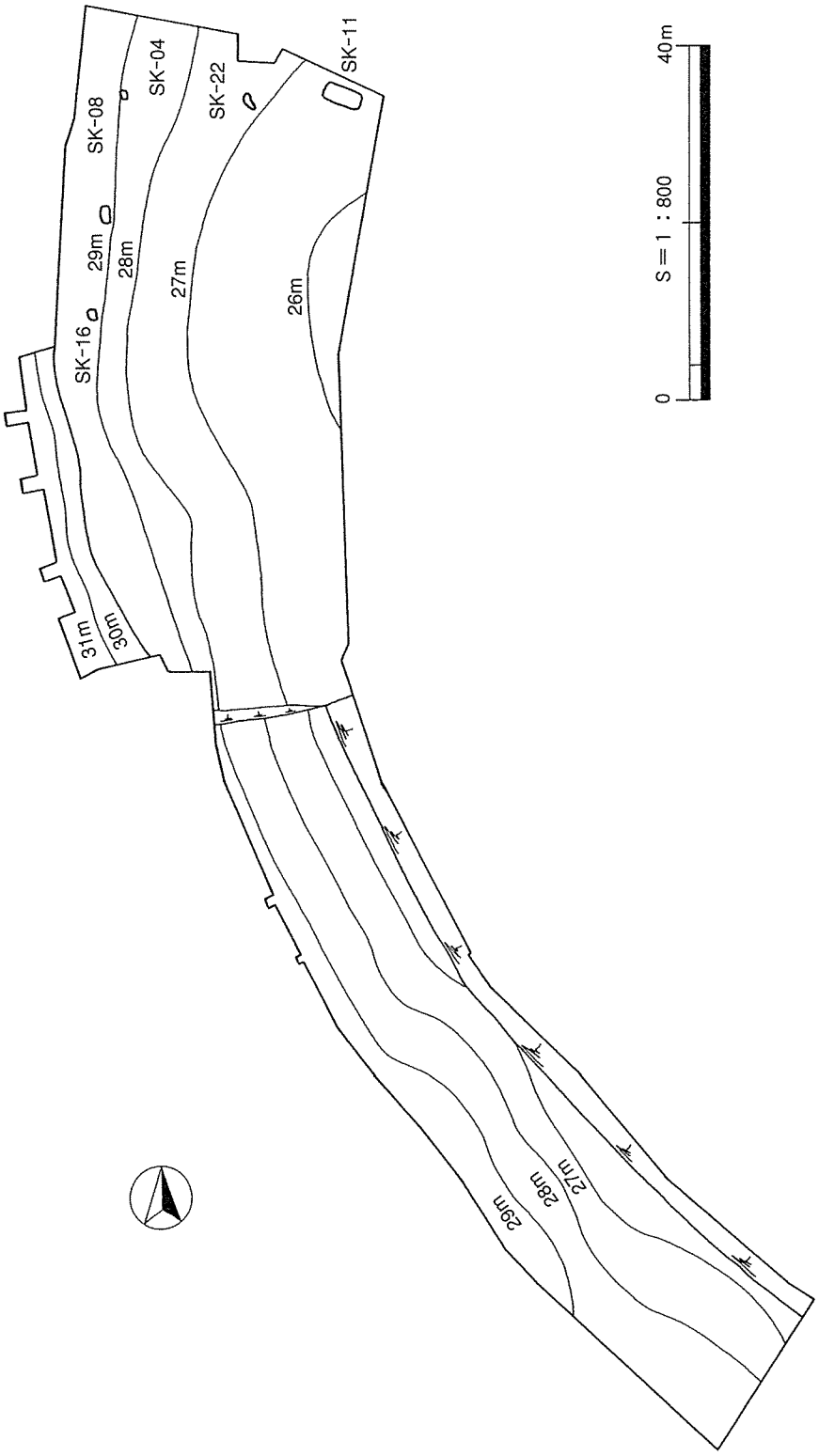


第49図　地下式横穴出土遺物実測図



赤線は縦穴の上端

第50図　地下式横穴遺構図



第51図　近世以降の遺構配置図

第７節　近世以降の調査

１．概　　要

近世以降の遺構は土坑を４基確認した。いずれも平面形態が隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈するもので、ＳＫ－０４・０８・１６は等高線に沿うように並ぶ。

ＳＫ－１１はごく最近まで存在したもので、埋土の状況から水溜として用いられたものと思われる。

２．検出した遺構と遺物

ＳＫ－０４（第52図）

ＳＫ—０４は南側が試掘トレンチによって改変を受けているが、平面形態は隅丸方形を呈するものと思われる。規模は長軸1.1m、短軸0.9m以上、深さ0.1～0.2mをはかる。埋土は灰褐色土の単層で、床面近くから近世陶器が出土している。

ＳＫ－０８（第52図）

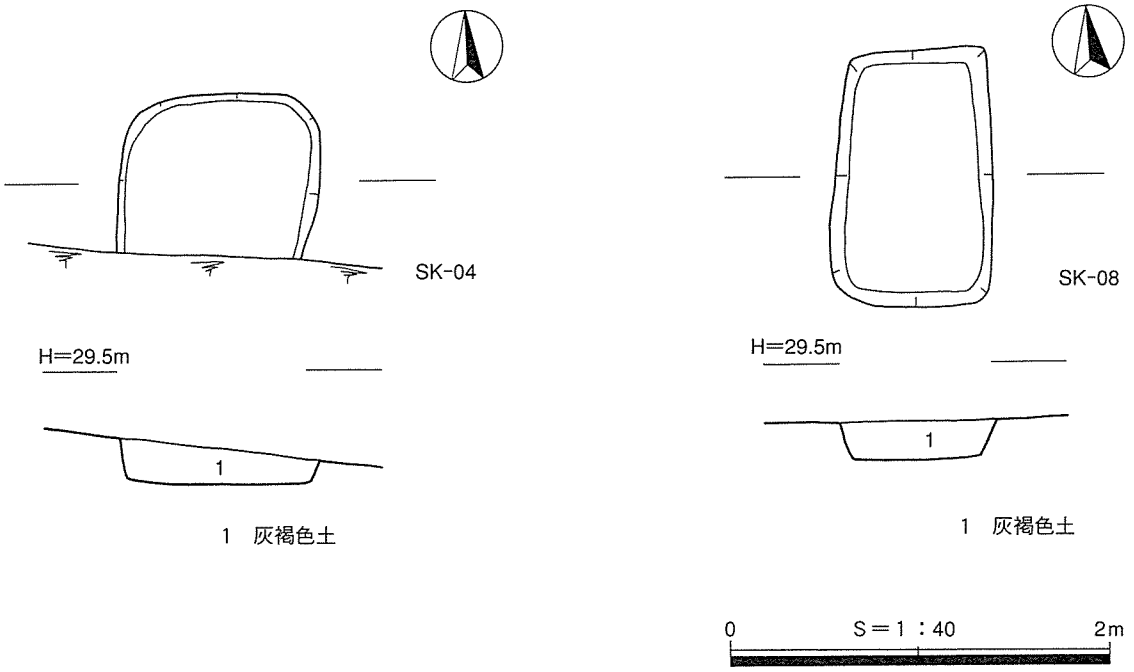
ＳＫ－０８は平面形態が隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.2mをはかる。

埋土は灰褐色土の単層で、須恵器、土師器、ガラスが出土している。

ＳＫ－１１（第53図）

ＳＫ－１１は平面形態が隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.8m、短軸2.8m、深さ0.3～0.4mをはかる。

埋土は灰褐色粘質土（上層）と灰色粘土（下層）の２層に分かれる。上層にはローム層のブロックが混じっており、上層は本遺構を埋め戻したものと思われる。下層は水性堆積層で、しまりがなく、ぬかるんだ印象である。下層からはジュースの空き缶が出土している。



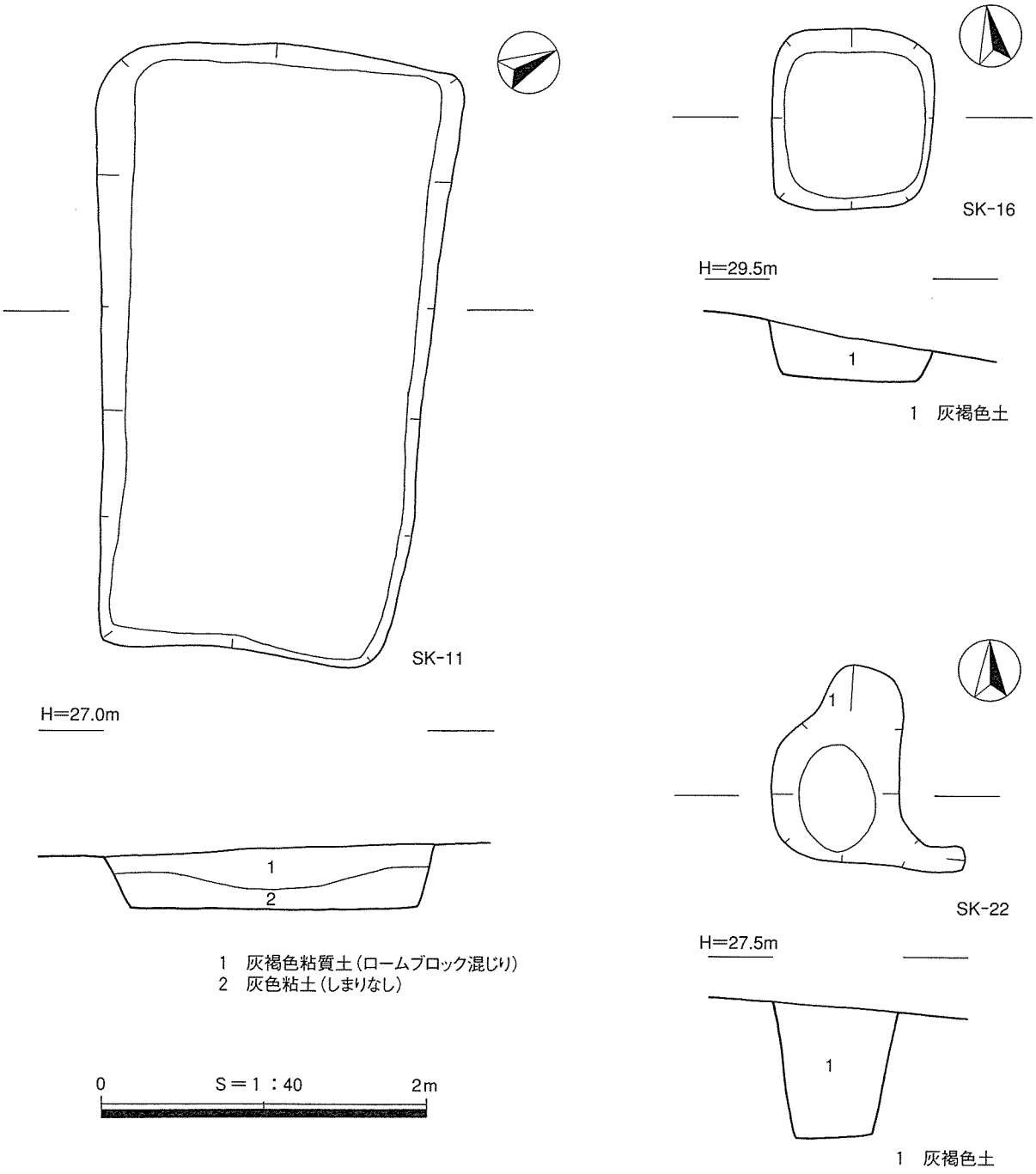
第52図　ＳＫ－０４・０８遺構図

ＳＫ－１６（第53図）

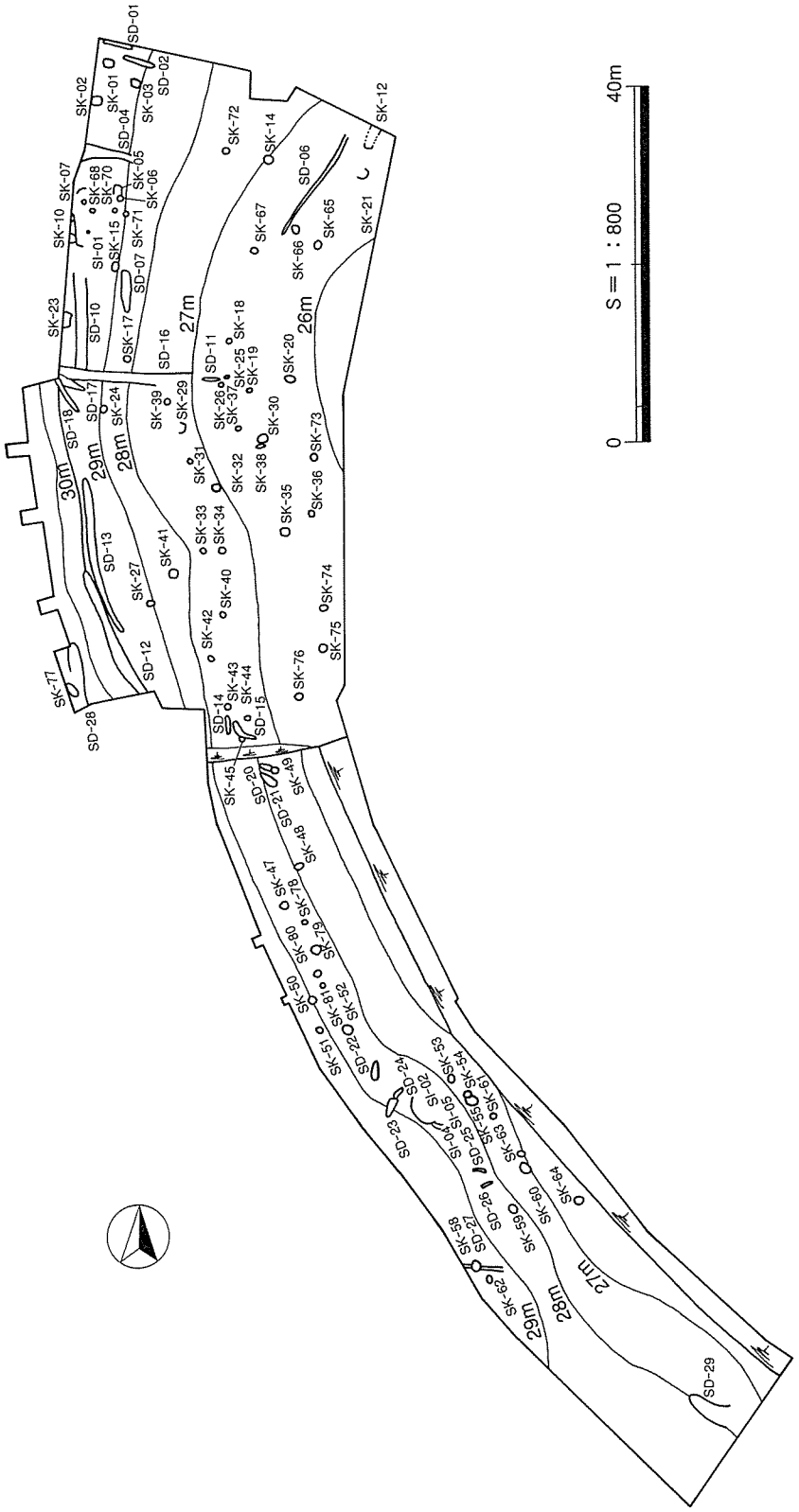
ＳＫ—１６は平面形態が隅丸方形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸1.0m、深さ0.2～0.3mをはかる。
埋土は灰褐色土の単層で、須恵器と近世陶器が出土している。

ＳＫ－２２（第53図）

ＳＫ－２２は平面形態が隅丸方形状を呈し、規模は長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.9mをはかる。
埋土は灰褐色の単層で、埋土から須恵器とタイルが出土している。



第53図　ＳＫ－１１・１６・２２遺構図



第54図　時期不明の遺構配置図

第８節　時期不明の遺構

１．検出した遺構と遺物

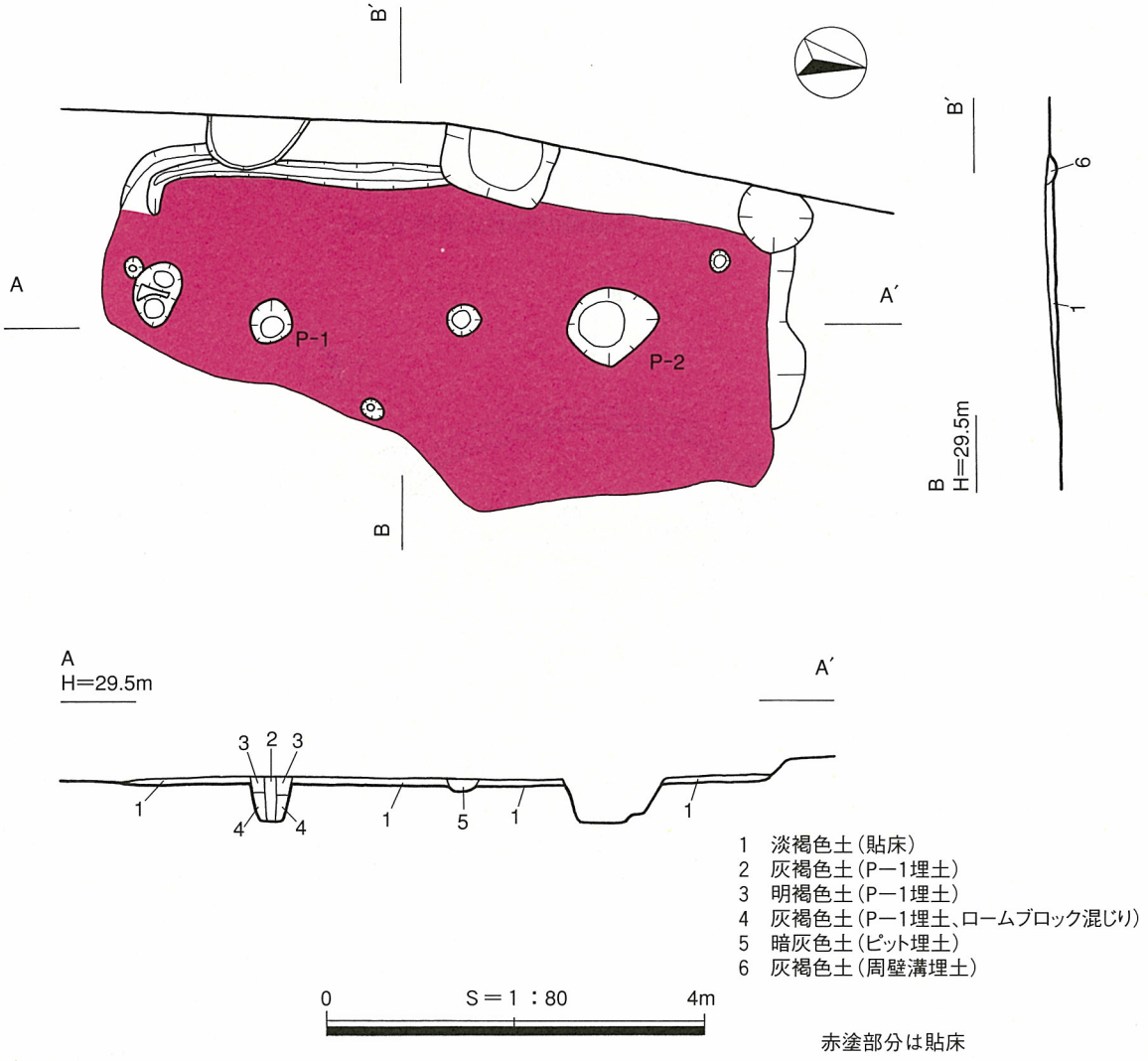
ＳＩ－０１（第55図）

ＳＩ－０１は削平が著しく、南西側の周壁溝が僅かに残存するのみである。平面形態は方形を呈するものと思われ、規模は東西長7.2ｍをはかる。なお、周壁溝は幅12～28㎝、深さ７㎝をはかる。

主柱穴は４基であると思われるが、Ｐ－１とＰ－２の２基を確認したのみである。柱穴の規模はＰ－１（50×46－48）㎝、Ｐ－２（85×69－46）㎝をはかり、柱間距離は3.5ｍである。Ｐ－１には径12㎝の柱痕跡が認められるが、Ｐ－２は試掘調査の際に掘削されているため、埋土の堆積状況は不明である。

床面にはローム層と同質の黄褐色粘質土を用いた厚さ３～７㎝の貼床がなされているが、貼床内からは遺物は出土しなかった。

本遺構は全体的に削平が著しく、周壁溝からも遺物が出土していないため、時期は不明である。



第55図　ＳＩ－０１遺構図

ＳＩ－０２（第56図）

ＳＩ－０２は南東側が削平され、さらにＳＩ－０３に切られているため、全容は不明であるが、平面形態は多角形あるいは円形を呈するものと思われる。規模は径5.6m、深さ0.1mをはかる。

主柱穴は２基確認し、その規模はＰ－１（47×45－20）cm、Ｐ－２（58×42以上－19）cmをはかり、柱間距離は3.3mである。

貼床は確認できなかったが、周壁溝が巡り、その規模は幅25～33cm、深さ３～12cmをはかる。埋土は茶灰色土の単層で、遺物は出土していない。

本遺構の時期はＳＩ－０３との切合関係からＳＩ－０３よりも古い時期のものであると考えられる。

ＳＩ－０４（第56図）

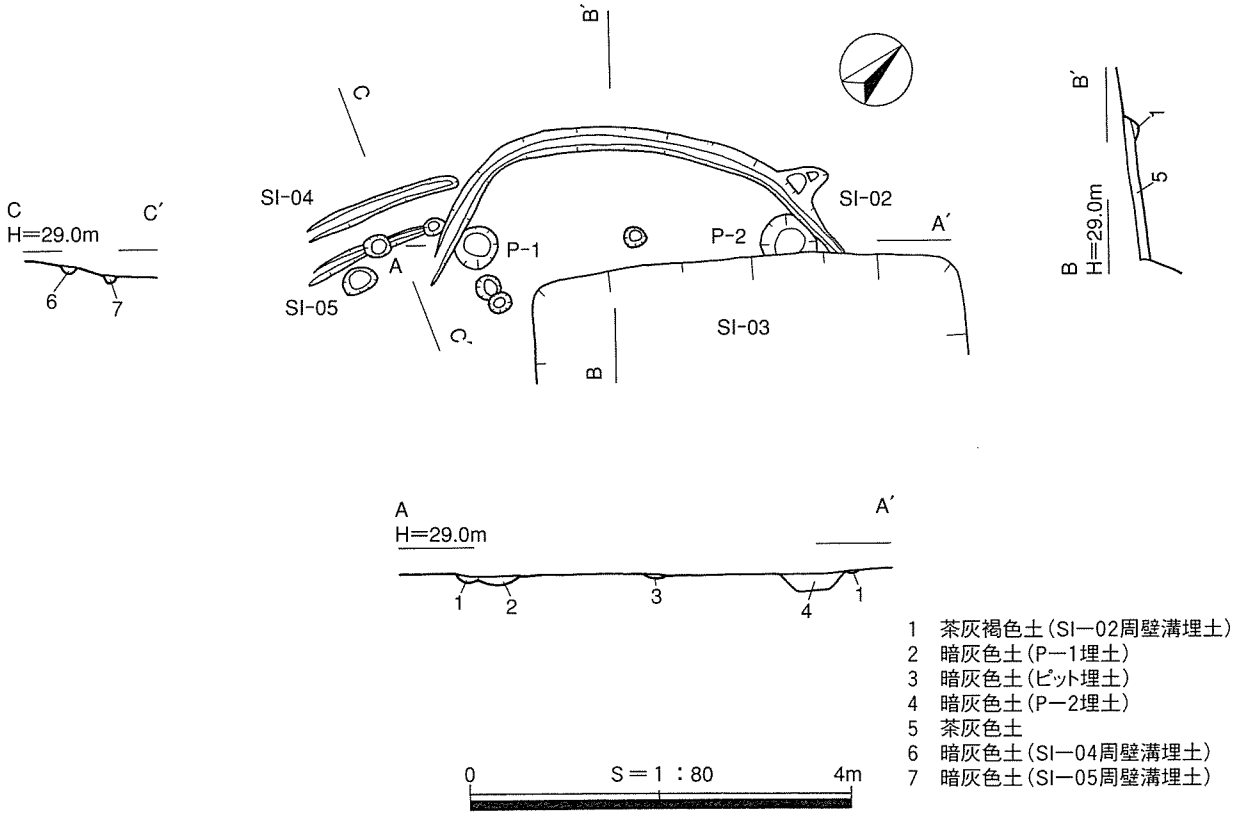
ＳＩ－０４は削平が著しく、周壁溝を確認したのみで、周壁溝の規模は幅17～22cm、深さ８cmをはかる。ＳＩ－０４はＳＩ－０５の北西0.4mに、ＳＩ－０５に平行するように位置していることから、ＳＩ－０４はＳＩ－０５を拡張した可能性がある。

周壁溝からは遺物が出土しておらず、ＳＩ－０２との切合関係も認められないことから、本遺構の時期は不明である。

ＳＩ－０５（第56図）

ＳＩ－０５は削平が著しく、周壁溝を確認したのみで、周壁溝の規模は幅８～17cm、深さ8cmをはかる。ＳＩ－０５は後にＳＩ－０４に拡張されるものと思われる。

ＳＩ－０５とＳＩ－０２との切合関係は両遺構の間にピットがあるため、明らかにすることができなかった。また、周壁溝からは遺物が出土していないことから、本遺構の時期は不明である。



第56図　ＳＩ－０２・０４・０５遺構図

土　　坑（第54図）

時期不明の土坑は71基確認している。このうち54基は底面に小ピットを持ってはいないが、平面形態が円形を呈し、その規模が径0.7～1.3ｍで、縄文時代の落し穴であると考えられるＳＫ－１３と同規模、同形態である。第３節でも前述したように、これらの中には縄文時代の落し穴が含まれる可能性があるが、時期を特定できる遺物が出土していないことから、現段階ではこれらは縄文時代の落し穴であると断定できるものではないと判断し、ここではこれらを時期不明の土坑として取り扱う。

また、ＳＫ－０３・０５は平面形態が隅丸方形を呈し、近世後半以降の遺物が出土したＳＫ－０４・０８・１６と同形態、同規模であり、さらに、これらは等高線に沿うように規則的に配置していることから、ＳＫ－０３・０５はＳＫ－０４・０８・１６と同時期のものである可能性がある。

各土坑の概要については、表５にまとめているので、これを参照されたい。

溝状遺構（第54図）

時期不明の溝状遺構は25条確認している。

ＳＤ－１６、ＳＤ－１７、ＳＤ－１８は土地の境界や地形の変換点に位置していることから、土地の境界を示したり、排水を目的としたものであると考えられる。また、切合関係から古い順にＳＤ－１６→ＳＤ－１７→ＳＤ－１８の前後関係が考えられる。これ以外の溝状遺構の性格については判然としないが、当調査地は湧水が著しいことから、その排水に用いたり、土地の境界を示したり、耕作に関連のあるものであると考えられる。

各溝状遺構の概要については、表６にまとめているので、これを参照されたい。

表５　土坑一覧表（時期不明のもの）

（　）内の数字は残存値

土坑番号	平面形態	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	出　土　遺　物
1	隅丸方形状	1．5	1．0	0．1	
2	隅丸方形	1．2	1．1	0．3～0．5	須恵器
3	隅丸方形	1．3	1．0	0．1～0．3	
5	隅丸長方形	(1．3)	1．0	0．1～0．3	須恵器、赤彩土器
6	円　　形	0．8	0．8	1．0	
7	隅丸方形	1．2	(0．7)	0．5	須恵器
10	楕　円　形	1．0	(0．7)	0．2	
12	隅丸長方形	(3．2)	1．0	0．2	
14	隅丸方形状	1．2	1．0	0．1	
15	円　　形	1．1	0．9	1．6	
17	円　　形	0．9	0．8	1．0	
18	円　　形	0．7	0．7	0．7	
19	円　　形	1．0	0．9	0．6	
20	円　　形	0．9	0．9	0．4	
21	円　　形	1．2	(0．9)	0．6	
23	円　　形	1．7	(1．1)	0．2	
24	円　　形	0．9	0．9	0．9	
25	円　　形	0．8	0．7	0．7	
26	円　　形	0．7	0．7	0．7	須恵器
27	円　　形	0．8	0．7	1．3	
29	隅丸方形状	1．0	(0．4)	0．4	
30	円　　形	1．3	1．3	0．9	
31	円　　形	0．8	0．7	0．7	
32	円　　形	1．1	1．0	0．4	
33	円　　形	0．9	0．8	1．0	
34	円　　形	0．9	0．8	0．9	
35	円　　形	1．3	1．2	1．1	
36	円　　形	0．9	0．8	0．6	
37	円　　形	0．8	0．8	0．4	
38	楕　円　状	1．0	0．4	0．2	
39	円　　形	0．8	0．7	0．8	
40	円　　形	0．8	0．8	0．7	
41	円　　形	1．1	1．1	1．1	
42	円　　形	0．9	0．8	0．3	
43	円　　形	0．8	0．8	0．3	
44	円　　形	0．7	0．7	0．3	

土坑番号	平面形態	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	出　土　遺　物
45	隅丸長方形	0．8	0．7	0．1	
47	円　　形	0．8	0．7	1．1	
48	円　　形	1．0	0．9	1．0	
49	円　　形	1．0	1．0	1．0	
50	円　　形	1．1	0．9	1．0	
51	円　　形	1．0	0．9	0．1	
52	円　　形	1．3	1．2	0．8	
53	円　　形	0．9	0．9	1．1	
54	円　　形	1．1	0．9	0．9	
55	円　　形	(1．3)	1．1	0．9	
58	円　　形	1．2	1．0	0．3	
59	円　　形	1．3	1．2	0．8	
60	円　　形	1．3	1．2	0．8	
61	円　　形	0．9	0．9	0．7	
62	楕　円　形	0．9	0．5	0．5	
63	円　　形	0．8	0．8	0．9	
64	楕　円　形	1．3	1．0	0．2	
65	楕　円　形	1．3	1．0	1．0	
66	楕　円　形	1．2	0．9	0．3	
67	円　　形	0．8	0．8	0．7	
68	円　　形	0．7	0．7	0．1	
69	円　　形	0．8	(0．6)	0．3	
70	楕　円　形	0．9	0．7	1．0	
71	円　　形	0．7	0．6	0．2	
72	円　　形	1．1	1．0	0．2	
73	円　　形	0．9	0．8	0．4	
74	円　　形	0．9	0．9	0．7	
75	円　　形	1．2	1．1	0．8	
76	円　　形	1．1	1．1	0．8	
77	楕　円　形	1．7	0．9	0．3	
78	円　　形	0．8	0．7	1．0	
79	円　　形	1．3	1．3	1．2	
80	円　　形	1．2	1．1	1．0	
81	円　　形	0．8	0．7	1．0	

表６　溝状遺構一覧表（時期不明のもの）

溝番号	検出長（m）	幅（m）	深さ（m）	出　土　遺　物
１	３．７	０．４～０．６	０．１～０．２	土師器
２	４．０	０．４～０．６	０．１～０．２	土師器
４	５．３	０．７～１．７	０．１～０．３	土師器
６	１１．１	０．２～０．３	０．１～０．２	土師器
７	４．８	０．４～０．８	０．１～０．２	
９	１．８	０．３～０．５	０．１～０．２	
１０	５．３	０．５～０．７	０．１	土師器
１１	２．２	０．３～０．５	０．１	
１２	１４．６	０．５～１．０	０．１～０．２	須恵器、土師器、土製支脚、移動式竈
１３	１８．２	０．５～１．０	０．１	須恵器、赤彩土器
１４	２．３	０．２～０．３	０．１	土師器
１５	３．６	０．４～０．７	０．１～０．２	
１６	６．６	０．４～０．６	０．３～０．４	
１７	３．４	０．５～１．０	０．３	
１８	１２．２	０．７～１．３	０．２～０．４	
２０	１．７	０．６～０．７	０．３	土師器
２１	２．４	０．６～１．２	０．１～０．２	
２２	２．３	０．６～０．７	０．２	
２３	２．４	０．７～０．９	０．１	須恵器、土師器
２４	１．５	０．５～０．６	０．１	
２５	１．５	０．２～０．３	０．１	須恵器、土師器
２６	１．１	０．３～０．４	０．１	土師器
２７	６．０	０．３～０．５	０．１～０．２	
２８	２．９	０．６～１．３	０．４～０．５	
２９	５．５	１．３～１．５	０．１～０．２	

第９節　遺構外出土遺物

35～83は突帯文土器である。突帯文土器には、口縁端部に刻み目が施されたものは全く存在しない。35～49は突帯に刻み目が施されたものである。35～46は口縁端部から下がった位置に突帯が付くもので、いずれも比較的しっかりとしたＤ字あるいはＶ字の刻み目が施されている。35～40は口縁端部が比較的まっすぐのびるのに対して、41～46は口縁端部がわずかに外反する。47～49は口縁端部に接するような位置に突帯が付くもので、軽めのＶ字状の刻み目が施されている。

50～81は突帯に刻み目が施されないものである。50～76は、口縁端部から下がった位置に突帯が付くもので、50～64は口縁端部が比較的まっすぐのびるのに対して、65～74は口縁端部がわずかに外反している。75、76は壷形を呈するもので、74、84～86とともにまとまって出土した。77～81は口縁端部に接するような位置に突帯が付くものである。82、83は２条の突帯が巡るもので、突帯には刻み目が施されている。85、86は出土位置から74、75、76、84のいずれかと同一個体となる可能性があるものと思われ、85は内面に、86は外面に稲の籾圧痕が認められる。

87～131は弥生土器である。87～93は前期の土器で、87、88、90は壷、89は甕、93は蓋である。87、88の口縁端部には有軸羽状文が施され、90～92の外面には木葉文が施されている。

94～97は中期前葉の土器である。94は壷で、頸部外面には15条の櫛描文が施されているが、摩滅が著しいために櫛描の単位は確認できなかった。95～97は甕である。96の外面には５条１単位の櫛描文が３段にわたって施され、その下位には三角形のスタンプ文が施されている。97の外面には14条の櫛描文が施されているが、櫛描の単位は確認できなかった。

98～112は中期中葉～後葉の土器である。98～102は壷で、98～101の口縁には２～３条の凹線が巡り、その上には刻み目が施され、98、99、101の外面には断面三角形の貼付突帯が巡っている。102は口縁端部を上下につまみ出すもので、４条の凹線が巡る。103～110は甕で、その口縁には、103は３条、104は２条、105は３条、106は２条、107は３条の凹線が巡り、106の凹線の上には刻み目が施され、頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡っている。108～110は頸部に指頭圧痕貼付突帯が巡っている。111、112は高坏で、脚部外面には断面三角形の突帯が巡っている。

113～116は後期の土器で、いずれも甕である。口縁には113は３条、114は５条、115は２条、116は５条の擬凹線が巡る。117～131は底部で、117～122の外面にはヘラミガキが施され、123～125はハケ調整が施されている。

132～150は古墳時代前期の土器である。132は壷、133～147は甕で、132～135は口縁端部が丸くおさまる。136～140は口縁端部が丸みを帯びた平坦状を呈し、141～147は口縁端部が平坦状を呈し、さらに、外方へわずかにつまみ出されている。148は高坏の坏部で、外面にはハケ調整が施されている。149は鼓形器台、150は低脚坏である。

151～166は古墳時代中期の土器で、いずれも甕である。151～161はかなり退化した複合口縁を有し、162～164は口縁がく字状を呈しているが、わずかに複合口縁の名残が認められる。165は口縁がく字状に外反し、166は口縁が内湾する。

167～187は古墳時代後期～奈良時代の土師器である。167～184は甕で、いずれも外面はハケ調整、内面はヘラケズリが施されている。167～175は口縁がく字状を呈し、頸部内面には稜が認められる。176～180は口縁がく字状を呈するが、頸部内面の稜は167～175と比べると、鋭さを失う。181～184は口縁が大きく外反し、頸部内面の稜は認められない。185は宝珠つまみを有する蓋、186は高坏の脚部で、面取りが施されている。187は坏身で高台を有する。

土師器の坏身は、図化できる資料が少なく、図化し、本報告に掲載したものは新しい時期のものが多いが、実際は図化はできないが、奈良時代のものが圧倒的に多く出土している。

188～192は平安時代の土器である。188、189は高台を有し、底部外面には糸切の痕跡は認められない。190～192は外傾しながらまっすぐ立ち上がり、底部外面には回転糸切りが施されている。

193、194は鎌倉時代の土器である。いずれも内湾気味に立ち上がり、底部外面には回転糸切りが施されている。

195～203は小皿である。195～197は内湾気味に立ち上がり、198～201は外傾しながらまっすぐ立ち上がり、202、

203は外反気味に立ち上がる。なお、195の底部外面には回転糸切りが施されているが、これ以外はすべて静止糸切りが施されている。

204～231は赤彩土器である。204～215は坏身で、204～206は外反気味に立ち上がり、口縁端部をわずかに内側へつまみ出している。207、208は外反気味に立ち上がるもので、口縁端部は丸くおさまる。209～212も外反気味に立ち上がるものであるが、207、208よりも外反度は小さい。213～215は外傾しながらまっすぐ立ち上がるものである。216～224は皿で、216～218は内湾気味に立ち上がり、219～224は外反気味に立ち上がる。以上の坏身、皿は底部外面をヘラ切りするものである。当遺跡出土の赤彩土器の坏身、皿はこのように底部外面をヘラ切りするものが大半を占めるが、225、226のように底部外面に回転糸切を施すものが数点存在する。227、228は高台を有するもので、底部外面はヘラ切りが施されている。229～231は鉢である。

232、233は内黒の黒色土器で、232の内面には暗文が認められる。

234、235は緑釉陶器で、底部外面には回転糸切が施されている。

236～332は須恵器である。236～243は坏蓋で、いずれも陶邑編年(註4)のＴＫ10～217に比定できるものと考えられる。236、237は扁平な器形を呈し、口縁と天井部の境には１条の沈線が巡る。238～243は口径に比べて器高が高くなり、238～240の口縁と天井部の境には１条の沈線がわずかに認められるが、241～243の口縁と天井部の境には沈線は認められない。244～251は受け部を有する坏身で、244、245は246～251よりも口縁の立ち上がりが高く、陶邑編年のＴＫ10に比定できるものと考えられる。一方、246～251は陶邑編年のＴＫ43～217に比定できるものと考えられる。252～272は坏蓋で、252～255は返りを有するものであるが、256～263は返りが消失したものである。264、265は宝珠状つまみを有し、255～257、266～272は輪状つまみを有する。273～307は坏身で、273～288、304～307は高台を有さないもの、289～303は高台を有するものである。273、274は底部外面をヘラ切りするもので、口縁は内湾気味に立ち上がる。275～285は底部外面に回転糸切りを施すもので、275～277は内湾気味に立ち上がる。278～282は口縁端部がわずかに外反するもので、283～285は口縁端部がさらに大きく外反するものである。286～288の底部外面には静止糸切りが施されている。289～297は底部外面にヘラ切りを施したもので、289～291は低い高台が付き、底部の形態はやや丸みを帯びている。292～294の高台端部は外傾する面状となっており、295～297の高台端部は水平な面状となっている。298～300の底部外面には回転糸切りが施され、301～303の底部外面には静止糸切りが施されている。304～307は外傾して立ち上がり、底部外面には回転糸切りが施されている。いずれも焼成不良である。308～311は皿である。308、309は底部を回転糸切りした後にナデ調整を行っているが、310、311は底部を回転糸切りした後にナデ調整を行っていない。312～315は高坏、316、317は瓶、318は風字硯である。319～323は壷で、319の外面には竹管文が施されている。なお、当遺跡出土の須恵器壷では長頸壷が比較的多く出土している。324～332は甕で、324～328の内面には同心円の当て具痕が認められ、外面は平行叩きを施している。331、332の内面には車輪状の当て具痕が認められ、外面は平行叩きを施している。

333～338は瓦である。333、334は丸瓦で、333は玉縁を欠損するが、内面には布目痕が認められる。外面にはわずかに縄目叩きの痕跡が認められるが、最終的にはナデ調整を行っている。334も内面には布目痕が認められ、外面はナデ調整が行われている。335～338は平瓦で、335～337は内面には布目痕が認められ、外面には格子目叩きが施されている。338は内面には布目痕が認められ、外面には縄目叩きが施されている。

当遺跡からは13点の平瓦が出土しており、その内訳は、内面に布目痕が認められ、外面に格子目叩きを施すものが４点（30.8%）、内面に布目痕が認められ、外面に縄目叩きを施すものが８点（61.5%）、不明１点（7.7%）となっており、外面に縄目叩きを施すものが多い傾向にある。

339～348は土製支脚である。343～348は底部で、343、344は内部が中空となっている。345、346は上げ底で、347は平底であるが、わずかに上げ底となっている。348は平底である。

349～352は甑で、352は赤色顔料が塗布されている。

353～366は移動式竈である。353～357、359は庇の部分で、358にも庇の接合痕が認められる。なお、358は把手

を有している。360～366は底部で、主に外面はハケ調整、内面はヘラケズリが施されている。なお、366は把手を有している。358や366のように把手を有するものは類例が少なく、米子平野では、米子市吉谷屋奈ヶ埆遺跡、石州府第4遺跡、米子市淀江町百塚第5遺跡、南部町御内谷下々ヶ市遺跡から出土している(註5)。

367～371は製塩土器で、370、371の内面には布目痕が認められる。

372～374はミニチュア土製品で、372、373は椀形、374は支脚形である。

375～377は土馬である。375は顔から胴体にかけての部分で、口先、脚、尻尾を欠損する。胴体には前輪と後輪を別々につくり、貼り付けて鞍を表現している。376は胴体の後ろの部分で、脚と尻尾を欠損する。377は脚である。

378～382は管状土錘である。

383、384は備前焼の擂鉢である。

385～390は陶器、391～393は磁器である。385、386は肥前系陶器である。385は皿で、見込みには砂目が認められる。386は椀の高台である。387～390は在地系陶器で、387は灯明皿、388は蓋、389は鉢、390は鍋である。391～393は肥前系磁器で、391は瓶、392、393は皿である。

394は漆器椀である。内外面とも黒塗りで、木取りは横木地の柾目取りである。樹種はケヤキである。

395は煙管の雁首で、吸い口側から見て左側に継ぎ目が認められる。

396～421は石器である。396～399は石鏃で、396、397の石材は黒曜石、398、399の石材は無斑晶安山岩である。400は尖頭器で、石材は黒曜石である。401は勾玉、402は紡錘車で、石材はいずれも安山岩である。403～420は打製土掘具で、使用痕分析の結果、これらは鋤や鍬のような土掘具として用いられたものと考えられる。403～420は素材剥片をハードハンマーの直接打撃で整形加工しており、特に基部側は念入りに加工し、側面の稜を叩きつぶしているものもあることから、着柄を想定して加工しているものと考えられる。平面形態には、刃部の幅が狭い短冊形を呈するもの（403、405、406、409）、刃部が基部に対して拡がるバチ形を呈するもの（404、407、408、410、412）、しゃもじ形を呈するもの（411、413、416）がある。421は磨製石斧である。なお、これらの法量、石材等は表13を参照されたい。

註

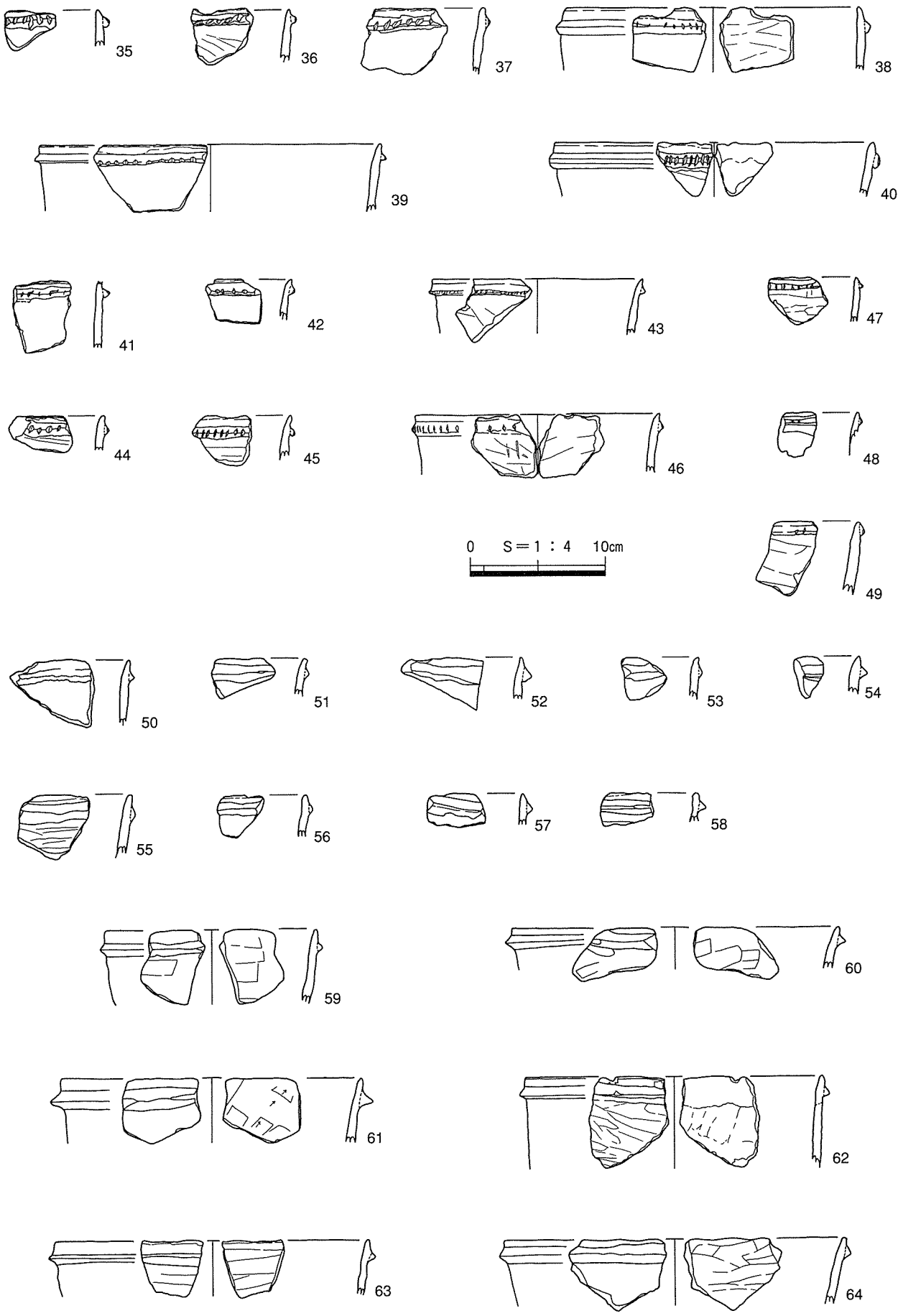
1　下高瑞哉　2004　『平成14・15年度　米子市内遺跡発掘調査報告書』　米子市教育委員会

2　打製石斧、石鍬とも呼称するが、当遺跡出土のものは、使用痕分析の結果、鍬と鋤の２種類の用途が想定されることから、本報告では、第４章　第５節では打製石斧という用語を用いるが、それ以外は打製土掘具と呼称することとする。

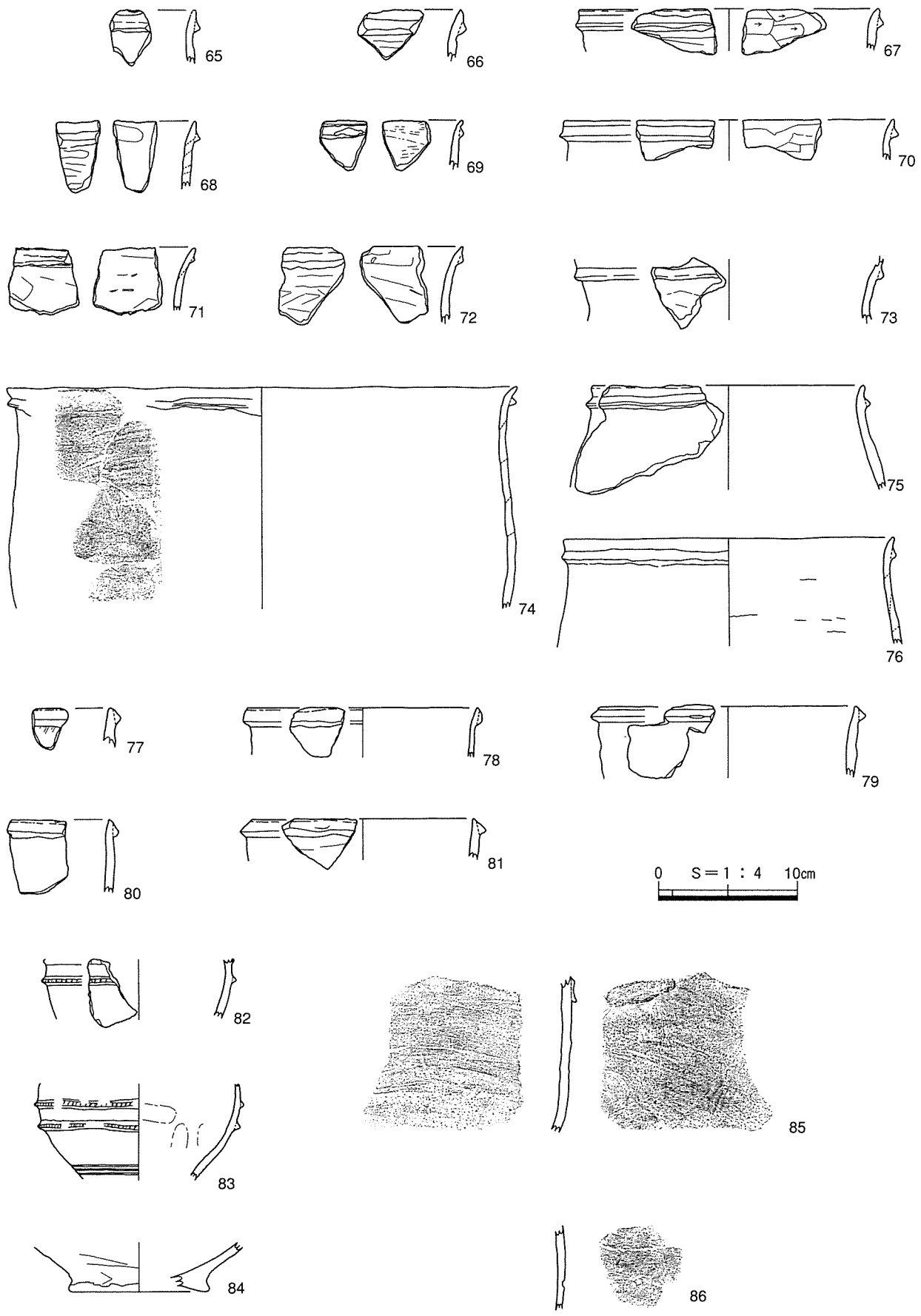
3　清水真一ほか　1978　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　鳥取県教育委員会
　小原貴樹ほか　1982　『米子市諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』　米子市教育委員会

4　田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ

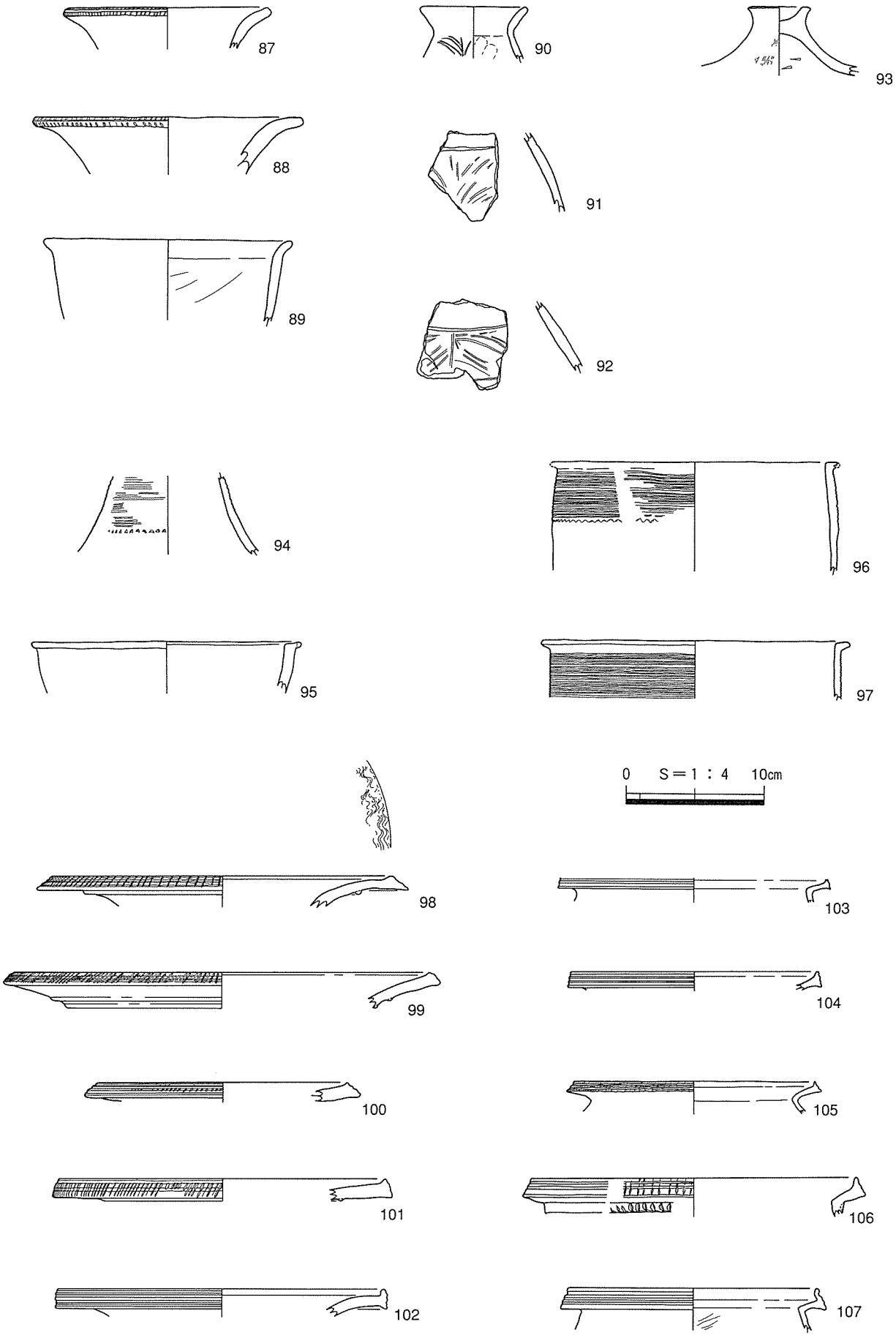
5　濱隆造ほか　2003　『吉谷遺跡群　吉谷中馬場山遺跡　吉谷屋奈ヶ埆遺跡』　財団法人　鳥取県教育文化財団
　小原貴樹ほか　1989　『石州府古墳群発掘調査報告書』　米子市教育委員会　石州府古墳群発掘調査団
　原田雅弘ほか　1995　『百塚第５遺跡　小波狭間谷遺跡　泉上経前遺跡』　財団法人　鳥取県教育文化財団
　西川徹ほか　1998　『御内谷遺跡群』　財団法人　鳥取県教育文化財団



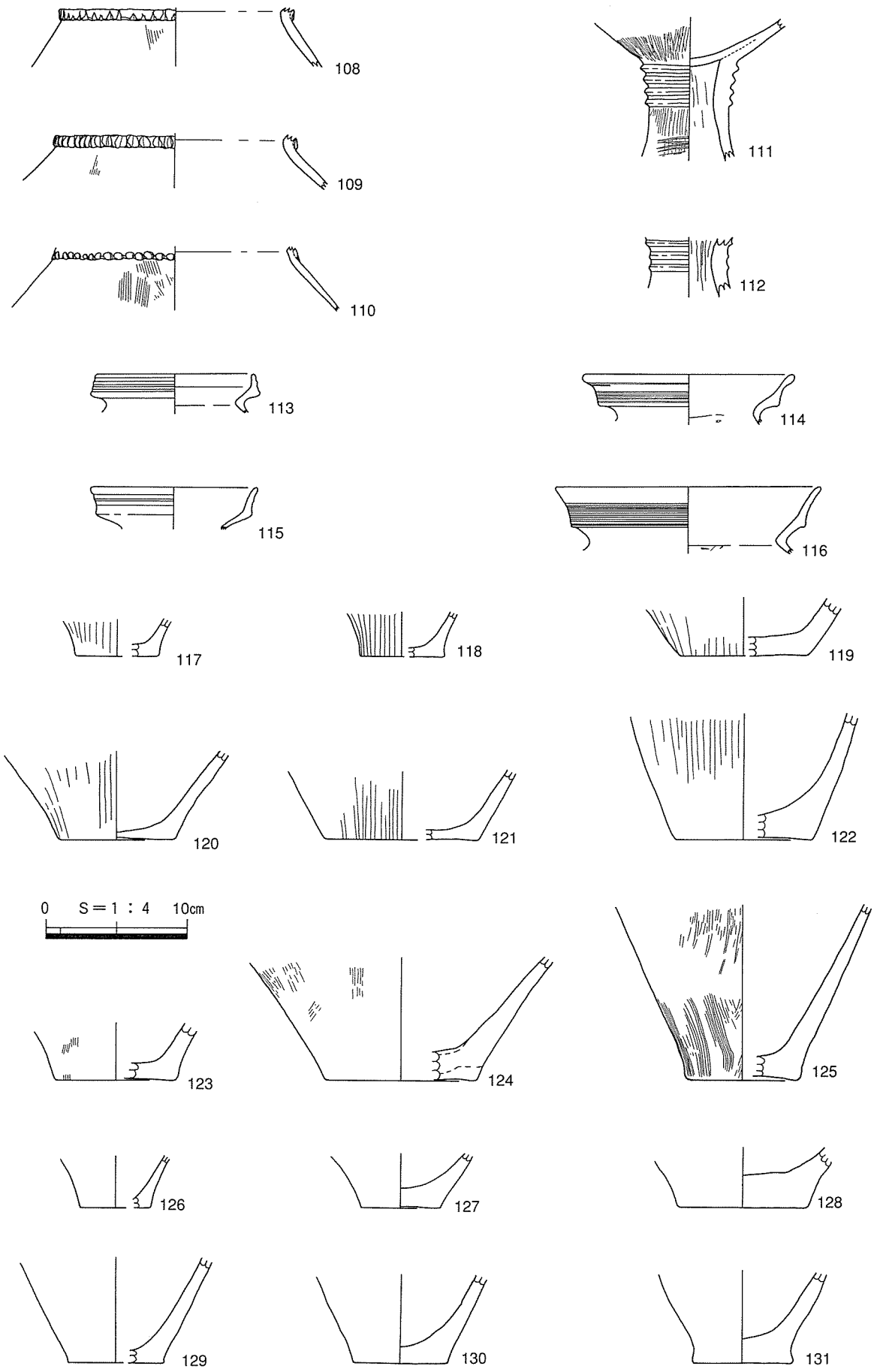
第57図　遺構外出土遺物実測図（1）



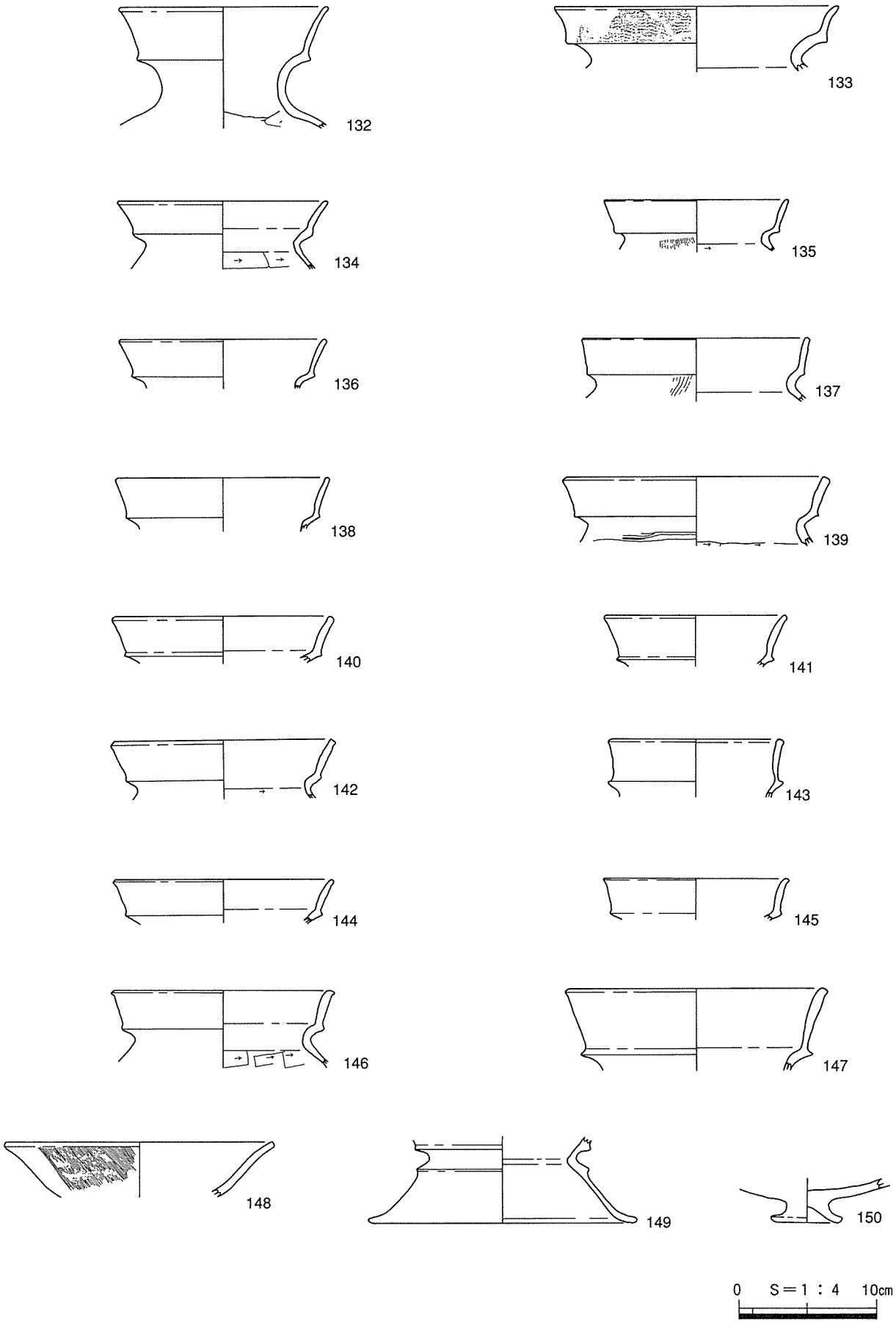
第58図　遺構外出土遺物実測図（２）



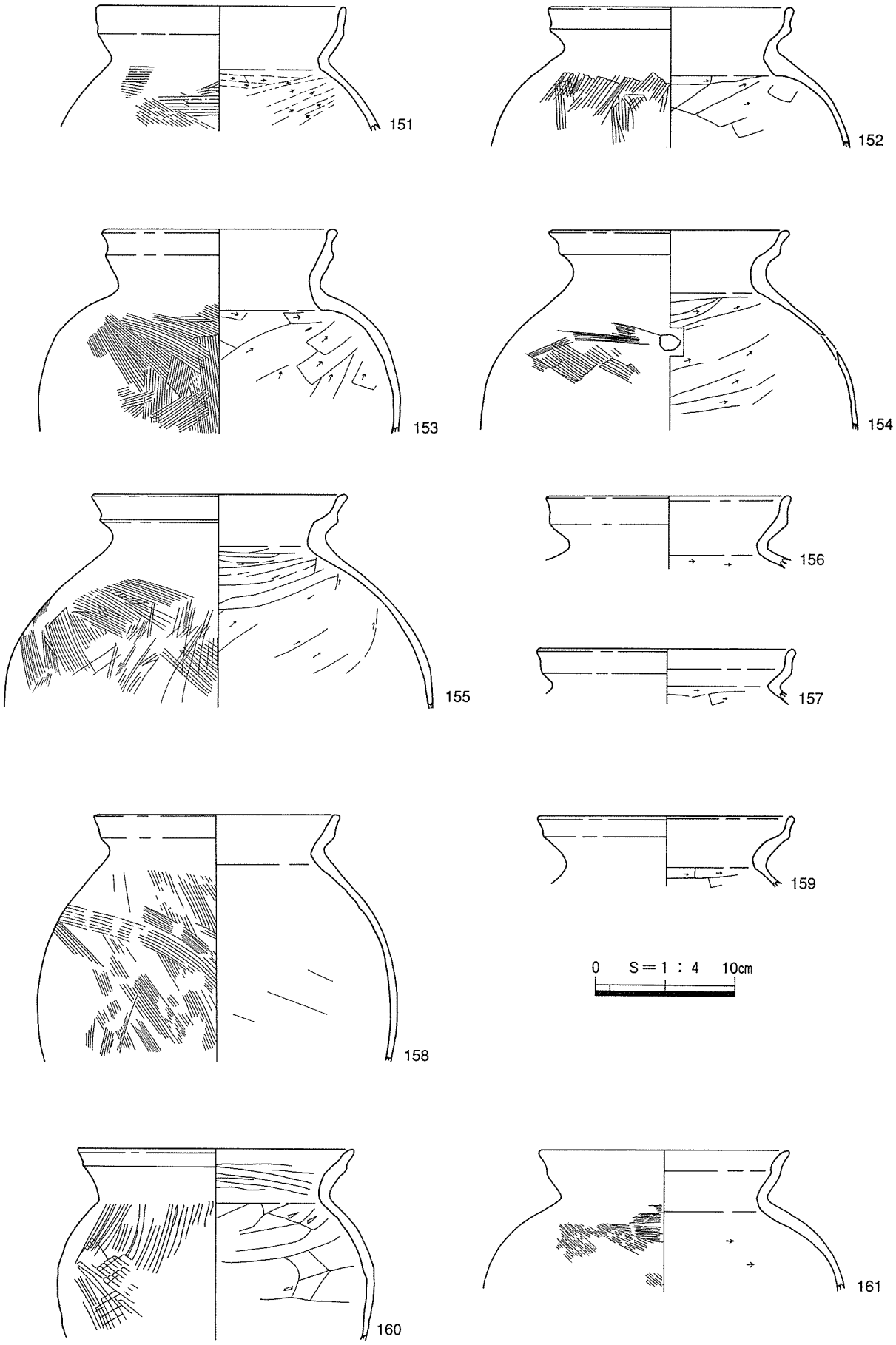
第59図　遺構外出土遺物実測図（3）



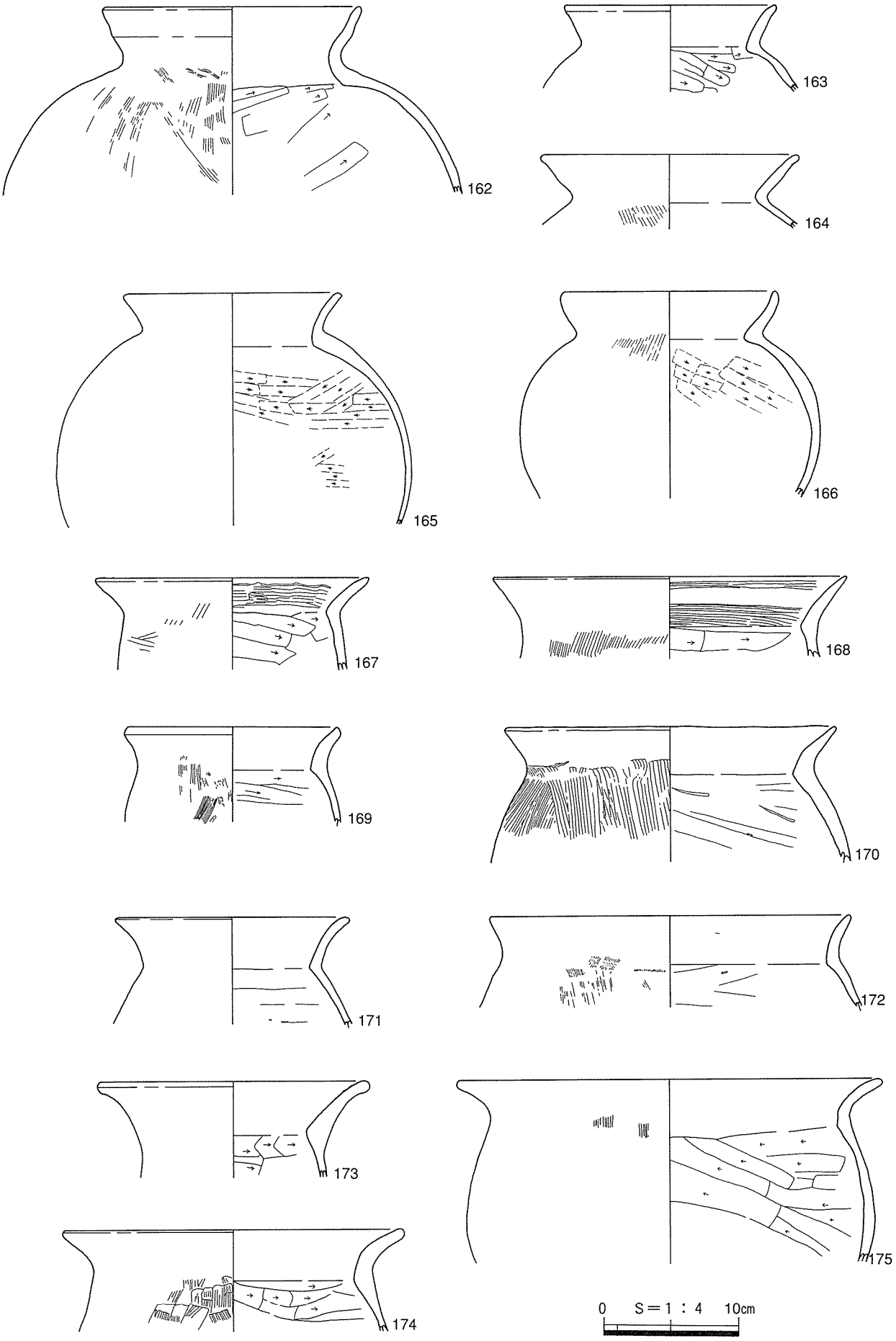
第60図　遺構外出土遺物実測図（４）



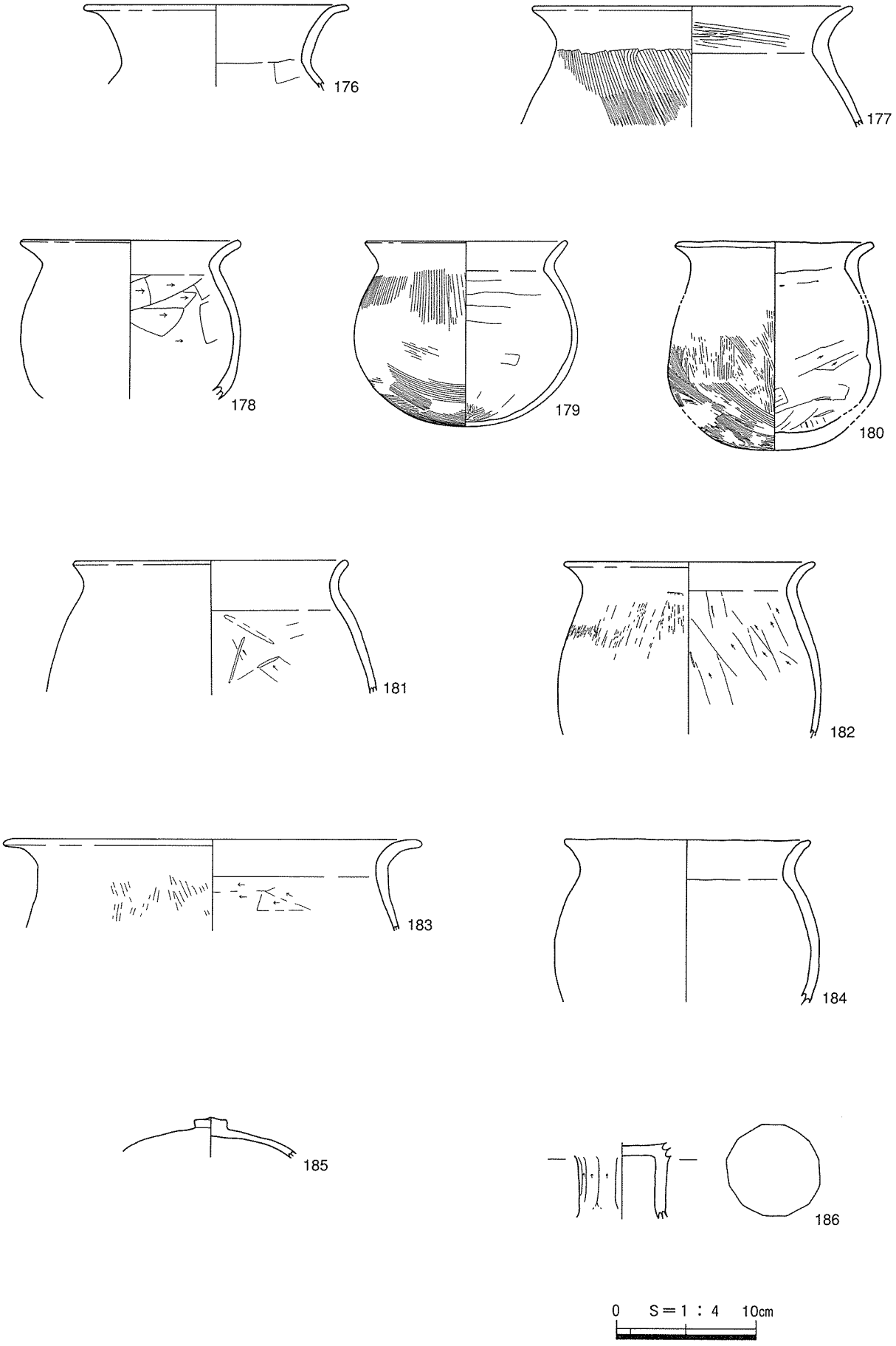
第61図　遺構外出土遺物実測図（５）



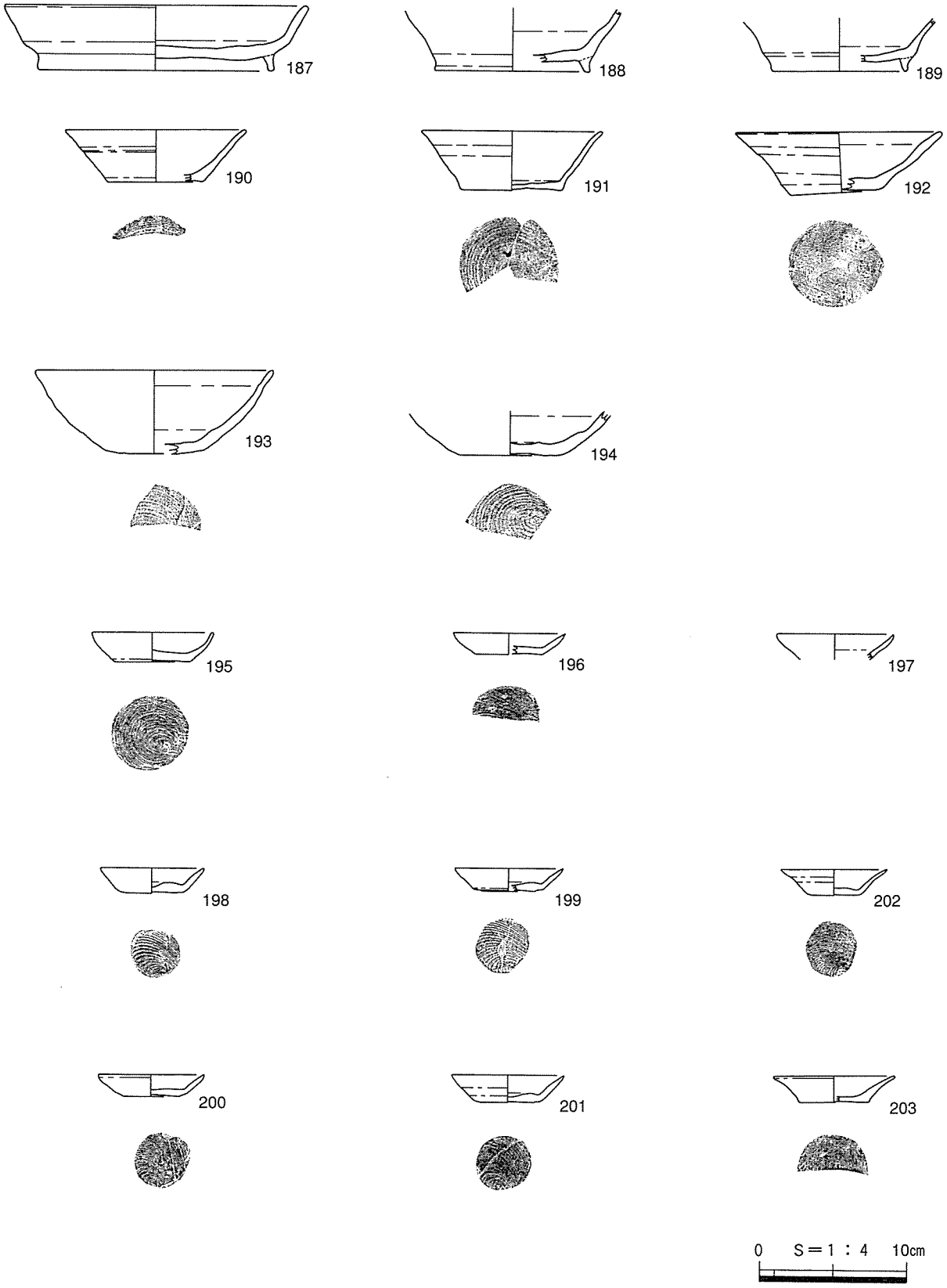
第62図　遺構外出土遺物実測図（６）



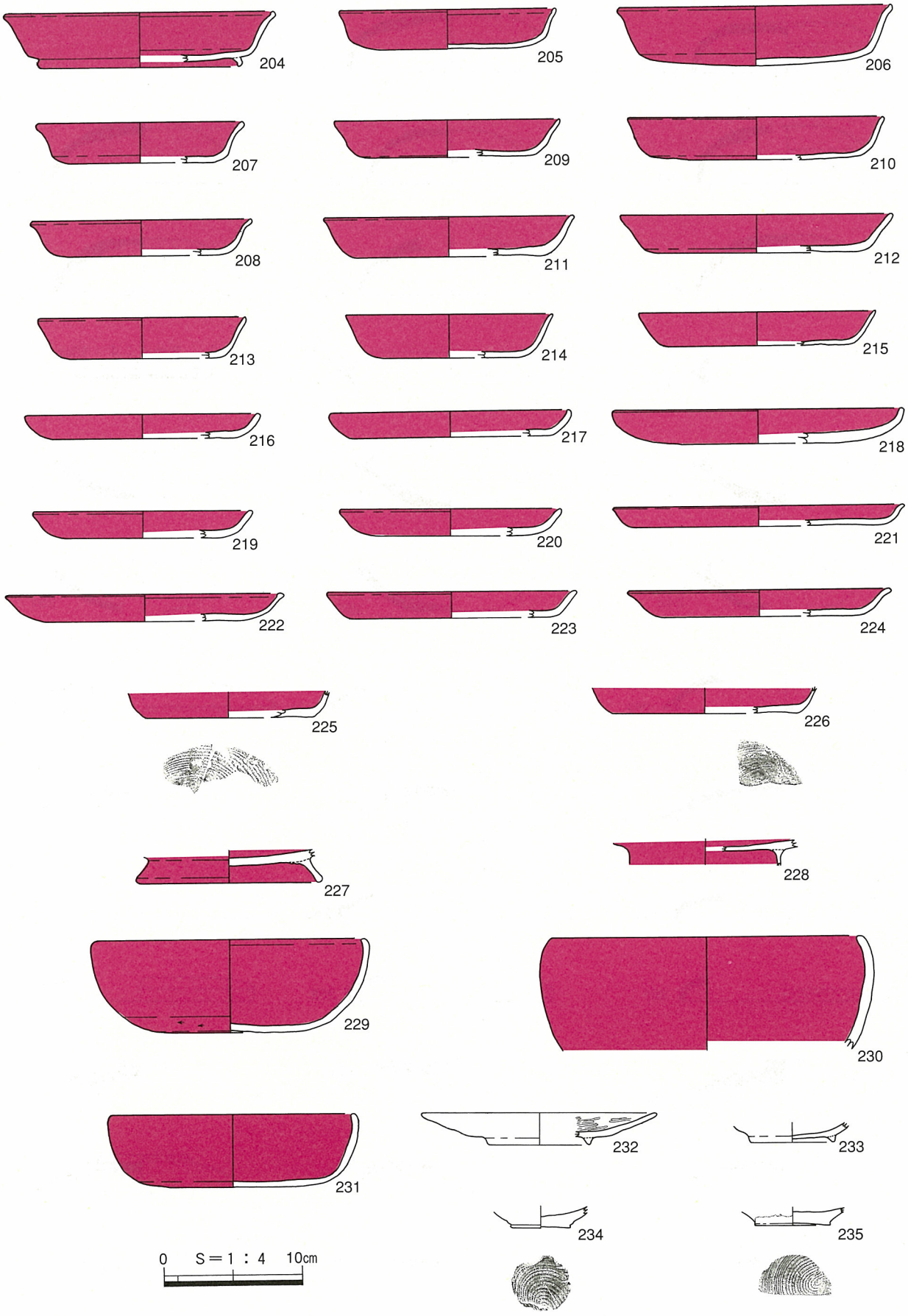
第63図　遺構外出土遺物実測図（７）



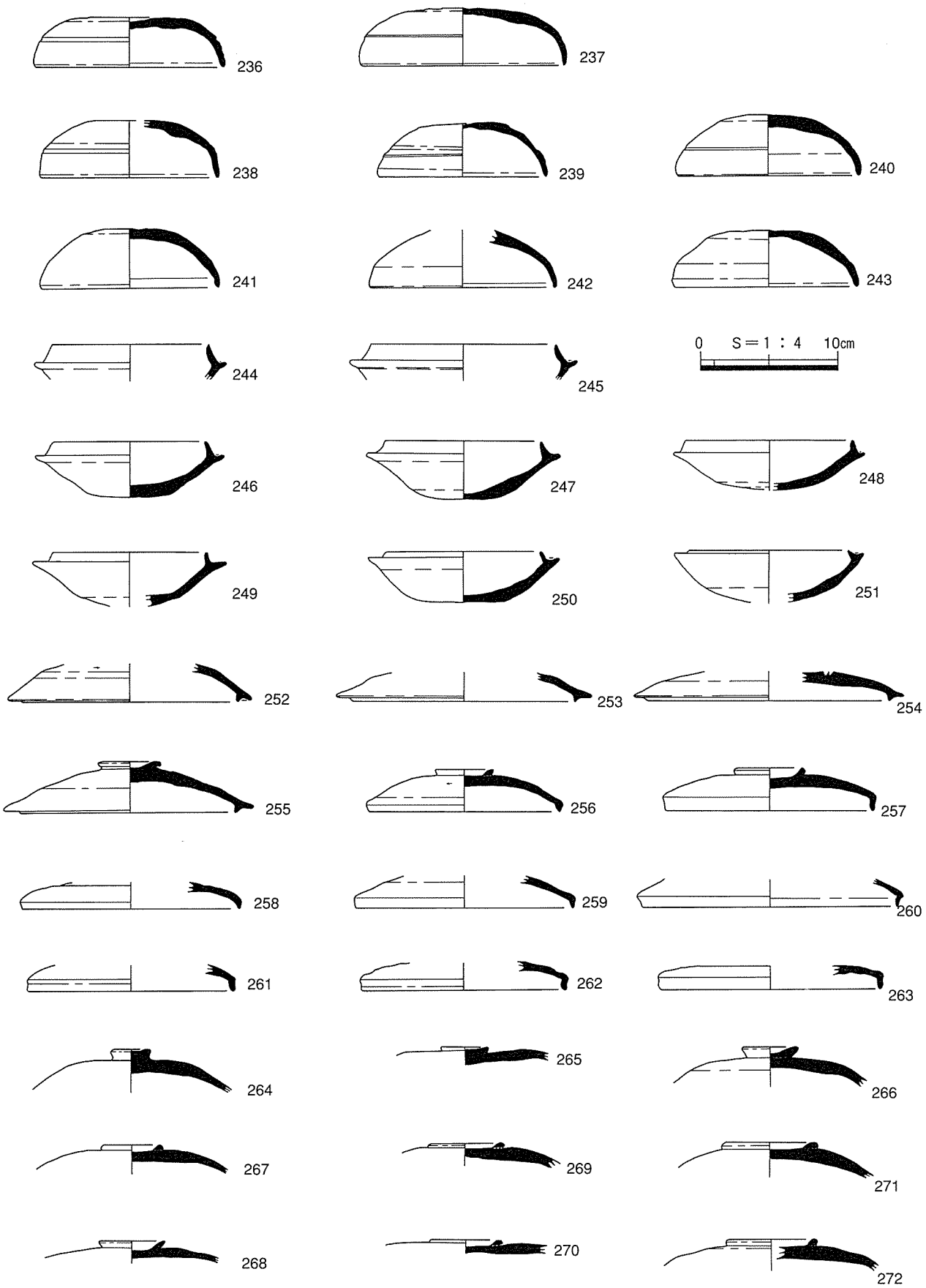
第64図　遺構外出土遺物実測図（８）



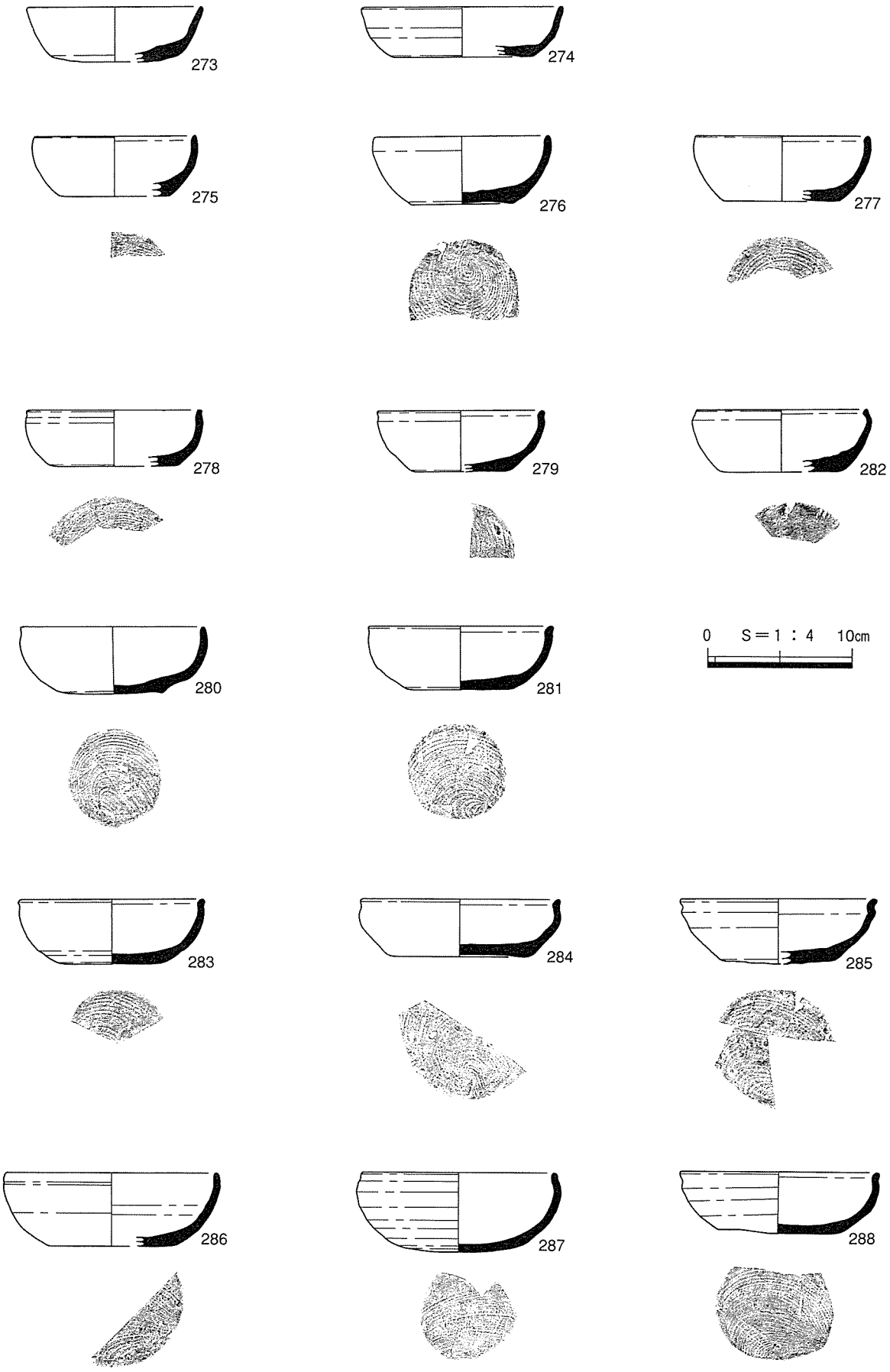
第65図　遺構外出土遺物実測図（9）



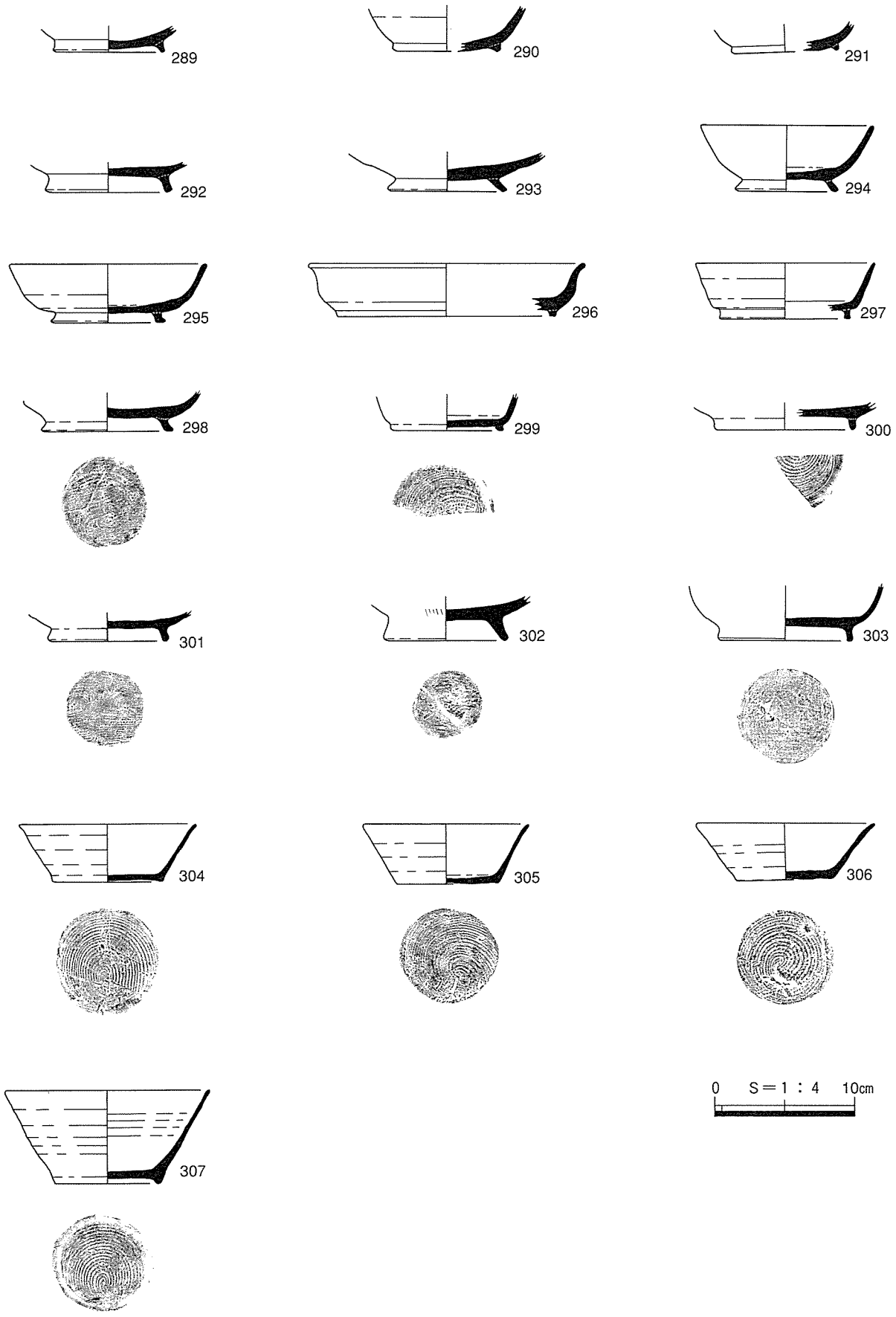
第66図　遺構外出土遺物実測図（10）



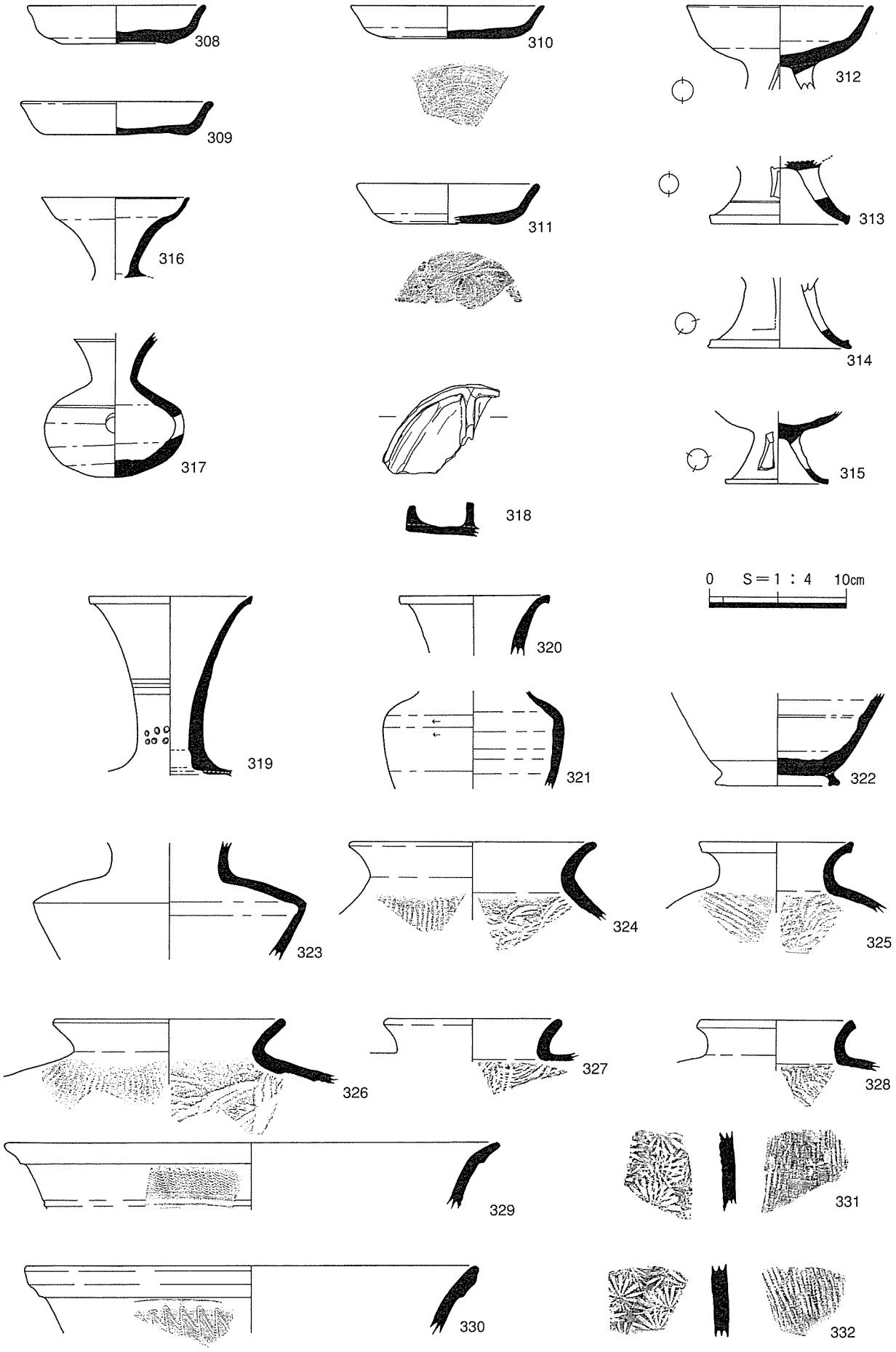
第67図　遺構外出土遺物実測図（11）



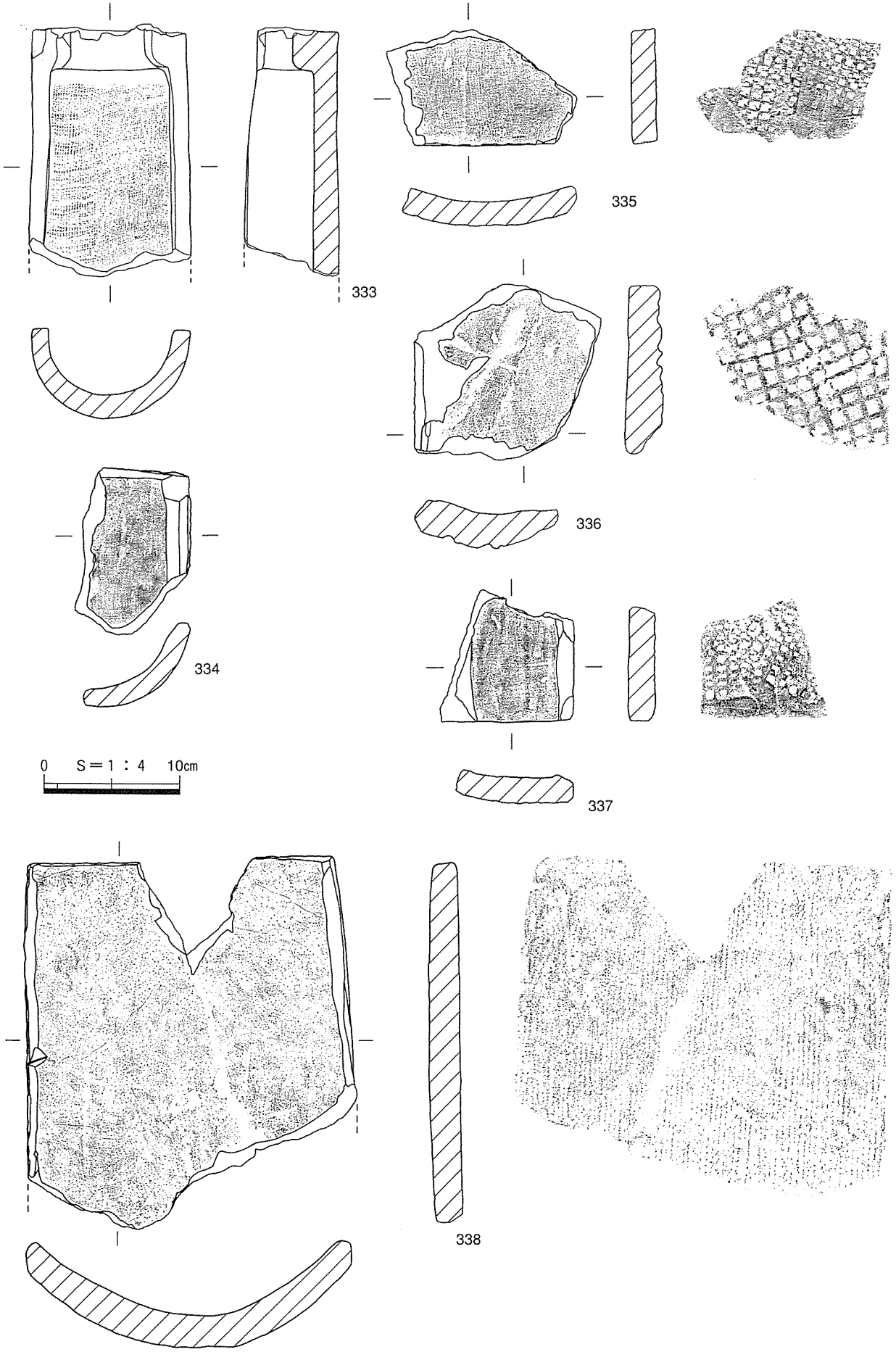
第68図　遺構外出土遺物実測図（12）



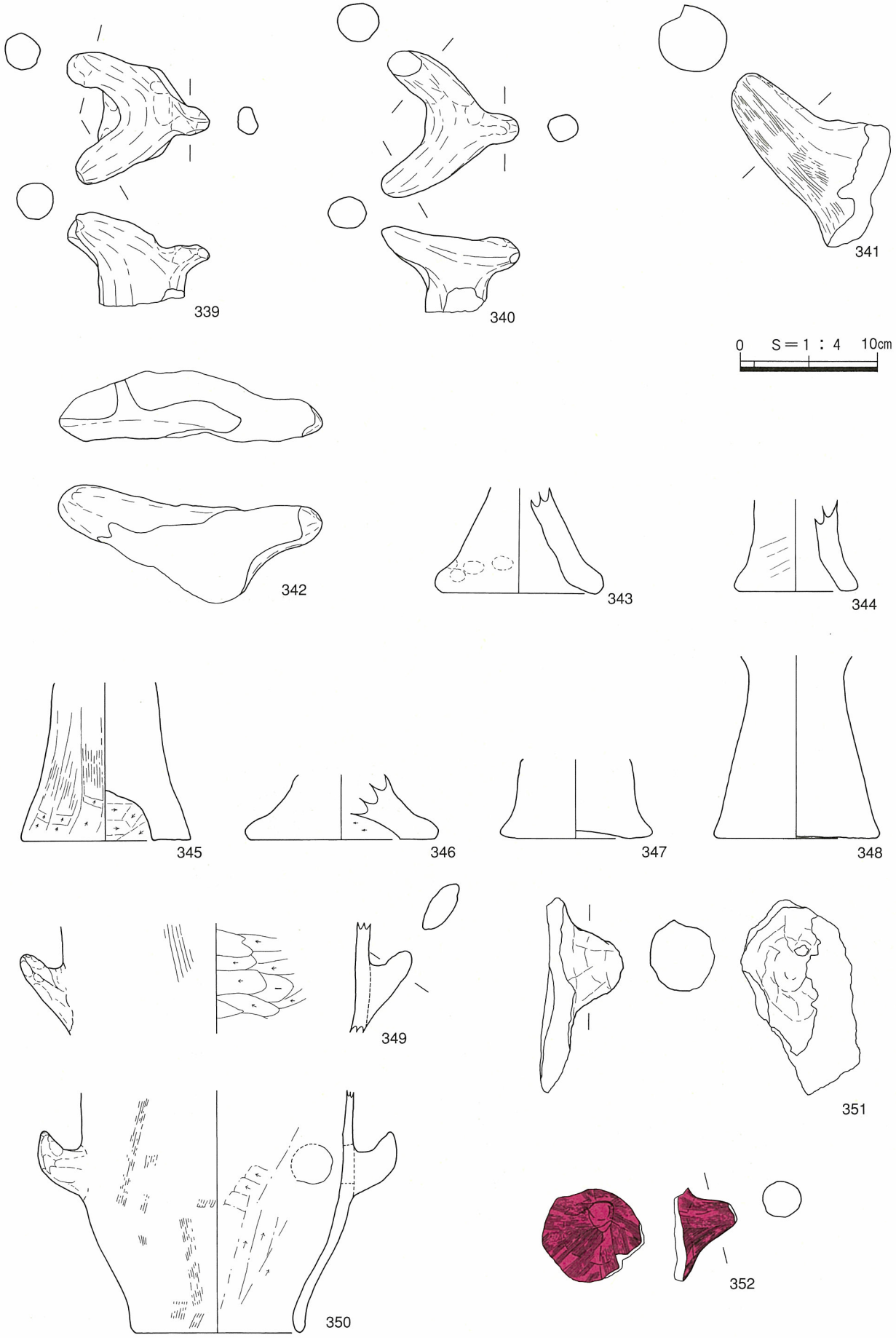
第69図　遺構外出土遺物実測図（13）



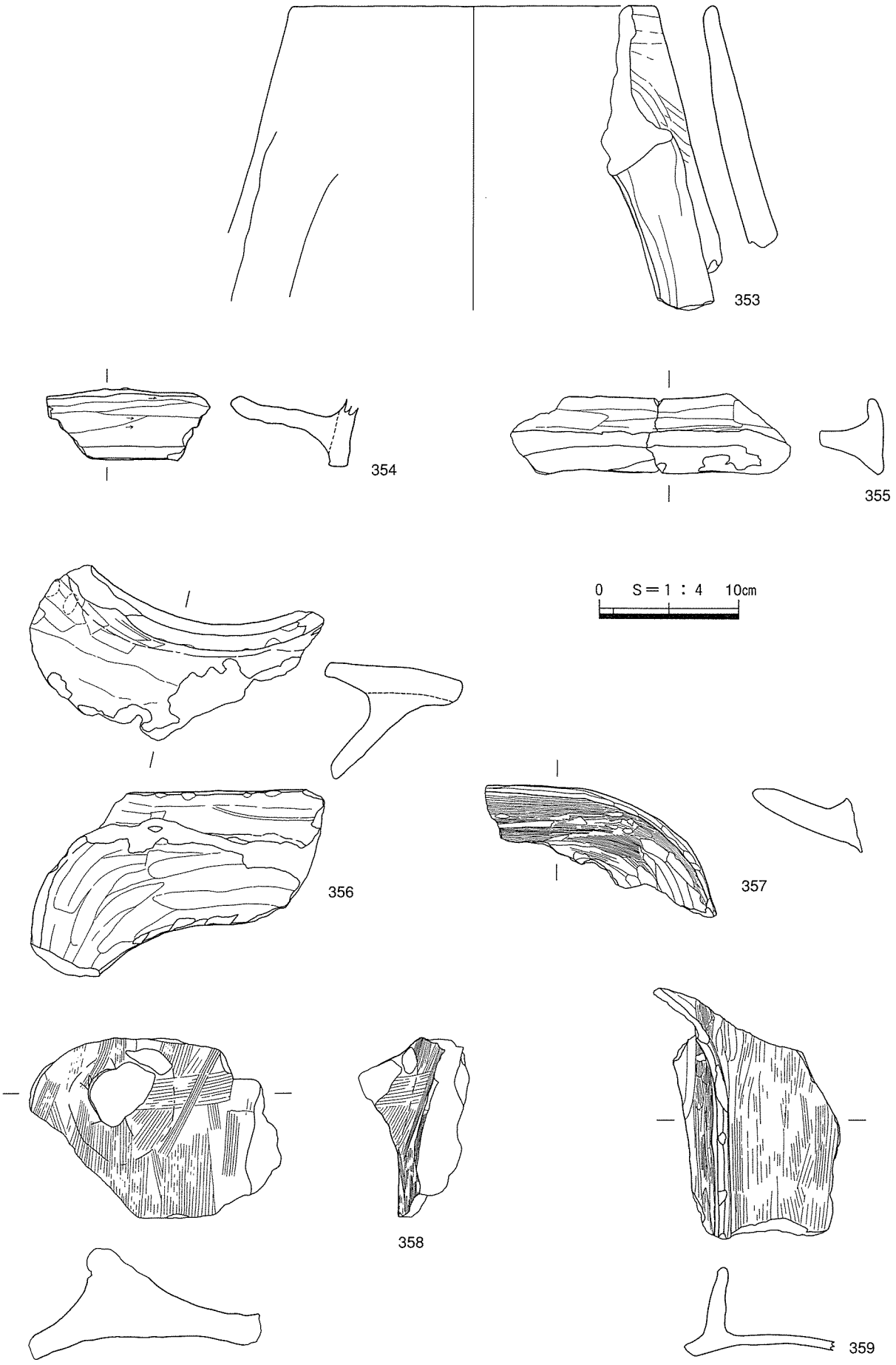
第70図　遺構外出土遺物実測図（14）



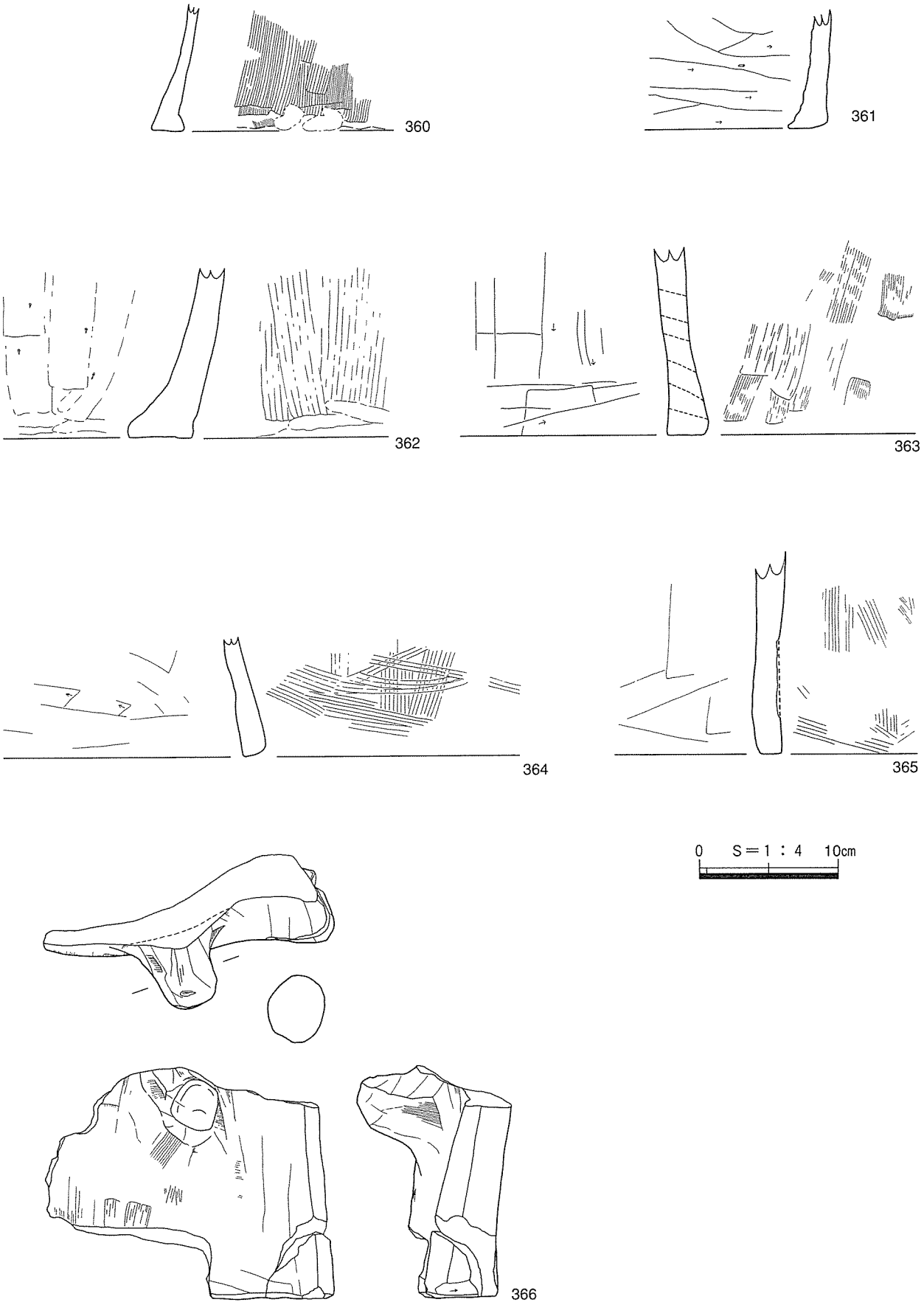
第71図　遺構外出土遺物実測図（15）



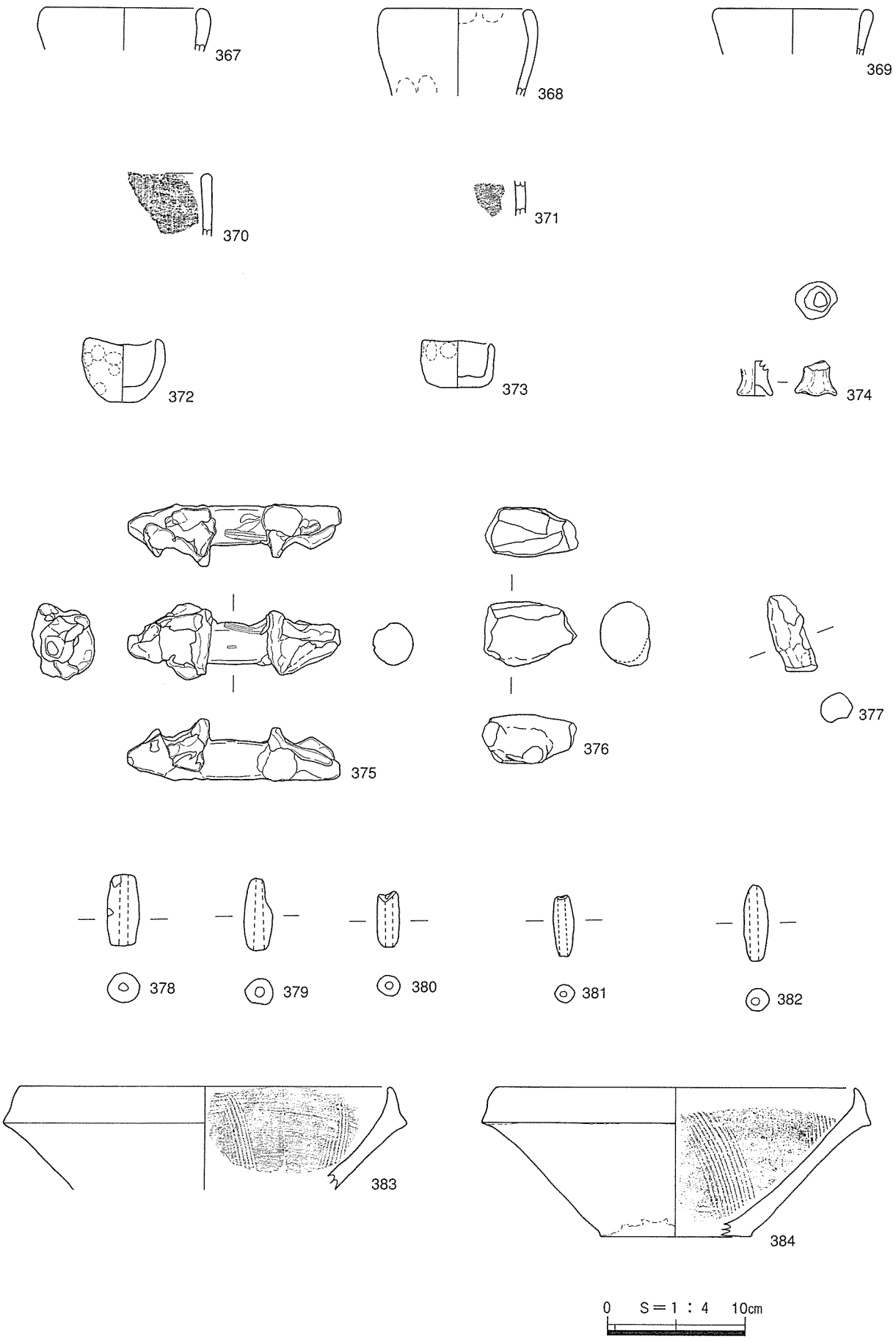
第72図　遺構外出土遺物実測図（16）



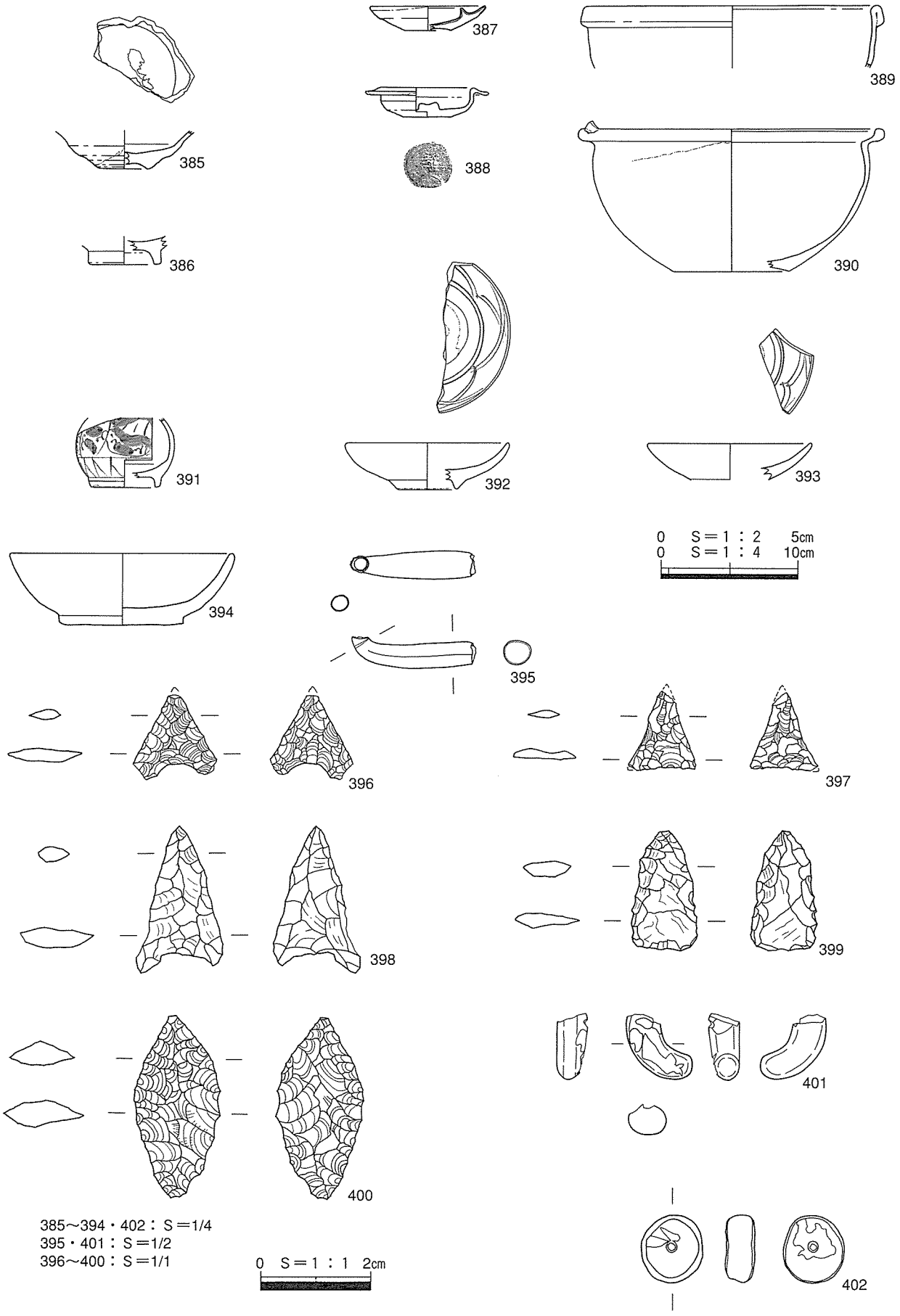
第73図　遺構外出土遺物実測図（17）



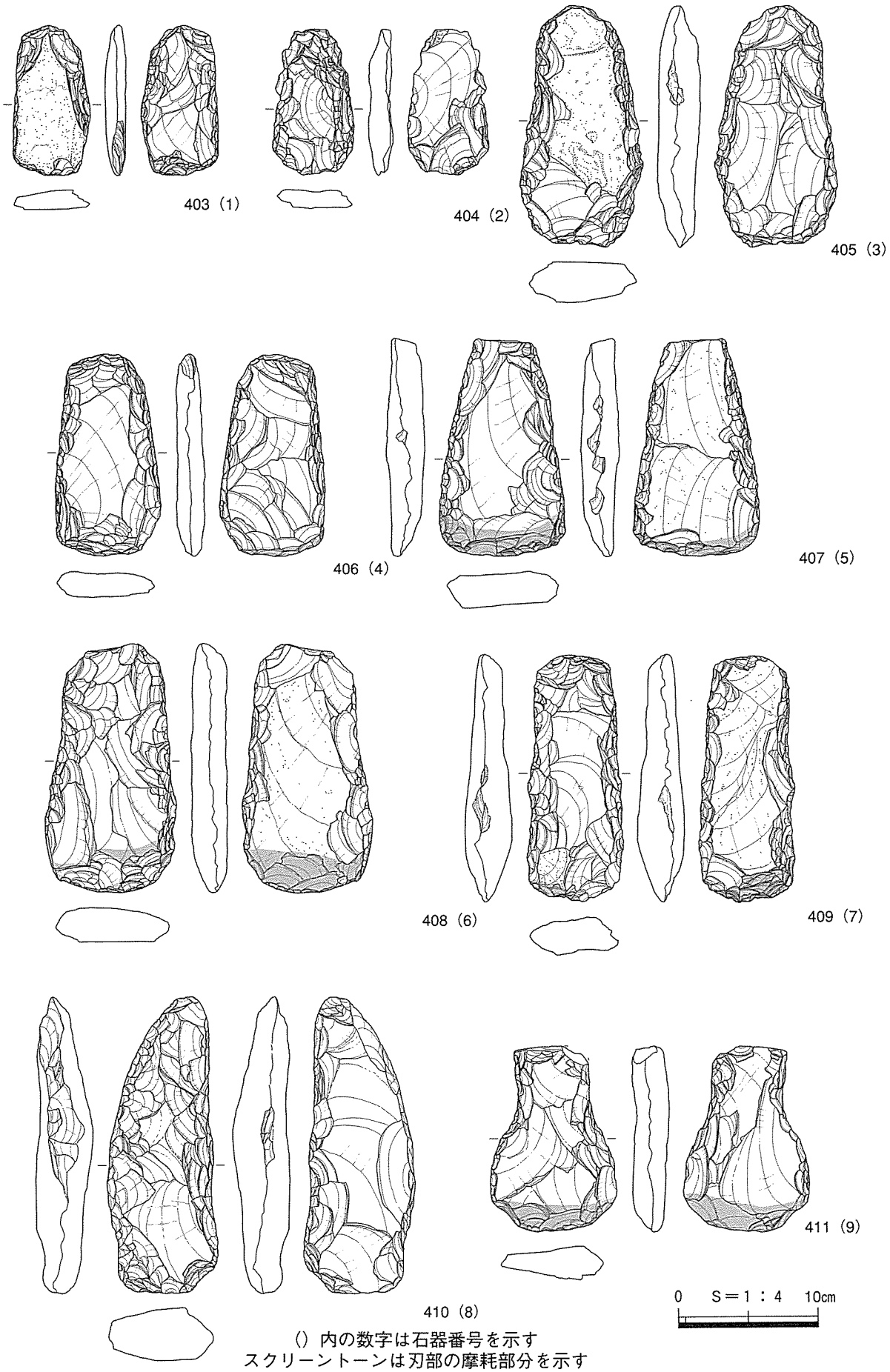
第74図　遺構外出土遺物実測図（18）



第75図　遺構外出土遺物実測図（19）

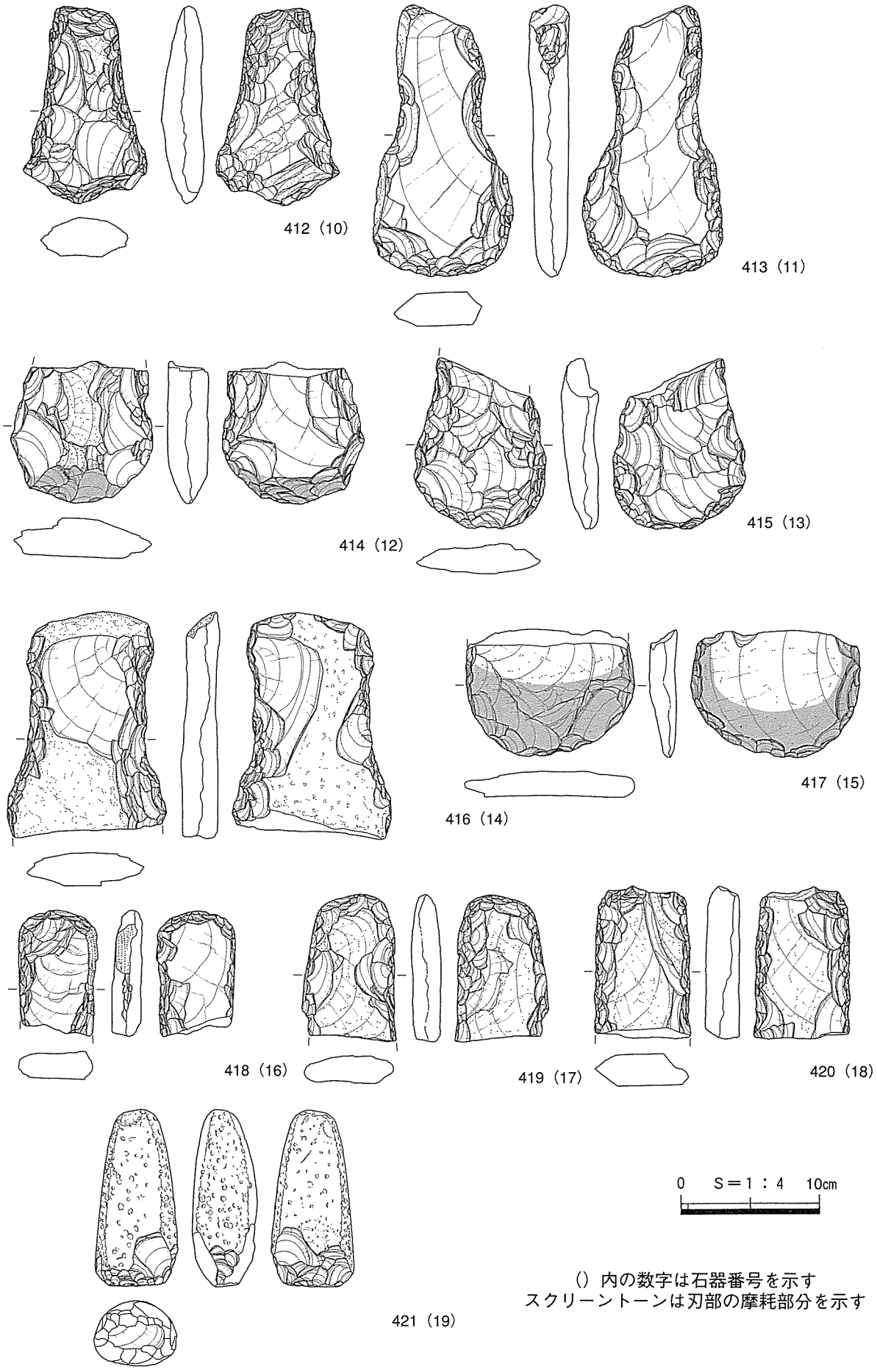


第76図　遺構外出土遺物実測図（20）



（）内の数字は石器番号を示す
スクリーントーンは刃部の摩耗部分を示す

第77図　遺構外出土遺物実測図（21）



第78図　遺構外出土遺物実測図（22）

表7　遺構内出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土遺構	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面
1	20	SI-03	土師器	高坏		△ 8.9	※ 9.6	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	密	良好	淡褐色	淡褐色
2	20	SI-03	弥生土器	甕	※ 20.0	△ 1.3		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
3	20	SI-03	土師器	甕	※ 12.1	△ 6.1		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	淡橙褐色	淡橙褐色
4	20	SI-03	土師器	壺	※ 18.4	△ 10.2		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良	褐色	褐色
5	21	SK-46	土師器	甕	※ 35.2	△ 19.2		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良	暗灰褐色	暗灰褐色
6	24	SK-28	須恵器	坏身	※ 12.6	△ 4.1		天井部:ヘラケズリ、その他:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	濃灰色	淡灰色
7	24	SK-28	移動式竈			△ 9.8		ナデ	ナデ	密	良好	淡黄褐色	橙褐色
8	24	SK-28	移動式竈			△ 11.3		ナデ	ナデ	密	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
9	25	SS-01	須恵器	坏蓋	※ 11.4	△ 1.2		回転ナデ	回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
10	25	SS-01	須恵器	坏身		△ 2.1	※ 6.9	ナデ	ナデ	密	良好	灰色	灰色
11	25	SS-01	須恵器	坏身		△ 0.9	※ 9.8	回転糸切り	ナデ	密	良好	灰褐色	灰褐色
12	25	SS-01	須恵器	坏身		△ 1.3	※ 9.2	ナデ	ナデ	密	良好	茶褐色	茶褐色
13	25	SS-01	須恵器	甕		△ 2.0	※ 11.0	平行叩き	ナデ	密	良好	灰色	灰色
14	26	SS-02	土師器	坏身		△ 1.2	※ 5.6	ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
15	26	SS-02	土師器	坏身		△ 1.2	※ 4.6	ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
16	26	SS-02	土師器	坏身		△ 2.0	※ 6.0	ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
17	29	SB-02	土師器	坏身		△ 1.0	※ 2.8	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	密	良好	淡褐色	淡橙色
18	45	SK-82	五輪塔	空風輪	最大幅 15.0	20.7				密			
19	46	SD-05	須恵器	壺		△ 2.7	※ 10.2	ナデ	ナデ	密	良	淡灰色	淡灰色
20	46	SD-05	土師器	坏身		△ 1.5	※ 5.8	回転糸切り	ナデ	密	良	淡灰褐色	淡灰褐色
21	46	SD-05	陶器	擂鉢	※ 30.4	△ 5.0				密	良		
22	47	SD-08	土師器	坏身	※ 12.8	△ 2.5		ナデ	ナデ	密	良	黄褐色	黄褐色
23	47	SD-08	土師器	坏身	15.4	5.2	5.8	口縁:ナデ、底部:回転糸切り	ナデ	密	良	淡黄褐色	淡黄褐色
24	47	SD-08	陶器	擂鉢	※ 25.0	△ 3.0				密	良		
25	47	SD-08	土錘		長 4.5	幅 1.4				密	良	淡灰褐色	淡灰褐色
26	48	SE-01	須恵器	坏蓋	※ 15.8	△ 1.8		回転ナデ	回転ナデ	密	良	灰色	灰色
27	48	SE-01	須恵器	坏身		△ 1.8	※ 9.8	回転糸切り	ナデ	密	良	暗灰色	暗灰色
28	48	SE-01	土師器	坏身	※ 12.8	△ 2.4		口縁:ナデ、底部:静止糸切り	ナデ	密	良	黄褐色	黄褐色
29	48	SE-01	土師器	坏身	8.6	2.0	3.8	ナデ	ナデ	密	良	黄褐色	黄褐色
30	48	SE-01	陶器	擂鉢	※ 25.0	△ 6.9				密	良好	赤褐色	赤褐色
31	48	SE-01	陶器	擂鉢		△ 4.5	※ 15.0			密			
32	49	地下式横穴	五輪塔	水輪	幅 32.3	20.7				密			
33	49	地下式横穴	五輪塔	水輪	幅 22.4	15.5				密			
34	49	地下式横穴	五輪塔	水輪	幅 43.4	35.6				密			

表8　遺構外出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	地区・層位	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面
35	57	4区 Ⅴ層	突帯文土器	甕		△ 3.0		ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
36	57	4区 Ⅱ層	突帯文土器	甕		△ 3.8		粗い擦痕が残るナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
37	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 4.9		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
38	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕	※ 21.4	△ 4.8		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
39	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕	※ 25.0	△ 5.0		ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
40	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕	※ 23.4	△ 4.0		ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
41	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 5.4		ナデ	ナデ	密	良好	灰褐色	灰褐色
42	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 3.0		ナデ	ナデ	密	良好	淡灰褐色	淡灰褐色
43	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕	※ 15.4	△ 4.0		ナデ	ナデ	密	良好	灰褐色	灰褐色
44	57	4区 Ⅱ層	突帯文土器	甕		△ 2.7		ナデ	ナデ	密	良好	灰褐色	灰褐色
45	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 3.8		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
46	57	4区 Ⅱ層	突帯文土器	甕	※ 18.0	△ 4.4		粗い擦痕が残るナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	褐色
47	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 3.5		ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
48	57	3区 Ⅱ層	突帯文土器	甕		△ 3.2		ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
49	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 5.6		ナデ	ナデ	密	良好	淡橙褐色	淡橙褐色
50	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 4.6		ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
51	57	1区 Ⅴ層	突帯文土器	甕		△ 2.8		ナデ	ナデ	密	良好	橙茶褐色	橙茶褐色
52	57	4区 Ⅱ層	突帯文土器	甕		△ 3.9		ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
53	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 3.2		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
54	57	1区 Ⅳ層	突帯文土器	甕		△ 3.2		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
55	57	4区 Ⅱ層	突帯文土器	甕		△ 4.8		ナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	暗褐色
56	57	1区 Ⅴ層	突帯文土器	甕		△ 3.1		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
57	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 2.3		ナデ	ナデ	密	良好	黒褐色	黒褐色
58	57	1区 Ⅴ層	突帯文土器	甕		△ 2.2		ナデ	ナデ	密	良好	橙茶褐色	橙茶褐色
59	57	1区 Ⅴ層	突帯文土器	甕	※ 15.4	△ 5.5		ナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	橙茶褐色
60	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕	※ 24.0	△ 3.3		粗い擦痕が残るナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	暗褐色
61	57	1区 Ⅲ層	突帯文土器	甕	※ 22.0	△ 4.8		ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
62	57	2区 Ⅱ層	突帯文土器	甕	※ 21.8	△ 6.8		粗い擦痕が残るナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	暗褐色
63	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕	※ 23.0	△ 5.1		ナデ	ナデ	密	良好	橙茶褐色	橙茶褐色
64	57	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕	※ 25.0	△ 4.9		ナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	暗褐色
65	58	1区 Ⅴ層	突帯文土器	甕		△ 3.6		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
66	58	1区 Ⅴ層	突帯文土器	甕		△ 3.4		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
67	58	4区 Ⅴ層	突帯文土器	甕	※ 21.2	△ 3.0		粗い擦痕が残るナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
68	58	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 4.9		ナデ	ナデ	密	良好	暗灰褐色	橙褐色
69	58	4区 Ⅱ層	突帯文土器	甕		△ 3.4		粗い擦痕が残るナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
70	58	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕	※ 23.4	△ 2.9		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
71	58	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 4.9		ナデ	ナデ	密	良好	灰褐色	灰褐色
72	58	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 5.4		ナデ	ナデ	密	良好	灰褐色	灰褐色
73	58	4区 Ⅱ層	突帯文土器	甕		△ 4.3		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
74	58	3区 Ⅴ層	突帯文土器	甕	※ 36.4	△ 15.9		粗い擦痕が残るナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
75	58	3区 Ⅴ層	突帯文土器	甕	※ 19.2	△ 7.9		ナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	褐色
76	58	3区 Ⅴ層	突帯文土器	甕	※ 23.2	△ 7.7		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
77	58	4区 Ⅱ層	突帯文土器	甕		△ 2.0		ナデ	ナデ	密	良好	灰褐色	灰褐色

78	58	4区 Ⅱ層	突帯文土器	甕	※ 16.4	△ 3.6		ナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	暗褐色
79	58	1区 Ⅴ層	突帯文土器	甕	※ 18.2	△ 5.0		ナデ	ナデ	密	良	淡褐色	淡褐色
80	58	4区 Ⅶ層	突帯文土器	甕		△ 5.3		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
81	58	1区 Ⅴ層	突帯文土器	甕	※ 15.8	△ 3.7		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
82	58	1区 Ⅴ層	突帯文土器			△ 4.3		ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
83	58	1区 Ⅴ層	突帯文土器			△ 4.9		ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
84	58	3区 Ⅴ層	縄文土器			△ 3.5	※19.8	ナデ	ナデ	密	良	褐色	褐色
85	58	3区 Ⅴ層	縄文土器			△ 11.2		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	淡褐色
86	58	3区 Ⅴ層	縄文土器			△ 6.0		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
87	59	1区 Ⅴ層	弥生土器	壺	※ 14.3	△ 3.0		ナデ	ナデ	密	良好	淡橙褐色	淡橙褐色
88	59	4区 Ⅶ層	弥生土器	壺	※ 19.2	△ 4.2		ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
89	59	4区 Ⅶ層	弥生土器	甕	※ 17.6	△ 5.8		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
90	59	1区 Ⅳ層	弥生土器	壺	※ 7.4	△ 3.7		ナデ、木葉文	ナデ	密	良好	褐色	褐色
91	59	1区 Ⅴ層	弥生土器			△ 5.8		ナデ、木葉文	ナデ	密	良好	淡橙褐色	淡橙褐色
92	59	1区 Ⅴ層	弥生土器			△ 5.0		ナデ、木葉文	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
93	59	4区 Ⅶ層	弥生土器	蓋		△ 5.0		ハケ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
94	59	4区 Ⅴ層	弥生土器	壺		△ 5.6		ナデ、15条の櫛描	ナデ	密	良好	淡褐色	黒褐色
95	59	3区 Ⅴ層	弥生土器	甕	※ 19.0	△ 3.7		ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
96	59	4区 Ⅶ層	弥生土器	甕	※ 20.4	△ 7.9		ナデ、5条1単位の櫛描が3段	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
97	59	3区 Ⅱ層	弥生土器	甕	※ 21.8	△ 4.2		ナデ、14条の櫛描	ナデ	密	良好	淡橙褐色	淡橙褐色
98	59	4区 Ⅶ層	弥生土器	壺	※ 24.4	△ 2.3		ナデ、口縁:3条の凹線	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
99	59	4区 表採	弥生土器	壺	※ 29.8	△ 2.7		ナデ、口縁:2条の凹線	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
100	59	4区 Ⅶ層	弥生土器	壺	※ 18.0	△ 1.5		ナデ、口縁:3条の凹線	ナデ	密	良好	褐色	褐色
101	59	4区 Ⅶ層	弥生土器	壺	※ 23.6	△ 1.7		ナデ、口縁:2条の凹線	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
102	59	4区 Ⅱ層	弥生土器	壺	※ 23.5	△ 2.1		ナデ、口縁:4条の凹線	ナデ	密	良好	褐色	褐色
103	59	3区 Ⅰ層	弥生土器	甕		△ 1.8		ナデ、口縁:3条の凹線	ナデ	密	良好	淡褐色	黒褐色
104	59	4区 Ⅱ層	弥生土器	甕	※ 17.9	△ 1.4		ナデ、口縁:3条の凹線	ナデ	密	良好	褐色	褐色
105	59	4区 表採	弥生土器	甕	※ 17.4	△ 2.4		ナデ、口縁:3条の凹線	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
106	59	4区 表採	弥生土器	甕	※ 23.4	△ 2.9		ナデ、口縁:2条の凹線	ナデ	密	良好	淡褐色	黒褐色
107	59	3区 Ⅴ層	弥生土器	甕	※ 17.9	△ 3.1		ナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	灰褐色
108	60	4区 Ⅱ層	弥生土器	甕		△ 4.2		ナデ、指頭圧痕貼付突帯	ナデ	密	良好	褐色	褐色
109	60	4区 Ⅱ層	弥生土器	甕		△ 3.9		ナデ、指頭圧痕貼付突帯	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
110	60	4区 表採	弥生土器	甕		△ 4.6		ナデ、指頭圧痕貼付突帯	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
111	60	3区 Ⅴ層	弥生土器	高 坏		△ 10.2		ハケ、4条の貼付突帯	ナデ	密	良好	褐色	褐色
112	60	4区 Ⅱ層	弥生土器	高 坏		△ 4.1		ナデ、3条の貼付突帯	ナデ	密	良好	褐色	褐色
113	60	1区 Ⅴ層	弥生土器	甕	※ 11.0	△ 2.9		ナデ、口縁:3条の擬凹線	ナデ	密	良好	褐色	褐色
114	60	2区 Ⅰ層	弥生土器	甕	※ 14.5	△ 3.6		ナデ、口縁:5条の擬凹線	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	淡橙褐色	淡橙褐色
115	60	1区 Ⅲ層	弥生土器	甕	※ 11.5	△ 3.0		ナデ、口縁:2条の擬凹線	ナデ	密	良好	暗褐色	淡橙褐色
116	60	2区 Ⅱ層	弥生土器	甕	※ 20.5	△ 4.8		ナデ、口縁:5条の擬凹線	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	淡橙褐色	淡橙褐色
117	60	4区 Ⅶ層	弥生土器	底 部		△ 2.5	※ 5.8	ヘラミガキ	ナデ	密	良	茶褐色	黒褐色
118	60	3区 Ⅱ層	弥生土器	底 部		△ 3.2	※ 5.8	ヘラミガキ	ナデ	密	良	淡褐色	淡褐色
119	60	3区 Ⅴ層	弥生土器	底 部		△ 4.0	※ 8.8	ヘラミガキ	ナデ	密	良	淡灰褐色	淡灰褐色
120	60	4区 表採	弥生土器	底 部		△ 6.3	8.2	ヘラミガキ	ナデ	密	良	淡黄褐色	淡黄褐色
121	60	4区 表採	弥生土器	底 部		△ 4.9	※ 10.8	ヘラミガキ	ナデ	密	良	褐色	黒褐色
122	60	3区 Ⅱ層	弥生土器	底 部		△ 8.9	※ 9.6	ヘラミガキ	ナデ	密	良	淡黄褐色	淡黄褐色
123	60	1区 Ⅴ層	弥生土器	底 部		△ 4.0	※ 8.4	ハケ	ナデ	密	良	黄褐色	黄褐色
124	60	4区 Ⅱ層	弥生土器	底 部		△ 8.8	10.6	ハケ	ナデ	密	良	淡黄褐色	淡黄褐色
125	60	3区 Ⅴ層	弥生土器	底 部		△ 12.5	※ 7.6	ハケ	ナデ	密	良	淡褐色	淡褐色
126	60	4区 Ⅶ層	弥生土器	底 部		△ 3.7	※ 5.0	ナデ	ナデ	密	良	暗褐色	暗褐色
127	60	4区 Ⅱ層	弥生土器	底 部		△ 3.8	5.6	ナデ	ナデ	密	良	黄褐色	黄褐色
128	60	4区 Ⅶ層	弥生土器	底 部		△ 4.3	※ 9.0	ナデ	ナデ	密	良	黄褐色	黄褐色
129	60	4区 Ⅶ層	弥生土器	底 部		△ 7.4	※ 6.8	ナデ	ナデ	密	良	淡黄褐色	黒色
130	60	3区 Ⅴ層	弥生土器	底 部		△ 6.3	6.6	ナデ	ナデ	密	良	褐色	褐色
131	60	4区 Ⅶ層	弥生土器	底 部		△ 6.5	6.8	ナデ	ナデ	密	良	黄褐色	黄褐色
132	61	4区 Ⅱ層	土師器	壺	※ 14.7	△ 8.8		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色
133	61	3区 Ⅴ層	土師器	甕	※ 20.4	△ 4.7		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良	褐色	褐色
134	61	4区 表採	土師器	甕	※ 15.0	△ 4.9		ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
135	61	4区 Ⅶ層	土師器	甕	※ 15.0	△ 3.5		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
136	61	4区 Ⅶ層	土師器	甕	※ 14.6	△ 3.6		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
137	61	4区 Ⅶ層	土師器	甕	※ 16.3	△ 4.6		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	褐色	褐色
138	61	1区 Ⅲ層	土師器	甕	※ 13.2	△ 3.8		ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
139	61	1区 Ⅴ層	土師器	甕	※ 18.5	△ 5.0		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色
140	61	1区 Ⅴ層	土師器	甕	※ 15.4	△ 3.4		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
141	61	4区 Ⅶ層	土師器	甕	※ 12.0	△ 3.4		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
142	61	4区 表採	土師器	甕	※ 15.4	△ 4.3		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色
143	61	3区 Ⅱ層	土師器	甕	※ 15.4	△ 5.6		ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
144	61	4区 表採	土師器	甕	※ 15.6	△ 3.2		ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
145	61	4区 Ⅶ層	土師器	甕	※ 13.0	△ 3.1		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
146	61	4区 Ⅴ層	土師器	甕	※ 15.4	△ 3.2		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	橙褐色
147	61	4区 表採	土師器	甕	※ 18.2	△ 5.9		ナデ	ナデ	密	良好	淡灰褐色	淡灰褐色
148	61	4区 表採	土師器	高 坏	※ 19.1	△ 4.0		ハケ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
149	61	4区 Ⅶ層	土師器	器 台		△ 6.3	※ 18.6	ナデ	ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色
150	61	4区 Ⅴ層	土師器	低脚坏		△ 3.2	4.5	ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
151	62	4区 Ⅶ層	土師器	甕	17.4	△ 8.4		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	淡灰褐色	淡灰褐色
152	62	4区 Ⅱ層	土師器	甕	17.2	△ 10.0		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	褐色	褐色
153	62	4区 表採	土師器	甕	※ 16.0	△ 14.6		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	黒褐色	黒色
154	62	4区 Ⅱ層	土師器	甕	16.6	△ 14.3		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	褐色	褐色
155	62	4区 Ⅶ層	土師器	甕	18.2	△ 5.3		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
156	62	4区 表採	土師器	甕	※ 17.4	△ 5.2		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色
157	62	4区 表採	土師器	甕	※ 18.0	△ 4.0		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	褐色	褐色
158	62	4区 Ⅶ層	土師器	甕	※ 17.0	△ 17.8		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色
159	62	4区 表採	土師器	甕	※ 18.0	△ 5.1		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色
160	62	4区 Ⅶ層	土師器	甕	19.6	△ 13.7		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	褐色	褐色
161	62	4区 Ⅱ層	土師器	甕	※ 17.6	△ 10.1		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	淡灰褐色	淡灰褐色
162	63	4区 Ⅱ層	土師器	甕	※ 18.5	△ 13.8		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色

163	63	4区 表採	土師器	甕	※ 15.4	△ 6.1		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色
164	63	4区 Ⅷ層	土師器	甕	※ 18.6	△ 5.4		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	淡灰色	淡灰色
165	63	4区 Ⅷ層	土師器	甕	15.4	△ 17.1		ナデ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	淡灰褐色	淡灰褐色
166	63	4区 Ⅱ層	土師器	甕	15.4	△ 15.2		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	淡灰色	黒灰色
167	63	1区 Ⅲ層	土師器	甕	※ 20.0	△ 7.9		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ハケ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	橙褐色
168	63	1区 Ⅲ層	土師器	甕	※ 25.6	△ 6.0		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ハケ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	褐色	褐色
169	63	1区 Ⅲ層	土師器	甕	※ 15.3	△ 7.0		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	橙褐色
170	63	1区 Ⅲ層	土師器	甕	※ 20.2	△ 9.9		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色
171	63	1区 Ⅲ層	土師器	甕	※ 16.6	△ 7.9		ナデ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	橙褐色
172	63	1区 Ⅳ層	土師器	甕	※ 26.3	△ 6.8		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色
173	63	3区 Ⅱ層	土師器	甕	※ 19.4	△ 7.1		ナデ	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	橙褐色
174	63	1区 Ⅲ層	土師器	甕	※ 24.6	△ 7.5		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	橙褐色
175	63	1区 Ⅴ層	土師器	甕	※ 30.6	△ 13.5		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	赤褐色	赤褐色
176	64	1区 Ⅴ層	土師器	甕	※ 18.4	△ 6.0		ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
177	64	1区 Ⅲ層	土師器	甕	22.4	△ 8.8		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ハケ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	暗褐色
178	64	1区 Ⅳ層	土師器	甕	※ 12.6	△ 6.1		摩滅のため調整不明	口縁:ナデ、頸部:ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	橙褐色
179	64	1区 Ⅲ層	土師器	甕	14.0	△ 13.7		口縁:ナデ、胴部:ハケ	胴部下半:ヘラケズリ、その他:ナデ	密	良好	淡橙褐色	淡橙褐色
180	64	1区 Ⅲ層	土師器	甕	※ 13.6	15.0		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	暗褐色	暗褐色
181	64	1区 Ⅲ層	土師器	甕	※ 19.4	△ 9.7		摩滅のため調整不明	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	暗褐色
182	64	1区 Ⅴ層	土師器	甕	※ 17.6	△ 12.4		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	橙褐色
183	64	1区 Ⅲ層	土師器	甕	※ 28.8	△ 6.6		口縁:ナデ、胴部:ハケ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	褐色	褐色
184	64	2区 Ⅱ層	土師器	甕	※ 17.4	△ 11.7		摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	密	良好	淡褐色	淡褐色
185	64	1区 Ⅲ層	土師器	蓋		△ 2.9		ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
186	64	4区 表採	土師器	高 坏		△ 5.5		ナデ、面取り	ナデ	密	良	淡黄褐色	暗褐色
187	65	3区 Ⅱ層	土師器	坏 身	※ 20.4	4.4	※ 15.8	ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
188	65	4区 表採	土師器	坏 身		△ 4.2	※ 10.4	ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
189	65	4区 表採	土師器	坏 身		△ 3.6	※ 8.9	ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
190	65	3区 Ⅳ層	土師器	坏 身	※ 12.2	3.6	※ 6.4	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
191	65	2区 Ⅰ層	土師器	坏 身	12.0	4.0	6.8	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
192	65	2区 Ⅳ層	土師器	坏 身	14.0	4.4	6.2	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
193	65	2区 Ⅳ層	土師器	坏 身	※ 16.0	5.7	※ 3.4	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
194	65	2区 Ⅳ層	土師器	坏 身		△ 3.0	※ 6.6	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
195	65	4区 表採	土師器	皿	※ 8.0	2.1	5.0	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡橙褐色	淡橙褐色
196	65	2区 Ⅰ層	土師器	皿	7.6	1.5	4.6	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
197	65	2区 Ⅳ層	土師器	皿	※ 7.9	△ 1.8		底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
198	65	2区 Ⅰ層	土師器	皿	※ 7.0	1.8	3.4	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
199	65	2区 Ⅰ層	土師器	皿	※ 7.4	1.6	3.6	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
200	65	2区 Ⅰ層	土師器	皿	※ 7.1	1.6	3.8	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
201	65	2区 Ⅰ層	土師器	皿	7.6	1.9	3.7	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
202	65	2区 Ⅰ層	土師器	皿	※ 7.2	1.8	3.4	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
203	65	2区 Ⅰ層	土師器	皿	※ 8.1	1.9	4.6	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡褐色	淡褐色
204	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	皿	※ 19.0	4.0	※ 14.2	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
205	66	1区 Ⅴ層	赤彩土器	坏 身	※ 15.4	15.4	※ 11.7	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
206	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身	※ 19.4	4.4	※ 15.0	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	赤褐色	赤褐色
207	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身	※ 14.6	3.0	※ 10.3	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
208	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身	※ 15.7	2.7	※ 10.6	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
209	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身	※ 16.2	2.7	※ 11.8	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
210	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身	※ 18.2	3.1	※ 9.2	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
211	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身	※ 17.8	2.9	※ 13.2	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
212	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身	※ 19.4	2.8	※ 11.4	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
213	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身	※ 14.8	3.0	※ 10.3	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
214	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身	※ 14.8	3.2	※ 9.2	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
215	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身	※ 16.9	2.5	※ 12.6	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
216	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	皿	※ 16.4	1.8	※ 12.8	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
217	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	皿	※ 17.0	1.9	※ 13.9	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
218	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	皿	※ 20.5	2.6	※ 11.0	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
219	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	皿	※ 15.6	2.0	※ 11.0	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
220	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	皿	※ 15.6	2.0	※ 11.6	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
221	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	皿	※ 20.4	1.5	※ 18.2	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
222	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	皿	※ 19.4	2.0	※ 14.1	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
223	66	3区 Ⅱ層	赤彩土器	皿	※ 17.6	1.9	※ 14.0	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
224	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	皿	※ 18.5	2.0	※ 14.0	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
225	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身		△ 2.0	※ 12.0	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	赤褐色	赤褐色
226	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	坏 身		△ 1.8	※ 13.4	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	赤褐色	赤褐色
227	66	1区 Ⅴ層	赤彩土器	坏 身		△ 2.4	※ 12.8	ナデ	ナデ	密	良好	赤褐色	赤褐色
228	66	4区 表採	赤彩土器	坏 身		△ 1.8		ナデ	ナデ	密	良好	赤褐色	赤褐色
229	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	鉢	※ 19.2	6.7	※ 11.2	底部:ヘラケズリ、その他:ナデ	ナデ	密	良	赤褐色	赤褐色
230	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	鉢	21.6	△ 8.1		ナデ	ナデ	密	良	赤褐色	赤褐色
231	66	1区 Ⅲ層	赤彩土器	鉢	17.2	5.3	13.8	ナデ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
232	66	4区 Ⅱ層	黒色土器	皿	※ 16.8	2.3	※ 7.1	ヘラミガキ	ナデ	密	良好	黒色	暗灰色
233	66	4区 Ⅷ層	黒色土器	皿		△ 1.4	※ 6.0	ナデ	ナデ	密	良好	黒色	橙黄灰色
234	66	3区 Ⅴ層	緑釉陶器	皿		△ 1.6	4.4	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	淡緑灰色	淡褐色
235	66	3区 Ⅱ層	緑釉陶器	皿		△ 1.3	5.4	底部:回転糸切り、その他:ナデ	ナデ	密	良好	緑灰色	淡灰褐色
236	67	4区 表採	須恵器	坏 蓋	13.6	3.3		天井部:ヘラケズリ、その他:回転ナデ	天井部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
237	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋	※ 14.6	4.2		回転ナデ	天井部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
238	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋	※ 12.2	4.1		回転ナデ	天井部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
239	67	3区 Ⅴ層	須恵器	坏 蓋	12.1	3.9		回転ナデ	天井部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
240	67	3区 Ⅴ層	須恵器	坏 蓋	※ 13.0	4.5		回転ナデ	天井部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
241	67	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 蓋	※ 12.7	4.4		回転ナデ	天井部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	暗灰色	暗灰色
242	67	2区 Ⅱ層	須恵器	坏 蓋	※ 13.3	△ 4.2		回転ナデ	天井部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
243	67	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 蓋	12.7	4.0		回転ナデ	天井部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
244	67	4区 Ⅷ層	須恵器	坏 身	※ 11.4	△ 2.5		回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
245	67	4区 Ⅷ層	須恵器	坏 身	※ 13.4	△ 2.6		回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
246	67	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身	※ 11.0	4.0		回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰褐色	淡灰褐色
247	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	※ 11.2	4.3		回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色

248	67	4区 Ⅷ層	須恵器	坏 身	12.0	3.6			底部:ヘラケズリ、その他:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
249	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	※ 11.2	△ 3.9			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
250	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	11.0	3.7			回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
251	67	2区 Ⅱ層	須恵器	坏 身	※ 11.4	△ 3.8			回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
252	67	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 蓋	※ 15.5	△ 2.8			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
253	67	1区 Ⅰ層	須恵器	坏 蓋	※ 16.0	△ 2.1			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
254	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋	※ 17.4	△ 2.2			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
255	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋	15.5	3.7			回転ナデ	天井部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
256	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋	13.7	3.1			ヘラケズリ後回転ナデ	天井部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰褐色	灰褐色
257	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋	※ 15.0	3.1			回転ナデ	天井部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰褐色	灰褐色
258	67	2区 Ⅰ層	須恵器	坏 蓋	※ 15.6	△ 1.9			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
259	67	2区 Ⅰ層	須恵器	坏 蓋	15.6	△ 2.4			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
260	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋	※ 14.3	△ 1.9			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
261	67	1区 Ⅳ層	須恵器	坏 蓋	※ 12.7	△ 3.1			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
262	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋	※ 18.4	△ 2.0			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	暗灰色	青灰色
263	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋	※ 14.1	△ 2.0			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
264	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋		△ 5.1			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
265	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋		△ 1.4			回転ナデ	ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
266	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋					ヘラケズリ	ナデ	密	良好	灰色	灰色
267	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋		△ 2.1			ヘラケズリ	ナデ	密	良好	灰色	灰色
268	67	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 蓋		△ 1.6			回転ナデ	ナデ	密	良好	灰色	灰色
269	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋		2.7			回転ナデ	ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
270	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋		△ 1.7			底部:ヘラケズリ、その他:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
271	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋		△ 2.6			回転ナデ	ナデ	密	良好	灰色	灰色
272	67	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 蓋		△ 2.3			回転ナデ	ナデ	密	良好	灰色	灰色
273	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	※ 12.2	3.8	※ 9.0		底部:ヘラ切り後ナデ、その他:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	暗灰色	暗灰色
274	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	※ 14.0	3.5	※ 9.9		底部:ヘラ切り後ナデ、その他:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
275	68	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身	※ 11.3	4.2	※ 7.6		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
276	68	3区 Ⅱ層	須恵器	坏 身	12.2	4.7	7.0		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
277	68	3区 Ⅴ層	須恵器	坏 身	※ 12.1	4.5	※ 8.0		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
278	68	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身	※ 12.2	3.9	※ 9.0		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	暗灰色	暗灰色
279	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	※ 11.6	4.2	※ 6.2		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
280	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	12.8	4.8	7.2		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
281	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	12.8	4.4	7.6		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
282	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	※ 11.8	4.3	※ 6.8		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	暗灰色	暗灰色
283	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	※ 12.9	4.4	※ 5.9		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
284	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	※ 13.8	4.0	※ 9.0		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	暗灰色	暗灰色
285	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	13.6	4.5	7.9		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
286	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	※ 14.8	5.1	※ 9.0		底部:静糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	暗灰色	暗灰色
287	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	13.6	5.5	7.2		底部:静糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	暗灰色	暗灰色
288	68	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	13.8	4.3	8.8		底部:静糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
289	69	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身		△ 1.9	※ 7.6		底部:ヘラ切り後ナデ、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	暗灰色	暗灰色
290	69	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身		△ 3.3	※ 7.2		底部:ヘラ切り後ナデ、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
291	69	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身		△ 2.0	※ 7.2		底部:ヘラ切り後ナデ、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
292	69	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身		△ 2.2	8.2		底部:ヘラ切り後ナデ、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
293	69	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身		△ 2.8	※ 8.1		底部:ヘラ切り後ナデ、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	暗灰色	暗灰色
294	69	1区 Ⅳ層	須恵器	坏 身	12.4	4.8	6.8		底部:ヘラ切り後ナデ、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
295	69	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身	※ 14.0	4.2	※ 7.8		底部:ヘラ切り後ナデ、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰褐色	淡灰褐色
296	69	3区 Ⅰ層	須恵器	坏 身	※ 19.3	3.8	※ 14.6		底部:ヘラ切り後ナデ、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
297	69	3区 Ⅴ層	須恵器	坏 身	※ 12.6	4.0	※ 8.6		底部:ヘラ切り後ナデ、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
298	69	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身		△ 2.8	※ 9.4		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
299	69	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身		△ 2.5	※ 8.0		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	暗茶灰色	茶褐色
300	69	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身		△ 1.9	※ 9.8		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
301	69	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身		△ 2.0	※ 8.6		底部:静糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
302	69	4区 表採	須恵器	坏 身		△ 3.1	※ 8.8		底部:静糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
303	69	1区 Ⅲ層	須恵器	坏 身		△ 3.9	※ 9.6		底部:静糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
304	69	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身	12.5	4.1	7.6		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
305	69	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身	11.6	4.3	7.2		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
306	69	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身	12.5	4.2	6.6		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
307	69	1区 Ⅴ層	須恵器	坏 身	14.4	6.7	7.2		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
308	70	3区 Ⅴ層	須恵器	皿	※ 13.0	2.8	※ 8.3		底部:回転糸切り後ナデ、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	青灰色	暗灰茶色
309	70	3区 Ⅱ層	須恵器	皿	※ 14.0	2.4	※ 10.8		底部:回転糸切り後ナデ、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	暗赤茶褐色	灰褐色
310	70	3区 Ⅰ層	須恵器	皿	※ 14.0	2.4	※ 9.6		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰色	淡灰色
311	70	3区 Ⅴ層	須恵器	皿	※ 13.2	2.9	※ 9.0		底部:回転糸切り、その他:回転ナデ	底部:ナデ、その他:回転ナデ	密	良好	淡灰褐色	淡灰褐色
312	70	1区 Ⅴ層	須恵器	高 坏	13.2	△ 6.2			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
313	70	1区 Ⅴ層	須恵器	高 坏		△ 4.5	9.7		回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
314	70	1区 Ⅱ層	須恵器	高 坏		△ 5.1	※ 10.4		回転ナデ	回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
315	70	3区 Ⅴ層	須恵器	高 坏		△ 5.3	6.9		回転ナデ	回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
316	70	1区 Ⅴ層	須恵器		10.8	△ 6.0			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	青灰色	青灰色
317	70	1区 Ⅴ層	須恵器			△ 10.1	10.2		胴部下半:ヘラケズリ、その他:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
318	70	4区 Ⅱ層	須恵器	硯	残存長 6.6	2.5	残存幅 8.5		ナデ	ナデ	密	良好	灰色	灰色
319	70	1区 Ⅰ層	須恵器	壺	11.8	△ 13.1			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	暗灰褐色	暗灰褐色
320	70	3区 Ⅴ層	須恵器	壺	10.8	△ 4.4			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	黒灰色	黒灰色
321	70	2区 Ⅳ層	須恵器	壺		△ 7.0			胴部:ヘラケズリ、肩部:回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
322	70	1区 Ⅲ層	須恵器	壺		△ 6.8	※ 7.6		回転ナデ	回転ナデ	密	良好	暗灰色	暗灰色
323	70	1区 Ⅴ層	須恵器	壺		△ 8.5			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰色	灰色
324	70	3区 Ⅴ層	須恵器	甕	※ 17.6	△ 5.6			口縁:回転ナデ、胴部:平行叩き	口縁:回転ナデ、胴部:同心円当て具痕	密	良好	灰色	灰色
325	70	1区 Ⅴ層	須恵器	甕	※ 11.0	△ 5.1			口縁:回転ナデ、胴部:平行叩き	口縁:回転ナデ、胴部:同心円当て具痕	密	良好	灰色	灰色
326	70	1区 Ⅴ層	須恵器	甕	※ 16.4	△ 4.7			口縁:回転ナデ、胴部:平行叩き	口縁:回転ナデ、胴部:同心円当て具痕	密	良好	灰色	暗灰色
327	70	1区 Ⅲ層	須恵器	甕	※ 12.5	△ 3.1			口縁:回転ナデ、胴部:平行叩き	口縁:回転ナデ、胴部:同心円当て具痕	密	良好	暗灰色	灰色
328	70	1区 Ⅰ層	須恵器	甕	※ 11.0	△ 3.7			口縁:回転ナデ、胴部:平行叩き	口縁:回転ナデ、胴部:同心円当て具痕	密	良好	淡灰色	淡灰色
329	70	2区 Ⅴ層	須恵器	甕	※ 35.6	△ 4.8			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	暗灰色	暗灰色
330	70	1区 Ⅰ層	須恵器	甕	※ 32.6	△ 4.9			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	茶褐色	茶褐色
331	70	4区 Ⅱ層	須恵器	甕		△ 5.7			平行叩き	車輪文当て具痕	密	良好	灰色	灰色
332	70	4区 Ⅱ層	須恵器	甕		△ 5.4			平行叩き	車輪文当て具痕	密	良好	灰色	灰色

333	71	3区	Ⅴ層	瓦		残存長18.5		11.9	厚さ 7.9	縄目叩き後ナデ	布目痕	密	良好	淡褐色	淡褐色
334	71	1区	Ⅲ層	瓦		残存長12.1	残存幅	9.2	厚さ 1.7	ナデ	布目痕	密	良好	淡灰色	淡灰色
335	71	1区	Ⅴ層	瓦		残存長 8.3	残存幅	12.3	厚さ 1.9	格子目叩き	布目痕	密	良好	淡灰褐色	淡灰褐色
336	71	4区	Ⅱ層	瓦		残存長11.5	残存幅	10.3	厚さ 2.7	格子目叩き	布目痕	密	良好	淡褐色	淡褐色
337	71	1区	Ⅰ層	瓦		残存長 9.7	残存幅	9.8	厚さ 2.7	格子目叩き	布目痕	密	良好	灰褐色	灰褐色
338	71	4区	Ⅱ層	瓦		残存長26.8		12.3	厚さ 6.9	縄目叩き	布目痕	密	良好	淡灰色	淡灰色
339	72	1区	Ⅲ層	土製支脚			△	6.9		ナデ		密	良	淡黄褐色	淡黄褐色
340	72	1区	Ⅴ層	土製支脚			△	6.3		ナデ		密	良	褐色	褐色
341	72	1区	Ⅴ層	土製支脚			△	12.6		ハケ		密	良	褐色	褐色
342	72	2区	Ⅱ層	土製支脚			△	8.7		ナデ		密	良	黄褐色	黄褐色
343	72	1区	Ⅲ層	土製支脚			△	7.7	※ 12.2	ナデ、指押さえ	ナデ	密	良	橙黄灰色	橙黄灰色
344	72	1区	Ⅲ層	土製支脚			△	6.6	※ 9.0	ナデ	ナデ	密	良	橙黄灰色	橙黄灰色
345	72	1区	Ⅲ層	土製支脚			△	11.8	※ 12.3	ハケ調整後ナデ	ヘラケズリ	密	良	橙黄灰色	橙黄灰色
346	72	1区	Ⅲ層	土製支脚			△	4.7	※ 14.0	ナデ	ヘラケズリ	密	良	橙灰褐色	橙灰褐色
347	72	1区	Ⅲ層	土製支脚			△	6.0	※ 11.0	ナデ	ナデ	密	良	淡黄灰色	淡黄灰色
348	72	1区	Ⅳ層	土製支脚			△	13.2	※ 12.0	ナデ	ナデ	密	良	淡黄灰色	淡黄灰色
349	72	1区	Ⅲ層	甑			△	8.1		ハケ	ヘラケズリ	密	良好	淡褐色	淡褐色
350	72	1区	Ⅴ層	甑			△	12.7	※ 11.8	ハケ	ヘラケズリ	密	良好	褐色	褐色
351	72	2区	Ⅲ層	甑			△	14.2		摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	密	良好	褐色	褐色
352	72	1区	Ⅲ層	甑			△	6.3		ハケ	ナデ	密	良好	赤褐色	赤褐色
353	73	1区	Ⅴ層	移動式竈		※25.5	△	21.1		ナデ	口縁:ナデ、胴部:ヘラケズリ	密	良好	暗褐色	暗褐色
354	73	3区	Ⅱ層	移動式竈			△	5.1		ヘラケズリ	ナデ	密	良好	橙褐色	橙褐色
355	73	1区	Ⅲ層	移動式竈			△	5.8	残存幅 12.4	ナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	暗褐色
356	73	2区	Ⅱ層	移動式竈			△	13.3	残存幅 18.1	ナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	暗褐色
357	73	1区	Ⅲ層	移動式竈			△	9.5	残存幅 16.5	ハケ、ナデ	ナデ	密	良好	暗褐色	暗褐色
358	73	1区	Ⅴ層	移動式竈			△	12.9		ハケ	ヘラケズリ	密	良好	褐色	褐色
359	73	1区	Ⅲ層	移動式竈			△	17.9	残存幅 11.8	ハケ	ハケ	密	良好	暗褐色	暗褐色
360	74	1区	Ⅲ層	移動式竈			△	9.1		ハケ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
361	74	3区	Ⅱ層	移動式竈			△	8.5		ナデ	ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	橙褐色
362	74	2区	Ⅰ層	移動式竈			△	12.2		ハケ	ヘラケズリ	密	良好	褐色	橙褐色
363	74	2区	Ⅴ層	移動式竈			△	13.5		ハケ	ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	橙褐色
364	74	3区	Ⅴ層	移動式竈			△	8.6		ハケ	ヘラケズリ	密	良好	橙褐色	橙褐色
365	74	2区	Ⅴ層	移動式竈			△	14.7		ハケ	ヘラケズリ	密	良好	暗褐色	暗褐色
366	74	2区	Ⅴ層	移動式竈			△	16.7		ハケ、ナデ	ヘラケズリ	密	良好	褐色	褐色
367	75	1区	Ⅴ層	製塩土器		※ 11.0	△	3.0		指押さえ	指押さえ	密	良	淡茶褐色	淡茶褐色
368	75	1区	Ⅲ層	製塩土器		※ 10.0	△	6.3		指押さえ	指押さえ	密	良	橙茶褐色	黄茶褐色
369	75	4区	表採	製塩土器		※ 10.4	△	3.3		指押さえ	指押さえ	密	良	橙茶褐色	黄茶褐色
370	75	1区	Ⅲ層	製塩土器			△	2.5		指押さえ	布目痕	密	良	淡黄褐色	淡黄褐色
371	75	3区	Ⅱ層	製塩土器			△	4.4		指押さえ	布目痕	密	良	暗灰褐色	赤茶褐色
372	75	2区	Ⅱ層	ミニチュア土製品	椀 形	4.8		4.6	2.0	指押さえ	指押さえ	密	良	橙茶褐色	橙茶褐色
373	75	1区	Ⅲ層	ミニチュア土製品	椀 形	4.9		3.4		指押さえ	指押さえ	密	良	橙茶褐色	橙茶褐色
374	75	1区	Ⅴ層	ミニチュア土製品	支脚形		△	2.3	3.0	ナデ	ナデ	密	良	淡橙褐色	淡橙褐色
375	75	1区	Ⅲ層	土馬		残存長15.3	△	4.5	幅 5.5	ナデ	ナデ	密	良好	淡赤褐色	淡褐色
376	75	1区	Ⅰ層	土馬		残存長 6.7	△	3.6	幅 4.7	ナデ	ナデ	密	良好	淡橙褐色	淡橙褐色
377	75	1区	Ⅱ層	土馬			△	5.6		ナデ	ナデ	密	良好	褐色	褐色
378	75	3区	Ⅴ層	土錘		長 5.2		2.3				密	良	暗褐色	暗褐色
379	75	1区	Ⅰ層	土錘		長 5.3		2.0				密	良	淡灰色	淡灰色
380	75	2区	Ⅱ層	土錘		残存長 4.0	△	1.6				密	良	淡灰色	淡灰色
381	75	3区	Ⅱ層	土錘		残存長 4.5		1.5				密	良	暗灰色	暗灰色
382	75	3区	Ⅱ層	土錘		長 5.9		1.7				密	良	暗灰色	暗灰色
383	75	1区	Ⅴ層	陶器	擂 鉢	※ 26.6	△	7.5	※ 26.5						
384	75	1区	Ⅰ層	陶器	擂 鉢	※ 25.7	△	10.8	※ 11.0						
385	76	3区	Ⅱ層	陶器	皿		△	2.9	3.4						
386	76	3区	Ⅰ層	陶器	碗		△	2.1	4.9						
387	76	1区	Ⅲ層	陶器	灯明皿	8.2		1.8	3.2		回転糸切り				
388	76	4区	Ⅱ層	陶器	蓋	6.8		2.2	3.5						
389	76	3区	Ⅱ層	陶器	鉢	20.8	△	4.6							
390	76	3区	Ⅱ層	陶器	鍋	21.2		10.9	8.4						
391	76	1区	Ⅲ層	磁器	瓶		△	5.1	4.8						
392	76	4区	Ⅱ層	磁器	皿	11.6		3.5	4.3						
393	76	2区	Ⅱ層	磁器	皿	11.8	△	2.7							
394	76	4区	Ⅱ層	漆器	椀	16.2		5.3	7.5					黒色	黒色
395	76	3区	Ⅱ層	煙管	雁 首	長 4.4	幅	1.1							

表9 石器一覧表(打製土掘具と磨製石斧を除く) △:残存値

遺物番号	挿図番号	種 類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材
396	76	石 鏃	1.5	0.2	1.3	0.3	黒曜石
397	76	石 鏃	1.6	0.2	1.5	0.4	黒曜石
398	76	石 鏃	2.7	0.4	1.6	1.2	無斑晶安山岩
399	76	石 鏃	2.2	2.8	1.2	1.0	無斑晶安山岩
400	76	尖頭器	3.3	0.5	1.5	2.2	黒曜石
401	76	勾 玉	△ 2.4	1.3	1.1	△ 5.3	安山岩
402	76	紡錘車	径 4.4～5.0		2.1	68.8	安山岩

第４章　理化学分析

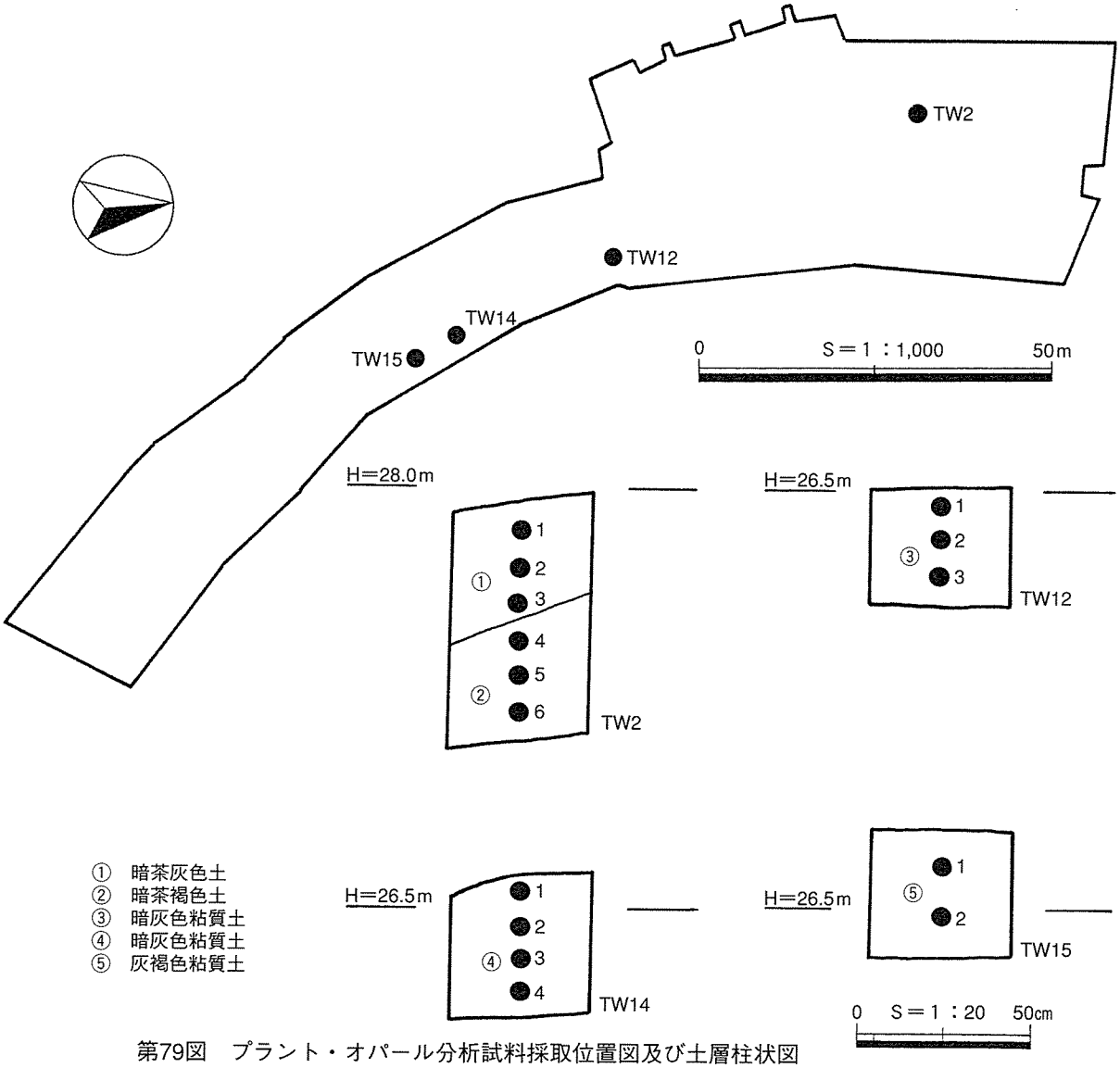
第１節　諏訪南山崎遺跡におけるプラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

諏訪南山崎遺跡の発掘調査では、稲籾圧痕の認められる縄文時代晩期末に比定される土器が検出された。そこで、縄文時代の稲作の可能性を検討する目的で、プラント・オパール分析を行うことになった。



第79図　プラント・オパール分析試料採取位置図及び土層柱状図

2．試　　料

調査地点は、断割トレンチ２（ＴＷ２）、同12（ＴＷ12）、同14（ＴＷ14）、同15（ＴＷ15）の４地点である。

分析試料は、ＴＷ２では上位より暗茶灰色土で３点（試料１，２，３）、暗茶褐色土で３点（試料４，５，６）、ＴＷ12では暗灰色粘質土で３点（試料１，２，３）、ＴＷ14では暗灰色粘質土で４点（試料１，２，３，４）、ＴＷ15では灰褐色粘質土で２点（試料１，２）の計15点である。

3．分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5）沈底法による20μm以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節型は0.30である（杉山，2000）。

4．結果および考察

分析試料から検出されたプラント・オパールは、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表10、第80図～第83図に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を図版55に示す。

ＴＷ２の暗茶灰色土と暗茶褐色土で各３点、ＴＷ12の暗灰色粘質土で３点、ＴＷ14の暗灰色粘質土で４点、ＴＷ15の灰褐色粘質土で２点の計15点について分析を行ったが、イネのプラント・オパールはいずれの試料からも検出されなかった。したがって、今回の調査区において稲作が行われていた可能性を認めることはできない。

いずれの層準もクマザサ属型が卓越し、続いてススキ属型がやや多い。こうしたことから、調査地はクマザサ属が繁茂し、部分的にススキ等も生育する乾いた環境であったと思われる。なお、ヨシ属も高い密度ではないが認められるため、近傍にはヨシの生育する湿地が存在していたと推定される。

5．まとめ

諏訪南山崎遺跡の断割トレンチ２、12、14、15の４地点においてプラント・オパール分析を行い稲作の可能性を検討した。その結果、いずれの試料からもイネのプラント・オパールは検出されず、当該調査区で稲作が行われていた痕跡は認められなかった。各地点ともクマザサ属型が繁茂する乾いた環境が推定された。

文　献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）ープラント・オパール分析による水田址の探査ー．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表10　諏訪南山崎遺跡のプラント・オパール分析結果

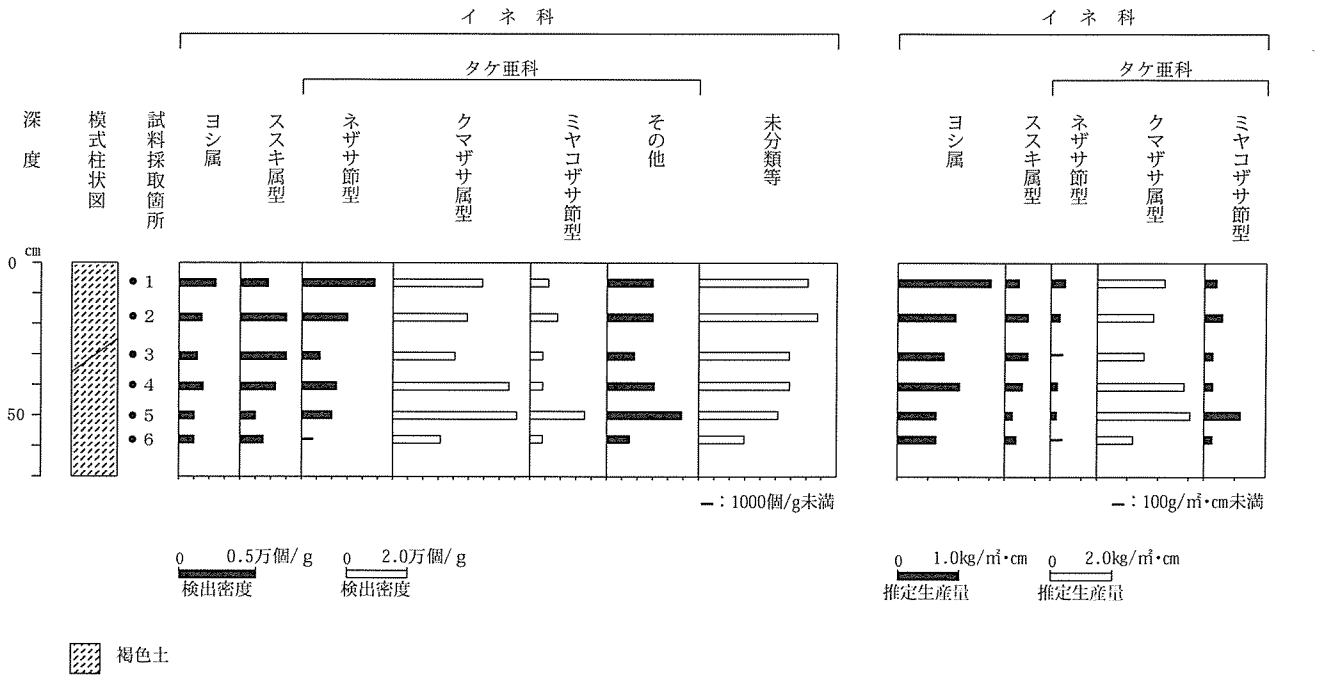
検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼試料		TW2 1	TW2 2	TW2 3	TW2 4	TW2 5	TW2 6	TW12 1	TW12 2	TW12 3	TW14 1	TW14 2	TW14 3	TW14 4	TW15 1	TW15 2
イネ科	Gramineae (Grasses)															
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	24	15	12	16	10	10			6		23			15	
ススキ属型	*Miscanthus* type	18	30	30	23	10	15	6	6	6	37	8	24	38	37	31
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)															
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	48	30	12	23	20	5	12	12	12	74	15	12	8	147	31
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	294	245	204	380	406	157	161	104	180	169	189	120	236	191	118
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	60	89	42	47	178	41	31	18	37	44	15	48	23	22	62
その他	Others	30	30	18	31	49	15	19	6	12	15	15	12	15	22	31
未分類等	Unknown	354	386	294	295	257	147	161	116	149	287	272	126	206	287	192
プラント・オパール総数		828	825	612	815	930	390	390	262	402	626	537	342	526	721	465

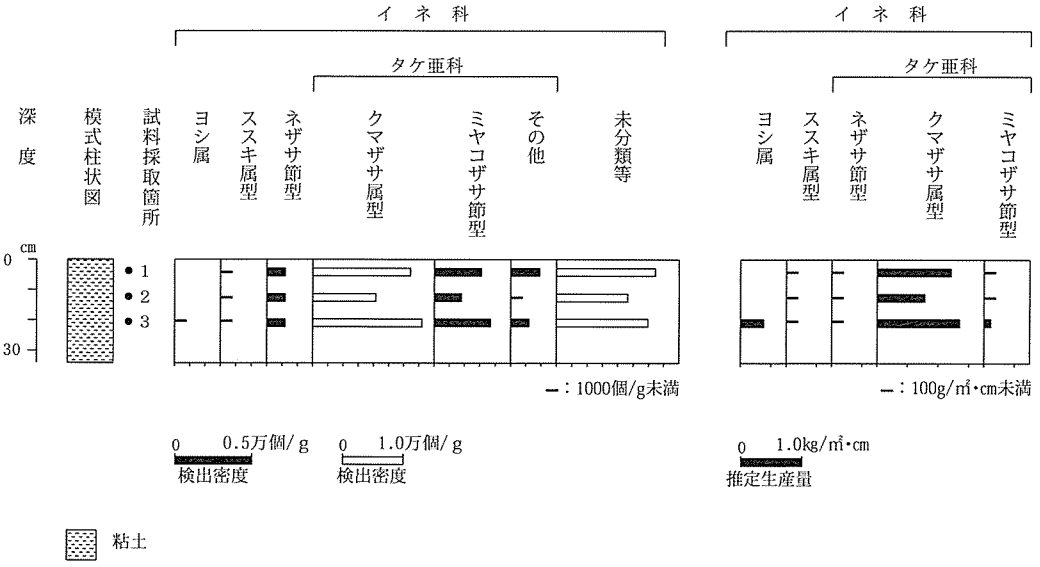
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

ヨシ属	*Phragmites* (reed)	1.51	0.94	0.76	0.98	0.62	0.64			0.39		1.43			0.93	
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.22	0.37	0.37	0.29	0.12	0.19	0.08	0.08	0.08	0.46	0.09	0.30	0.47	0.46	0.38
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	0.23	0.14	0.06	0.11	0.10	0.02	0.06	0.06	0.06	0.35	0.07	0.06	0.04	0.71	0.15
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	2.20	1.84	1.53	2.85	3.04	1.18	1.21	0.78	1.35	1.27	1.42	0.90	1.77	1.43	0.88
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.18	0.27	0.13	0.14	0.53	0.12	0.09	0.05	0.11	0.13	0.05	0.14	0.07	0.07	0.19

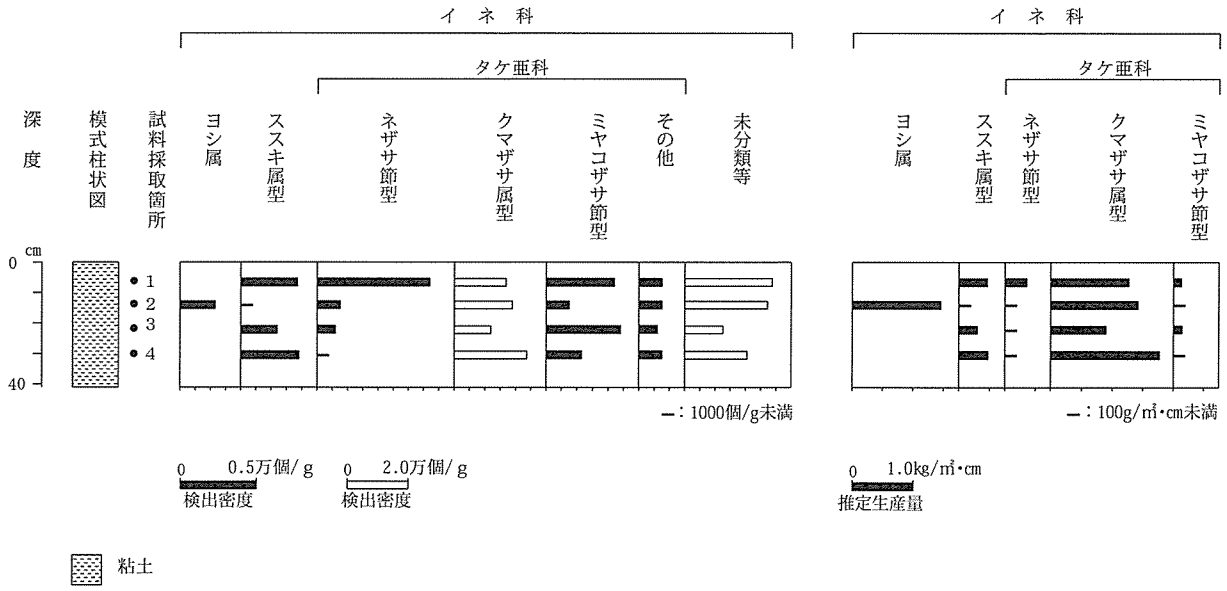
※試料の仮比重を1.0と仮定して算出.



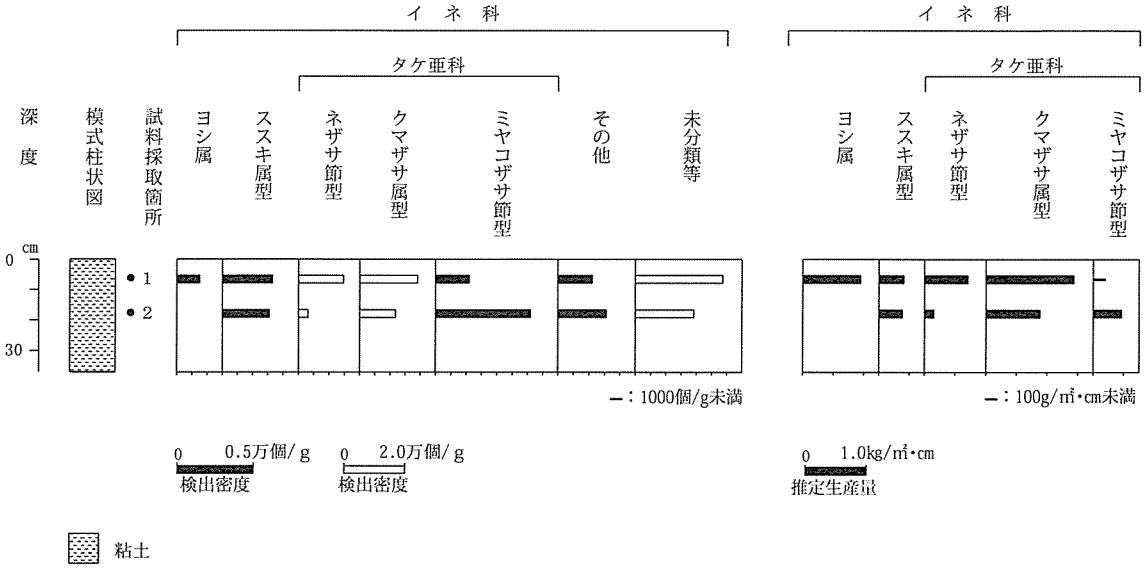
第80図　TW２におけるプラント・オパール分析結果



第81図　TW12におけるプラント・オパール分析結果



第82図　TW14におけるプラント・オパール分析結果



第83図　TW15におけるプラント・オパール分析結果

第２節　諏訪南山崎遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．プラント・オパール分析

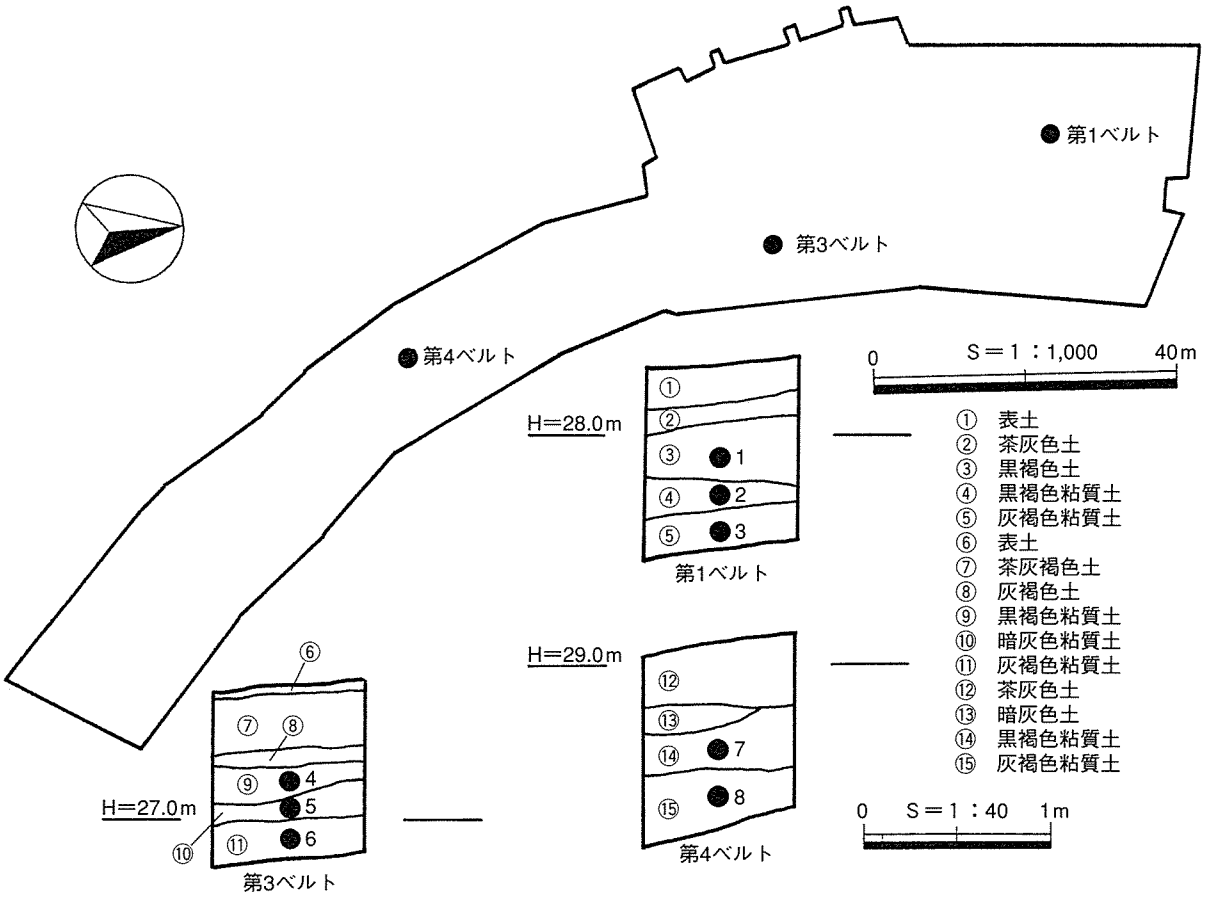
１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

ここでは、諏訪南山崎遺跡で採取された試料についてプラント・オパール分析を行い、同遺跡における稲作の可能性を検討した。

２．試　　料

調査地点は、第１ベルト、第３ベルトおよび第４ベルトの３地点である。分析試料は、第１ベルトでは上位より黒褐色土（試料１）、黒褐色粘質土（試料２）、灰褐色粘質土（試料３）の３点、第３ベルトでは上位より黒褐色粘質土（試料４）、暗灰色粘質土（試料５）、灰褐色粘質土（試料６）の３点、第４ベルトでは上位より黒褐色粘質土（試料７）、灰褐色粘質土（試料８）の２点の計８点である。



第84図　プラント・オパール分析、花粉分析試料採取位置図及び土層柱状図

3．分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2）試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5）沈底法による20μm以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節型は0.30である（杉山，2000）。

4．結果および考察

分析試料から検出されたプラント・オパールは、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表11、第85図～第87図に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を図版56に示す。

第1ベルトの黒褐色土、黒褐色粘質土、灰褐色粘質土、第3ベルトの黒褐色粘質土、暗灰色粘質土、灰褐色粘質土、第4ベルトの黒褐色粘質土、灰褐色粘質土について分析を行ったが、イネのプラント・オパールはいずれの層準からも検出されなかった。こうしたことから、第1ベルト、第3ベルト、第4ベルトの各地点において稲作が行われていた可能性は認められない。

第1ベルトの黒褐色土と黒褐色粘質土、第3ベルトの黒褐色粘質土、第4ベルトの黒褐色粘質土では、ススキ属、ネザサ節型、クマザサ属型の3分類群がそれぞれ高い密度である。こうしたことからこれらの層準の堆積時は、調査地はススキ属、ネザサ節型さらにクマザサ属の繁茂する乾いた環境であったと思われる。なお、ヨシ属も高い密度ではないが認められるため、近傍にはヨシの生育する湿地が存在していたと推定される。

5．まとめ

諏訪南山崎遺跡の第1ベルト、第3ベルト、第4ベルトの3地点においてプラント・オパール分析を行い稲作の可能性を検討した。その結果、いずれの地点からもイネのプラント・オパールは検出されず、稲作が行われていた可能性は認められなかった。各地点ともクマザサ属型が繁茂する乾いた環境が推定された。

表11　諏訪南山崎遺跡のプラント・オパール分析結果

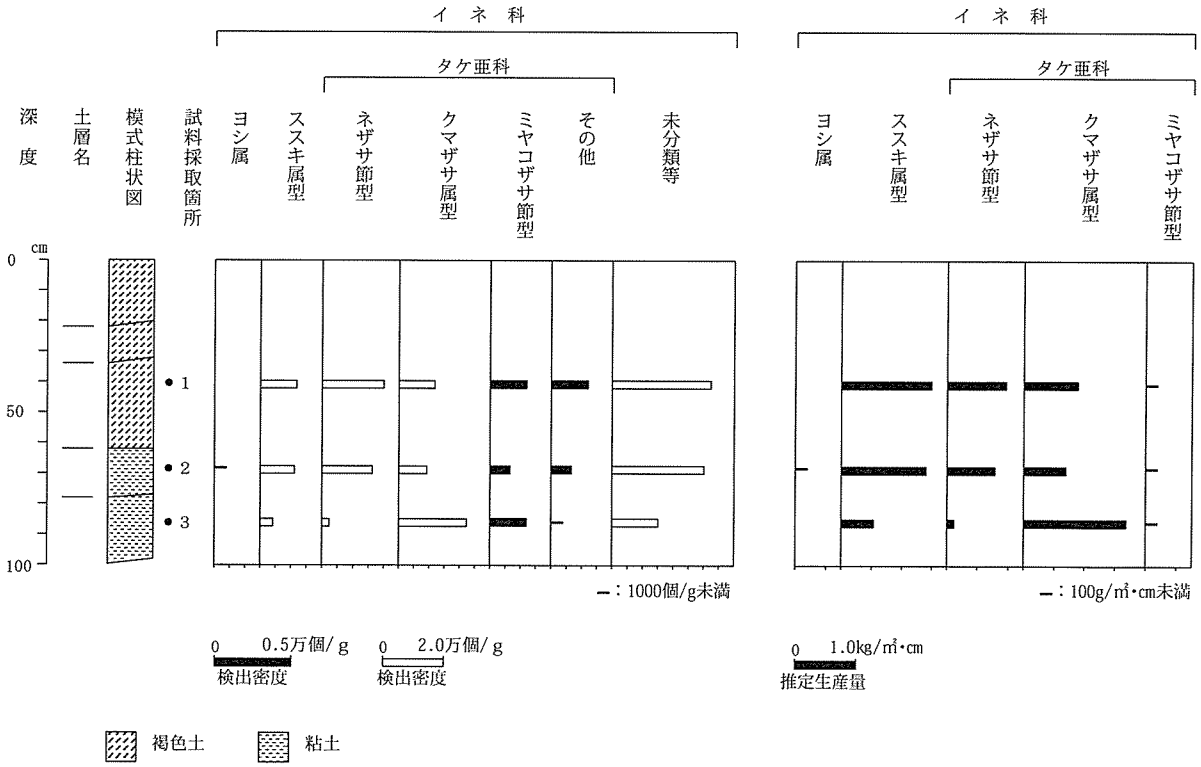
検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼試料		第1ベルト 1	2	3	第3ベルト 4	5	6	第4ベルト 7	8
イネ科	Gramineae (Grasses)								
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		7		7	15		12	20
ススキ属型	*Miscanthus* type	118	111	42	79	7		65	26
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)								
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	200	163	24	106	15	10	107	26
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	118	92	224	66	67	150	285	205
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	24	13	24	13	7	20	36	26
その他	Others	24	13	6	7	7	10	24	13
未分類等	Unknown	324	301	151	198	67	100	196	99
プラント・オパール総数		808	700	471	476	185	290	725	415

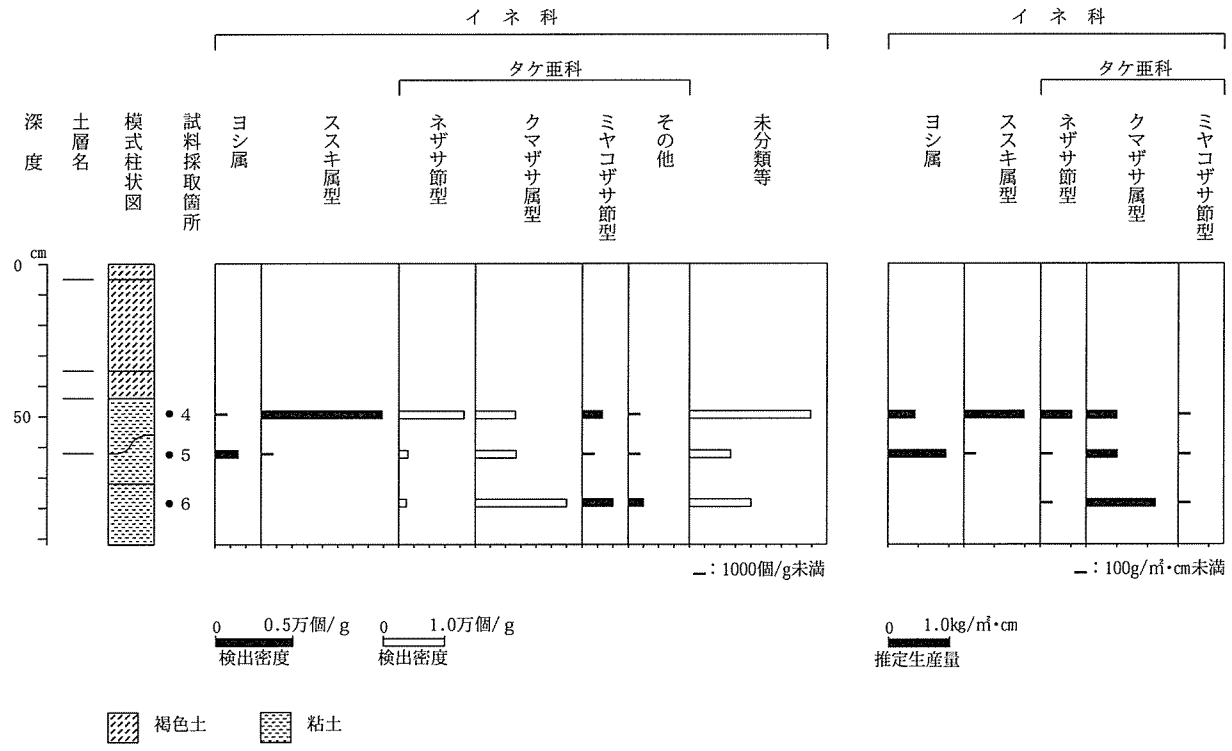
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

ヨシ属	*Phragmites* (reed)		0.41		0.42	0.94		0.75	1.25
ススキ属型	*Miscanthus* type	1.46	1.38	0.52	0.98	0.09		0.81	0.33
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	0.96	0.78	0.12	0.51	0.07	0.05	0.51	0.13
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	0.88	0.69	1.68	0.49	0.50	1.12	2.14	1.53
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.07	0.04	0.07	0.04	0.02	0.06	0.11	0.08

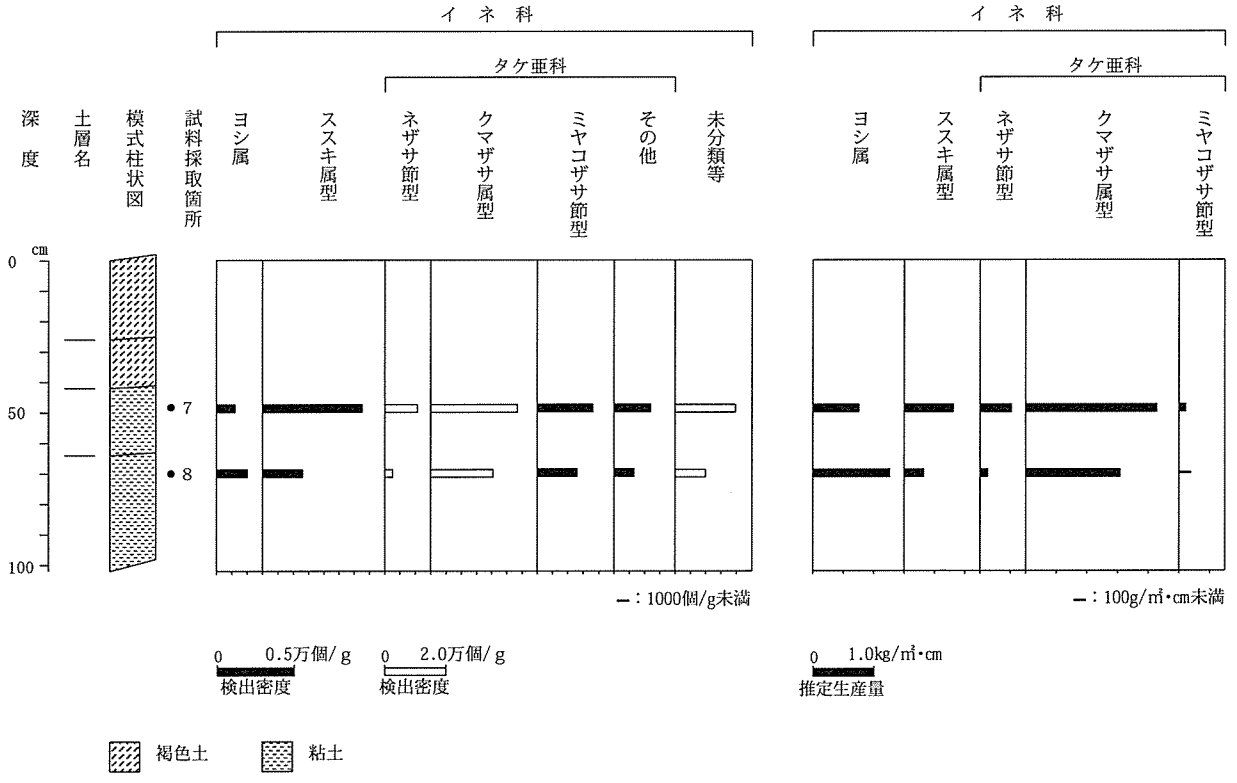
※試料の仮比重を1.0と仮定して算出.



第85図　第1ベルトにおけるプラント・オパール分析結果



第86図　第３ベルトにおけるプラント・オパール分析結果



第87図　第４ベルトにおけるプラント・オパール分析結果

Ⅱ．花粉分析

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2．試　　料

分析試料は、第１ベルトの黒褐色土（試料１）、黒褐色粘質土（試料２）、灰褐色粘質土（試料３）の３点、第３ベルトの黒褐色粘質土（試料４）、暗灰色粘質土（試料５）、灰褐色粘質土（試料６）の３点、第４ベルトの黒褐色粘質土（試料７）、灰褐色粘質土（試料８）の２点の計８点である。いずれもプラント・オパール分析に供した試料と同一である。

3．分析方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
2）水洗処理の後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
4）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
5）再び氷酢酸を加えて水洗処理
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4．結　　果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉９、樹木花粉と草本花粉を含むもの２、草本花粉13、シダ植物胞子２形態の計26である。これらの学名と和名および粒数を表12に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第88図、第89図に示す。主要な分類群は顕微鏡写真を図版57に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、ハイノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属ーフサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

1）第1ベルト（試料1～3）

試料3、試料2では、花粉はほとんど検出されなかった。試料1では花粉密度はやや低く、ほとんど草本花粉で占められ、わずかにシダ植物胞子が出現する。草本花粉ではヨモギ属が優占し、次いでタンポポ亜科、イネ科、アブラナ科などが出現する。

2）第3ベルト（試料4～6）

試料6、試料5では、花粉はほとんど検出されなかった。試料4では、樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高い。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属が高率に出現し、スギ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に伴われる。草本花粉ではイネ科が優占し、ヨモギ属、ナデシコ科、ソバ属、タンポポ亜科などが伴われる。

3）第4ベルト（試料7、8）

試料8、試料7とも花粉はほとんど検出されなかった。

5．花粉分析から推定される植生と環境

1）第1ベルト

下部より黒褐色粘質土・灰褐色粘質土では、花粉がほとんど検出されず、わずかにヨモギ属とイネ科が検出されたのみである。こうしたことから、花粉などの有機質遺体が分解する乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境であったと考えられる。黒褐色土では、草本花粉がほとんどを占め、ヨモギ属、イネ科、アブラナ科の乾燥地を好む人里植物や耕地雑草の性格をもつ草本で占められ、樹木花粉がほとんど出現しないことから、堆積地周辺はこれらの草本が生育し、日当たりの良い比較的乾燥した開地であったと推定される。

2）第3ベルト

下部より黒褐色粘質土・灰褐色粘質土では、花粉がほとんど検出されず、花粉などの有機質遺体の分解が行われる乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境であったと考えられる。わずかに検出された乾燥を好むヨモギ属などが生育していた。黒褐色粘質土では、人里植物や耕地雑草の性格をもつイネ科、ヨモギ属などの草本が生育していた。栽培植物のソバ属などが検出されることから、畑地の分布が推定される。近隣にはマツ属複維管束亜属の針葉樹が二次林として分布していたと考えられる。

3）第4ベルト

灰褐色粘質土・黒褐色粘質土では、花粉がほとんど検出されず、花粉などの有機質遺体が分解する乾燥、あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境であったと考えられる。一部にヨモギ属などが生育していた。

6．まとめ

諏訪南山崎遺跡で花粉分析を行った結果、第１ベルト、第３ベルト、第４ベルトとも、花粉が少なく、ヨモギ属が主に検出されたことから、乾燥を好むヨモギ属などの草本が生育し、花粉などの有機質遺体が分解する乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境であったと考えられる。花粉がやや多く検出された第１ベルトの黒褐色粘質土と第３ベルトの黒褐色粘質土では、ヨモギ属、イネ科を主に、アブラナ科ないしタンポポ亜科の乾燥を好む人里植物や耕地雑草の性格をもつ草本が生育しており、第３ベルトの黒褐色粘質土ではソバの栽培が示唆された。

参考文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）ープラント・オパール分析による水田址の探査ー．考古学と自然科学，17，p.73-85.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として.第四紀研究,13,p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

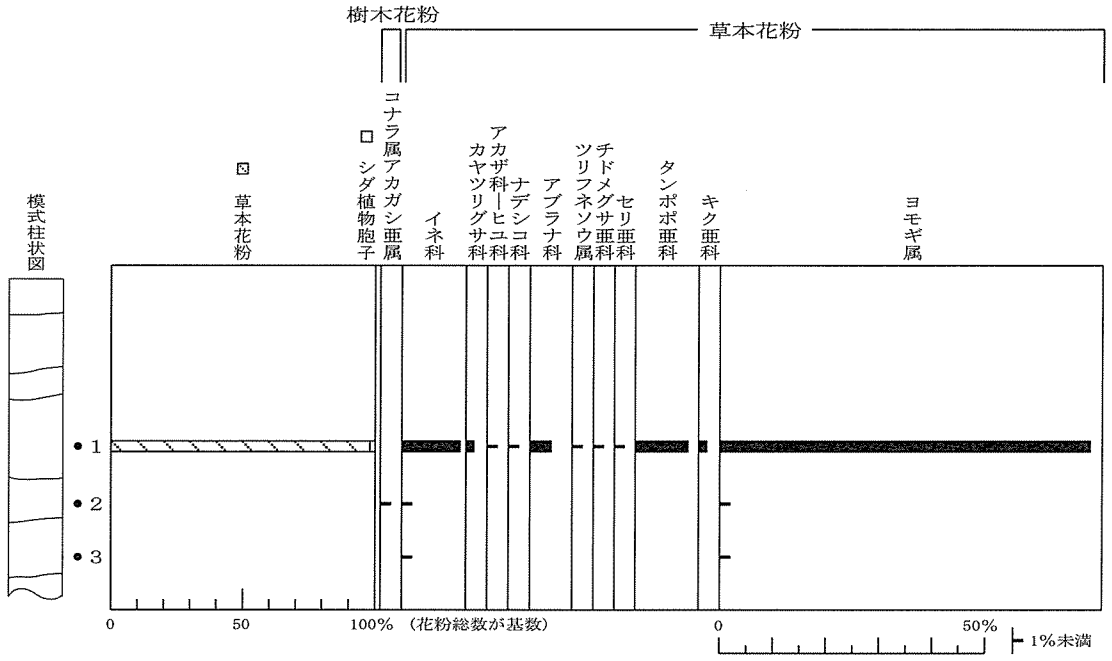
辻誠一郎（1984）栃木県南部、二ノ宮町における立川期の植物遺体群集.第四紀研究,23，p.21-29

町田洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス.東京大学出版会，p.269

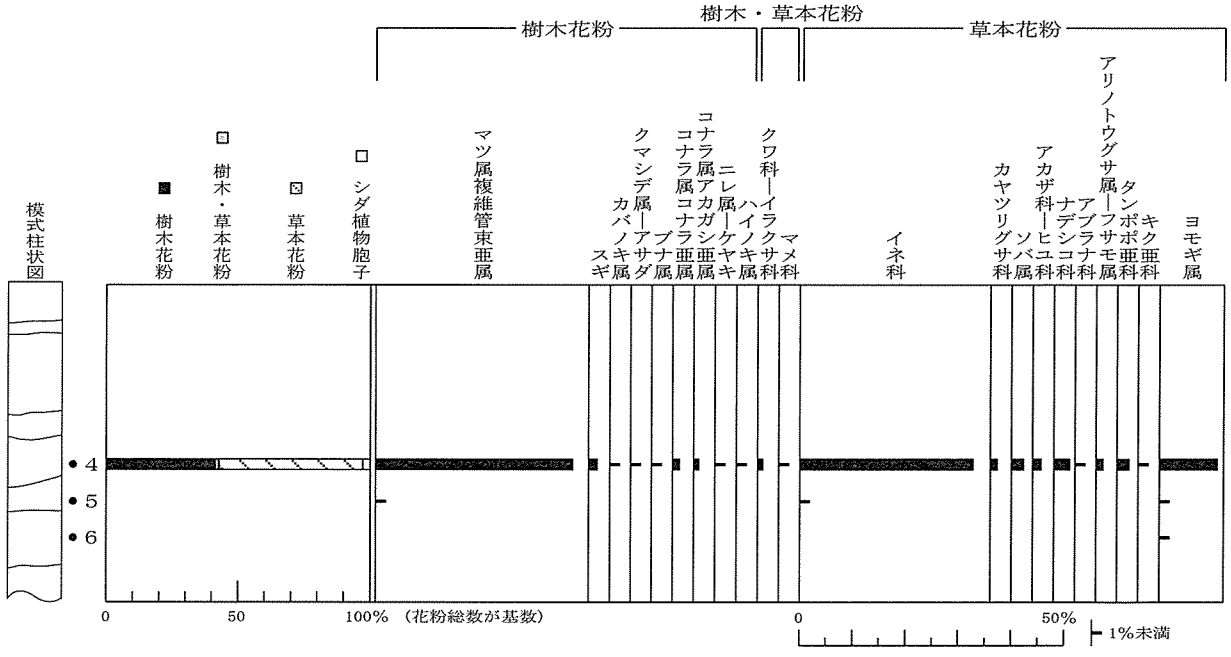
安田喜憲・三好教夫（1998）関東地方の植生史.図説日本列島植生史.朝倉書店，p.73-81

表12　諏訪南山崎遺跡における花粉分析結果

分類群		第1ベルト			第3ベルト			第4ベルト	
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8
Arboreal pollen	樹木花粉								
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属				113	1		3	
Cryptomeria japonica	スギ				5			1	
Betula	カバノキ属				1				
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ				1				
Fagus	ブナ属				1				
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属				4			1	
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属		1		3				
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ				1				
Symplocos	ハイノキ属				1				
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科				3			1	2
Leguminosae	マメ科				1				
Nonarboreal pollen	草本花粉								
Gramineae	イネ科	22	1	1	100	3		6	2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3			4				2
Fagopyrum	ソバ属				7				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1			5			1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1			9				
Cruciferae	アブラナ科	8			1				
Impatiens	ツリフネソウ属	1							
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属				4				
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1							
Apioideae	セリ亜科	1							
Lactucoideae	タンポポ亜科	20			7			3	
Asteroideae	キク亜科	3			1				
Artemisia	ヨモギ属	140	6	2	33	2	1	10	3
Fern spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単条溝胞子	1			5	2			2
Trilate type spore	三条溝胞子	3	1		4			1	2
Arboreal pollen	樹木花粉	0	1	0	130	1	0	5	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	4	0	0	1	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	201	7	3	171	5	1	20	7
Total pollen	花粉総数	201	8	3	305	6	1	26	9
Unknown pollen	未同定花粉	2	0	1	1	1	0	1	0
Fern spore	シダ植物胞子	4	1	0	9	2	0	1	4
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)



第88図　第１ベルトにおける花粉ダイアグラム



第89図　第３ベルトにおける花粉ダイアグラム

第３節　諏訪南山崎遺跡出土漆器椀の樹種同定

名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期　　岡　田　　賢

１．試料の概要

本稿で報告する試料は、平成16年度に（財）米子市教育文化事業団によって発掘調査された諏訪南山崎遺跡出土の漆器椀１点である。これは４区の調査の際に第Ⅱ層から検出されたものである。なおこの試料の所属時期は中世後半～近世であると思われる。

２．試料の同定方法

同定試料は、水洗いによって土を落としたあと、片刃カミソリを用いて徒手によって木口面・柾目面・板目面の切片をとり、それをスライドグラスにのせガムクローラルで封入しプレパラートを作成した。次にそれらと筆者所持の現世標本や文末に掲げる諸文献を参考に同定作業を行った。

３．結　　果

本試料の樹種はケヤキであり、その解剖学的特徴を示せば以下のとおりである。

ケヤキ　Ｚｅｌｋｏｖａ　ｓｅｒｒａｔａ　Ｍａｋｉｎｏ（ニレ科　Ｕｌｍａｃｅａｅ）

環孔材で、非常に大きい孔圏道管が1列、部分的に2列並び、孔圏外では小道管が多数集まり、円形や接線状、斜線状の集団管孔をなしている。道管は単せん孔を有し、小道管にはらせん肥厚が見られる。軸方向柔細胞は周囲状である。放射組織は同性ないし異性で上下縁辺に大きな結晶細胞をもつ。以上の特徴からケヤキと同定した。

ケヤキは温帯から暖帯下部に広く分布する落葉広葉樹で、本州・四国・九州の広い範囲に分布する。（北村･村田1979）また平野部から山間部の二次林にも分布する。材質は硬く強靱で建築材や器具、家具など用途の幅の広い優良材である。（豊島ほか1962）またその綺麗な木目が玉杢や牡丹杢などと呼ばれている。縄文時代から刳物の容器に利用されることが多く、古代や中世、近世以降も挽物に使われる代表的な木材である。（鈴木2002）とくに、近世にはブナ・トチノキと並んで漆器の主要な材料である。

一方木取りについては、本例は横木地の柾目取りである。近世漆器ではブナが主に横木地の柾目取り、トチノキは横木地の板目取り割合が高く、ケヤキは横木地の柾目取りと板目取りの比率がほぼ同じであるという指摘がある。（北野2000）また東日本の中世漆器では中世前期、後期ともにケヤキが主体であるのに対し、近世になるとブナが主要な材料になるという指摘がある。（仲田1998）ブナ林は中国山地にも分布するが、今後は製作技術や流通を考慮しながら当地域の漆器樹種について、時期的な様相を把握する必要があろう。本試料がその一助になれば幸いである。

参考文献

伊東隆夫，1995．日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31.
貴島恒夫・岡本省吾・林昭三，1962．原色木材大図鑑．保育社.
北野信彦，2000．生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費．日本考古学，９．ｐｐ．71－96.
北村四郎・村田源，1979．原色日本植物図鑑　木本編Ⅰ・Ⅱ．保育社.
鈴木三男，2002．日本人と木の文化．八坂書房.
仲田茂司，1999．東国中世の漆器．考古学研究，第46巻第1号．pp．73－90.

第４節　ＳＫ－４６、造り付け竈の放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

１.試料と方法

試料名	遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.１	ＳＫ－４６	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄	ＡＭＳ
No.２	造り付け竈煙道	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄	ＡＭＳ

※１）AMSは加速器質量分析法: Accelerator Mass Spectrometry

２.測定結果

試料名	測定No.（Beta-）	^{14}C年代（年BP）	σ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）
No.１	201590	1670±40	−27.6	1630±40	交点：cal AD 420
					１σ：cal AD 400 ～ 440
					２σ：cal AD 350 ～ 530
No.２	201591	1400±40	−27.1	1370±40	交点：cal AD 660
					１σ：cal AD 650 ～ 680
					２σ：cal AD 620 ～ 700

１）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

２）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68%確率）と２σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

第５節　諏訪南山崎遺跡出土打製石斧の使用痕分析

株式会社　アルカ　高　橋　　哲

１．はじめに

諏訪南山崎遺跡から出土した打製石斧14点の使用痕観察の成果を報告する。

打製石斧18点と、磨製石斧１点の計19点の石器についてその特徴を記述し、次に刃部が残存している打製石斧14点について、使用痕観察した結果を下に詳述する。

２．資料の状況

包含層出土である。縄文時代晩期に属する資料である。この遺跡では、縄文時代晩期の籾痕土器が出土し、すでにこの地で稲作農耕があったのではないかと推定されている。打製石斧がそれと関連するのかが問題である。

３．出土石器の特徴

打製石斧は、安山岩を主体とした石材であり、これに緑色変岩、頁岩、結晶変岩、礫岩が加わる。素材の両面に節理面がみられるものが多く、薄く平らに剥離できる石材を選択したものと考えられる。

素材剥片をハードハンマーの直接打撃で整形加工している。特に基部側は念入りに加工し、側面稜を叩きつぶしている打製石斧もあることから着柄を想定して加工しているものと考えられる。

平面形態は短冊形４点、バチ形５点、しゃもじ形３点であり、特にどの平面形態に偏ることはなかった。他は破損が激しく平面形態を特定できなかった。

刃部は片刃状である。石器の表裏は刃部の平らな面を裏面とした。刃部は平面形態との関わりから、短冊形は刃部幅が狭く、バチ形やしゃもじ形は刃部が基部に対して拡がることから、幅広の刃部をもつ。

第78図の418～420は打製石斧の基部資料で、刃部は欠損している。419は稜などほぼ全面が摩耗していた。

421は凝灰岩製の磨製石斧である。刃部が欠損し、全面を敲打で整形している。敲打後表面を研磨していると推定されるが、石器表面が荒れており、研磨痕は確認できなかった。刃部の折面を打面とし、再加工している。

４．使用痕分析

（１）対象資料

刃部が残存した14点について使用痕分析を行った。

（２）　観察方法

キーエンス社デジタルマイクロスコープ（VHX）を用い、低倍率・高倍率の観察を行った。高倍率で観察する前にエタノールで石器表面を拭き、手の脂分などを除去した。使用痕属性は東北大学使用痕研究チームによっている（梶原・阿子島1981,阿子島1989など）。

（３）　観察結果

石器番号５　（第77図　407、図版59）

安山岩製でバチ形の平面形態を呈する。素材主要剥離面側を正面とし、裏面には素材の節理面がみられる。基部側をより丁寧に加工し、基部先端を細く作り出している。

〔**刃部の磨耗**〕：石器の両面に刃部摩耗がみられる（写真１、２）。特に正面側がより内側にまで摩耗が拡がる。さらに詳細にみると、摩耗に伴い線状痕が刃部に対して直交にみられる（写真４）。

〔**高倍率観察**〕：顕著な光沢などは見られなかった。体部表面（写真７）と比較し、刃部摩耗部分は、高倍率下

でも摩耗と光沢らしきものがみられる（写真５、６）。

石器番号６　（第77図　408、図版60）

安山岩製でバチ形の平面形態を呈する。素材主要剥離面は節理割れである。基部側をより丁寧に加工し、基部を作り出している。

〔**刃部の摩耗**〕：石器の両面に刃部摩耗がみられる（写真１、２）。ほぼ同じ程度に摩耗が拡がるが、正面側は、剥離のため欠損し、その後も使用され、剥離面を切ってさらに摩耗している。裏面の摩耗はもとに剥離面の稜を覆い、本来の剥離面の形は不明瞭となっている（写真３）。摩耗に伴い線状痕が刃部に対して直交にみられる。

〔**高倍率観察**〕：両面に明るく、表面が滑らかな光沢がみられた（写真４から６）。Ｂタイプ光沢に類似した特徴をもつ。このような痕跡は体部にはみられなかった（写真７）。なお写真８は明るくパッチ状であり、一見光沢のようにみられるが、その範囲の縁辺がそいだように鋭く、石器素材に含有されている鉱物の結晶である。

石器番号12　（第78図　414、図版61）

安山岩製の打製石斧刃部断片である。正面に素材の節理面がみられる。

〔**刃部の摩耗**〕：両面に摩耗がみられるが（写真１、２）、特に正面側が顕著である。正面側の摩耗は、それに伴い刃部に直交する線状痕がみられる（写真３）。裏面側には線状痕はみられないが、摩耗により剥離面の稜が不明瞭になっている（写真４）。

〔**高倍率観察**〕：両面に光沢がみられた（写真５）。石器番号６にみられた光沢ほど丸みなどなく、それほど顕著に拡がらない。このような光沢は体部にはみられなかった（写真６）。

石器番号15　（第78図　417、図版62）

安山岩製の打製石斧刃部断片である。

〔**刃部の摩耗**〕：石器両面に摩耗がみられる（写真１、２）。特にどちら側により強く摩耗しているのでなく、同程度に摩耗が拡がっている。摩耗はもとに剥離面の稜を覆い、本来の剥離面の形は不明瞭となっている（写真３、４）。摩耗に伴い線状痕が刃部に対して直交にみられる。

〔**高倍率観察**〕：両面に明るく、表面が滑らかな光沢がみられた（写真５から７）。Ｂタイプ光沢に類似した特徴をもつ。石器番号６ほど顕著なものではなかった。このような痕跡は体部にはみられなかった（写真８）。

石器番号１　（第77図　403、図版63）

凝灰岩製で、平面形態は短冊形である。特に基部側に近い縁辺をより丁寧に加工し、基部を作り出している。

〔**刃部の摩耗**〕：石器両面ともに摩耗はみられなかった（写真１、２）。

〔**高倍率観察**〕：光沢など使用痕と思われる痕跡は確認できなかった。

石器番号３　（第77図　405、図版63）

安山岩製で、平面形態は短冊形である。基部側をより丁寧に加工し、基部を作り出している。

〔**刃部の摩耗**〕：石器両面ともに顕著な摩耗はみられなかった（写真１、２）が、裏面の一部に線状痕らしき、刃部に対して直交方向に走っているのが確認できた（写真３）。

〔**高倍率観察**〕：光沢など使用痕と思われる痕跡は確認できなかった。

石器番号４　（第77図　406、図版63）

緑色片岩製で、平面形態は短冊形である。

〔**刃部の摩耗**〕：石器正面には摩耗はみられなかった（写真１）が、裏面には摩耗がみられた（写真２）。摩耗

の程度は非常に弱く、線状痕などもみられなかった。

〔高倍率観察〕：光沢など使用痕と思われる痕跡は確認できなかった。

石器番号７　（第77図　409、図版64）

安山岩製で、平面形態は短冊形である。

〔刃部の摩耗〕：石器両面に摩耗はみられた（写真１、２）。特に裏面側に顕著に摩耗がみられた。

〔高倍率観察〕：光沢など使用痕と思われる痕跡は確認できなかった。

石器番号８　（第77図　410）

安山岩製で、平面形態はバチ形である。基部が加工によりややすぼまる。分析資料中、一番大形で厚みのある資料である。石材が柔らかいため、石器全体が摩耗しており、刃部の摩耗が使用に伴うものか判断できなかった。高倍率で観察したが、同じく使用痕らしき痕跡は確認できなかった。

石器番号９　（第77図　411、図版64）

安山岩製で、平面形態はしゃもじ形である。

〔刃部の摩耗〕：石器全面が摩耗している。しかし、刃部の摩耗はより面的に拡がるのに対し、体部の摩耗は特に石器稜上にみられるので、このあたりの違いに注意し、図面に摩耗範囲を示した。両面ともに摩耗がみられる（写真１、２）。特にどちらか一方に強く摩耗していない。剥離の本来の稜が摩耗により不明瞭になっている。裏面側にうっすらとであるが、刃部に対して直交方向の線状痕がみられた。

〔高倍率観察〕：光沢など使用痕と思われる痕跡は確認できなかった。

石器番号10　（第78図　412、図版64）

安山岩製で、バチ形の平面形態である。刃部右辺側が大きく欠損している。

〔刃部の摩耗〕：石器両面ともに摩耗はみられなかった（写真１、２）。

〔高倍率観察〕：光沢など使用痕と思われる痕跡は確認できなかった。

石器番号11　（第78図　413、図版65）

安山岩製で、しゃもじ形の平面形態である。体部中央を抉り状に加工している。分厚い刃部で、急角度に加工されている。

〔刃部の摩耗〕：石器両面ともに摩耗はみられなかった（写真１、２）。

〔高倍率観察〕：光沢など使用痕と思われる痕跡は確認できなかった。

石器番号13　（第78図　415、図版65）

安山岩製で、刃部断片である。

〔刃部の摩耗〕：石器全面がうっすらと摩耗しているので、刃部にみられる摩耗が使用に伴うものかは判断できなかった（写真１、２）。

〔高倍率観察〕：光沢など使用痕と思われる痕跡は確認できなかった。

石器番号２　（第77図　404）

礫岩製で、バチ形の平面形態を呈する。素材は節理面が強く、粗い素材である。縁辺の加工もあらく、いわゆる鋸歯状である。他の打製石斧は、縁辺のバリを剥離で落としているが、これらはそのような痕跡は認められず、未製品と考えられる。

（4）使用痕実験　（図版66）

・実験場所

登呂遺跡博物館所有の水田で土掘り実験を行った。諏訪南山崎遺跡の打製石斧が水田と何らかの関係があるのであれば、そこで作業した痕跡が打製石斧に残るのではと仮説を立て、実験を行った(註)。

・複製石器

複製の石鍬を作成し、実験した。鍬は、柄の部分と石器を乗せる台座を別に作り、台座に穴をあけ、柄を差し込み装着した。石器は、千曲川で採集した凝灰岩を荒割りし、製作した。石器中央に抉りをいれ、石器は台座に乗せ、ひもで緊縛した。

・作業方法

成年男子複数名と女子１名で実験を行った。30分１単位、５単位の総計２時間半の作業時間である。実験は２日にわたったが、初日雨と、石鍬が破損したので中止し、２日目に集中して行った。基本的に鍬を振りかぶり、地面に打ち付けるように作業した（写真3）。

・作業環境

登呂遺跡内の水田で、すでに稲は刈り取られ、株が残っている状態であった（写真１）。初日雨が降り、２日目晴れたが、水田は実験中は終始湿った状態であった。

・実験結果

泥が刃部に張り付き、刃部全面を覆ったため、顕著な摩耗は形成されなかった（写真６）。実験前石器表面には光沢など観察できなかった（写真７）が、稲株を巻き込みながら作業したため、実験後光沢らしき痕跡が観察できた（写真８）。この光沢は、石材に含有されている結晶上に形成されている。このことから、諏訪南山崎遺跡の打製石斧においてBタイプ光沢が確認できたことは、草本類を巻き込みながら作業が行われたと思われる。

鍬は、水田の土から10㎝強ほど食い込んだ。水田のような湿った土では、泥が刃部にはりつき、かつ覆うため、遺物でみられるような痕跡は、打ち鍬として使用した場合形成されない可能性が高いと思われる。

（5）分析のまとめ

摩　耗：上記の通り刃部形態から石器の表裏を決めたとき、刃部摩耗の範囲は、３通り確認でき、それは石器両面にほぼ同程度、正面もしくは裏面のどちらか片面に顕著なものである。摩耗は石器の左右どちらかの辺に顕著に偏ることはなかった。摩耗範囲と石器平面形態（刃部幅）の関係は、特にどの平面形態に傾向があるようではなかった。

線状痕：刃部に対して直交方向が観察できた。

光　沢：Bタイプを除き明瞭な光沢は確認できなかった。分析資料の刃部摩耗痕跡が奥まで入り込むことは、被加工物が木質のものや骨・岩など硬いものとは考えられない。摩耗が顕著であるので、柔らかくとも多少なりとも研磨作用が働き、刃部奥まで被加工物に食い込むようなものが対象であったと考えられ、このような点を考慮すると、打製石斧が土などに対して打ち込まれて使用されたと考えられる。

数点の石器にBタイプ光沢が確認できた。この光沢は、木などで生じる光沢であり、石包丁などに顕著にみられるコーングロスなどもこのタイプに属する。仮に打製石斧が木材などの伐採具である場合、使用痕は刃部の狭い範囲に限定され、摩耗が刃部奥深くまではいりこむことはない。荒れたBタイプ光沢が実験で確認されたことから、対象となる土に植物が生えていたと考えられる。

まとめ：以下総括すると、打製石斧は基部を入念に加工しているので、柄に装着された。刃部摩耗が表裏どちらかの面に偏り、左右に偏らないので、横斧的に装着され、石斧を縦に装着した狭鍬的な機能の道具ではないと思われる。そして刃部を中心に考えると、石器の表裏どちらかに摩耗の痕跡が偏る傾向があり、線状痕を考慮しても鍬や鋤のように使用された可能性がある。鍬については、その使用痕分布の概念図が示されており（池谷他2003,04）、刃部正面に摩耗が偏るのがそれに当てはまると思われる。鋤は、地面に打ち込み土を掘り返すような用途の道具であるため、刃部の裏面側に摩耗が顕著になることが想定される。諏訪南山崎遺跡の打製石斧を摩耗の範囲という視点で観察した場合、このように鋤と鍬の２つの用途があった可能性がある。

5．総　　括

諏訪南山崎遺跡の打製石斧は、分析から鍬もしくは鋤として、地面を掘り返したりする道具であることが明らかになった。鋤・鍬として当時明瞭な区分があるのであれば、石器の形態と摩耗分布範囲の異なりに相関関係は捉えられると仮定したが、今回の資料ではそこまでは判断することはできなかった。現時点で打製石斧を鋤と鍬に区分することは難しいが、唐古遺跡などから出土した木製品（岡本1966,木下1979）に鍬と鋤が明瞭に製作され、石鍬を集成した松井の報告（松井1995）に掲載された図面を見る限り、やはり石器の正面もしくは裏面側に顕著な摩耗痕跡が残されており、両者が使い分けられていた可能性も否定できない。実験において、鋤としての機能についてはデータがないので、この点については、今後の課題としたい。

縄文時代後期以降、打製石斧は大形の傾向を持つ。それは、環状集落・列石などの大規模な土木工事が行われており、それにみあった道具が必要であった。つまり縄文時代後期以降、大規模の周辺環境を改変するような社会要因があったと推定され、やがて弥生時代を迎えることとなった。東日本の初期弥生時代に再葬墓が特徴的に拡がり、それに伴い打製石斧（石鍬）が出現するのは、水田開発にともなう、周辺環境の改変であり、そうした時代背景が要求した道具であったのではないか。木製の鍬や鋤は、水田が機能した段階で十分に役割を果たせたであろうが、堅い土を砕き、水田を開墾するのは、打製石斧がより適切であったのではないであろうか。

（註）：水田での実験は、静岡市の中野宥氏の好意で使用させていただきました。愛知県埋蔵文化財原田幹氏に実験の段取りなどでお世話になりました。他に実験に参加した若林幸子氏、小野由香氏、山口大学、國學院大學の学生諸氏に手伝ってもらいました。この場を借りてお礼を述べます。

参考文献

阿子島香　1989　『石器の使用痕』考古学ライブラリー56　ニュー・サイエンス社

池谷勝典・高橋哲　2004　「後家山遺跡出土の打製石斧の使用痕分析」『後家山遺跡　東久保遺跡　宮田遺跡Ⅰ・Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書第121集　pp.543-554

池谷勝典・馬場伸一郎　2003　「弥生時代飯田盆地における打製石鍬の用途について」『中部弥生時代研究会　第６回例会発表要旨集』　pp.11-18

岡本明郎　1966　「1労働用具　一工具」『日本の考古学Ⅲ　弥生時代』河出書房　pp.222-232

梶原洋・阿子島香　1981　「頁岩製石器の実験使用痕研究-ポリッシュを中心とした機能推定の試み-（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その2）」『考古学雑誌』67-1 pp.1-35

木下忠　　1979　「木器」『新版考古学講座　4原史文化（上）弥生文化』雄山閣　pp.236-255

松井一明　1995　「弥生時代の石鍬について（上）」『弥生文化博物館研究報告』4　pp.55-92

表13　石斧一覧表

石器番号	挿図番号	遺物番号	器種	出土地	層位	取上番号	石材	平面形態	刃部属性	刃部摩耗範囲	線状痕の方向	形態整形加工	形態成形加工	素材形態	欠損部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	所見
1	77	403	打製石斧	4区	Ⅶ層	2099	頁岩	短冊形	HD	なし	なし	HD	HD	横長剥片		107.5	55.5	15.0	117.0	
2	77	404	打製石斧	4区	Ⅶ層	2113	礫岩	バチ形	HD	なし	なし	HD	HD	横長剥片	完形	104.4	58.8	17.4	111.1	
3	77	405	打製石斧	3区	Ⅱ層	2014	安山岩	短冊形	HD	裏面？	直交	HD	HD	剥片		172.7	88.0	30.7	548.3	
4	77	406	打製石斧	4区	Ⅱ層	2053	緑色片岩	短冊形	HD	裏面	直交？	HD	HD	横長剥片	完形	144.6	75.8	21.3	362.5	刃部摩耗している。
5	77	407	打製石斧	4区	Ⅷ層	2089	安山岩	バチ形	HD	両面/特に正面顕著	直交	HD	HD	横長剥片	完形	156.0	90.6	27.7	488.3	刃部摩耗している。
6	77	408	打製石斧	1区	Ⅳ層	574	安山岩	バチ形	HD	両面/特に裏面顕著	直交	HD	HD	横長剥片	完形	178.3	93.6	26.6	609.9	刃部摩耗している。刃部にBタイプ光沢らしき痕跡みられる。
7	77	409	打製石斧	4区	Ⅲ層	2098	安山岩	短冊形	HD	両面/特に裏面顕著	なし	HD	HD	横長剥片	完形	176.6	69.0	33.8	446.7	刃部一部摩耗している。
8	77	410	打製石斧	4区	Ⅱ層	2111	凝灰岩	バチ形	HD	Z	Z	HD	HD	横長剥片	完形	212.3	79.3	40.7	773.7	石器全面が激しく摩耗している。
9	77	411	打製石斧	3区	Ⅴ層	1947	凝灰岩	しゃもじ形	HD	両面/特に裏面顕著か？	直交	HD	HD	横長剥片	基部一部欠	133.2	90.2	27.1	342.4	石器全面が激しく摩耗しているが、刃部の摩耗は使用によると考えられる。
10	78	412	打製石斧	4区	表採	－	頁岩	バチ形	HD	なし	なし	HD	HD	横長剥片	完形	142.3	89.2	30.9	362.0	
11	78	413	打製石斧	4区	Ⅷ層	2087	安山岩	しゃもじ形	HD	なし	なし	HD	HD	横長剥片	完形	195.8	101.1	29.3	697.9	基部中央に抉りを入れている。
12	78	414	打製石斧	4区	Ⅱ層	2074	安山岩	Z	HD	両面/特に正面顕著	直交	HD	HD	横長剥片	基部欠	102.6	102.3	29.7	398.9	刃部摩耗している。
13	78	415	打製石斧	4区	Ⅱ層	2074	安山岩	Z	HD	なし	なし	HD	HD	横長剥片	基部欠	123.2	95.4	27.7	307.1	石器全面が摩耗している。
14	78	416	打製石斧	4区	Ⅱ層	2053	安山岩	しゃもじ形	不明	Z	Z	HD	HD	扁平礫	刃部欠	163.5	114.3	27.2	592.8	
15	78	417	打製石斧	4区	Ⅶ層	2110	安山岩	Z	HD	両面		HD	HD	剥片	刃部残	92.2	122.2	19.9	284.1	
16	78	418	打製石斧	4区	Ⅱ層	2126	結晶片岩	Z	不明	Z	Z	HD	HD	剥片	刃部欠	91.3	57.1	21.9	172.1	
17	78	419	打製石斧	4区	Ⅶ層	2110	安山岩	Z	不明	Z	Z	HD	HD	剥片	刃部欠	106.3	67.9	22.1	225.5	
18	78	420	打製石斧	4区	表採	－	安山岩	Z	不明	Z	Z	HD	HD	剥片	刃部欠	110.2	69.9	24.6	297.3	
19	78	421	磨製石斧	4区	Ⅷ層	2087	凝灰岩	Z	不明	Z	Z	Pe+HD	HD	不明	完形	128.0	60.0	47.0	501.2	刃部欠損後、折面を打面とし、再加工している。

HD：ハードハンマーによる直接打撃
Pe：敲打整形
Z：属性が該当しない

第６節　レプリカ法による諏訪南山崎遺跡出土土器の圧痕の観察

東京国際大学　　丑　野　　毅

１．はじめに

出土した土器に残されていた圧痕の中に、稲籾の痕跡があるのかどうかを調べる目的で諏訪南山崎遺跡では４点の土器片、古市河原田遺跡では１点の土器片から圧痕を採集してレプリカ法（1987：丑野、1990：丑野、1991：丑野、田川）による観察を試みた。レプリカ法の応用に関して別の文献（2001：丑野）に概要を記してあるので参照していただきたい。

２．レプリカの作成

土器片に残されている観察対象部分をよく洗浄して表面に附着している汚れを取り除いた後、印象材を充填してレプリカを作成した。作成したレプリカは、表面を清掃して観察用の資料とする。あらかじめルーペ、実体顕微鏡などでレプリカの特徴を把握しておき、電子顕微鏡による観察に備える。不備があった資料に関しては再度レプリカをとることとした。

レプリカを作るために使用した印象材はCaulk社（米国）製のReprosil（レギュラータイプ）を使用した。細部の観察を行うために使用した電子顕微鏡は日立電界放射型Ｓ-2250Ｎである。

３．観　　察

観察は肉眼、ルーペ、実体顕微鏡を使用して性格を把握した後、細部の観察を行うために走査型電子顕微鏡を使用している。走査型電子顕微鏡（以下、SEMとする）は日立電界放射型Ｓ-2250Ｎである。

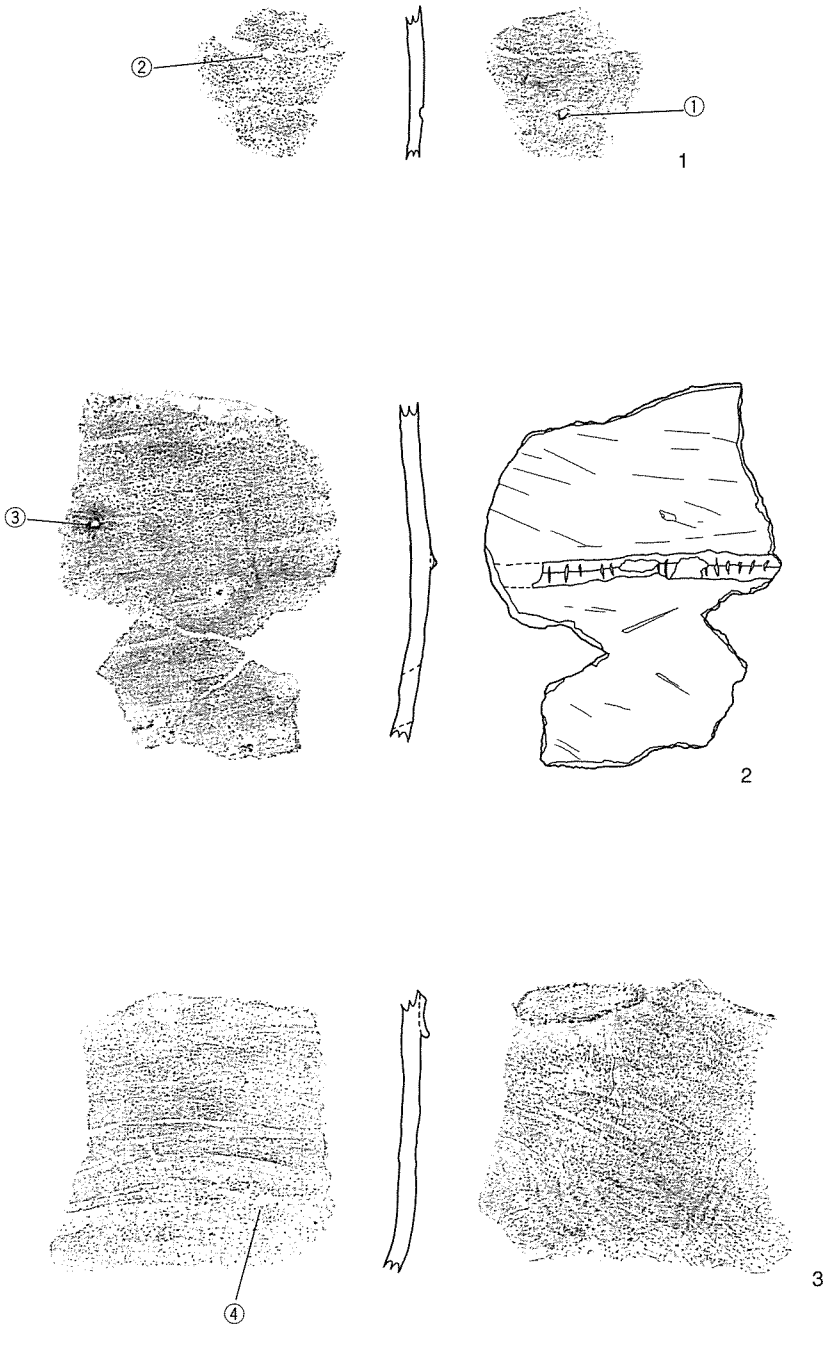
なお観察はレプリカを使用していることから、実際の土器資料とは凹凸・左右が逆になっている。稲籾の部分名称に関しては、第91図として掲げてあるので参照していただきたい。また、一部にステレオ撮影した写真を使っているので位置や形の確認に利用していただきたい。

１）諏訪南山崎遺跡①（第90図－１、図版67－1～6）

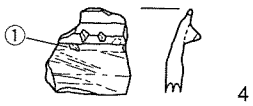
土器片の胴部外表面に残されていた圧痕（図版67－1）。稲籾による圧痕であると判断した。レプリカの右上をかすめて斜めに走っているのは土器片の接合部分である（図版67－２）。光沢のある部分は接着材。圧痕の表面は接着材に薄く覆われているため全体的な形は必ずしも明瞭ではないが、顆粒状の突起、穎の合わせ目などの稲籾の穎に特徴的な表面形状を観察することができた。図版67－３～５は資料台の向きを変えて撮影した写真である。図版67－２を基準にしたとき、それぞれ左から、下から、上からの順に掲げておいた。図版67－６は図版67－３の左端に見えている顆粒状の突起を拡大した写真で、突起が整然と並んでいるようすは観察できるが、フモウは定かではない。強いていえば、矢印の先端に見えている左上がりの繊維状をした部分がそうであろうか。

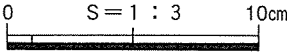
２）諏訪南山崎遺跡②（第90図－１、図版68－７～９）

１）の内表面に残されていた圧痕（図版68－７）。肉眼で観察した段階では、大きさ、外形上から稲籾によく似ている印象を受けたが、SEMによってその詳細を観察した結果では、稲籾らしい特徴を見つけることはできなかった。かろうじて見えている長軸方向に走る２条の線が稲籾の穎に見られる線と類似するのみであった（図版68－８、９）。写真に見えている通り、この圧痕の表面は薄く細かな粒子からなる泥状の物によって覆われているかのようにみえる。レプリカを採集する際には圧痕の内部を充分洗浄し、泥など残存物のないことを確認していることから、圧痕に泥が詰まっているとは考えられない。あるいは混入した物の表面が泥状の薄い皮膜によって覆われたままの状態であったため、このような表面形状をした圧痕が残ったのであろうか。圧痕の右端に見えている、滑面を持つ角張った平面形は砂粒が残した圧痕である。砂粒の圧痕が窪みになっていることから、土器片に残っている砂粒であることが判る。レプリカがこうした形状になっている原因は今のところ不明である。いまの仮説に従えば、泥の皮膜に覆われた籾がそのまま胎土中に入りそのまま圧痕を残した。その後土器を乾燥している内に籾と共に胎土とは異質の泥も剥落、あるいは焼成を経る中で燃焼した籾と泥が剥落した、ということも考えられよう。このことは実験による検証の結果を見るまで結論を保留したい。



1～3：諏訪南山崎遺跡
4：古市河原田遺跡





第90図　レプリカ法による観察資料

3）諏訪南山崎遺跡③（第90図－2、図版68－10・11）

胴部破片の内表面に残されていた圧痕（図版68－10）。全長4㎜余りの扁平な圧痕で、鳥の羽根状をしている（図版68－11）。表面には右端上部に見えている亀裂のような線が見えるのみであり、さらに圧痕を形作っている周辺の輪郭線は壊れたようなギザギザになっていて本来の形を表しているとは思えない。この圧痕に関しても原体は不明である。

4）諏訪南山崎遺跡④（第90図－3、図版69－12～16）

口縁部破片の内表面に残されていた圧痕（図版69－12）。形の上では2）で示した圧痕に比べると、より稲籾の特徴を有しているように見える。しかし、この資料に関しても表面の形状は明瞭とは言いがたい。右側上方にあいている砂粒の圧痕は大変明瞭に残っている（図版69－13）ことから、2）と同じく土器が土中に埋蔵されている時に詰まった泥ではなく、原体が混入した段階でこの形になったものと思われる。それぞれ向きを変えて撮影した図版69－14～16を見てもわかるように、稲籾かどうかを判別する重要な特徴である顆粒状の突起やフモウを観察することはできなかった。決定的な証拠には欠けるものの、稲籾の内穎、外穎と形がよく似ていること、および図版69－12の下端に見えているフサキ状の部分、同じく上端に見えている小穂軸のように見える部分、大きさから、ここでは稲籾の可能性が高いと判断した。

5）諏訪南山崎遺跡⑤（図版70－17～24）

胴部破片の内表面に残されていた圧痕（図版70－17）。採取したレプリカを観察したところ、二カ所から異なる圧痕を確認することができた。一つは茎状をした断片。図版70－18で判るように、一端は引きちぎれたような切り口が残り、長さの揃わない繊維がばらけた状態で残されている。他方は土器片の外に出ているため端部の状態は定かでないが、いくつかの繊維がまとまっている様子をうかがうことができる。中程では1本になっていることから、この形が本来の姿であり、表皮を剥がすと両端に見られるような形になっているのであろう。図版70－19は図版70－18を60°上方に回転させて撮影している。断面形を判断できる撮影をしなかったので断定はできないが、完全な円筒形ではないようである。

もう一カ所から得た圧痕を図版70－20～24に示した。図版70－20は正面から撮影した写真で、図版70－21はそれを50°傾けて下方から撮影している。写真のほぼ中央部の左側には300μm程の大きさをした種子状の、右側には方形をした500μm程の方形をして内側にメッシュ状の紋様を持つ圧痕が見えている。その部分を拡大した写真を図版70－22に示した。この写真は正面から撮影しているので、右のメッシュ状の圧痕があまり明瞭ではないが、それを50°傾けて下方から撮影した図版70－23をみると、稲籾の穎の表面と同様の顆粒状をした突起がはっきり見える。また右上隅の表面にはフモウのような短い繊維状をした条が見えている。これだけのことからこの圧痕が稲籾の穎であるとは断定できないが、その可能性は小さくない。図版70－24は種子状の圧痕を拡大した写真。やや扁平な楕円形をしている。左端部分では表皮の一部が2枚剥がれその内側から実が出ているように見えているが、圧痕を残した原体が何であるのか今のところ不明である。

6）古市河原田遺跡①（第90図－4、図版71－25～29、図版72－30・31）

土器片の外表面にある突帯文の部分に残されていた圧痕（図版71－25）。図版71－26は下方から、図版71－27は正面から撮影した写真である。形状からは稲籾は勿論、種子であるかどうかも判断するだけの根拠を見つけることはできなかった。表面のようすを拡大して観察したが、図版71－28で示したように表面は鱗状をした物で覆われている。これが圧痕を残した原体の表面組織であるのかないのか現状では不明である。図版71－29は図版71－26，27につけた矢印の先端部分において観察できた毛である。表面にキューティクルが見えていることから動物の物と思われるが、人毛かどうかを含めて同定できていない。表面から浮き上がって附着しているようなので、圧痕ではなく土器を水洗した後に器面に附着した可能性が高い。ステレオ写真にしてあるので、実体視すればより実感できるであろう。こうしたあとからの異物の混入はレプリカを採集する際に良くクリーニングしたつもりでも除去しきれない場合があり、時たま誤った判断をすることがある。最も多い例は土器をくるむときに使用した綿や紙の繊維である。

図版71－27の近くで見つかった種子状の圧痕を図版72－30に示した。図版72－31はそれを拡大し、ステレオ写真として撮影した。表皮は一部剥離し、扁平ではあるが角が丸味を持つ菱形をしているようである。5）とした諏訪南山崎遺跡⑤の種子状の圧痕（図版71－24）とは大きさも形状も違っているので、種類は異なるのであろう。

4．まとめ

諏訪南山崎遺跡から出土した土器片５点から、古市河原田遺跡から出土した土器片１点から２種類の圧痕を観察した。結果は上に記した通りである。

形状、大きさが近似しているにもかかわらず、今回保留した２）の資料、および稲籾の可能性が高いと判断した４）の資料は、圧痕サンプルから種を同定することの一つの限界であろう。実体があれば、組織でもDNAでも取り出して分析ができる。しかし、レプリカ法による観察によって形態的に同定できる資料であるなら、土器という絶対的な層位に保存されているため、時期決定は確実に行うことができる。それであるからこそ同定は慎重に行いたい。

あとから附着した可能性の高い「毛」をあえて掲載したのは、これからレプリカ法を試みたいと思っている方に、レプリカをとる際のクリーニングがいかに重要であり、そして難しいかを知っていただきたかったからである。先述したように、土器という確実な層位があるため、観察にも遺漏がないようにしたい。なお、レプリカ法による筆者の観察ではイネの種類、粳米か糯米か、あるいは陸稲か水稲かなどの判断はできない。これは植物の研究者からも、少なくともレプリカでは判らないと言われている。

参考文献：

丑野　毅　1983　「寄居町用土・平遺跡」『寄居町史』原始・古代・中世編　　寄居町教育委員会

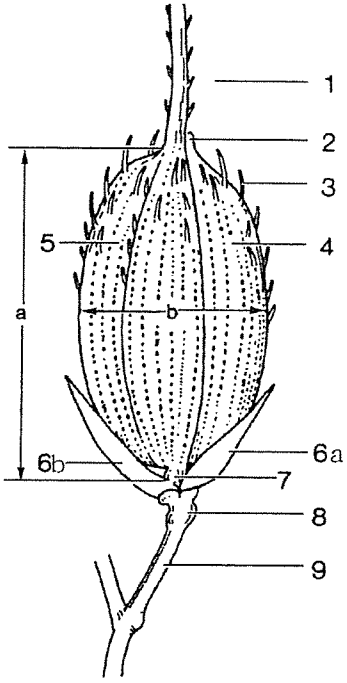
丑野　毅　1990　「上小岩遺跡の土器破片にみられた圧痕」　『上小岩遺跡Ⅱ』　上小岩遺跡調査会

丑野　毅、田川裕美　1991　「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』第24号 日本文化財科学会

丑野　毅　1994　「土器に残された圧痕」『大塚遺跡』Ⅱ（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

丑野　毅　2000　「遺物に残された痕跡」『第２回考古科学シンポジウム』　東京大学原子力研究総合センター・東京大学総合研究博物館・東京大学埋蔵文化財調査室

丑野　毅　2001　「レプリカを用いた考古遺物の解析」『真贋のはざま［デュシャンから遺伝子まで］』西野嘉章編　東京大学総合研究博物館



1　：芒
2　：稃先
3　：稃毛（フモウ）
4　：内穎
5　：外穎
6a：上の護穎
6b：下の護穎
7　：小穂軸
8　：副護軸
9　：小枝梗
a　：長さ
b　：幅

第91図　稲籾の部分名称

第７節　諏訪南山崎遺跡出土籾痕土器の評価について

中　沢　道　彦

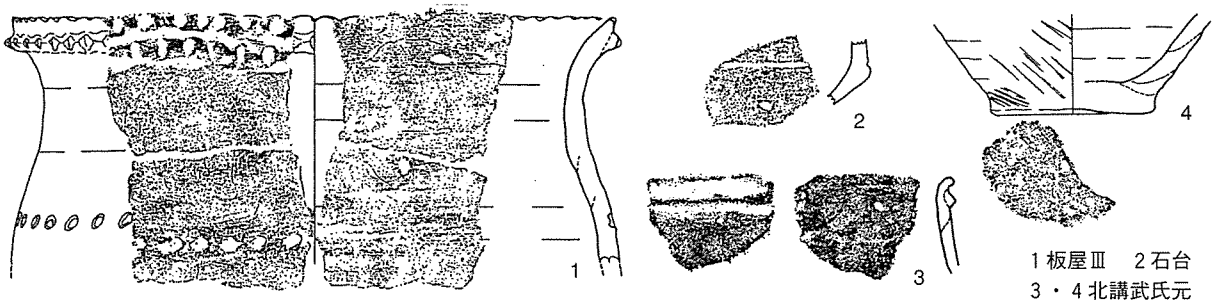
第６節において丑野が、諏訪南山崎遺跡で４点の土器、７ヶ所の圧痕、米子市古市河原田遺跡で１点の土器、２ヶ所の圧痕をレプリカ法により観察した結果、諏訪南山崎遺跡出土、土器１点１箇所の圧痕が稲籾によるもの、また土器２点２ヶ所の圧痕が稲籾による圧痕である可能性が高いと確認できた。筆者と丑野はこれまでも山陰地方縄文時代晩期後半～弥生時代前期後半土器の籾圧痕をレプリカ法で観察したことがあり、その成果も踏まえて本例に対する若干の評価を試みたい。

本遺跡第Ⅴ層出土の土器群は縄文時代晩期末の古海式から越敷山式が主となる。第90図1は外面に籾圧痕をもつ無文土器破片。第90図３は突帯をもつ深鉢の口縁部。内面に稲籾による可能性の高い圧痕をもつ。突帯はおそらく口縁端部から弧状に貼付され、無刻である。山陰の縄文時代晩期後半から弥生時代前期前半の土器編年は「桂見遺跡自然河川01段階」、古市河原田式、古海式、越敷山式／原山式、「イキスタイプ」／弥生時代前期前半と濱田竜彦により整理されており（濱田2000他）、筆者もそれを基本とする(註1)。ただし、米子平野の突帯文土器は古海式（併行）でも突帯が口縁端部から下がった位置にあるものもあり、また無刻突帯は古市河原田式で１割程度組成するようで、山陰の中でも突帯文土器諸型式の小地域差は検討課題といえるが、第90図３の例は古海式突帯文土器と考えられよう。第90図１については、無文のため、縄文時代晩期末古海式～越敷山式土器とまでしかいえない。

ここで、山陰における縄文時代晩期後半から弥生時代前期のコメに関するデータを確認しよう。伯耆の米子平野では米子市目久美遺跡では晩期後半古市河原田式から古海式を主体とする第Ⅶ層茶褐色マコモ混土層でオオムギ穎２点、ヒエ５点とともに炭化米５点、弥生時代前期前半主体の第Ⅵ層下層ではヒエ48点、オオムギ１点、炭化米55点が出土している。第Ⅶ層出土資料が第Ⅵ層下層からの混入であるか否かの厳密な検証作業は必要であろうが、時期的には不自然でない。第90図３の諏訪南山崎遺跡例が古海式、第90図１が古海式か越敷山式とするならば、目久美遺跡第Ⅶ層例とともに突帯文土器期のコメの存在を示す重要な資料となる。

出雲の平野部では島根県松江市石台遺跡で第92図２の古市河原田式か古海式精製浅鉢、同市（旧鹿島町）北講武氏元遺跡で第92図３、４の弥生時代前期前半「イキスタイプ」突帯文土器に籾痕が認められる。また石台遺跡の試掘調査では土坑から古海式に伴い16点の炭化米が出土している。

出雲の山地では島根県飯南町（旧頓原町）板屋Ⅲ遺跡で第92図１の「桂見遺跡自然河川01段階」併行の前池式突帯文土器内面に籾痕が確認されている。



第92図　山陰地方の籾痕をもつ突帯文土器

現状の山陰では晩期後半突帯文土器期を遡るコメの存在を証明する資料はない。突帯文土器期では土器の籾痕では前池式の板屋Ⅲ遺跡例が最も古く、古市河原田式か古海式の石台遺跡例がそれに次ぐ。第90図３の諏訪南山崎遺跡例が古海式（併行）とするならば、石台遺跡例と同時期かそれに次ぐ古さということになる。山陰の突帯文土器期においては水田による稲作の可能性は高いだろうし、諏訪南山崎遺跡例もそれを補強する資料とは評価できる。ただ、山陰の当該期では鳥取県南部町（旧会見町）枇杷谷遺跡、伯耆町（旧溝口町）宇代横平遺跡、島根県出雲市三田谷Ⅰ遺跡などで低湿地型貯蔵穴も検出され、堅果類への依存度の高さも否定はできない。今後は、総合的な資料蓄積により該期の生業復元を試みる必要があるのだろう。

【註】

１）山陰の該期の土器についてはこれまで濵田竜彦から様々な点を御教示いただいている。

【参考文献】

赤澤秀則　1989　『北講武氏元遺跡』　鹿島町教育委員会

丑野　毅・田川裕美　1991　「レプリカ法による土器圧痕の観察」　『考古学と自然科学』24　日本文化財科学会　pp.13～36

江川幸子・内田律雄　1988　「石台遺跡の試掘調査―炭化米を出土した縄文晩期の土壙―」　『季刊文化財』第62号　島根県文化財愛護協会　pp20～27

角田徳幸・片岡宏二・渡部忠世他　1998　『板屋Ⅲ遺跡』　島根県教育委員会

小原貴樹・笠原安男・武田満子・藤沢浅他　1986　『目久美遺跡』　米子市教育委員会

中沢道彦・丑野毅　2003ａ　「レプリカ法による山陰地方縄文時代晩期土器の籾状圧痕の観察」　『縄文時代』第14号　pp.139～153　縄文時代文化研究会

中沢道彦　2005　「山陰地方における縄文時代の植物質食料について－栽培植物の問題を中心に－」『第16回中四国縄文研究会　縄文時代晩期の山陰地方　発表資料集』　中四国縄文研究会　pp.109～130

西伯耆弥生集落検討会編　2001　『第3回西伯耆弥生集落検討会　山陰地方における弥生時代前期の地域相　資料集』　西伯耆弥生集落検討会

濵田竜彦・濵隆造・古田学他　1999　『古市遺跡群Ⅰ』　鳥取県教育文化財団

濵田竜彦　2000　「山陰地方における弥生文化成立期の様相―山陰東部を中心に―」　『第47回埋蔵文化財研究集会　弥生文化の成立』　埋蔵文化財研究会　pp55～74

前島己基　1977　「籾痕のついた縄文式土器の破片」　『季刊文化財』第31号　島根県文化財愛護協会　pp19～23

柳浦俊一・守岡正司　1993　『石台遺跡Ⅱ』　島根県教育委員会

第5章　まとめ

今回の調査では、当遺跡は断続的ではあるが、縄文時代～近世に至る複合遺跡であるということを確認した。また、調査の結果、縄文時代～弥生時代中期前葉、弥生時代中期中葉～後葉、弥生時代後期中葉～後葉、古墳時代前期～中期、古墳時代後期～平安時代、中世～近世の6時期に大別できるものと思われる。

本章では、上記の時期毎に当遺跡の変遷を概観し、併せて、当遺跡が所在する長者原台地での遺跡の時期的な動向についても言及したい。

縄文時代～弥生時代中期前葉

当該期の遺構は縄文時代の落し穴を1基確認したのみである。落し穴は東へのびる小尾根上に位置し、落し穴の近辺からは量的には少ないが、石鏃が出土しており、調査地北側を中心に狩猟活動が展開されたものと考えられる。

縄文時代晩期末には約80点の突帯文土器が出土している。これらは、台地上部から流入、堆積した層や近世以降の層から出土したもので、さらに、新しい時期の遺物と層位的に共伴していることから、資料的には良好な出土状況を示しているとはいえないが、これらの中には籾痕が認められるものが2点存在する。

この籾痕土器は縄文時代晩期末に位置づけられるもので、籾痕については丑野毅氏のレプリカ法による鑑定の結果、いずれも稲であるとの結果を得た。(第4章　第6節に詳述)。

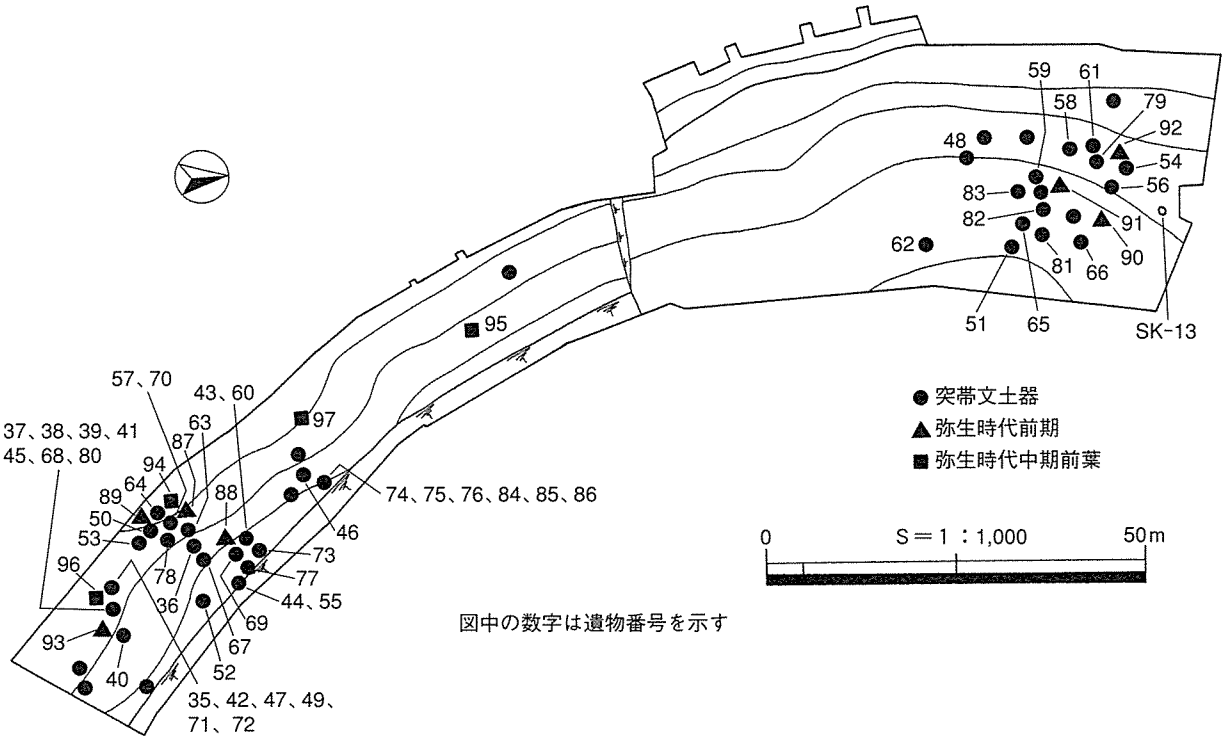
籾痕土器の存在意義については、中沢道彦氏は、1．稲作をその土器を製作する地域で行っていた。2．他地域で作られた稲籾、もしくは米がもたらされた。3．他地域で作られた籾痕土器がもたらされた。という3つのパターンを想定している(註1)。当遺跡から出土した土器については、胎土分析など化学的な分析を行っていないため、その供給先は不明であるが、当遺跡からは打製土掘具が18点と比較的多く出土しており、使用痕分析の結果、これらは鍬や鋤のような土掘具として使用されたものと考えられることからも、当遺跡周辺で稲作を行っていたことはほぼ間違いないものと思われる。しかし、石庖丁などの穂摘具(註2)が出土しておらず、その実態は不明な部分が多い。

今回の調査では水田遺構を確認しておらず、籾痕土器が出土した層の直下層（無遺物層）のプラント・オパール分析では、当遺跡では稲作の可能性は低いという結果が提示された。(第4章　第1節に詳述）しかし、以上の結果から、直ちに稲作が行われなかったという否定的な考えではなく、稲作耕地については、調査区外東側の低湿地部分に存在したか、あるいは籾痕土器が出土した周辺に存在していたものが、後世の削平などによって既に失われている可能性を指摘しておきたい。なお、調査区外東側の低湿地部分は試掘調査の結果、圃場整備によって大きく改変を受けており、遺跡の存在はほとんど望めない(註3)。

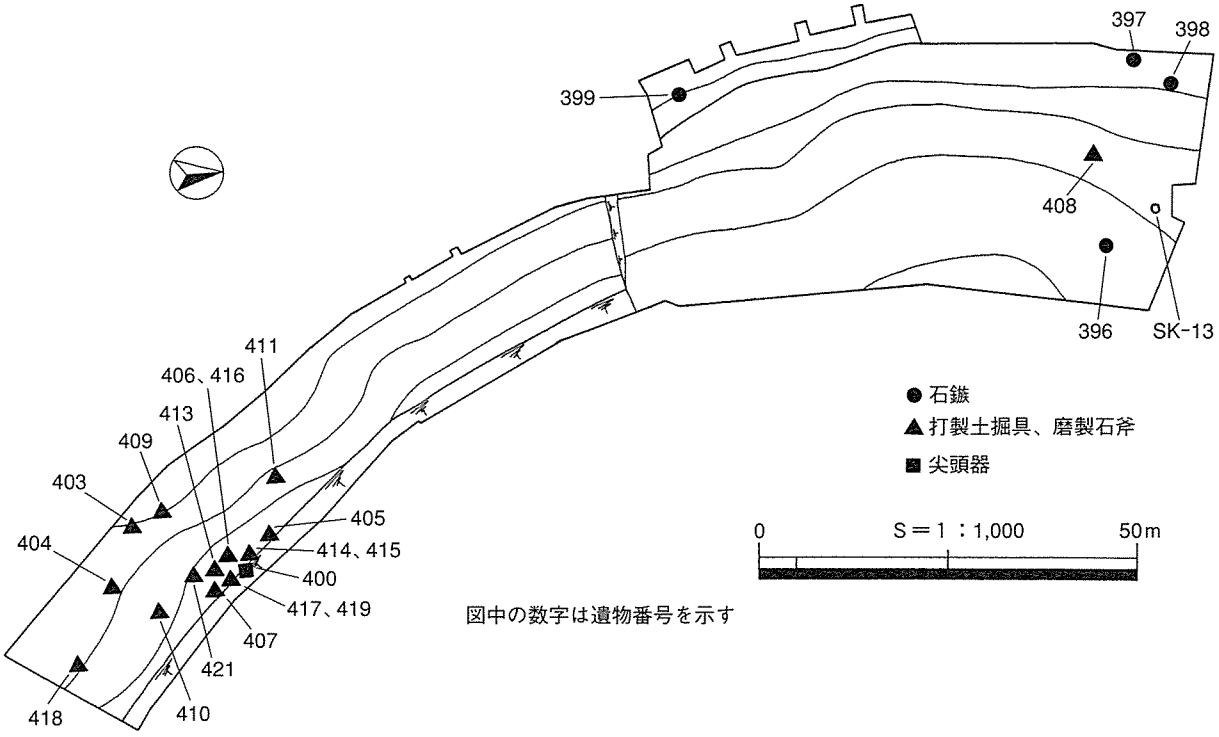
当遺跡における当該期の遺物の出土状況は、縄文時代晩期末に位置付けられる突帯文土器は調査区の北側と南側に集中して出土している。突帯がつく位置の違いによる分布的特徴は特には認められないが、調査区の北側では突帯に刻目を持つものがほとんど認められないのに対して、調査区の南側では突帯に刻目を持つものが3割程度認められる。

なお、調査区の南側では籾痕土器が出土し、打製土掘具も調査区の南側で集中して出土していることから、調査区の南側周辺に当該期の水田が存在したものと想定される。

弥生時代前期の土器は7点、弥生時代中期前葉の土器は4点と出土量は極端に少なくなり、その分布状況を断定的に論ずるのにはかなり無理があるが、現状では弥生時代前期の土器は突帯文土器の分布と一致するのに対して、中期前葉の土器は調査区の北側では認められず、調査区中央南寄りから南側にかけて出土する傾向にある。なお、弥生時代前期の土器は、木葉文を施したものが調査区の北側から出土するのに対して、これ以外のものは調査区の南側から出土するという特徴がある。



第93図　縄文時代晩期末～弥生時代中期前葉の土器出土分布図



第94図　石器出土分布図

1　福市遺跡
2　青木遺跡
3　樋ノ口第３遺跡
4　諏訪成ヶ谷西遺跡
5　別所新田遺跡
6　別所中原遺跡
7　諏訪西山ノ後遺跡
8　諏訪南山崎遺跡
9　諏訪西土取場遺跡
10　別所第６遺跡

第95図　長者原台地における縄文時代の遺跡分布図

1　別所新田遺跡
2　諏訪南山崎遺跡

第96図　長者原台地における弥生時代前期～中期前葉の遺跡分布図

縄文時代後晩期の長者原台地は、各所で落し穴が確認されており、狩猟活動の場として展開していたものと思われる。しかし、当該期の住居跡などは確認されておらず、その生活領域及び活動領域などの実態は明らかとはなっていない。

なお、諏訪西土取場遺跡(註4)では、落し穴の中位から後期後葉～晩期前葉であると考えられる粗製土器が7点まとまって出土しており、当該期の生活様式や狩猟活動の実態を窺う手掛かりとなるかもしれない。

長者原台地では、現在のところ諏訪南山崎遺跡と別所新田遺跡(註5)以外、弥生時代前期の遺跡は確認されておらず、台地上では遺跡が縄文時代晩期から弥生時代前期へと連続する状況は窺うことができない。しかし、諏訪南山崎遺跡と別所新田遺跡や周辺の遺跡の状況から勘案すると、台地の裾部に縄文時代晩期から弥生時代前期へと連続する遺跡が存在するものと考えられる。

弥生時代前期末～中期前葉には、長者原台地とは小平野を隔てて対峙する丘陵上に立地する宮尾遺跡、天王原遺跡、天万遺跡では断面V字状を呈する環濠が確認されており(註6)、この小平野を中心とした積極的な開発を窺うことができる。

なお、長者原台地を開折する谷の縁辺部に位置する別所新田遺跡では、前期末であると推定される土壙墓が25基確認されており、谷部を生産基盤とした集団の墓地として位置づけられるものと考えられる。

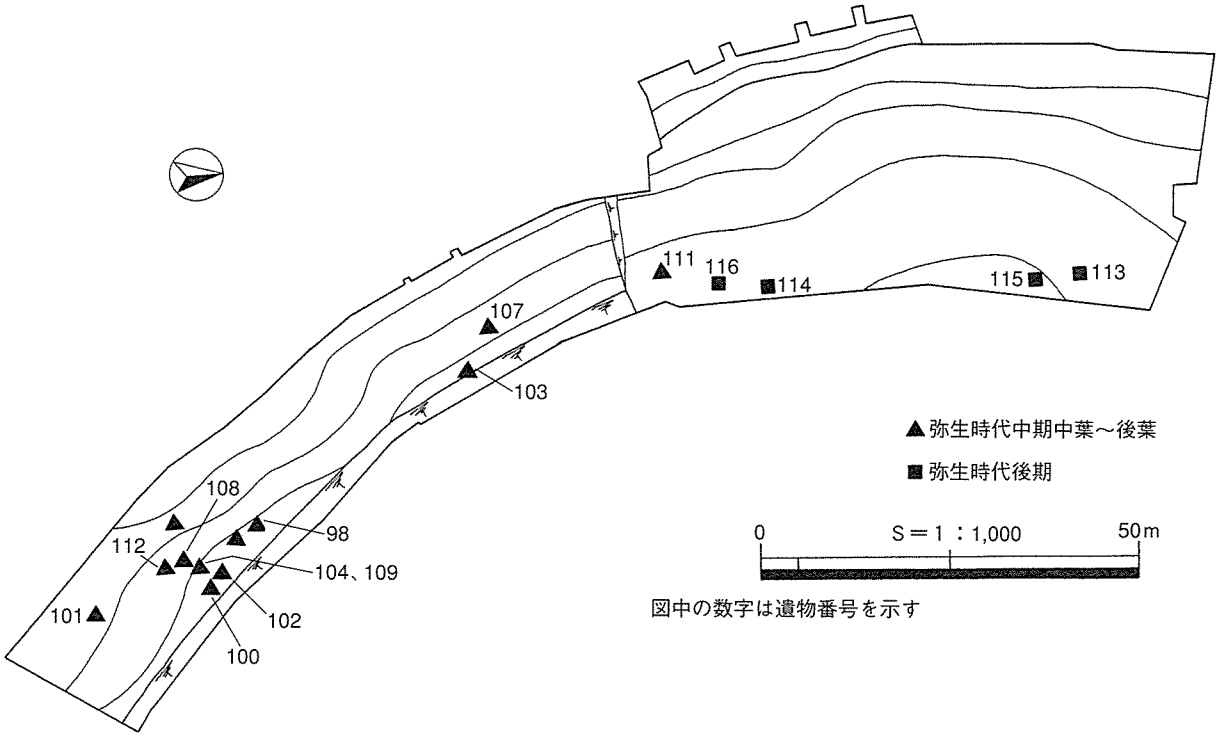
このように当該期には、周辺の低湿地の開発が積極的に行われるようになるものと考えられる。

弥生時代中期中葉～後葉

当該期の遺構は確認できなかったが、遺物が若干出土している。

調査地西側の台地上に立地する諏訪東チンゴ原遺跡(註7)では遺構は確認できなかったが、主に当該期の遺物が出土していることから、調査地西側の台地上に当該期の集落が存在するものと思われる。なお、同遺跡からは後期の遺物が出土していないことから、後期には集落が廃絶したものと思われる。

当遺跡における当該期の遺物の出土状況は、全体的に出土量が少ないが、調査区の中央から南側にかけて出土しており、これらは位置的に諏訪東チンゴ原遺跡から流れ込んだものと考えられる。



第97図　弥生時代中期中葉～後期の遺物出土分布図

当該期の長者原台地は、今まで台地上には存在しなかった集落が中期中葉から形成され始めるが、数的には少ない。青木遺跡(註8)は中期中葉に集落の形成がはじまり、後葉にかけて盛行を迎え、地域の拠点的な集落となるが、これに対して、諏訪南山崎遺跡や別所第6遺跡(註9)はごく短期間で集落が廃絶しており、青木遺跡や同じく当該期の拠点的集落である越敷山遺跡群(註10)に集約、統合されたのであろうか。

なお、別所第6遺跡では中期末の土壙墓が1基確認され、丹彩し、底部を穿孔した供献土器が出土しており、墓制においても新たな展開が窺える。

1　青木遺跡
2　諏訪東チンゴ原遺跡
3　諏訪南山崎遺跡

第98図　長者原台地における弥生時代中期中葉の遺跡分布図

1　青木遺跡
2　諏訪西山ノ後遺跡
3　諏訪東チンゴ原遺跡
4　諏訪南山崎遺跡
5　別所第6遺跡

第99図　長者原台地における弥生時代中期後葉の遺跡分布図

弥生時代後期中葉～後葉

当該期の遺構は確認できず、土器が4点出土したのみである。また、調査地西側の台地上に立地する諏訪東チンゴ原遺跡では確実に後期であると判断できる土器は出土しておらず、現状では調査地周辺に集落の存在を想定するのは非常に困難である。

当遺跡における当該期の遺物の出土状況は、量的には少ないが、調査区の北側から出土しており、前代の弥生時代中期中葉～中期後葉の遺物の出土状況とは対称的である。

1　青木遺跡
2　諏訪西山ノ後遺跡
3　別所第6遺跡
4　岩屋谷荒神上遺跡

第100図　長者原台地における弥生時代後期前葉の遺跡分布図

1　福市遺跡
2　青木遺跡
3　諏訪西山ノ後遺跡
4　諏訪南山崎遺跡

第101図　長者原台地における弥生時代後期中葉～後葉の遺跡分布図

当該期の長者原台地は、青木遺跡と福市遺跡[註11]で地域の拠点となる大規模な集落の形成が認められるが、青木遺跡では中期中葉～後葉に盛行を迎えた集落が中期末～後期前葉には一時衰退し、後期中葉～後葉には再び盛行を迎えるという消長をたどる。また、福市遺跡の集落は後期後葉に形成が開始されたものであり、中期中葉～後葉には地域の拠点的位置にあった台地北側の先端部は後期前葉には集落が希薄な地域となる。

一方、台地の南側奥部では岩屋谷荒神上遺跡[註12]と別所第６遺跡で、台地の東側縁辺部では諏訪西山ノ後遺跡で後期前葉の小規模な集落が確認されている[註13]ことから、後期前葉には青木遺跡から分村したものと思われる小規模な集落が台地全体に散在していたものと思われる。しかし、後期中葉～後葉には、諏訪西山ノ後遺跡では集落の存続が認められるが、これ以外の集落は再び青木遺跡や福市遺跡に集約・統合された可能性がある。

古墳時代前期～中期

当該期の遺構は、前期後半の竪穴住居跡１棟と中期前半の土坑１基を確認した。いずれも集落の縁辺部に位置するものと思われ、集落の本体は調査地西側の台地上に存在するものと考えられる。

竪穴住居跡（ＳＩ－０３）は主柱穴が２本で、壁際に特殊ピットを有する。特殊ピット内には集石が認められ、その直上からは土師器高坏脚部が出土している。

当遺跡と同じ長者原台地上に位置する福市遺跡と諏訪西山ノ後遺跡では、竪穴住居を廃棄する際に竪穴住居内に礫を投棄したものが数例認められる。諏訪西山ノ後遺跡のＳＩ－０２では、住居の廃棄時に大量の河原石が投棄されており、さらに、２基の柱穴内に1個体分の甕と高坏が埋置され、特殊ピット内にも河原石が置かれていた[註14]。特殊ピット内に河原石が置かれたのは、住居の築造時、廃棄時、存続時のいずれかははっきりしないが、いずれにしても建築儀礼的なものであると考えられる。

当遺跡のＳＩ－０３の特殊ピットは、周壁溝の埋土との切合関係から、少なくとも住居の存続時には機能していたものと思われ、さらに、特殊ピット内とその北東側の肩にある１石以外に住居跡の埋土から数個の礫が出土していることから、当遺跡のＳＩ－０３の特殊ピット内にみられる集石及び土師器高坏脚部の出土は、住居の廃棄に伴う何らかの祭祀行為を示唆している可能性がある。

中期前半の土坑（ＳＫ－４６）は、床面や壁が被熱した痕跡は認められないが、埋土内には焼土や炭化物が混じっており、煤が付着した土師器甕が出土していることからも、火処と関連がある可能性がある。

当遺跡の当該期の集落は、遺物の出土量から、前期前半頃に形成され始め、前期後半から中期に盛行を迎えたものと考えられる。しかし、６世紀前半の土器が認められないことから、この頃に集落が廃絶したものと思われる。

当遺跡における当該期の遺物の出土状況は、前期の土器は調査区の南側と北側の両方から出土するのに対して、中期の土器は調査区の北側ではほとんど認められず、主に調査区の南側から出土している。なお、当該期の遺構が確認された周辺は遺物の分布はほとんど認められない。

出土遺物の器種組成は、前期のものは壺甕類が多いが、高坏や器台、低脚坏が若干認められる。これに対して中期のものは壺甕類以外のものはほとんど認められず、完形にはならないまでも、ある程度形になるものが多い。

当該期の長者原台地は、前期を通して福市遺跡と諏訪西山ノ後遺跡では集落の形成が認められるのに対して、前代に全盛を誇った青木遺跡の集落は急激に小規模化し、中期前半まで集落の形成はほとんど認められなくなる。

なお、当該期には墓制において階層差が顕著となっており、福市遺跡日焼山地区では、同一墓域内で円墳１基と土壙墓24基が確認されている。また、青木遺跡でも隣接するように古墳17基と方形周溝墓29基が確認され、さらに、古墳内にも主体部や出土遺物に格差が認められる。しかし、このような墓制における階層分化と集落の消長がどのように関係してくるのかは現段階では不明な点が多く、今後の展開に期待したい。

中期前半の集落は、長者原台地では現在のところ、諏訪南山崎遺跡以外認められないが、中期後半になると再び集落が形成され始めるとともに、古墳群が造営されるようになる。

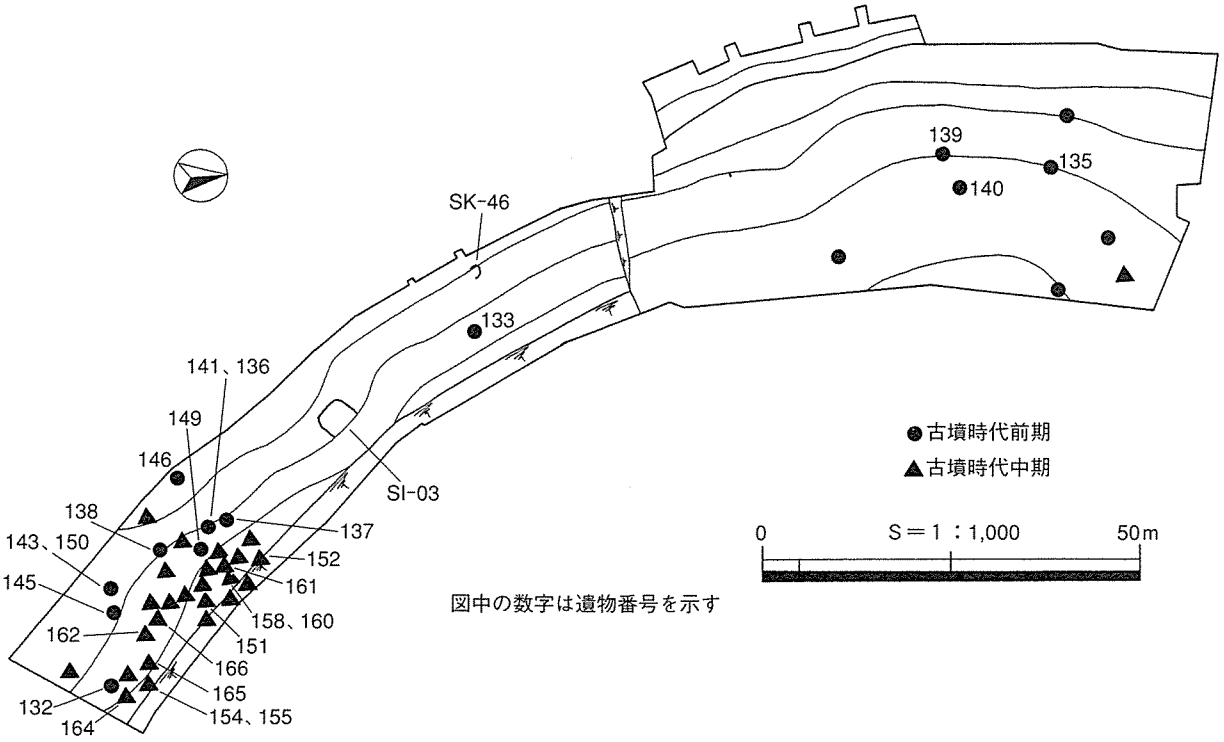
調査地の南東約200～1000mには長者原古墳群が存在し、諏訪西山ノ後遺跡でも当該期の古墳群が確認されている(注E15)。両古墳群に挟まれるような位置に当遺跡が存在するが、当遺跡の南側と北側には谷が入り込んでおり、これらの古墳群とはこの谷によって隔されていることから、当遺跡とこれらの古墳群とは直接的には関係がないものと思われる。なお、諏訪西山ノ後遺跡では当該期の集落は確認されていない。

長者原台地上での中期の集落と古墳群との関係は、台地の中央から西側については不明であるが、台地の東側では、台地の縁辺部に古墳群が造営され、その後背する場所に集落が展開するものとされている(注E16)。

樋ノ口古墳群(注E17)は台地の東側縁辺部に位置し、その後背に位置する場所に樋ノ口第3遺跡(注E18)、樋ノ口第4遺跡の集落が展開している。また、長者原古墳群と諏訪西山ノ後遺跡の古墳群も台地の縁辺部に位置しており、その後背に位置する場所に当該期の集落が存在するものと想定される。

しかし、これに対して例外的な事象が認められる。台地の縁辺部に位置する当遺跡からは中期の遺物が比較的まとまって出土している。近辺に古墳が存在していた可能性も捨象できないが、埴輪などが出土していないことや、当遺跡の西側の台地上に位置する諏訪東チンゴ原遺跡の調査では古墳を確認していないことから、その可能性は低いものと考えられ、どちらかというと当該期の集落の存在が想定され、従来考えられてきた当該期の集落と古墳群との位置的な関係に対して、新たな問題提起を与えるものである。

なお、諏訪西山ノ後遺跡では前期末～中期前半に集落の廃絶とともに古墳群の築造が開始され、青木遺跡では5世紀後半の古墳群が確認されているが、古墳築造の終焉とともに再び集落の形成が開始するという現象も看取され、集団の消長や集落の移動、そして古墳群の形成との関係を考えるうえではたいへん興味深いものである。



第102図　古墳時代前期～中期の遺物出土分布図

1　福市遺跡
2　青木遺跡
3　諏訪古墳群
4　諏訪西山ノ後遺跡
5　諏訪南山崎遺跡

第103図　長者原台地における古墳時代前期の遺跡分布図

1　福市遺跡
2　青木遺跡
3　樋ノ口第４遺跡
4　樋ノ口第３遺跡
5　樋ノ口古墳群
6　諏訪西山ノ後遺跡
7　諏訪南山崎遺跡
8　長者原古墳群

第104図　長者原台地における古墳時代中期の遺跡分布図

古墳時代後期～平安時代

当該期は当遺跡の最も中心となる時期で、その特徴は、赤彩土器や瓦などが出土しており、７世紀後半以降、官的な影響が濃くなるということである。米子平野の西部に位置する陰田遺跡群でも、既存の集落が７世紀中葉を境にして、官的な影響が濃くなることが指摘されおり(註19)、地域的に連動した動向が窺える。

当該期の遺構は、造り付け竈１基、段状遺構３基、掘立柱建物13棟、柵４条、土坑１基を確認した。

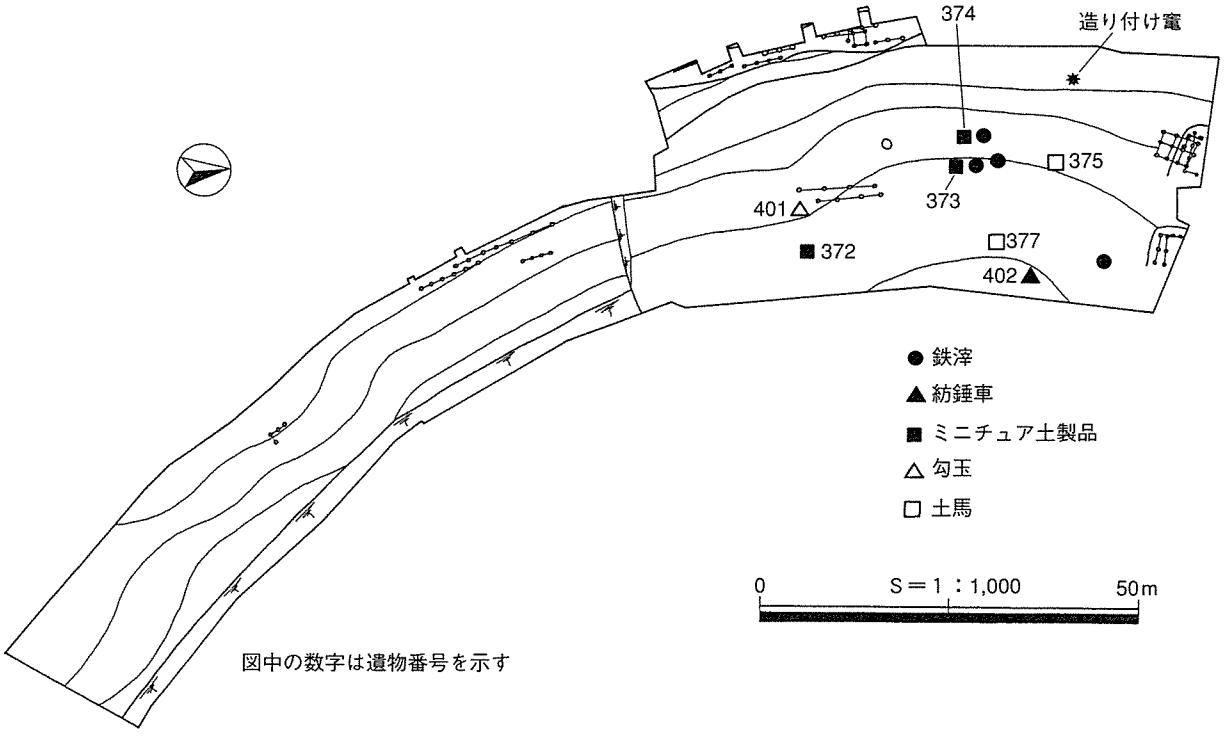
造り付け竈は、無柱穴の竪穴建物に伴うものであると推測され、放射性炭素年代測定の結果から７世紀中葉のものであると考えられる。また、造り付け竈の近辺からは少量ではあるが、鉄滓が出土していることから、鉄生産に関わる可能性がある。

前述したように当遺跡では7世紀後半以降、官的な影響が濃くなっており、7世紀中葉の造り付け竈はその過渡期に位置付けられるものであるが、これは官的な影響が及ぶ以前の集落を構成するものなのか、あるいは官的な影響下に組み込まれたものなのか、また、これを工房的な施設として考えたならば、集落内での消費に対して供給したものなのか、あるいは貢納物を生産したものなのかは現時点では判断できない。今後の調査に期待したい。

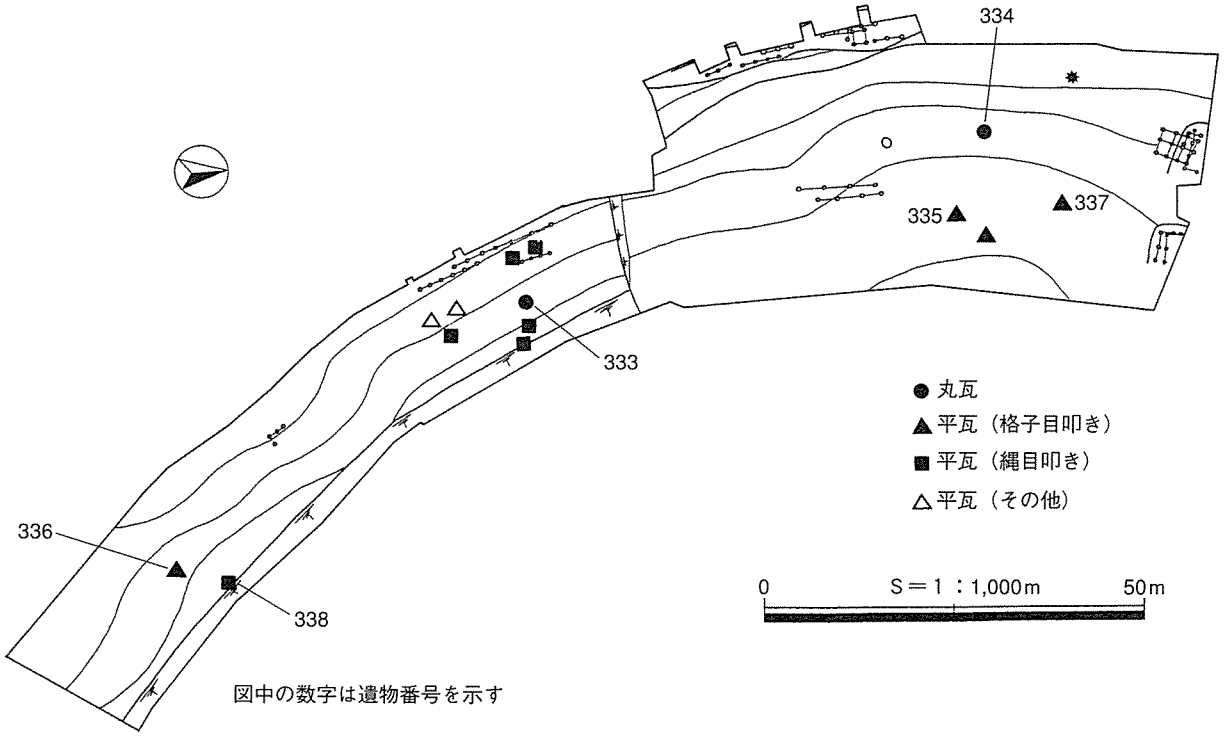
当遺跡では台地斜面に段状の平坦面（段状遺構）を造成して、そこに掘立柱建物を構築している。このような状況は当地域の当該期の集落には普遍的に認められるものである(註20)が、調査地の西側の台地上は比較的平坦で、集落を形成するのには好適地であるにも関わらず、このような立地形態をとるのには、占地において何らかの規制があったのか、あるいは斜面に立地する利便性があったのであろうか。

７世紀後半以降の集落の性格については、赤彩土器や瓦などが出土していることから、官的な影響を受けたものと考えられるが、建物の配置に規則性が認められないことや、炊飯具の比率が高いことから、山中敏史氏が分類する官衙補完施設であると考えられる。つまり、６世紀末に形成された集落が７世紀後半以降、律令体制下で官的な影響を受け、また、郡衙の近くに位置するということもあり、その機能の一部を補完する施設へと変容をとげたものと考えられる。

なお、今回の調査では、墨書土器などの文字資料が出土しなかったため、官衙の機能を補完する施設の詳細については明らかにすることができなかった。



第105図　鉄滓、紡錘車、ミニチュア土製品、勾玉、土馬出土分布図



第106図 瓦出土分布図

当遺跡における当該期の遺物の出土状況は、土馬、ミニチュア土製品といった祭祀具や鉄滓は量的には少ないが、主に造り付け竈周辺から転落したような位置から出土している。これらの時期については特定できないが、出土位置から、造り付け竈と関連がある可能性がある。

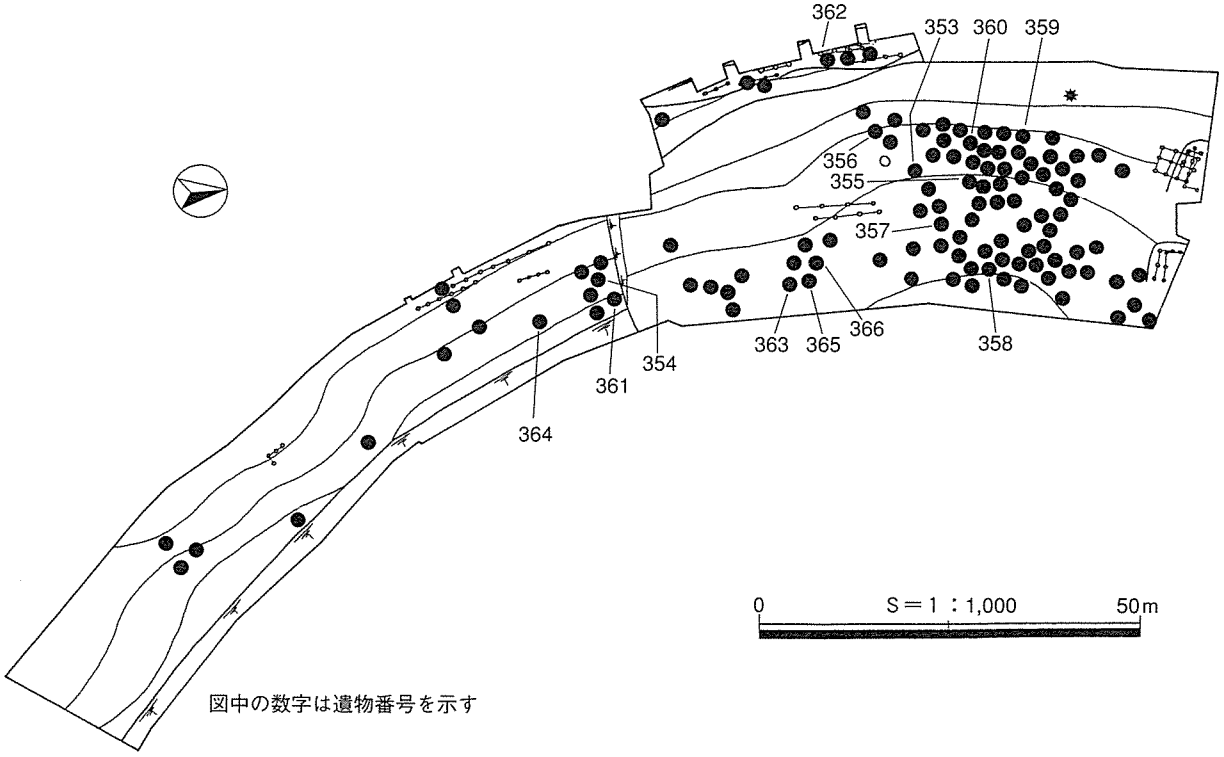
瓦は掘立柱建物や柵が確認されている調査地の北側と中央から主に出土しているが、出土量から瓦葺建物の存在は窺えない。なお、外面に格子目叩きを施す平瓦は主に調査区の北側から出土しているのに対して、外面に縄目叩きを施す平瓦は主に調査区の中央から出土する傾向にある。

移動式竈、土製支脚、甑といった炊飯具は、調査区の北側に集中しており、南へ行くにしたがって希薄になっている。また、黒色土器と風字硯は調査区の南側から出土しているのに対して、緑釉陶器は主に調査区の中央から出土しており、時期差や機能差を示唆している可能性がある。

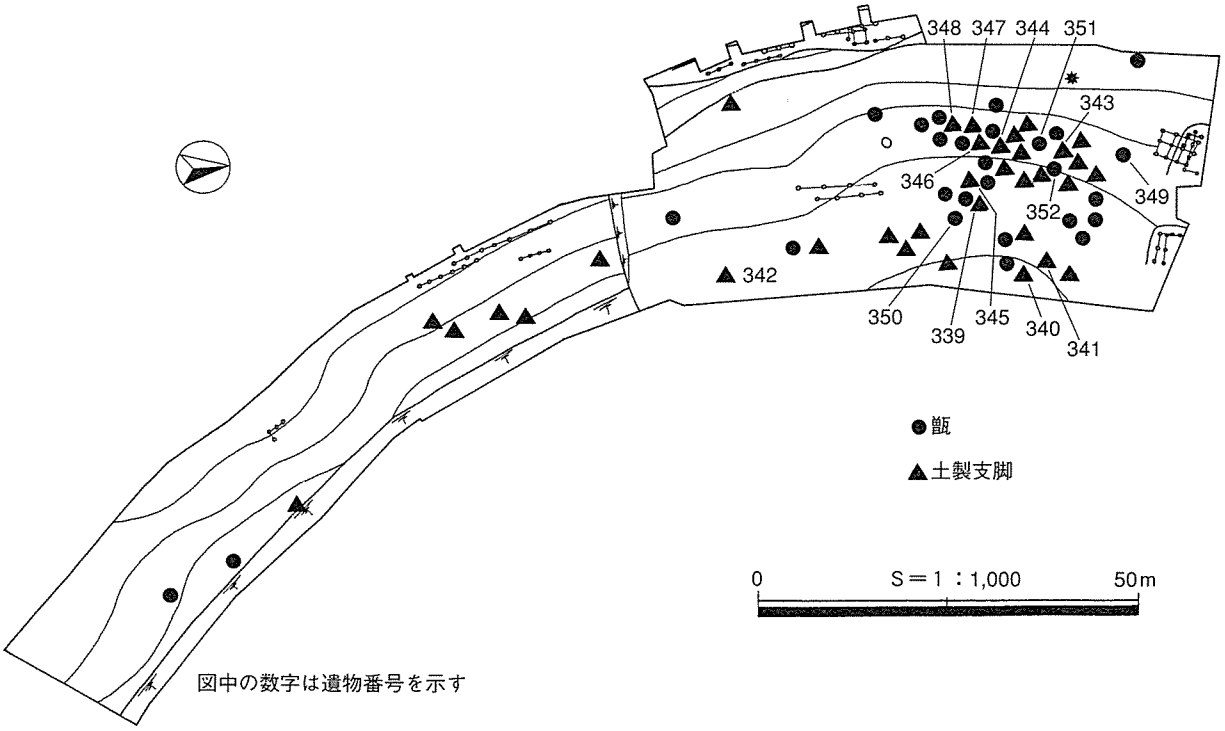
須恵器は具体的な数値やデータ及び出土分布状況を示すことはできないが、全体的には６世紀末から10世紀までのものが出土しており、９世紀以降は極端に少なくなる。

次に出土した須恵器について時期毎に分け、地区毎にその消長を概観したい。時期は１期：６世紀末～７世紀前半、２期：７世紀後半～８世紀前半、３期：８世紀後半の３時期に分ける。調査地北側の１区では、１期から３期までコンスタントに比較的多く出土している。これに対して調査地中央北寄りの２区では、１期は比較的多く出土しているが、２期以降減少する傾向にある。また、調査地中央南寄りの３区では、１期は１区や２区よりも量的には少ないが、比較的出土が認められる。しかし、２期になると２区と同様に減少する傾向にあり、３期になると再び増加に転じる。

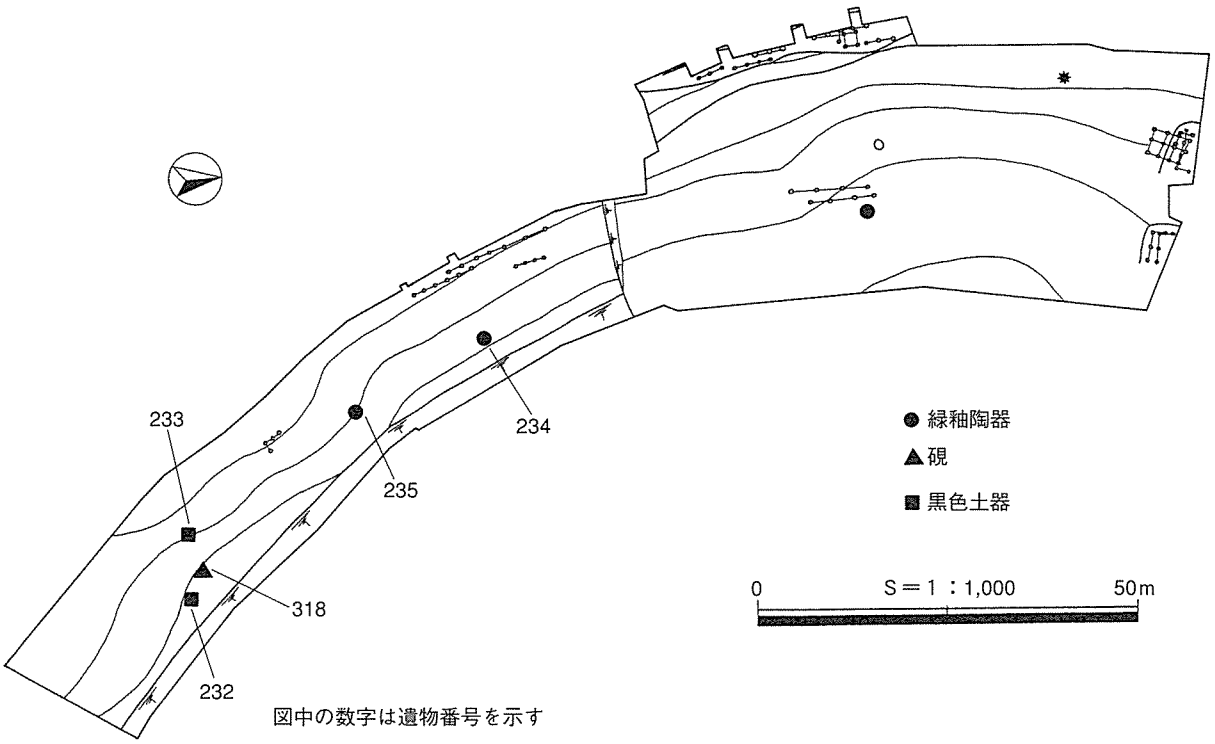
以上のことから勘案すると、１期には調査地のほぼ全域に集落が展開していたものと考えられるが、2期になると、集落の範囲や規模が縮小しており、１区に機能が集約・統合された可能性がある。２期には官的な影響を受けていることからも、これによって集団の再編成が行われたのであろうか。３期になると、３区に機能の一部を分化・移転したものと推測され、このことは移動式竈、土製支脚、甑といった炊飯具や瓦の出土状況に反映されている可能性がある。



第107図 移動式竈出土分布図



第108図 甑、土製支脚出土分布図



第109図 緑釉陶器、硯、黒色土器出土分布図

当該期の長者原台地は、６世紀前半の集落の形成はほとんど認められないが、６世紀後半になると台地の中央部で小規模な集落が形成される(註21)。また、台地の南側奥部に位置する６世紀後半の別所１号墳(註22)は全長27mの前方後円墳で、２基の横穴式石室を有し、馬具、鉄刀、鉄鏃、耳環、玉類、円筒埴輪、形象埴輪（人物、馬）が出土していることから、当地域の有力な首長墓であると推測され、これが後に郡司層へと転化した可能性がある。

奈良時代になると、台地の各所で集落が形成される。集落は竪穴と掘立柱建物で構成されるが、竪穴は無柱穴や焼土面を持つものが多く、これらの多くは居住用というよりも工房的な建物であると考えられる。また、当遺跡をはじめ岩屋谷荒神上遺跡や諏訪西土取場遺跡では鉄滓が出土していることから、鉄生産に関わるものと考えられ、工房的な竪穴建物が確認された他の集落も鉄滓の出土の報告はないが、鉄生産に関わる可能性がある。

なお、樋ノ口第４遺跡では石帯が出土し、諏訪西山ノ後遺跡では胞衣埋納遺構が確認されており、これらは郡衙に出仕する役人が居住する集落であると考えられる。

中世～近世

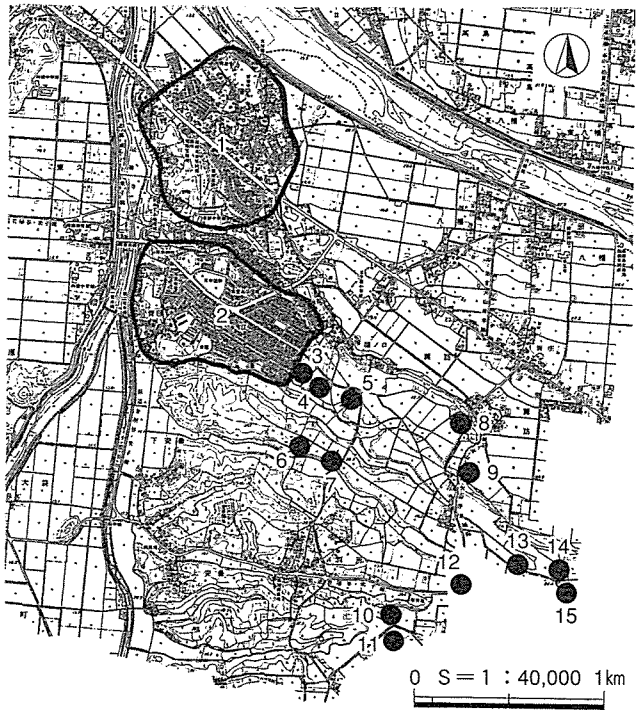
当該期の遺構は土坑１基、溝状遺構２条、井戸１基、地下式横穴１基を確認した。

ＳＤ－０５は段々状の耕作地の段下にめぐらせた排水用の溝であると考えられ、ＳＤ－０８はＳＥ－０１からオーバーフローした水を東側へ流す用水路的な溝であると考えられる。いずれもＳＥ－０１とともに耕作に関わりのあるものであり、当該期には大規模な耕作地の造成が行われていることからも、古墳時代後期～平安時代の集落が廃絶した後、再び当該期に耕作地として開発が行われたものと思われる。

地下式横穴は砂礫層を掘り込んで構築されている。調査地の西側には地下式横穴を構築するのには好適な砂礫層が展開しており、あと数基の地下式横穴が存在するものと推測される。地下式横穴の詳細な時期については明らかにはできなかったが、調査地の西約500mにある別所中原地下式横穴では、３基の地下式横穴が確認されており、いずれも出土遺物から16世紀代の築造であると考えられている。このことから、当遺跡の地下式横穴もこの頃の年代が考えられるが、大山西麓に位置する米子市淀江町百塚第５遺跡と大下畑遺跡では鎌倉時代前半の地下式横穴が確認されており、当遺跡からは量は少ないものの12～13世紀代の土器が出土していることから、時期については更なる検討が必要である。

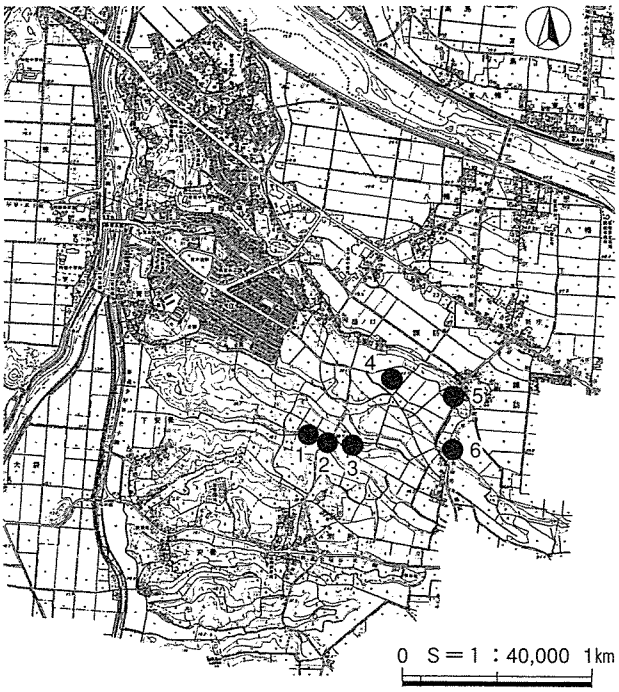
1　福市遺跡
2　青木遺跡
3　別所新田遺跡
4　別所ダヤシキ遺跡
5　諏訪南山崎遺跡
6　別所１号墳

第110図 長者原台地における古墳時代後期の遺跡分布図



1　福市遺跡
2　青木遺跡
3　樋ノ口第４遺跡
4　樋ノ口第３遺跡
5　樋ノ口第２遺跡
6　別所新田遺跡
7　別所中原遺跡
8　諏訪西山ノ後遺跡
9　諏訪南山崎遺跡
10　別所第６遺跡
11　岩屋谷荒神上遺跡
12　長者屋敷遺跡
13　諏訪西土取場遺跡
14　諏訪東土取場遺跡・大殿下ノ原遺跡
15　坂長下屋敷遺跡

第111図 長者原台地における奈良時代の遺跡分布図



1　別所ダヤシキ遺跡
2　別所中原地下式横穴
3　別所長峰古墓
4　諏訪１号墳
5　諏訪西山ノ後遺跡
6　諏訪南山崎遺跡

第112図 長者原台地における中世～近世の遺跡分布図

長者原台地では、15～16世紀の墳墓が多く確認されており、その形態は大きく２つに分けられる。１つは方形の墳丘の周囲に溝を巡らせ、その墳丘上に五輪塔あるいは宝筐印塔を建てていたものと思われるもので、諏訪1号墳、別所長峰古墓、別所ダヤシキ遺跡、諏訪西山ノ後遺跡で確認されている。もう１つは地下式横穴で、別所中原地下式横穴と当遺跡で確認されている。

なお、調査地西側の台地上には東チンゴ原（東鎮護原）、西チンゴ原（西鎮護原）という小字があり、数多くの五輪塔が散乱しており、調査地西側の台地上から斜面にかけて墓地が形成されていたものと思われる。

註

1　中沢道彦・丑野毅　1998　「レプリカ法による縄文時代晩期土器の籾状圧痕の観察」　『縄文時代』　第９号　縄文時代文化研究会

2　古市河原田遺跡、長砂第3遺跡、口朝金遺跡では収穫具の可能性があるサヌカイト製のスクレイパーが出土している。

　濱田竜彦ほか　1999　『古市遺跡群１　古市カハラケ田遺跡　古市河原田遺跡』　財団法人　鳥取県教育文化財団

　平木裕子ほか　1998　『長砂第3・４遺跡』　財団法人　米子市教育文化事業団

　吾郷信一ほか　1988　『口朝金遺跡』　会見町教育委員会

3　下高瑞哉　2004　『平成14・15年度　米子市内遺跡発掘調査報告書』　米子市教育委員会

4　（財）米子市教育文化事業団　佐伯純也氏ご教示。

5　小原貴樹ほか　1982　『米子市諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』　米子市教育委員会

6　岡田龍平ほか　1982　『宮尾遺跡　天万遺跡発掘調査報告書』　会見町教育委員会

　岡田龍平ほか　1993　『天王原遺跡発掘調査報告書』　会見町教育委員会

7　筆者調査。

8　清水真一ほか　1976　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　鳥取県教育委員会

清水真一ほか　1977　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　鳥取県教育委員会

清水真一ほか　1978　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　鳥取県教育委員会

9　小原貴樹ほか　1983　『米子市諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』　米子市教育委員会

10　赤井進ほか　1994　『越敷山遺跡群』　会見町教育委員会　岸本町教育委員会

11　大村俊夫ほか　1966　『福市遺跡　鳥取県米子市福市（吉塚地区）発掘調査報告書』　米子市教育委員会　米子市福市遺跡調査団

12　野崎正美ほか　『長者原遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』　岸本町教育委員会

13　（財）米子市教育文化事業団　佐伯純也氏ご教示。

14　小原貴樹ほか　1982　『米子市諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』　米子市教育委員会

15　（財）米子市教育文化事業団　佐伯純也氏ご教示。

16　小原貴樹ほか　1982　『米子市諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』　米子市教育委員会

17　小原貴樹ほか　1982　『米子市諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』　米子市教育委員会

18　小原貴樹ほか　1981　『米子市諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』　米子市教育委員会

19　北浦弘人ほか　1996　『陰田遺跡群』　財団法人　鳥取県教育文化財団

20　法勝寺川左岸の陰田遺跡群、新山遺跡群、吉谷遺跡群などを中心に多くみられる。

21　小原貴樹ほか　1982　『米子市諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』　米子市教育委員会

22　小原貴樹ほか　1983　『米子市諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』　米子市教育委員会